

601
35



* 0053480000 *

0053480-000

601-35

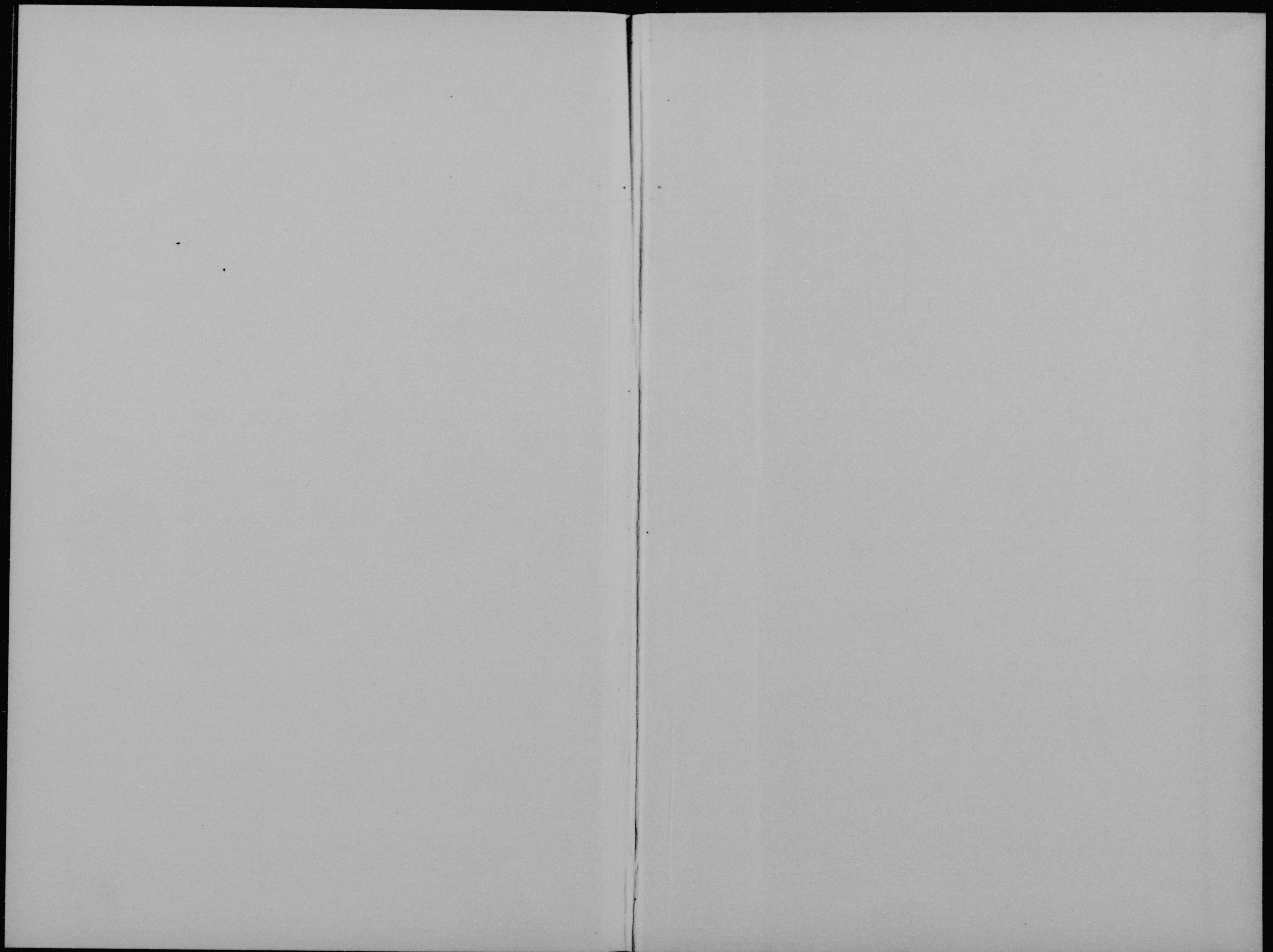
アチックミュージアム彙報

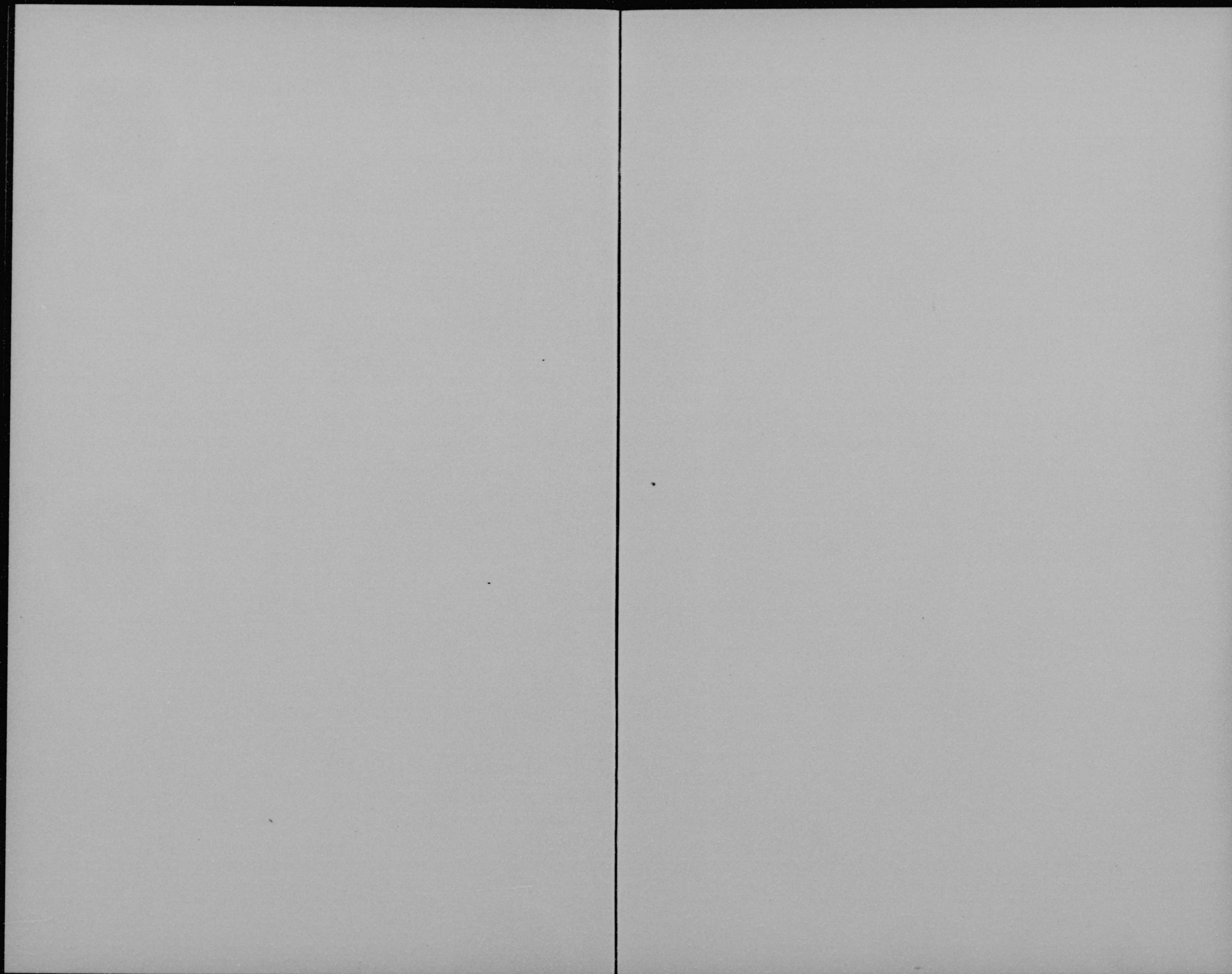
アチックミュージアム

第45

昭15

AIA





エトX43



郡邑魚譚

アチツク ミューゼウム彙報 第四五

アチツク ミューゼウム刊

武藤鐵城



秋田郡邑魚譚 目次

仙北郡

- 上檜木内村(檜木内村)〔一〕 下檜木内村(檜木内村)〔一〇〕 西明寺村〔一一〕 神代村〔三三〕 中川村〔二七〕 田澤村〔三三〕 生保内村〔四一〕 白岩村〔四二〕 角館町〔四六〕 田澤湖〔三五〕 雲然部落(雲澤村)〔一六五〕 西長野村(雲澤村)〔一七一〕 碓部部落(雲澤村)〔一七四〕 八割部落(雲澤村)〔一七七〕 下延部落(雲澤村)〔一七八〕 長野町〔一九八〕 葛川部落(豊川村)〔二〇一〕 豊岡村〔二〇二〕 清水村〔二〇四〕 長信田村〔二〇四〕 横瀬村〔二〇四〕 高梨村〔二〇五〕 横澤村〔二〇五〕 六郷町〔二〇五〕 千屋村〔二〇七〕 金澤東根村〔二〇九〕 金澤町〔二〇九〕 大曲町〔二一一〕 花館村〔二一四〕 神宮寺町〔二一九〕 北檜岡村〔二二三〕 荒川村〔二三三〕 土川村〔二三三〕 刈和野町〔二三四〕 强首村〔二三五〕 峯吉川村〔二二六〕 淀川村〔三三一〕

平鹿郡

- 横手町〔二三三〕 八澤木村〔二三七〕 見入野新田村〔二三七〕 板井田村〔二三七〕 山内村〔三三八〕 大澤村〔三三八〕 沼館町〔二三八〕 角間川町〔二三九〕 壹河村〔二三九〕

雄勝郡

秋ノ宮村〔二四一〕 柳田村〔二四二〕 三輪村〔二四三〕 澤湯町〔二四三〕 皆瀬村〔二四三〕 五丹澤村〔二四四〕 向野村〔二四五〕 岩崎町〔二四五〕 京櫃村〔二四五〕 三又村〔二四五〕

河邊郡

船岡村〔二四七〕 戸米川村〔二四八〕 椿川部落(川添村)〔二四八〕 岩見三内村〔二四九〕 戸嶋村〔二五〇〕 四ツ小屋村〔二五一〕 下北手村〔二五一〕 豊岩村〔二五二〕 大野部落(仁井田村)〔二七二〕 目長田部落(仁井田村)〔二七五〕 福島部落(仁井田村)〔二七五〕 新屋町〔二七六〕 濱田村〔二八一〕

秋田市 (むかしの久保田)〔二八五〕

南秋田郡

松原村〔三〇四〕 土崎港町〔三〇四〕 出戸部落〔三一〇〕 五城目町〔三一〇〕 八郎湖〔三一三〕 金川村〔三二三〕 船川港町〔三二三〕 南平澤村〔三二四〕 女川村〔三二四〕 豪嶋村〔三二五〕 椿村〔三二五〕 相川村〔三二五〕 北浦町〔三二五〕 戸賀村〔三二六〕 鹽戸村〔三二七〕 加茂村〔三二七〕 男鹿全體として〔三二七〕

山本郡

森岳村〔三三三〕 荷上場村〔三三三〕 檜山町〔三三三〕 能代港町〔三三三〕 粕毛村〔三三五〕 八森村〔三三五〕 岩館村〔三三六〕

北秋田郡

大館町〔三三九〕 七日市村〔三三九〕 獨鈷村〔三四〇〕 根子部落(荒瀬村)〔三四〇〕 比立内部落(荒瀬村)〔三四一〕

鹿角郡

錦木村〔三四二〕 十和田湖〔三四二〕

由利郡

矢島町〔三四五〕 象潟町〔三四六〕 金浦町〔三四七〕 本莊町〔三四九〕 大正寺村〔三四九〕 笹子村〔三五〇〕 福田村〔三五〇〕

目次
補遺

雄勝郡 秋ノ宮村〔三五二〕
由利郡 矢島町〔三五三〕

圖版 目次

- 第一圖 海の幸山の幸〔編者蔵の木像〕
- 第二圖 コノシロの繪馬〔參照三二頁〕
- 第三圖 ムロ(室)恵比須の御幣〔參照五五頁〕
- 第四圖 オゴズの繪馬〔參照一一八頁〕
- 第五圖 潟雜魚の炙り方〔參照一四八頁〕
- 第六圖 タツ子人形と國壽意匠陶器〔參照一三九頁〕
- 第七圖 舟小屋(春山附近)〔參照一五六頁〕
- 第八圖 アギ笈とサワ(澤)〔參照一六一頁〕

- 第九圖 獨木舟とケヤシギ使用法〔參照一六四頁〕
- 第一〇圖 鮭網の魚舎―屋根に魚扱を載せてある〔參照二一五頁〕
- 第一一圖 水神の御幣(太田時治氏蔵)〔參照二〇五頁〕
- 第一二圖 片目鯨の菓子〔參照二〇九頁〕
- 第一三圖 鮭の供養碑〔參照二四一頁〕
- 第一四圖 魚形爬刻石〔參照三四六頁〕
- 第一五圖 男鹿の獨木舟と子供の漁(加茂青砂にて)〔參照三二七頁〕
- 第一六圖 シラヤ網(寺内町の雄物川べりにて)〔參照三〇六頁〕
- 第一七圖 鶉の御判紙(寶永二年)〔參照二二一頁〕
- 第一八圖 カケヨ祭〔參照三四八頁〕
- 第一九圖 魚の供養碑
 - 鮭魚萬本碑(明治三十九年)〔參照二七二頁〕
 - 鱒萬本祭(大正五年)〔參照二七二頁〕
 - 萬魚供養塔(安政五年)〔參照三〇九頁〕
- 第二〇圖 魚形岩偶(小西宗石氏蔵)〔參照二〇五頁〕
- 第二一圖 石器時代土器面へ押捺の網目紋〔參照一三九頁〕
- 第二二圖 石器時代土器面へ押捺の網目紋〔參照一三九頁〕
- 第二三圖 置き針〔參照四頁〕
- 第二四圖 置き針の参考品〔參照四頁〕

- 第二四圖 ハネ網の網〔参照六九頁〕
- 第二五圖 菱賊の魚腹にありし珍石(佐佐木竹五郎氏藏)〔参照一二四頁〕
- 第二六圖 小舟・ケヤシギ・ユゲヤ〔参照一五六頁〕
- 第二七圖 河伯供養塔〔参照二五一頁〕
- 第二八圖 網の「鬼結び」〔参照二七九頁〕
- 第二九圖 川舟(長舟)〔参照三三二頁〕
- 第三〇圖 川舟(練舟)〔参照三三三頁〕

秋田郡邑魚譚 目次終

秋田郡邑魚譚



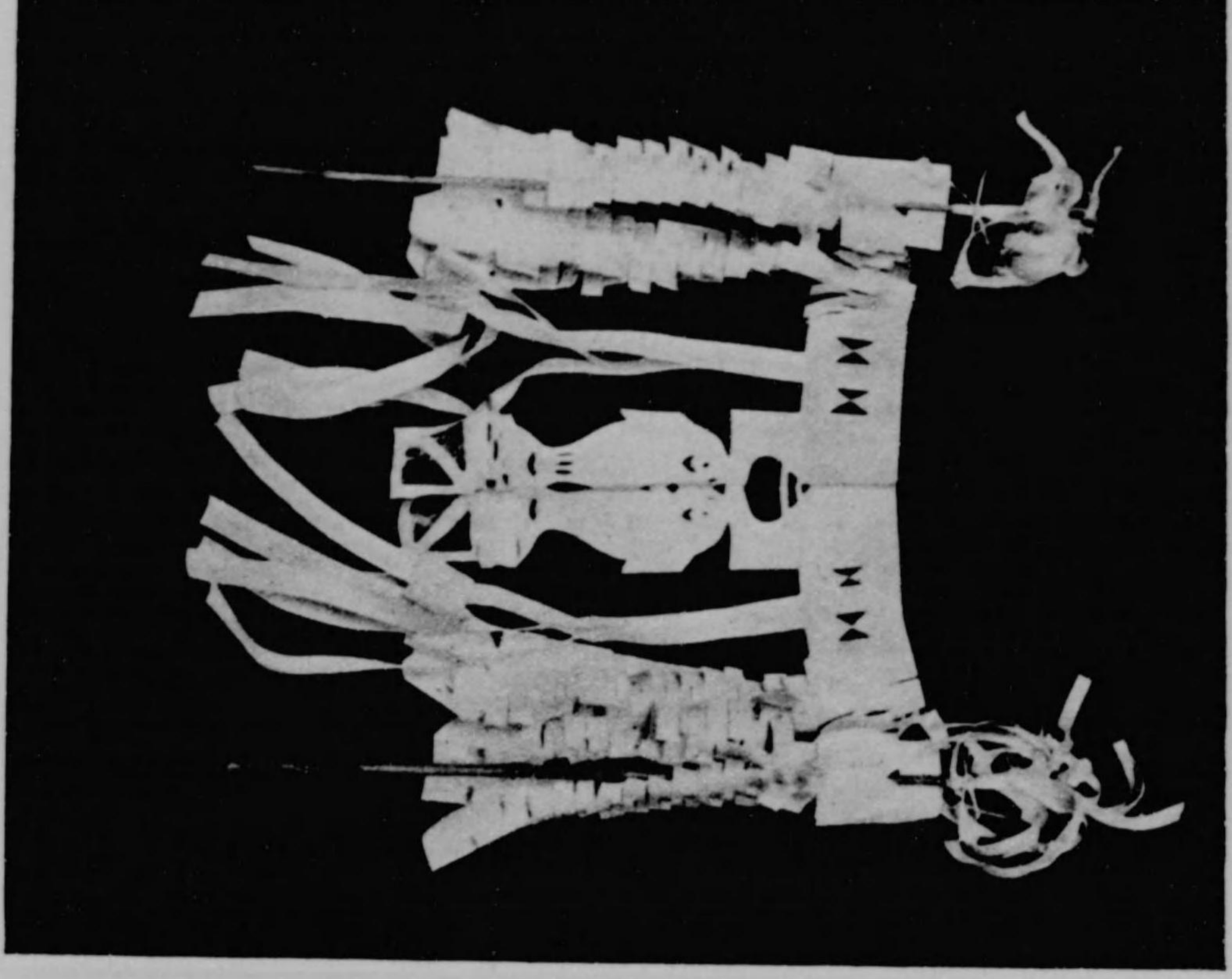
第一圖 海の幸山の幸 (編者蔵)

角館郊外にて恵比壽大黒として祭祀せるもの
作者不詳 高一八釐

第一圖 海の幸山の幸 (編者蔵)



角館郊外にて恵比壽大黒として祭祀せるもの
作者不詳 高一八釐



第三圖 ムロ(室)恵比須の御幣

(五五頁)



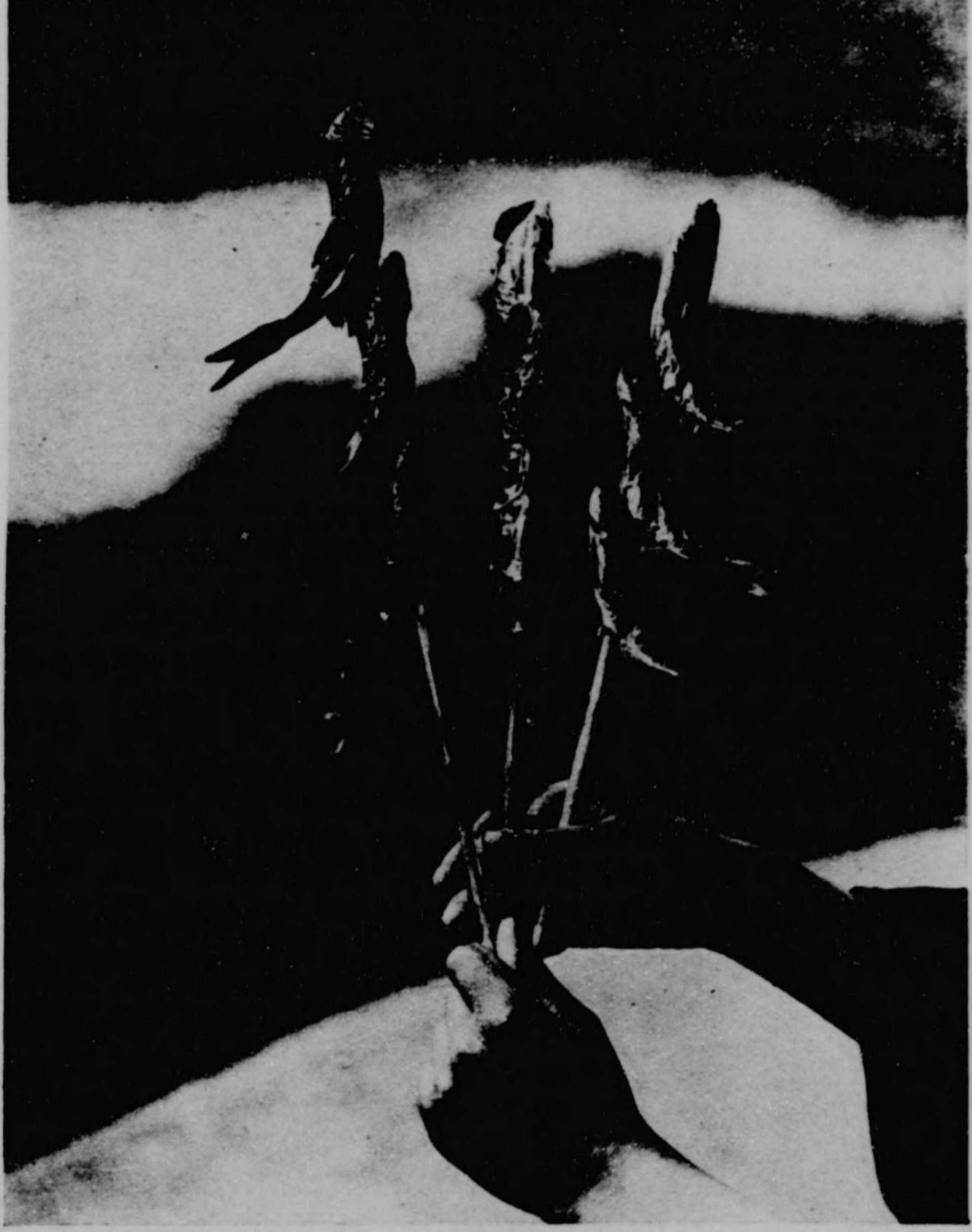
第二圖 コノシロの繪馬

(三三頁)



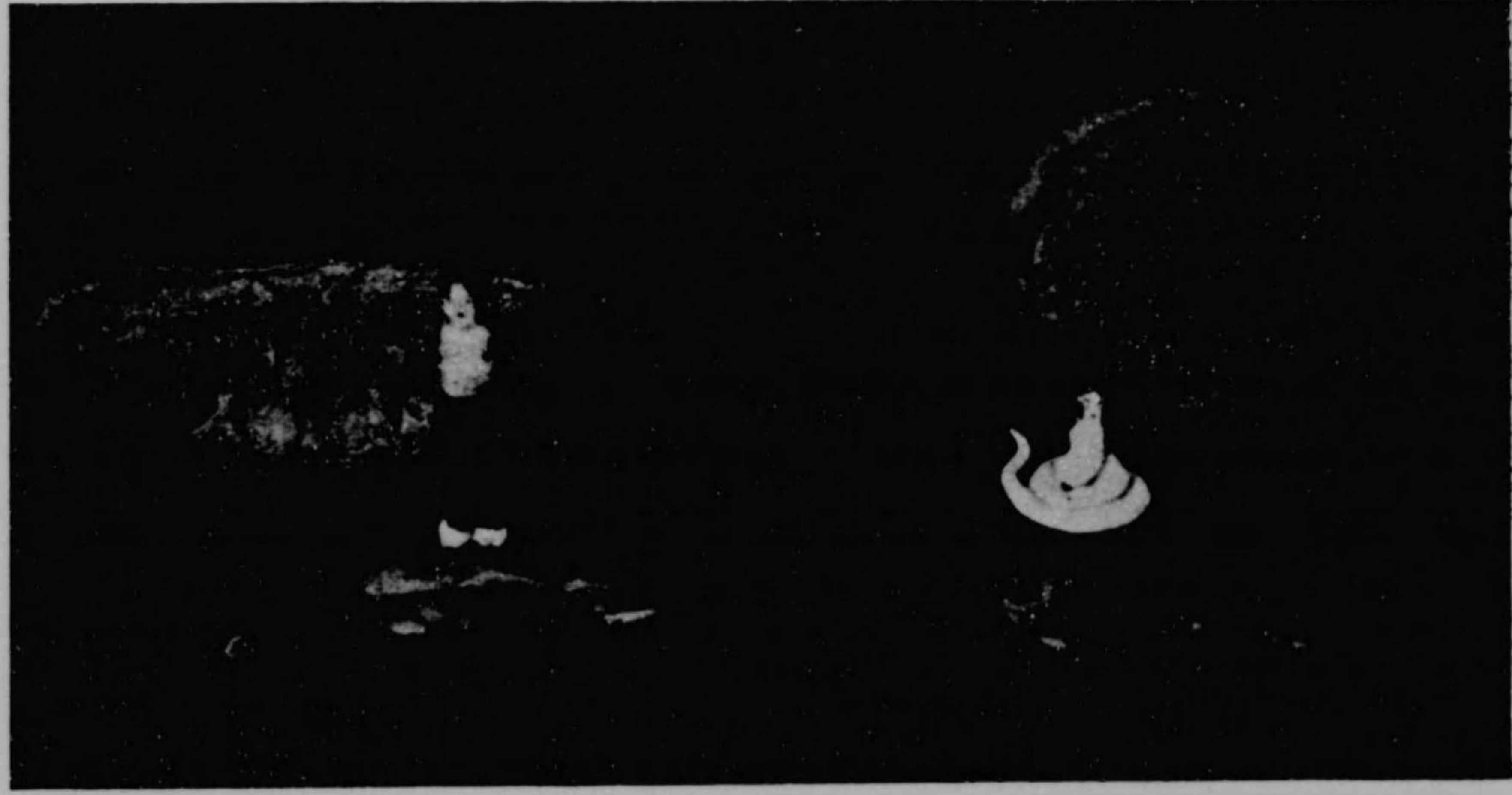
第四圖 オコズメの繪馬

(一一八頁)



第五圖 湯雜魚の炙り方

(二四八頁)



第六圖 タツ子人形と國鱒意匠陶器

(一三九頁)



第九圖 獨木舟とケヤシギ使用法

(二六四頁)



第一〇圖 鮭網の魚舎

(二二五頁)

屋根に魚叔を載せてある



中の籠形のはケヤシギ

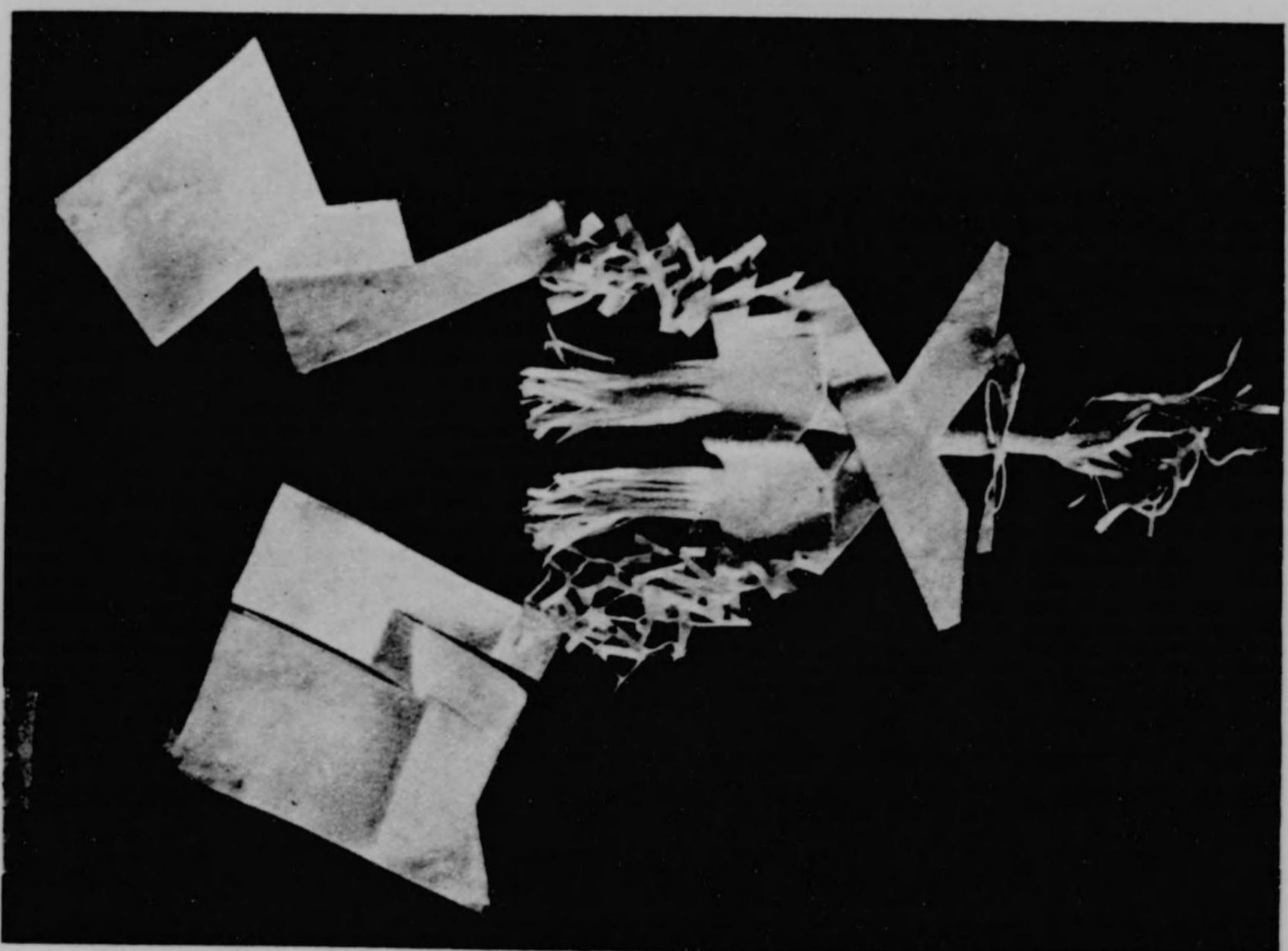
第七圖 舟小屋(春山附近)

(二五六頁)



第八圖 アギ笥とサワ

(二六一頁)



第一圖 水神の御幣 (太田時治氏藏)

【一〇五頁】



第二圖 片目跡の裏字

【一〇九頁】

第三圖 蛙の供養碑



【二四一頁】

第四圖 魚形爬刻石



【三四六頁】

第一五圖 男鹿の獨木舟と子供の魚（加茂青妙にて）



（三二七頁）

第一六圖 シラヤ網（寺内町の雄物川べりにて）



（三〇六頁）

第一七圖 鶴の御判紙（寶永二年）



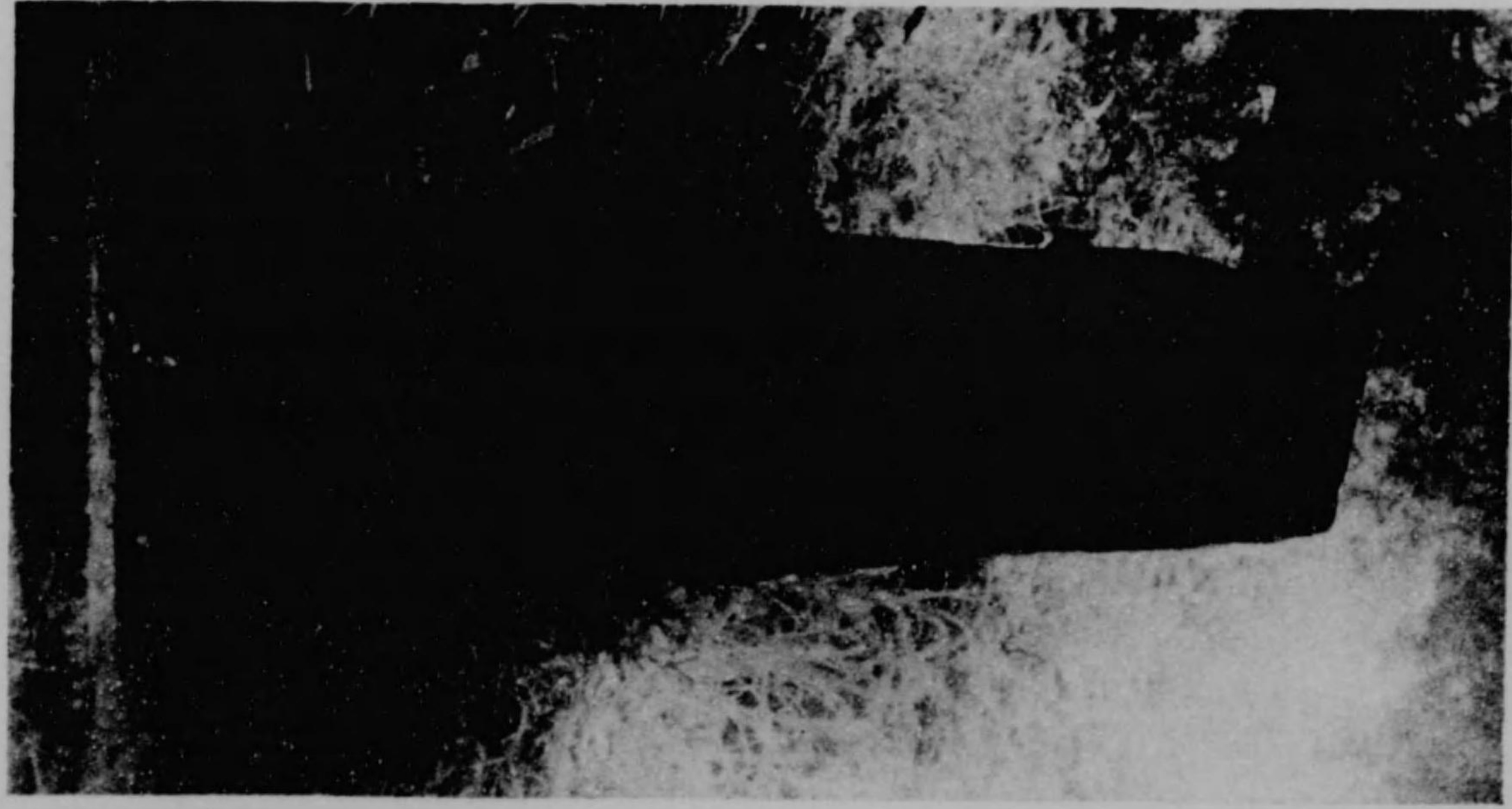
（二二二頁）

第一八圖 カケヨ祭



（三四八頁）

第一九圖 魚の供養碑



(一七二頁)

鮭魚萬本祭碑

(明治三十九年)



(一七三頁)

萬本祭 (大正五年)



(一〇九頁)

萬魚供養塔 安政五年の建立
立てるは上法香苗氏

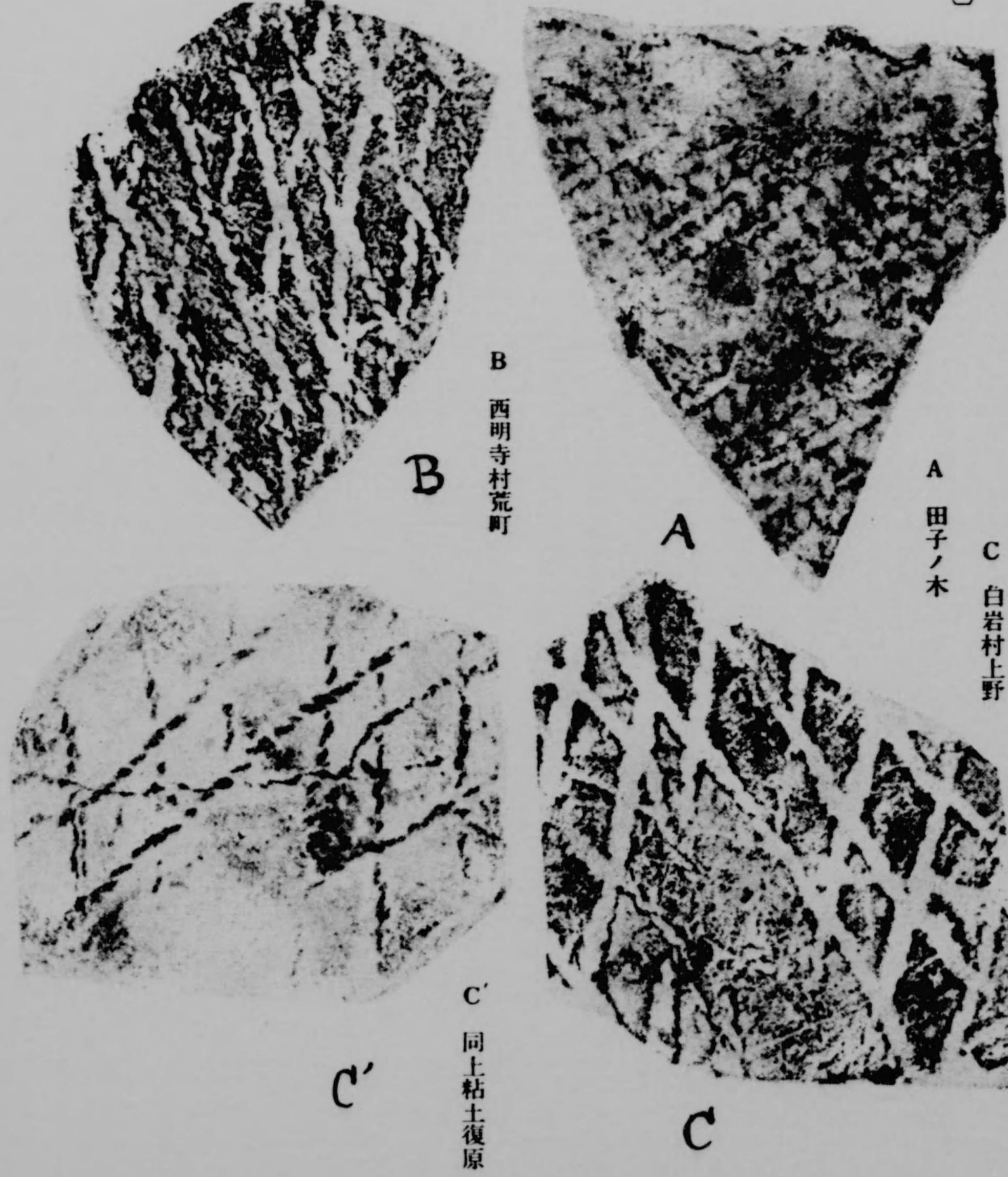
第二〇圖 魚形岩偶



a 頭頂部
b 咽喉部
(小西宗石氏藏)

(二〇五頁)

石器時代土器面へ押捺の網目紋



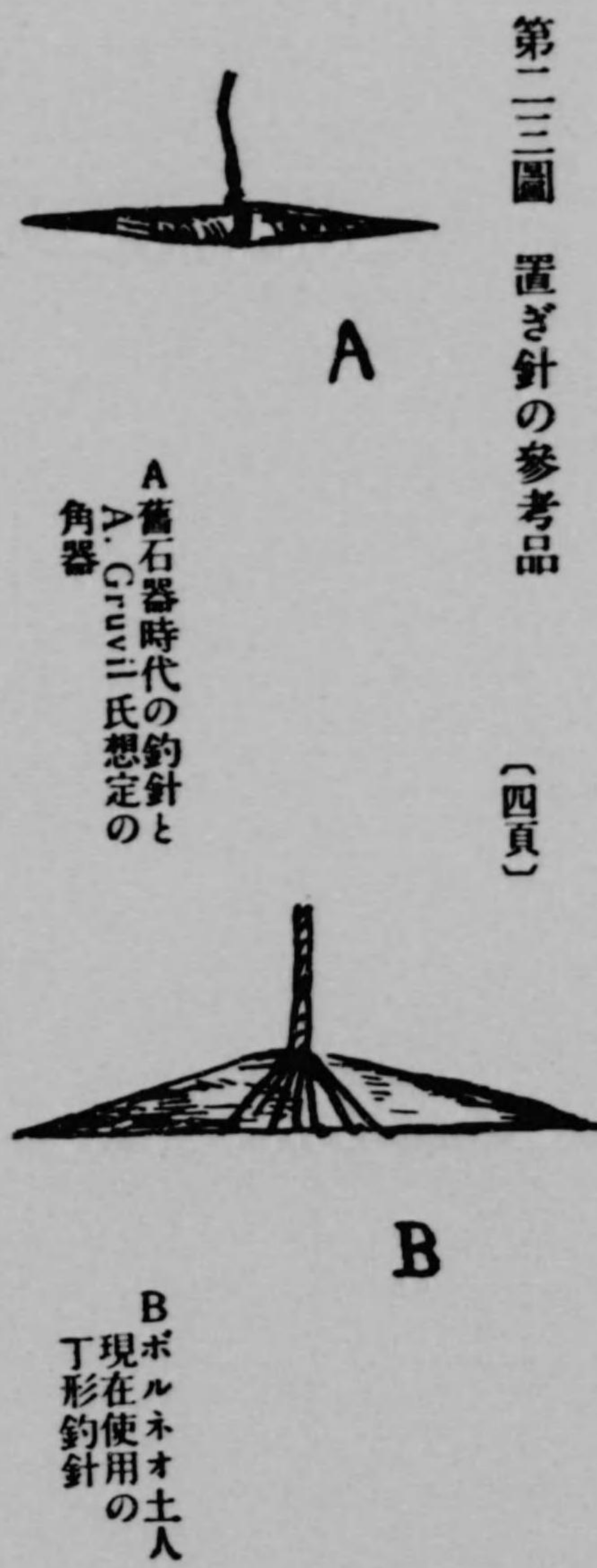
A 田子ノ木

C 白岩村上野

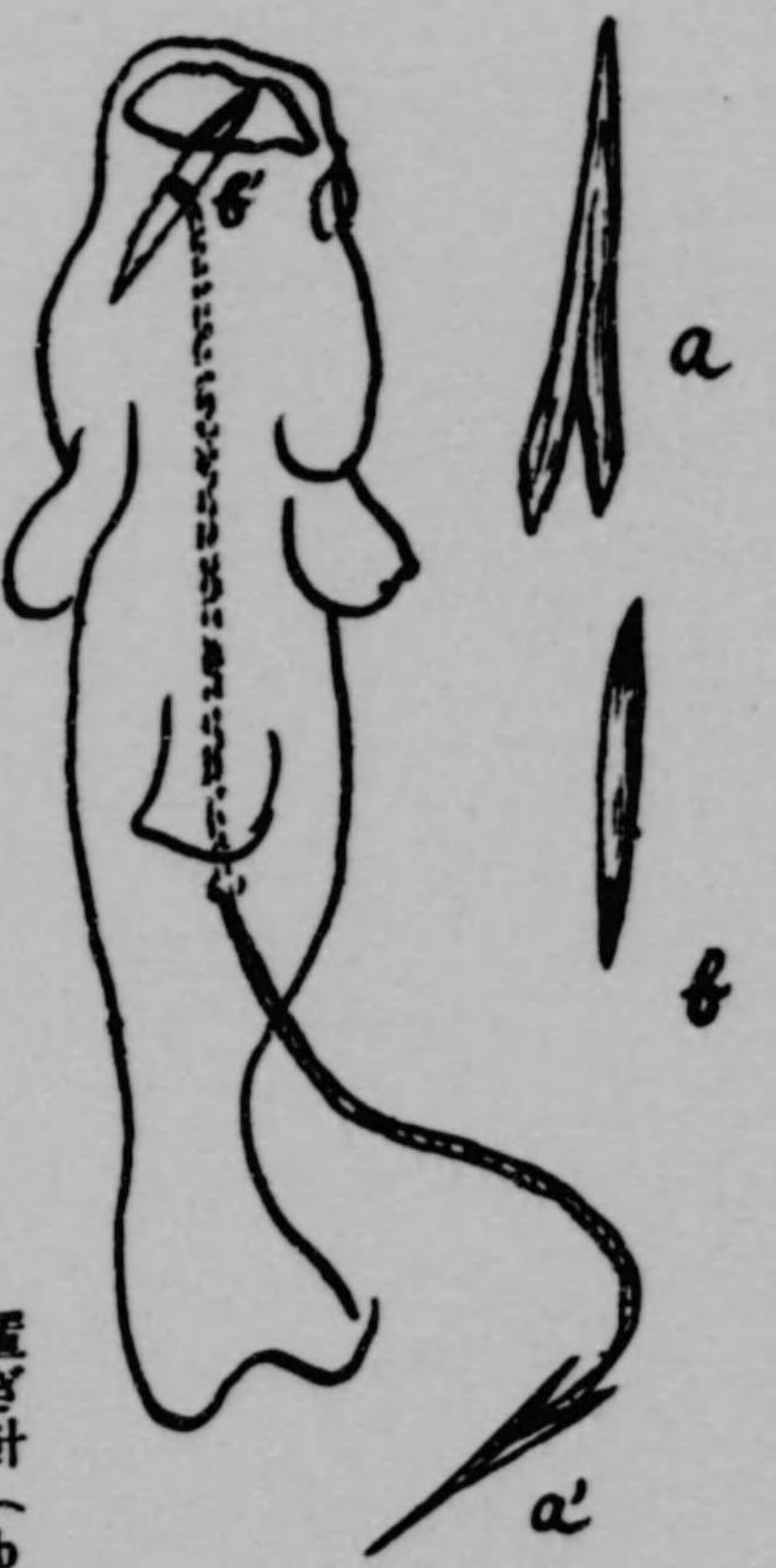
B 西明寺村荒町

C' 同上粘土復原

(一三九頁)

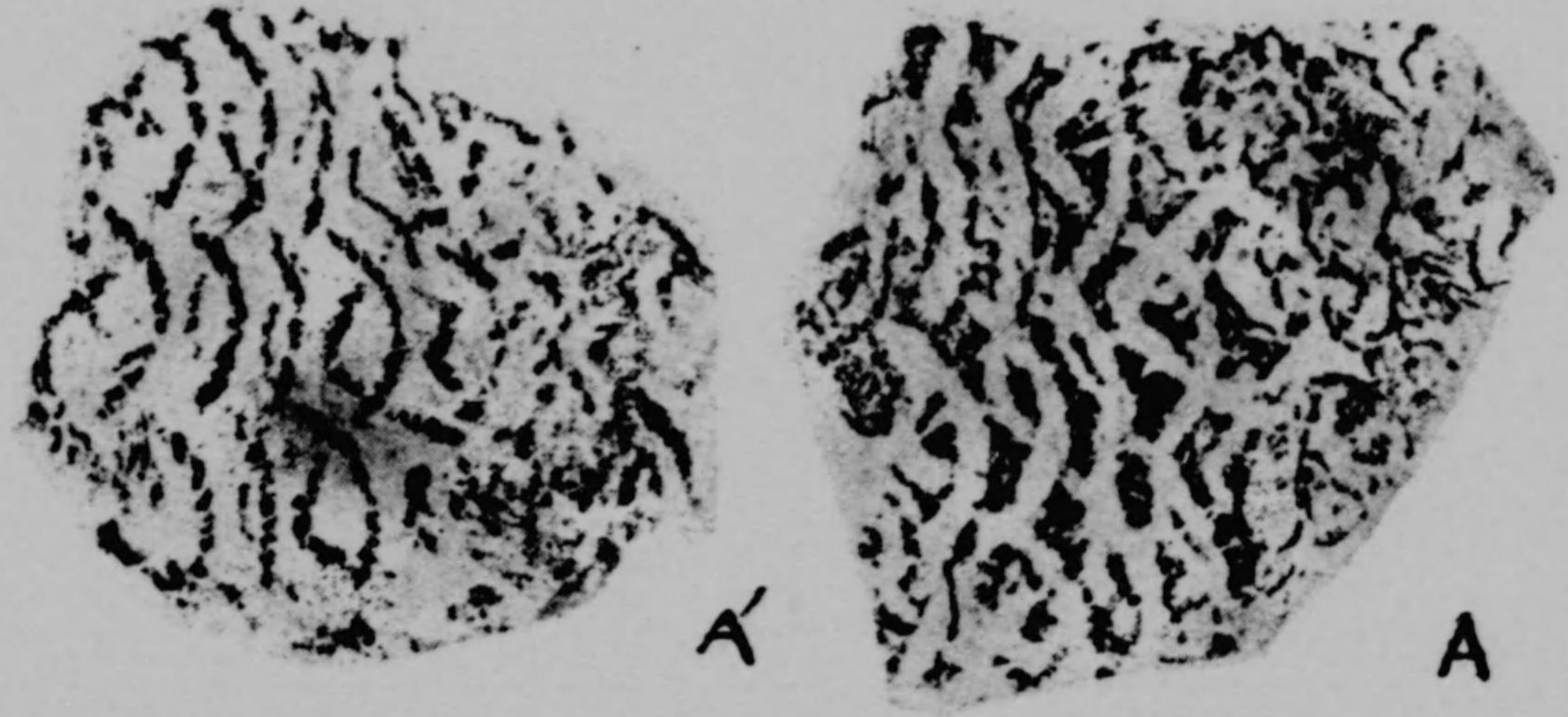


第三圖 置き針の参考品 (四頁)

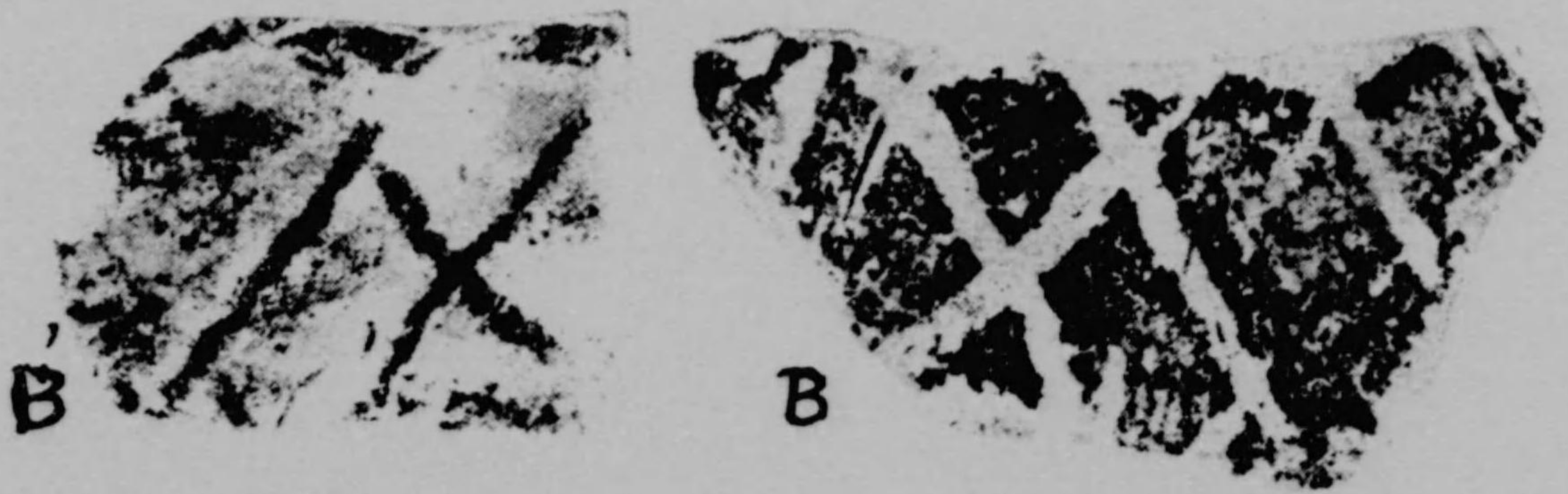


第二圖 置き針 (四頁)

置き針 (b b') とその使用法

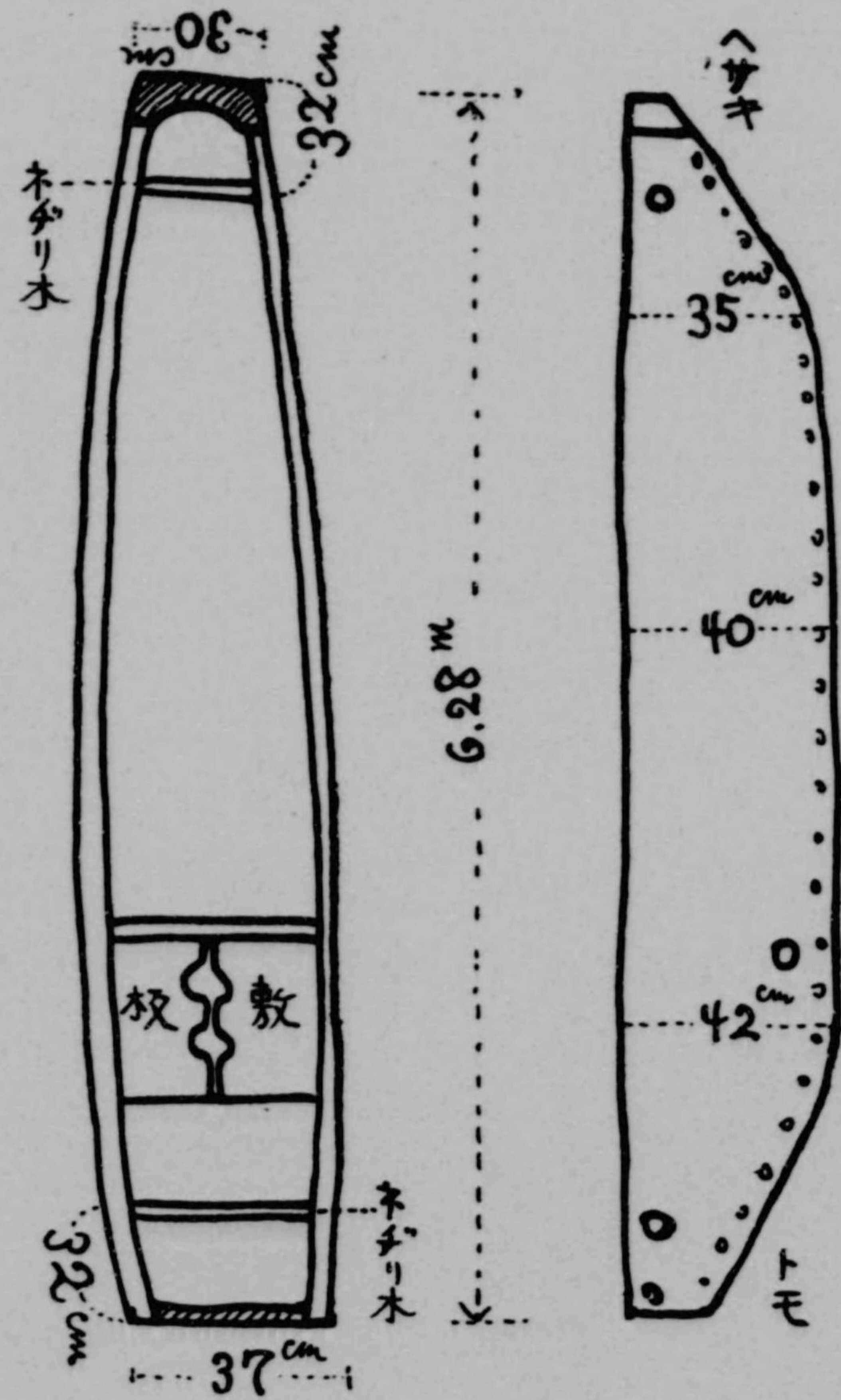


第二圖 石器時代土器面へ押捺の網目紋

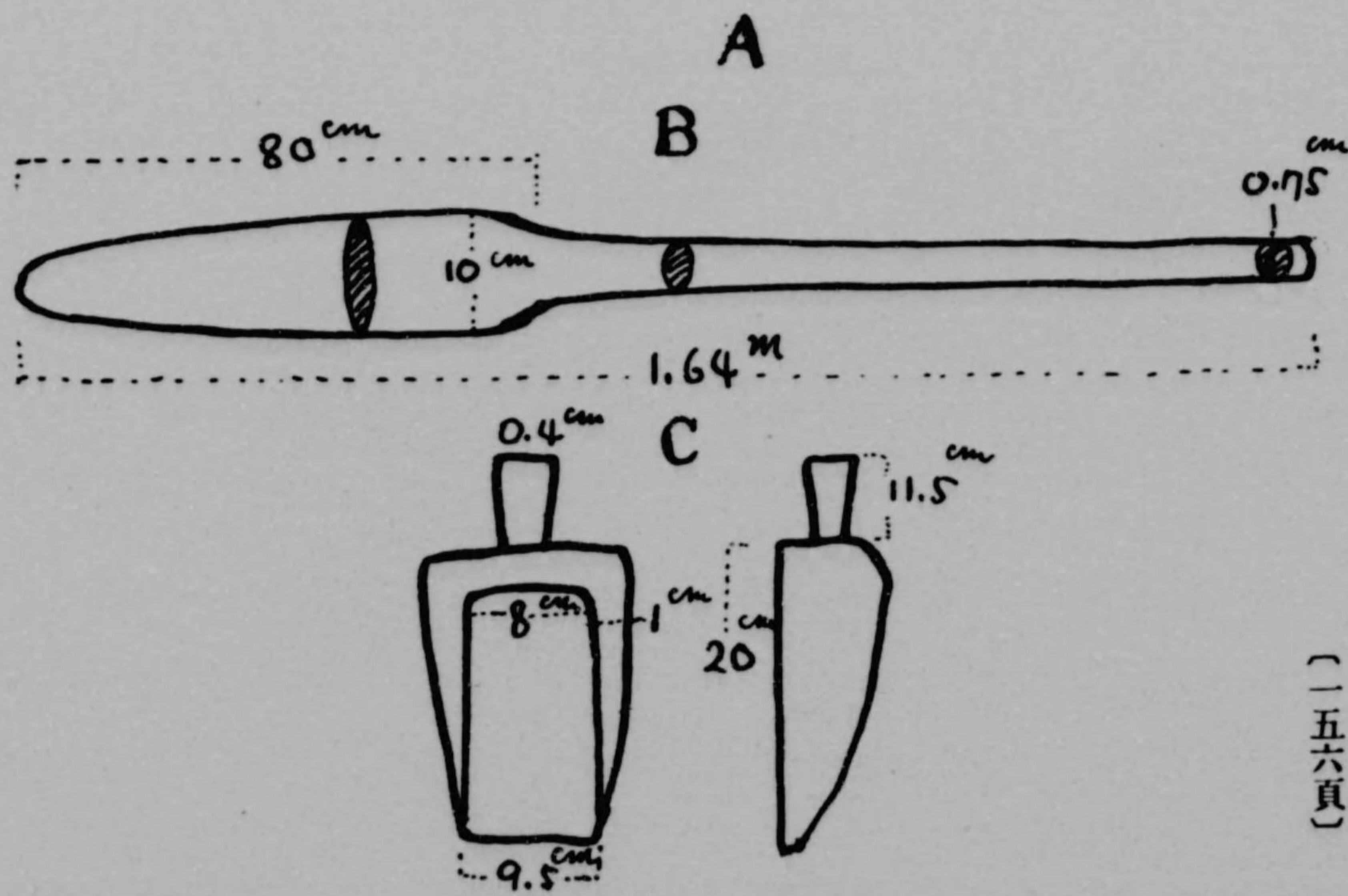


(二三九頁)

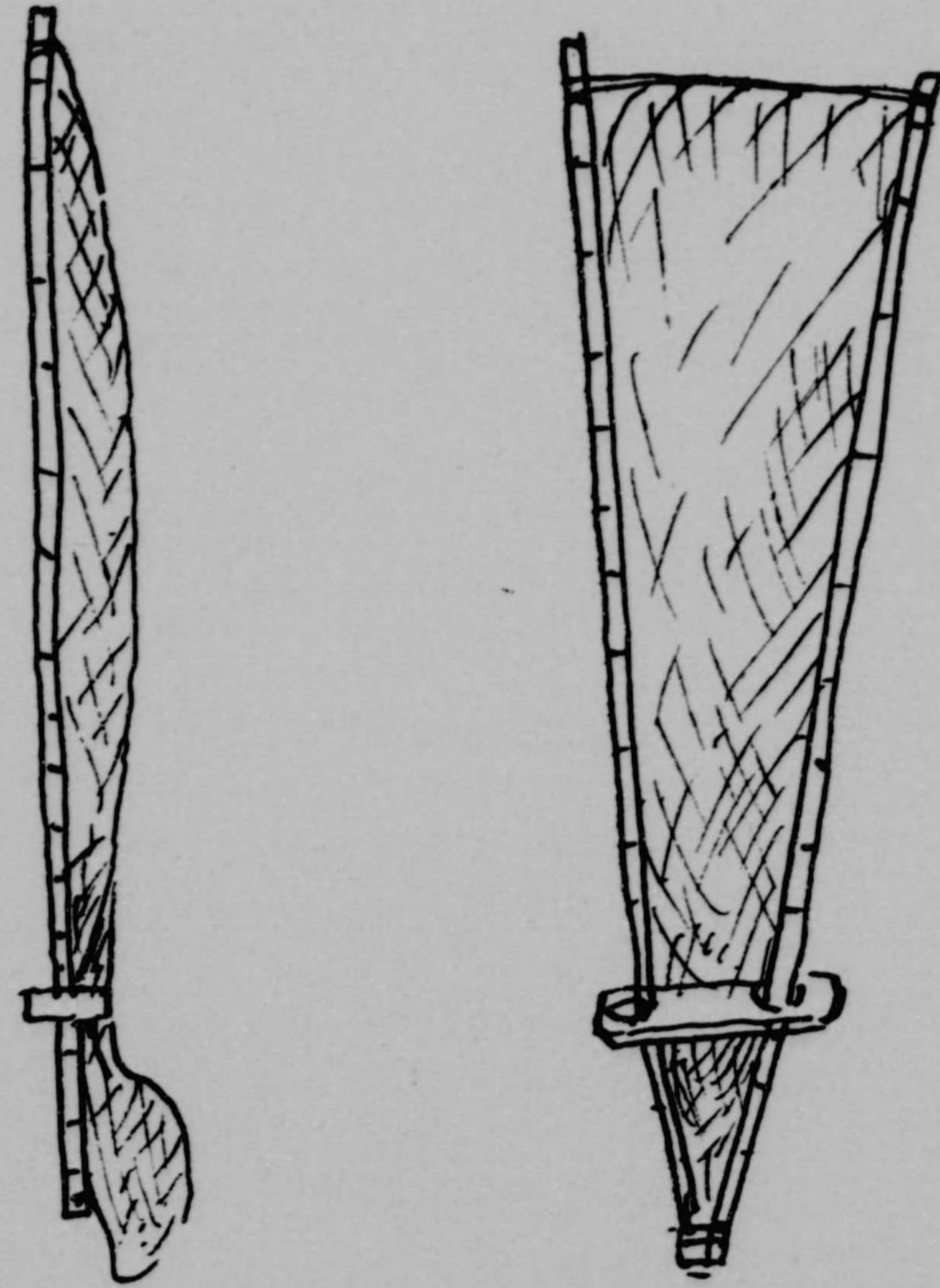
小舟(又ハ漁船) A、トケヤシギ B、及びユゲヤ C



第二六圖 小舟・ケヤシギ・ユゲヤ

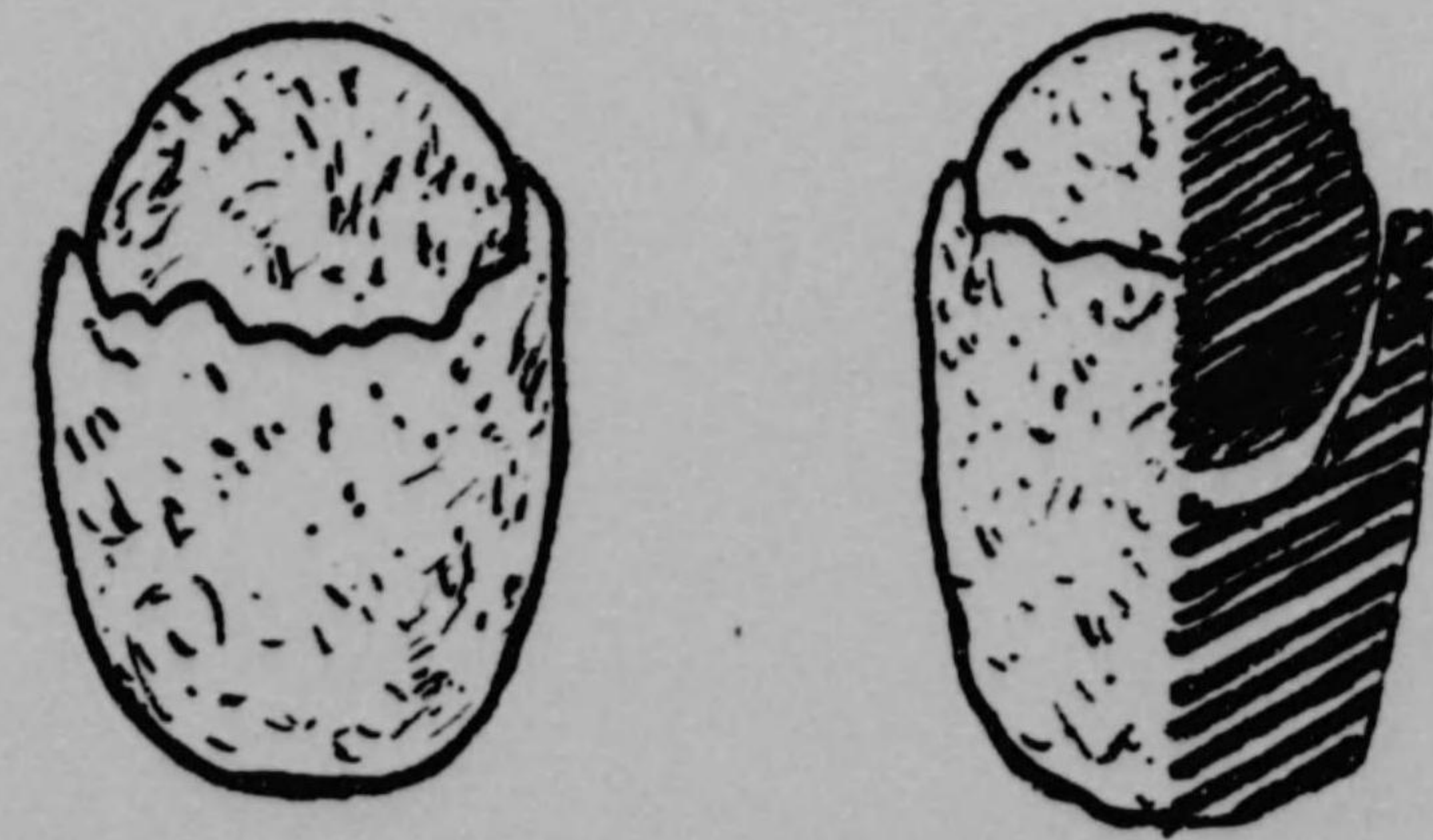


(一五六頁)



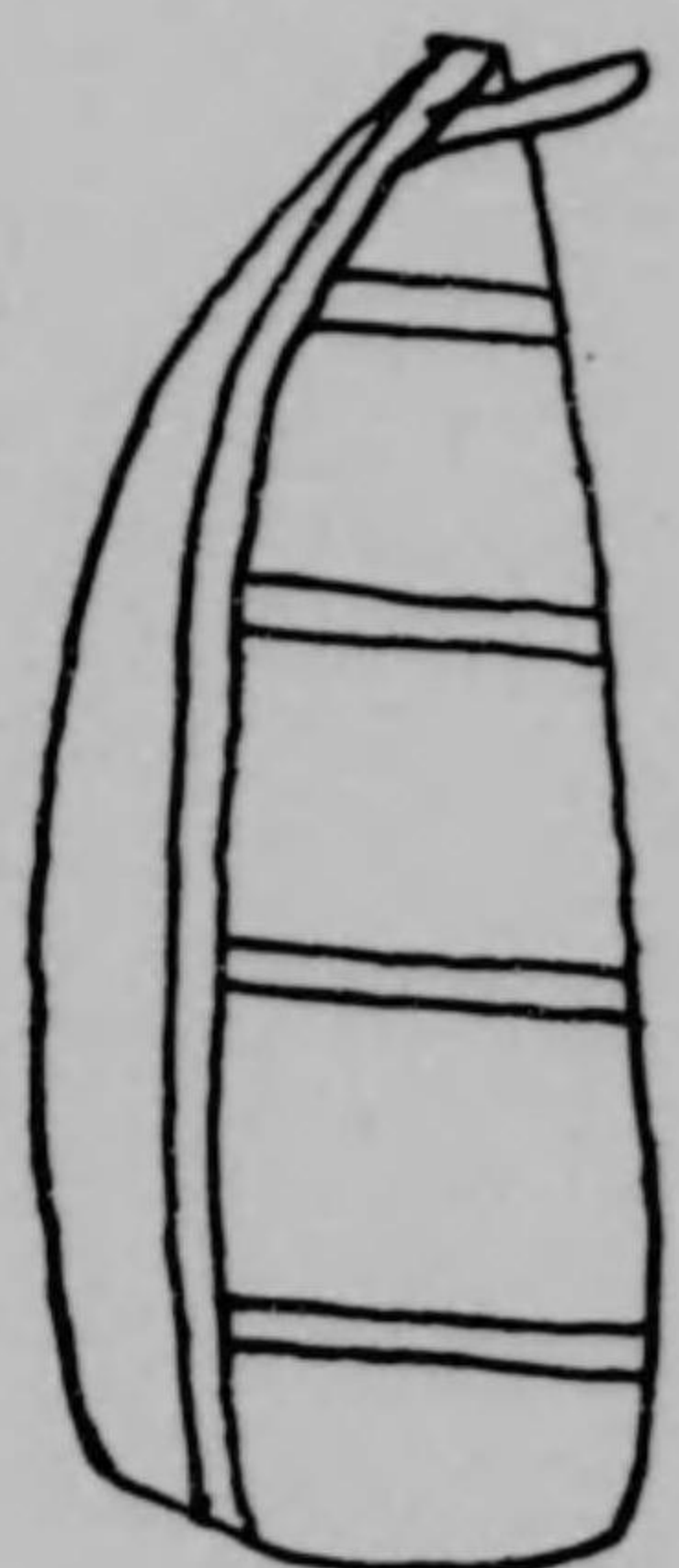
第二四圖 ハネ網の網

(六九頁)

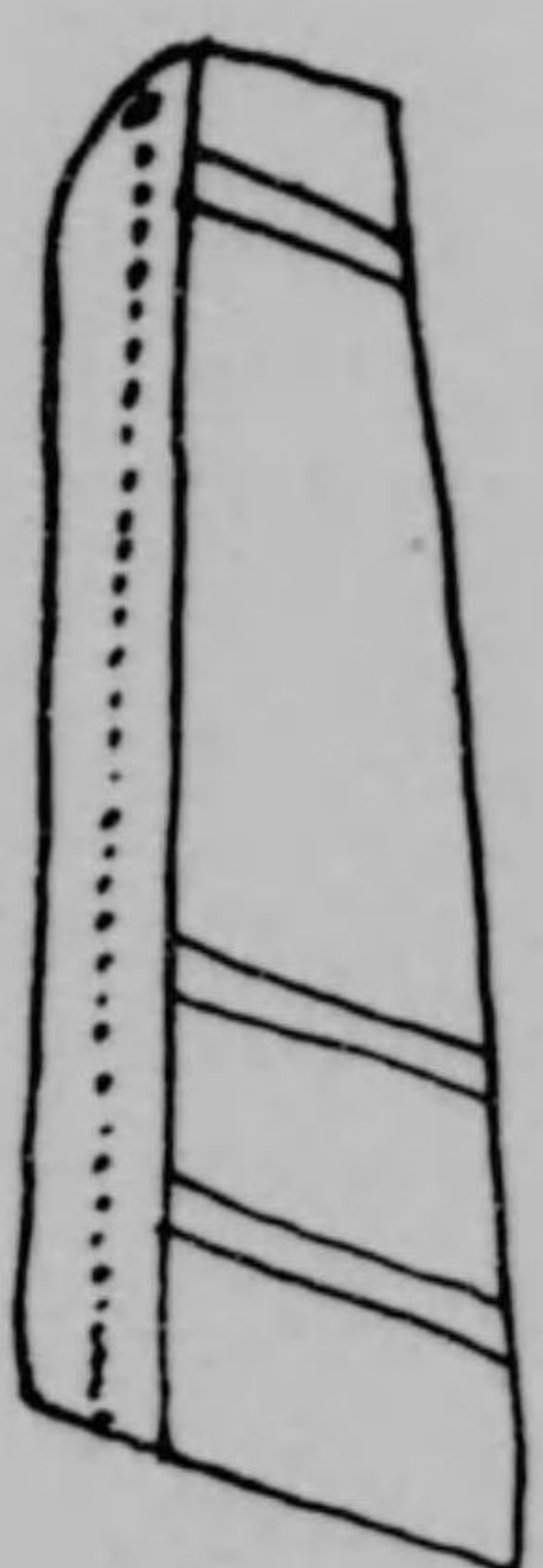


第二五圖 娑賊の魚腹にありし珍石
(佐佐木竹五郎氏藏)

(一一四頁)

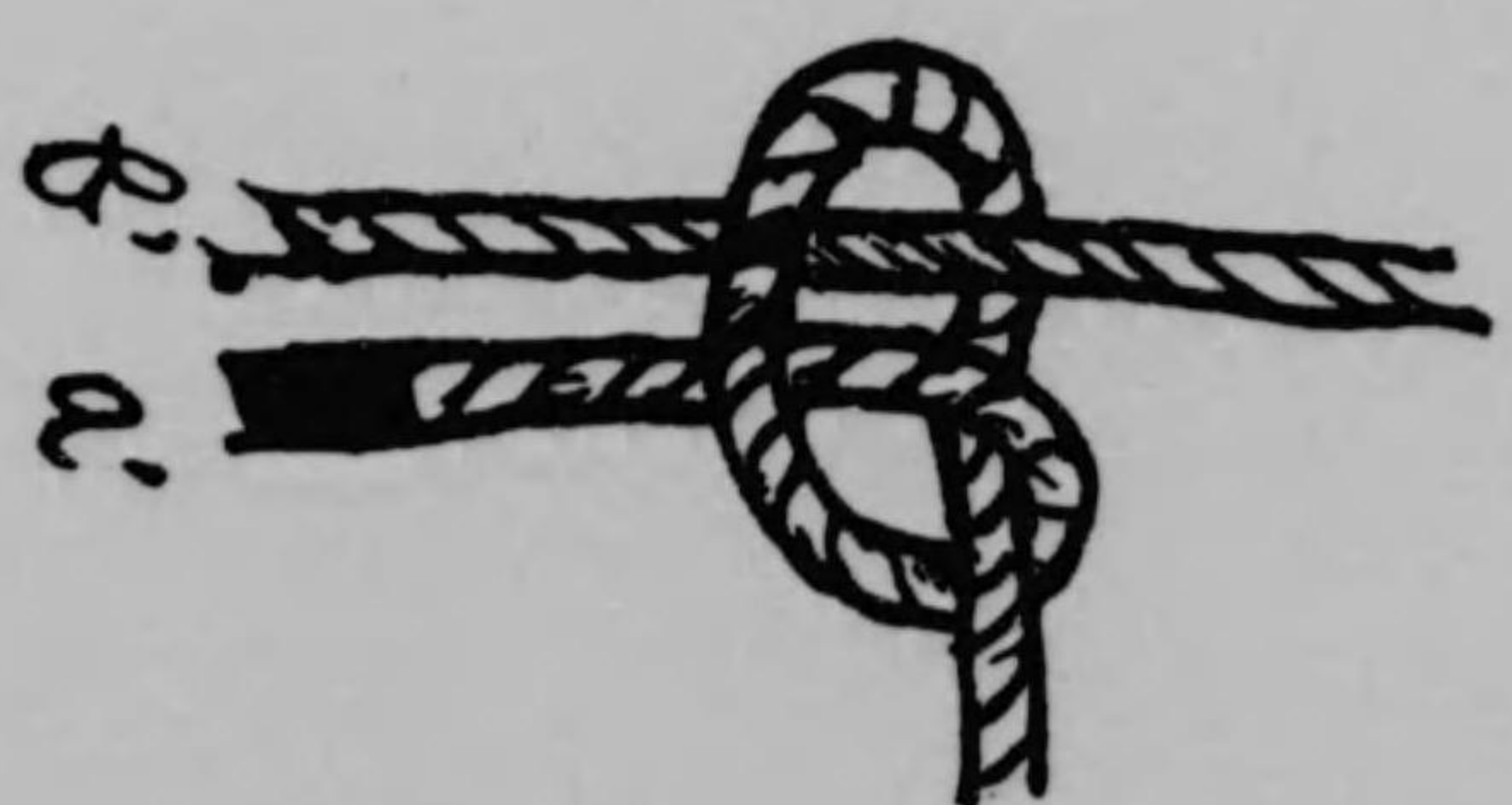


第十九圖 三舟 (長舟)

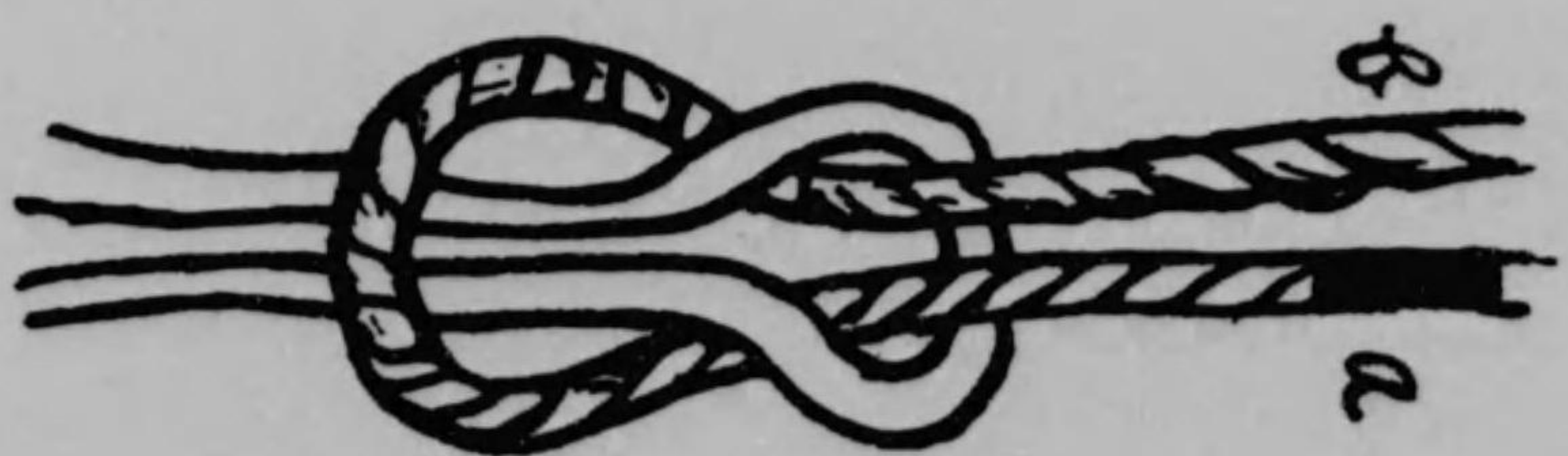


第二十圖 三舟 (狭舟)

(三三頁)



B



A

第十八圖 鬼結び (一七九頁)

Aの結びの上へ更にBの結びを以て被ひ締めるAは普通の繩の結び



第十七圖 河内供養塔

(一五二頁)

仙北郡

上檜木内村 (檜木内村)



○水干
夏の日、この村から玉川部落へ越して八幡平の景勝を探めんとする者が、尻高峠を登りつめた時、背後を顧みるならば、仙北、北秋の兩郡境に跨る一一六六、八米の大佛嶽が、兩肩に光背そのもの、如く聖なるハレエーシオンを起して、靜かに、然し巍然と鎮座する姿を見るであらう。
その大佛嶽に降り濺ぐ雨の、北秋田郡に流れるものは比立内川であり、仙北郡側に流れるものは檜木内川となり、玉川と落合つて後に雄物川に合流する。
享保郡邑記や古い地圖には、その分水嶺を「大佛峯切水落次第」と書いてあるが、今日村人は、その分水嶺であり水落であるものを、簡単に水干と云つてゐる。面白い言葉と思ふ。

仙北郡

○垂天池

その大佛の北に續いて、矢張り水干を形成してゐる立様(九九一、九米)を少し下ると、山上の神祕湖垂天池がある。昔、横枕部落の上杉彌五右衛門の、シヨウゲの婆々と呼ばれてゐた婆様が、どうした心持からか、麻絲を捲いた杵を背負つて一目散にその沼へ駆け登つた。驚いて引止めやうとする村人を、時々振返つて凄目で睨み付け乍ら行く婆さんの脚の速いこと、遂に姿を見失つてしまつた。
やがて村人が漸く其處に着いてみたら、岸に雜履が揃へてあり、婆様は沼に沈んで、唯、背負つて行つたガワばかりが、水面にボカリ浮んでゐたと云ふ傳説がある。
今でも御天氣のよい日には、そのシヨウゲの婆さんが沼から出て機を織つてゐる。そして上のサマに休んで居るから、うつかり其處を通ると崇られるといふ。(同村赤上正治郎氏)

元來その沼には、鯉、鮒、ニゲヤフエヤ (フエヤ雜魚とも) の三いろの魚より棲んでゐなかつた。現在は三尺程の鯉も居るが、風の日などは沼一面に大小の鯉が浮い

て遊泳してゐる。(赤上氏)昭和五年頃、三尺以上の緋鯉が六尾悠々泳いでゐる姿を見受けたので、鐵砲を放したが當らなかつた。ニゲャフエヤといふは、三寸程の雜魚である。(同村擔當區、澤井源吉氏)

それへ大正年代に小熊といふ森林主事の方が、アマノヨと、それから田澤湖の孵化場から持つて来た米鱒を放したが、アマノヨは殆んど取盡されてしまつた。

現在、角館營林署では、赤上岩吉といふ人を沼の番人に置いてゐるが、舟がないので筏を浮べてゐる。番人は最早、魚に馴染が出来て、筏の上から「オヤ／＼お前、今日も此處で遊んでゐたか」などと、自分の子供とでも語るやうに聲をかけてゐる。(赤上氏)

○鱒の溯上

この沼から大覺野峠(五八二、三米)の方へ少々下ると定ノ澤があり、炭焼小屋の集團がある。所謂、水干から落ちて、しばし木葉の下を潜つて来た水も、其邊になると漸く噛き始める位の溪流となるが、然も地圖を見ても判かるやうに、檜木内川最上流の末端である。

流れの幅は少年でも一跨ぎ出来るし、水量とても炭焼

が炭に打つ水を汲み上げるため柄杓をたてたら、それがくゞらない程度のものである。

其處に岩魚や山への棲むことは普通であるが、鱒が産卵のため溯上して来るには驚く。もつと上へ行つたらウンナンソウ(山椒魚)の棲んで居るところもあるであらうが、此邊が先づ魚止マリであらう。このヨドマリといふは、シバリの向の行き詰つてゐる地形である。

これから下つて行つて、未だ本流に落ちぬ邊に蝦夷ドマリといふ所があるが、鱒はその蝦夷ドマリを突破して、このヨドマリ迄溯上して来るのである。

ソコベ即ち産卵鱒が、宛も氷河の冷凍を慕ふものゝ如く、冷い水を求めて此邊まで来て、ホリ掘る(産卵場を作ること)は、秋の彼岸の前後三十日であると人々は云つてゐる。(赤上氏)又、鱒は獨活の實を食べないと、ホリ掘れないと云はれてゐる。(同村、淺利鷹治郎氏)

獨活の實は、宛も黒い頭の附着いた、マチ針を放射形に集めたやうな形をしてゐるものであるが、そのやうに結實する頃に鱒が溯上するといふ意であらう。

○澤蟹の移動

蝶螺も水から水へ移るに定まつたコースがあるやうであるが、澤蟹にもそれがあるらしい。この村の山間で、時々その現象を見ることがある。(角館町、田口鐵藏氏)

○漁法

・漁法 鰍は幼年期の川一帯に棲息し、取り易い魚である。川の二股になつてゐる場所を選んで、一方にばかり水の流れるやうにして、片方を止めて干す。此の魚以外の魚を獲つても矢張り、鰍干といふ。(同村、門脇龍治郎氏)

あまり古い話でもない。村の者が二人、山の二股澤で鰍干をやつてゐた。暫時二人は一緒に岩を起したりしてゐたが、やがて一人が不圖氣付いた時、傍に連れの姿が見えない。其處らへ脱糞にでも入つたかと、深く氣にも止めないでゐたが、いくら待つても待つても歸つて来ない。

神隠しに遭つたか、天狗に攫らはれたかと案じ事してゐたら、別の澤の飛石を宛も夢遊病者のやうに、然し身軽く渡り乍ら其男が戻つて来たのであつた。そして夢のやうに澤や藪原を、自分乍ら身軽く飛び廻つて歩いたことだけ知つてゐるが、他は何も判からないといふ話。

然るにその事あつて幾日か過ぎて、二人が北秋田郡境へ青物採りに行つた時、境界の標木を見てゐたその男の胸裡に浮んだは、確かにその邊を自分が歩き廻つてあつたといふ記憶であつた。鰍干をやつた澤からその標木まで、假令草駄天でも半日はかゝる行程である。それを僅か二三時間で往復したことは、全く信じ得ない不可思議である。二人は事のあまりの意外さに、呆然としてしまつたといふ。(淺利鷹治郎氏)

全く山の人生には、平野の人の頭脳で到底想像し得ぬ神祕がある。

・鰍瀧 この村の小瀧に、メタといふ場所があり、其處の瀧を鰍瀧といふ。瀧の上は溪谷迫つて、水はまるでヒアゲの注口からでも出るやうに迸る。

あまり高い瀧でもないのに、鰍が左方の水勢の弱い岩面を溯上しやうとして、その部分へ蜜蜂でも附着いたやうに蟻集する。然も面白いことに、一方其處まで溯上した八ツ目鰻どもは、鰍のやうに岩面を上る藝當も出来ないのに、瀧壺の處にまるで水死女の黒髪のやうに、吸着いて靡いてゐるのである。

村人は其處へ罾網を持つて行つて當て、眞實に兩手で罾と八ツ目とを掻き入れる。(田口鐵藏氏)
・雑魚スグ スグは掬ふの意であるらしい。雑魚と云つても、その名稱が平野の方と若干相違してゐる。

岩魚、ヤマベ、フエヤッコ、鱒の類までが雑魚で、川を溯つて来るウケヒを、特にクキ(群來魚)と云ふ。

フエヤッコといふは、メダカ即ち土地でいふ、メダラベヤッコが二三寸に育つたものであるといふ。

これは鵜と稱する棒と網を使用する漁法である。鵜は長柄(棒竿)の先から五寸乃至一尺位までの距離の點に、葡萄皮、鴉の羽、犬の尾、黒布等、鳥の鵜に見えるやうな物を束ねて繩で結び付けた追棒である。

黒布であると二尺位のを二つ折とし、先を細く裂く。更に二羽の鵜に見せる場合には、同じ束を一尺程離して下方にも付ける。それで以て上から追つて来て、下で別の人が張つてゐる網へ追ひ込む。(赤上、門脇兩氏)

・置き針 岩魚、ヤマベを獲る方法である。竹を一寸程の長さの細棒に削つて、兩端を鋭くする。その中程を丈夫な細糸で結び、罾或はフエヤ雑魚の口を開けて、一端

が口先に、他端が胸鰭の邊に達するやうに、斜に挿入する。(これを大形の魚釣鉤でもやることがあるが、それは進歩した方法である)

川幅の広い場合には、繩の先へ石を結び付け、その竹針を香ました罾を付けて、あの邊は今夜魚の遊び場所であらうと思ふ所へ投げ込む。勿論漁人は雲の動きで風を知り、魚の遊び場所が判かるのである。繩の端は岸の木へ繋いで来る。そして翌朝行つて見ると、屹度岩魚の物が附着いてゐる。

又、川の狭い時には、二尺以上一丈五六尺位の長柄にその餌罾を付け、棒には流れぬやう重石を載せて置く。

然しこの置き針では、魚以外に鴨まで釣られる。その罾を呑み、竹針を咽頭に引つかけて、ギヤ／＼バタ／＼騒いでゐる不運な鴨を手捕にすることも稀らしくはないのである。(赤上氏)

これは飛騨の山間地方で、チチコ(罾か)を生餌として、鱒を釣るオケヅリと云ふ方法と同じものらしい。(川口孫次郎氏著「飛騨の白川村」)

私はこの原始的釣針は、石器時代に於ける石製、或は骨角を材料とする釣針と稱されてゐるものを検討する上に於て、貴重な参考資料と思ふ。

クラウゼ氏は、北歐のマグレモージアン(中石時代)遺跡から出土した簡単な細石器風のを釣針として説明するに、マーシャルやアラスカ土人の結合釣針を例證に挙げてゐるが、(史前學雜誌、マグレモージアン號) 私達はこの置き針の例で、結合して曲鉤を作らなくとも、直線針そのものとして、魚はおろか鴨まで釣り得ることを知る。

つまり罾或はフエヤ雑魚といふ中間の餌魚の存在を知つて、始めてその直線的な竹針の用途が判断出来るのである。

恁うして獲つた岩魚を焼いて皿に載せると、大きく口を開き臍立つて勇ましいものである。夏季此の村を通る旅人は、必ずや食膳にその魚の姿を見、又その美味に舌鼓を打つことであらう。

・ゲャベロ筈 ギギの事である。罾に似てゐるが色が薄赤色のもので、それを獲るに小型の筈を使用する。

この魚は頭に刺があつて、そこを曲げたりすると指を刺されるが、非常に痛い。(赤上氏)

○行事と信仰

・ネエツの棒 五月田植の初めと植終りと二回作つて、田ノ神へ供へるものであつて、朴ノ葉二枚敷いてそれへ御飯を盛り、小豆をまぜ、苗葉で結んだものへ、干鰯と箸を添へ、火棚のうちの横座と婆々座の間へ吊り下げる。これは後で取りはづして苗代背負ひ(コネヤ打のこと)などに食べさせる。(瀧利氏)

・又鬼とオゴズ 又鬼(獵師)がオゴズを使用するは、勿論山の神の御機嫌をとるためである。然しそれは豊獵を希ふ心持からばかりでなく、泊りがけの獵などでは怪我のないやうにと持つて行く者もある。

若しその魚が手に入らなければ、他の魚でもよいとされてゐる。(門脇氏)

又鬼が當初からオゴゼで山ノ神を釣らうと考へてゐる時は、その魚を十二枚の紙に包んで懐中して行く。そして若し豊獵にして呉れれば、包紙を一枚宛刺ぐと心で神へ約束するのである。然しいくら豊獵が続いても、十二

枚を皆剥ぐやうなことはしない。其儘懐中して歸る。

山ノ神ばかりいゝ面の皮である。(淺利氏)

・漁夫が魚を獲つた時の歡聲や、魚を叩き殺す時の唱言に「エビス！」と叫ぶことは何處でもやるらしいが、又鬼達も熊の多く遊んでゐる場所を、エビスバ(バは場)といふ。山の幸も海の幸に通ずるのである。(赤上氏)

○魚のムガシコ

・犬猫報恩 或る所に爺様と婆様と居て、犬と猫を大變可愛がつて飼つてゐた。或る時、乞食坊主が来て一夜の宿を借り、佛壇に向つて御經らしいものを讀んだ。

翌朝出立した後を見たら、其處に一つの延命小槌を置き忘れてあつた。それを振ると、金銀、米等、何でも望み通りの物が出るので、入用な物を出して大金持になつた。

ところが或日、別の乞食坊主が来て泊つて、矢張り佛壇へ向つて何やら御經を讀んだが、出立した後へ行つて見たら其處へ置いた筈の小槌が盗まれてなかつた。

そこで犬と猫は、日頃の恩返しはこの時とばかりに、その悪者を追駈けたが、とうとう姿を見失つてしまつた。

た。

悲觀しての歸りしなに、海岸を通つたら漁師が澤山に鯛を獲つてゐた。土産もないので、猫がそのうちの大鯛を一尾盗んで犬の背に跨がり、家へ大急ぎでハネて(駆ける意)來た。

爺婆々は小槌の盜難を災難とあきらめて、その大鯛を料理す可く、腹へ庖丁を立てたらゴロリ轉ろげ出たものがある。見たらそれが盗まれた延命小槌。盗人が海へ投じたのを鯛が呑み込んでゐたのであつた。(赤上氏が、九十八翁の勘太郎又鬼から聽かれたもの)

この系統のムガシコは、世界的童話として、昔話研究界で珍重してゐるものである。

・鯛の恩返し 或村の爺さん、畑へ行く途中、悪童達が堰から大鯛を釣つてゐるところへ通りかゝつた。

魚を何となくムゾク(可哀想に)思つたので、買ひ取つて放してやつた。

其晩家へ歸つたら何處からか頬冠りした、よいアネさんがやつて來て、臺所仕末をして呉れたり、いろ／＼と世話を焼く。その女の煮るお汁の旨いこと! 眞實に舌

が抜けさう。

一體何で味をつけてあんなに旨いだらうと、こつそり節穴から覗いて見て吃驚仰天、物もあらうに、そのアネさん、お汁鍋を跨いで、ジャーと小便してゐるではないか。

やがてお椀へ盛つて來たが、爺さん反吐をつきさうな顔。女はそれと「氣付くと妾のダシを入れてゐるところを見たでせう。何を隠さう。妾は貴方に救けられた鯛です」と云ふより早く、一尾の大鯛となつて裏のタナ池へダボーンと飛び込んでしまつた。

爺さんが小便と見たのは、實は鯛が苦しい思ひをして、腹の中のシラコを絞ほり出してゐたのであつたと。綾チュウ／＼錦サラ／＼御葉の松原通うて參れヤトンピンバラリのブウ(淺利氏)

・爺ちやと蟹コ 爺さん山へ行く途中、子供達が蟹コ捕つて苛めてゐるを見て、ムドツラに思つて錢をやつて買ひ取り放してやつた。そして澤へ行つたら向から、えゝアネさんがやつて來て爺さんと仲よく語つた。

爺さん若返つた心持で、次の日もそのアネさんに遭ふ

ことを楽しみにして行つた。澤のところまで行つて

蟹コウチ コウチ

翁は參つた

と云つたら昨日の女が出來て來て、爺さんと又、いろいろ話コした。

さうしたことが毎日續いてゐるうち、爺さんはその若い綺麗な女の姿ばかり目にチラ付いて、自分の皺ちやくれた婆々の面など見たくなくなつた。

一方婆さんも爺様の態度異變に氣が附いて、或日こつそり後をつけて行つたらその有様。そこで翌日は爺さんをしやり無理家に置いて、爺さんの姿して山へ行つた。

そして爺さんのやうに

蟹コウチ コウチ

翁は參つた

といふと女が出來て來たので、婆さん、いきなり胸倉とつて「よぐも俺家の爺どて横取りしやがつたな」と掴かみかゝつたところ、その女は動天して忽ち一匹の蟹となつた。「この畜生、憎くい奴だ」と叩き殺して、鉢は小屋の屋根へ投げたし、甲良どて畑へブン投げてしまつた。

何事も知らぬ爺さん、翌日山へ行つて例の通り呼んだが出て来ない。いくら呼んでも女は出て来ない。どうしたもんだらうと當惑してゐたら、木の上の鴉が

鉄は屋根に

甲良は如

カロン カロン

と鳴くので、屋根を見たら鉄、畑を見たら甲良を投げたであつた。なあ、(淺利氏)

・蛙と蟹 蛙と蟹と道で出遭つた。話が合つて二人は上方見物に出掛けた。高慢な蛙は蟹に向つて、「そんな恰好してワサ／＼歩かないで、もつと真直に速く歩いたらどうだ」と云つた。然し蟹は、無上この恰好より歩けないといふて、相變はらずワサ／＼横に這つた。

そのうち何やら後方からドドめかして来る音が聴えるので「ビックキど、ビックキど、後から馬ハネて来たやうだから、路を開けないと危ぶないよ」と云つたが、蛙は自分には跳ねるに上手だから大丈夫だといふて、其儘歩いてゐた。蟹はワサ／＼傍の藪へ寄つた。

其處へ二歳駒が、ガバ／＼駈けて来たので蛙は避ける

暇もなく馬の蹄にドーンと蹴飛ばされて傍の溝へ落ちた。

そして眼をひつくり返し、白球を出し、口あんぐり開いて舌をダラリと出してゐた。

そこで蟹が「ビックキど、ビックキど、その態何んだ」と云つたら蛙は「デモノムネマヨ」と、「餅呑む真似ヨ」を逆言葉で答へたのであつたが、實は腹を蹴破られて往生してゐたのであつた。だからあまりゴンシヨたげやる(強情張る)もんでねえーど。(同上)

・狐と河獺 狐が河獺のところへ魚を獲る方法を傳授して呉れと云つて来た。かね／＼憎くらしい狐故、河獺はうんと凍る晩に淵へ尻尾を漬けて置くと、しこたま雑魚が附着くと教へた。

狐、それを眞實にして其通りやつてゐたら、尾が悉皆凍り付いてしまつた。翌朝になつて尾をいくら曳いても上つて来ない。そこで狐の叫ぶには

コンコチ コンコチ

ヤーンさ

痛でヤコンコチ

少々の雑魚だら放れる

それを百姓が見付けたので、この馬鹿狐奴と、小長柄で叩殺してしまつた。(同上)

・猿と蟹と蛙と餅食ふ相談 この三匹が一緒になつて何か食ふ相談してゐたら、近くの長者殿の家に御祝儀があつて、ベタランコ／＼と餅を搗く音。

そこで蛙がタナ池にダボンと飛び込んで、ギヤグギヤグと小兒の泣き聲を眞似たら、長者殿の家では、それ坊やが水へ落ちたと大騒ぎして外へ飛び出した。その隙に猿は餅の入つた臼を擔ぎ出し、蟹は樋口から忍び込み小豆鍋を持つて逃げた。

山の上へ引上げて餅を食ふ段になると、猿は悪智慧を出して、臼を下へ轉ろがすから誰でも早く下りた者が食ふ可しと提言した。蛙も蟹も、足が遅くて及ばないからと不賛成唱へたが、猿は自分勝手に臼を轉ろがして、どん／＼下りて行つてしまつた。

蛙と蟹は、その急坂をシナつて／＼(迂廻に迂廻し)行つたら、ヒド(凹所)の所に臼から抜けた餅がそつくり落ちてゐたので、大歡びして蟹は鉄でそれをちぎりちぎ

り、小豆をつけて蛙にも食べさせてゐた。

空白と一緒に下りた猿は残念面して、登つて来たらその有様。そして「何して居る」と聞くので蟹はわざと謙遜して「臼へ追付けないから、此處で落ちこぼれ拾つて食つて居た」と答へた。猿は堪まらなくなつて涎を流し餅へ顔を附着けんばかりに寄つて来るので、蟹は、そんなに食ひたいならと、未だ熱い餅を猿の顔へ投げてやつた。その時の火傷で、猿の面はあんなに赤いのだと。

(淺利氏母堂サヨ嬢、五十七歳の御話)

○河童の話

・河童の手といふ植物がある。アギのやうな刺が生えてゐる。河童の手にも、それに似た刺があつて、人間の肛門へ入れる時はスルリと入るが、それが引掛つて容易に抜けないものだといふ。

・瓜は河童へ供へてから(川へ流してから)食ふもんだ。相當大きくなつてから供へる故、それまで子供達に盗まれることを防ぎ得るため、さう云ふものであらう。

河童が瓜畑へ入つて、瓜へ爪痕を立てたなど云ふもその小泥棒除けの策であるかも知れない。

・瓜のシブリ(尻)を食ふと河童に捕られる。雲然村でネブド(腫物)が出ると云つてゐる。

・瓜を持つて川へ行くと河童に捕られる。瓜を食べての水浴は腹を壊はすことを教へたものか。

・川で小便しようとする時は、「河童!」と叫ぶ。そして誰かゞそれに「化け!」と答へるまでは、いくら出て我慢しなければならぬ。これは水浴みに伴侶を必要とすることを教へたものかも知れない。

・河童が或時、芋殻に滑つて轉ろんで頭上の皿コの水をマカして威力を失ふた。それ故水泳ぎに行く時は必ずオガラを一本持つて行くか、麻糸を持つて行く。

河童が懲りて、近寄らないからである。

・或時、村の寄合に河童を見た者があるかといふ話が出た。誰あつて見たと云ふ者が無い。ところが隅に居た横枕部落の順助といふ薄馬鹿者が、俺は見たといふ。

どんな恰好であつたと寄つて聞いたら「河童、ゲエツツ(尻)さ、ヲガラ刺して、キョソソと小淵の方さ行つたけな」と答へたさうだ。(淺利氏)

河童の軀體は、双物を刺しても通らないが、ヲガラを

削つて刺すと容易く通るといふことが、倭訓葉や閑窓自語など、云ふ本にも書いてあるさうだから、何處にもある話かも知れない。

下檜木内村(檜木内村)

○アメ

ナメのことを此地方では、アメと云ふ。だからナメ流し、又はナメ打ちは、アメ流し、アメ打である。

秋田縣では昭和五年十二月廿五日の日附で、檜木内川沿岸へ次のやうな建札を立てた。總白ペンキ塗りの板の上方へ、魚を一尾描き

- 一魚ヲ殖ス様河川ヲ愛シマセウ
 - 一青酸加里ナメ爆發物ヲ使ハヌ様捉ヲ守リマセウ
 - 一魚ヲ大キクシテカラ捕リマセウ 魚捕獲ハ魚ヲ絶ヤス基
 - 一産卵ヲ援ケテ魚ヲ殖シマセウ
 - 一放流シタ魚ハ特ニ愛護シマセウ
 - 一河川ノ魚利ヲ増シ自分ヲ富マシマセウ
- 右のやうな總假名振りの、親切な文言の建札ではあつ

たが、何んぞ知らん、ナメを用意するに面例臭いし、ダイナマイトは容易に手に入らないし、それに音で判かられるしと啣つてゐた農民達へ、青酸加里といふ重法な藥品のあることを教へて呉れたことに就いて、大いに感謝されたいといふ、眞に皮肉な効果であつた。

以来、藥屋でその劇藥の賣行きの旺盛になつたこと云ふ迄もない。所謂、川焼きが始まつたのである。

ナメは主として山椒皮に灰を混するが、胡桃皮も使用する。これは川水の温む時に効果がよい。然し使用に關する取締は、今も昔も變はりはなかつた。文政の昔に次のやうな事もあつた。

文政十二年八月廿七日 佐竹義術侯筆録

一下檜木内むら川筋一圓あめ、打候義開得候ニ付、吟味申付候處恐入之由ニ而、同むら肝煎常光院へ入寺致、詫筋申出候由故、此度差免候様申付候 尤以來之義ハ會而左様之徒不爲致様ニ殿ニ申渡候 (角館町、佐竹男爵家藏「北家御日記」に依る。常光院は角館にある寺)

○漁法

・水カグ 水干に似たもので、小川などの兩方を堰止め

て、中の水を掻き出すことである。角館方面では、川干と稱してゐるが、その南方二里程隔つた、下延村では雜魚ケヤル(掻き出す)と云つてゐる。

○魚名

・フエヤ雜魚 上檜木内でメダカをメグラベッコと稱することは前述の通りであるが、この村ではフエヤ雜魚といふ。

西明寺村

仙北平野の形が瓢箪であれば、檜木内村はその上部の膨らみに相當し、下方の大きな膨らみの縊びれに近い部分に西明寺村がある。

檜木内川はその縊びれの中にスラロームを描くが、其處に川岱の發電所がある。少し前に其の邊で角館町の小野納藏氏が、一尺八寸の鱒を釣つたことがある。上げるものが出来ないで、サテ網で掬ひ取るやら大騒ぎであつた。釣餌は、下ガリコ(軒下などで上下に飛ぶ羽虫)であつた。(同氏)

○濁尻川の魚屬

それから少し下ると、田澤湖から溢れて来る湯尻川、(昔の湯野川)が東から合流する。この川は相當魚屬の豊富な川であつた。古い記録にも次のやうなものがある。

・明和七年七月三日 佐竹義躬侯筆録

一卯之刻過より湯野川へ鶴川に出候 供、與右衛門、八之進、新八郎、手柄鮎四百斗、内三百壹持參、殘候分へ鶴遣共ニ吳候 西明寺村肝煎等手柄之内十吳候

近年無之鮎ニ候 五ツ半頃歸候

・文政元年七月廿五日 佐竹義術侯筆録

一卯之刻、我等廣吉同道にて湯野川へ鶴遣に參候 右川至而鮎澤山、千餘手柄申候 七ツ過、湯野むら茂吉宅へ着陳申候(北家御日記)

鶴遣に出ることを「鶴川」と稱したことは、注意すべきことである。

角館町の三沼巖氏は、五六年前に此の川で一尺の鮎を三尾釣つたことがある。(同氏)

鮎釣は何處も同じやうに、友釣の方法でやる。即ち釣絲に鮎を一尾付けて置き、そのあたりに錨恰好した空釣を付けると、雌雄關係ではなく、繩張り争ひでヤラウた

め(やり合ふため)横合からやつて来て、釣に引つかゝるのである。

鮎は河石のカナ(鐵分)を嘗める。その爲めか鰓が赫い。下り鮎になる頃を「錆びる」或は「煤ける」と云ふ。

煤け鮎といふがそれである。

二百十日になると、下ると云ふ。その下り鮎は不味いと云はれてゐるが、そんなでもないと思ふ。(同村、赤倉善藏翁六十五歳の御話)

○オゴズ 今から三十年程前、湯野部落の絲井和三郎翁は、何か賭事に出る時は、オゴズを懐に入れて行つたがそのお陰で必ず勝つて来るものであつた。それは一尺もあるやうな大物であつた。(同翁の息、角館町、高橋直治氏)

そのオゴズは今も絲井家に秘藏されてゐるが、立派に海の鬼オゴズである。殆んど蟲の害もつけず、今だに如何にも山ノ神の狂喜しさうな姿をしてゐる。

○又鬼の魚漁

右から僅か下流に沿ふて、鎌足部落がある。其處の小

林辰五郎家は代々五左衛門と稱して、又鬼(獵師)渡世であつた。

同家五代の祖にモッケ(藁)と仇名された有名な又鬼が居て、數々の逸話を遺したが、その冬季タデ(餅)を奮ひ山の幸を追ふモッケは、夏時分は又優秀な鱒突きであつた。此の地方の支配者であつた佐竹北家の殿様が、この村の淵へ川狩に来ると、モッケは選ばれて鱒を引懸けて御目にかけるのであつたが、或夏の如き、大鱒を三尾まで獲つて、そのうちの牛乗り(一番大きいもの)を買ひ盆まで頂戴したといふ。(故小林辰五郎翁)

○鮎釣と鱒釣

同家にはモッケ愛用のものであつたか、鮎を引懸けるに使用した古い鉤がある。四尺の柄に附着してゐる鉤は、鱒釣のやうに袋式としてはめたものではなくて、紐でぐる／＼柄に捲き付けてある。

鉤は根元からベントの頂點まで、二尺五寸といふ途方もなく長く原始的なもので、アギは内向きに一本だけ附いてゐるが、その小さいことが特に目立つて見えた。

鮎も矢張り、ホリ掘るに(産卵に)此の川を溯つて来た

のであつた。

昭和十年八月廿日、私が小林家の又鬼事情を再調査に赴いた際、八津部落の八柳辰五郎氏が川下で突外づした鱒を追つて来たといふて一服吸ふてゐた。

同氏が其時持つてゐた鉤は、三寸二分のもので、アギは矢張り内向きに一つ、比較的長く袋式であつて其處から繩がついて、柄に結ばれてあつた。柄は長さ五尺、根元が次第に太くなり、更に手から滑べり抜けぬやうに鉤状としてあつた。

昔は三尺柄であつたが、現在は水眼鏡など使用して遠くまで目が届くので、長柄となつたといふ。

又鉤を引くに、魚をカギ腹へ載せるやうに、少し先を上げ鹽梅にするが秘傳だといふ話であつた。(八柳氏)

右の鉤と柄を結んである紐繩は、鱒が懸つて狂ふと、自然とカギが抜け外づれて延びるやうにしてあるのである。一貫二三百両もある鱒が懸かる時は、相當に引張られるものだといふ。

鱒が淵に澤山居ることが判かると、川狩といふことをやる。網を廻はし勢子が泳いでパチャ／＼やつたり、石

を投げたりする。

カギノシ(引懸ける者)は釣を持ち、大きな重石を抱いて四尋も潜ぐり、前を逃げる鱒を待つてゐてかける。かゝると、ググ、と大きな音がするものである。場合に依つて、カギノシは深く潜つて水中で仰向いて引懸けることもある。

昔のチヨン鬚時代には、顔に下がる髪を押へるため網で造らへた頭布を冠ぶつて入つたものであつた。

鱒突きには、「落し突き」と云ふことがあり、長い柄のついた魚扱へ手繩を付け、岸又は舟から投げ突きするのである。(赤倉翁)

カギノシも含めて漁人全體を稱したか判からないが、川子といふ言葉があつた。

○享保十七年六月二日 佐竹義據侯關係記録

尤門屋村儀左衛門所にてお晝被召上候 鱒二本、川子之者取り申候(北家御日記)

産卵後の鱒は見る影もなく寝れてゐるが、それをホツサギといふ。昭和九年の秋近く、折ノ木船場の邊でその鱒が一尾うよ／＼してゐたが、川子が魚扱を向けたら上

流の方へ逃げて行つた。然し村人は、ホツサギ鱒は一度逃げて亦戻つて来るものだ云つてゐた。(角館町、松田直次郎氏)

○原始的漁法

矢張り鱒を獲るに、手ネヅルと云ふ方法がある。全くの手掴かみである。岩の下に鱒の居る時は、その下腹を撫で、ササメ(鯉)に手を入れて捕へる。

鱒は背に觸れると敏感に逃げるが、腹を撫でられると氣持よいものか、じつとして動かない。其時若し暴ばれるやうであると、直ちにササメを離してしまふ。つまり兩鰓の間を、もぎ取るのである。すると直ぐ死んでしまふ。(赤倉翁)

昔、孔子が絃歌してゐた時、九尺もある大入道が入つて来て子貢を小脇に挟んでしまひ、續いてかゝつた子路も甚だ危ぶなかつた。何事ぞと覗いた孔子が、その入道の頰と鰓のやうに動く部分のあるのを見たので、子路に入智慧して、そこを掴かまへさせた。そして難なく押へて見たら、それは大鯰であつたといふ。

鯰の化物も、急所であるササメを押へられては、何も出来なかつたらしい。

○魚の尻尾

この附近では魚の尾のことを、オバギと稱する。生魚の場合、それを切ると、「エビス様さ上げもす」と云つて、流しの板に張つて置く。

然し町などのやうに、それを見舞品に添へて遣ることはない。(同村、齋藤カノ六十四嬢の御話)

○宥然淵

そのむかし宥然といふ坊が、東岸の高筑紫森から向岸の山へ飛行せんとして、過つて墜落した。坊が其際携へてゐた琵琶が化石して淵に沈んでゐるし、岩上に足痕や手をついた爪痕があるといふ。その傳説の宥然淵はこの附近にあつて、西明寺村三大淵の一つである。

共に舊藩時代には、角館の殿様の御留場とされ、村民も勝手に漁が出来なかつたのである。

寛保三年六月九日 佐竹義據侯關係記録

一日和 今日ゆうぜん迄鱒狩有之、五ツ過よりお出候

御長刀、御挾箱、御茶辨當、御草履取、御步行兩人、

御供老之助、作右衛門、十藏、宇七郎、珍齋ニ御座候

吉右衛門、九右衛門、久三郎參候

鱒十五かゝり候 暮過御歸り候(北家御日記)

この界隈は、山水明媚、四季山川の幸に恵まれ、農民自身の日から暮らし易い所だと云つてゐる。羨む可きユートピアと思ふ。

○大石澤のアメ打

村の西に、大石嶽の七ツ星といふ農民曆(頂上近くの巖に、その形に雪が残る頃になれば、水泳ぎを始めてもよいと)を有する高峯が聳え、それに喰ひ入る深い澤々の流れにも魚屬が豊富である。

然しそれ等の澤奥にも、魚止マリと稱する箇所がありそれから上には岩魚も棲息しない。(赤倉翁)

むかし角館侯はその澤まで入つて、アメ打をやり、莫大な手柄をしてゐる。

延享三年六月九日 佐竹義據侯筆録

一天氣吉 酷暑 五ツ前より大石西ノ股澤ニ、あめ打ニ

行候 鱒二尺、いわな五十本、やまべ十斗、きり／＼

千、其外猷澤山手柄申候而、五ツ頃歸候

今日の供、岩又右衛門、小田五郎、岩又之丞、畑彌惣

太、同傳太、陶庄吉、植藤治、平治、村之助、平八、

庄右衛門、孫一郎、忠藏、軍藏、勇太也 北家御日記、
姓の下文字が省略されてゐる)

○制禁の魚獲法

此の地方が、ナメを昔のやうに、アメと稱する下限である。即ち、アメ打、アメ流し、アメ揉みなどがその語である。原料は既述の如く山椒皮、トゴロを使用するのであるが、トゴロは大川に、山椒は谷川へ主として使用する。

・トゴロの場合 「アメ打だ」と觸れ、來ると、先づ皆は山へトゴロを掘りに行く。一度に多量用意出來ないからである。

それを土間で潰ぶし、俵へ入れて背負つて行つて、上流で踏むと河水がまるで眞白になる。兩岸には何百人といふ村人が待ち構へてゐて、魚扱で突いたり、絹のタモ網で掬ひ取つたりする。勿論それは、取り次第自分のものであつた。

そのやうな大仕掛けのアメ打は、明治頃まで行はれたものであつた。

・山椒の場合であると、その皮を陰干して乾かすなり、

る。新らしく水の流れる場所を避けて首を突込むので、その間に青酸加里などは流れてしまひ、それで救かる場合があるからである。

この岩魚の悪食は有名で、「イワナのアダ喰ひ」と稱されてゐる。水を渡る蛇、蛙、岸を走る蜥蜴などにかぶり付くことは稀らしくない。或る場合には水面から一尺も上に垂れてゐる、草葉や藤藎などに附いてゐる毛蟲にまで飛び付いて喰ふ。

・ハツバの場合 ダイナマイトは、長さ三寸五分位の巻煙草恰好してゐるものであるが、油紙で包む故水が入らない。その先に柴棒で孔を開け、水中道火を眞鍮管に挿して抜けないやうにクチめて(咬んで)締めたものを挿入する。それを又、流れぬやうに石の錘につけ、點火して投入する。

大きい淵だと、さうして十本も投げるが、始めはポヤ／＼と泡ブクが立つてゐて、やがてビビーンと地響き爆發するのである。重ね管の三本マルキなど入れると、水雷のやうに凄まじい勢で水が上がる。

結果、雑魚は勿論、大鱒などビツと水から抜けて、白

火に炙ぶるなりして白で碎き、更に篩にかけて粉末とする。それへ同量の生灰を混じ、袋へ入れて上流でもむ。皮の儘でやる時は、生灰と一緒に煮て薙にひろげ、盛んに煽いで冷ます。それを早くやらないと、アメがアメルといふ。

然し皮のものは、容量があり重量があるので、あまりやらない。(同村、藤村淺吉氏)

一般に鮎を獲るナメは山椒を使用しないで、トゴロを揉む。それに土を混するのには、ナメが水面に浮ばないで底を重く流れるやうにする爲めである。(同村、佐々木門左衛門氏)

・青酸加里の場合 結晶を叩き潰ぶして川へ入れる。

水が笹色になる。一尺二三寸の岩魚が、バチツと抜けてひつくり返る光景は痛快である。利目が薄くなると、追ひ打と稱して、少し下つて又流す。

二度と出ぬことを岩魚のやうだと云ふやうに、澤の水溜などに居るものを一度逃がすと、泥に潜ぐつたきりどうしても出て來ない。然し尻尾は隠し得ないので捕へられる。その習性は可笑しいが、然し慧かしいとも考へ得

河原(腹を出して眞白になつて)なつて流れるのである。

(赤倉翁)

○釜の淵の魚

先の有然淵と等しく、西明寺村三淵の一つである入江部落の釜の淵は、今日も瀬とならないで深く、随つて魚も多い。

淵があれば傳説といふ風に、この淵にもそれがある。

昔、門屋村の某老人が、鱒を取らうと思つてその淵へ飛び込んだ。ところがどうしたものか、急に腕が痺れたと思つたら手に握つてゐた筈の釣が無くなつてしまつた。

老人にとつては大事の釣故、一生懸命搜したけれども見當らない。

そのうち底の方に明かるい所が見えるので、氣味悪く思つたが勇を鼓してその中へ入つて行つて見たら、これは不思議、中から讀經の聲が聞えるではないか。それを岩の隙間から覗かうとしたら、中から「誰だ。何しに來た！」と大喝。

恐る／＼事情を述べたところ、「俺はこの淵の上にあつた開殿寺の坊である。洪水に伽藍を流し再興を企てた

が、凶作の折から誰一人應ずる者もなく、遂に淵に身を投じて主となつた。俺は何より金氣の物が嫌ひだ。

今後あんな釣など此處へ入れなければよいし、さもなくば汝を再び返さぬぞ」と怒鳴つた。

老人は平身低頭、二度と再び金氣の物など入れないと誓つたら、扉が開いて、古衣を裳ふた凄しい坊主が現はれて、その釣を返し寄越したといふ。(西明寺郷土史。淵の底の坊主が、墨を磨つてゐたと傳へる者もある。)

この淵も勿論、角館の殿様の禁漁區で、魚の澤山溜まつた時分を目懸けては、物々しく供揃して川狩に來たのであつた。

寛保三年六月八日 佐竹義據侯筆録

一快晴 五ッ過より釜淵へ鱒狩ニ行候 供、岩橋又右衛門、植田藤治、宮崎與惣兵衛、林專治、小九右衛門、石善右衛門、深谷喜内、小田ノ半八、三彌税、武勇太下勘助、久林之丞、小兎毛、石黒形右衛門 深谷市右衛門、植田新左衛門へ跡より來り候 晝前、鱒十七本上り候 内二本歩夫ニ而屋敷御兩様へ上候 同四本晝にて料理、川子共ニ吳れ候

晝後四本上り候 かと屋庄三郎四本取候故、一本吳れ候 寺澤甚八三本とり候故 一本吳れ候

鷹巢淵に而、釣など慰ミ暮半歸り候 九右衛門、善右衛門へ先へ歸り候故御兩様へ鱒貳本宛上ケ候

釜淵留場、兎候

一夜食ニも鱒料理被付候

一残りの鱒、久保田土産ニ皆鮮ニ申付候

今日鱒狩起取人數

植田藤治、久津澤六兵衛、同彌學、大津利兵衛、庄司彦九郎、步行惣八、金兵衛、平太、專右衛門、曾兵衛 かとや村百姓庄三郎、甚助、清五郎、庄吉、西明寺村今藏、万右衛門、吉右衛門、小山田村久左衛門、重兵衛、五郎兵衛、三右衛門、川原村吉藏、甚兵衛、善八、佐藤右衛門、與五兵衛

手柄

手取一 彌學、カキ一 彦九郎、カキ二 惣八、

手取一 平太、カキ一 金兵衛、カキ四 庄三郎、

カキ二 甚助、カキ三 甚八、カキ二 今藏、

カキ二 万右門衛、カキ一 佐藤右衛門、カキ一 甚

兵衛 (北家御日記、漁禁がかうした大漁の後に解放されたこと、及び、食べたり進物としたりしても残つた鱒は鮎としたことも注意す可きことと思ふ。)

寛延元年七月九日 同上侯筆録

一快晴 四ッ後より釜淵鱒狩ニ行候 八ッ頃狩仕舞候 鱒廿三本上り候 門屋彌左衛門所晝休ニ候 寛々居候 而暮頃歸候

表様へ三本、奥様へ二本上ケ候 其外澁川内藏之進、形右衛門、貞庵に一本宛遣候 晝ニ而二本料理候 河子之者之内、うしのり三人、並網魚一本宛とらせ候 一今日の供、先へ形右衛門、與右衛門、供澁内藝之進、深谷市右衛門、岩又右衛門、陶庄左、林之丞、小太郎 甚八、小田五郎兵衛、畑庄藏、平八、軍藏、易右衛門 植藤治也

鱒取候人數

鱒一本網懸り 庄司易右衛門、同一本 步行金之丞 同一本 門屋村友之進、同一本 川崎吉藏、鱒五本 カキ 寺澤村甚八、同四本 小山田村藤之丞、同三本 同村久左衛門、同二本 同村五郎兵衛、同

一本 同村十兵衛、同一本 門屋村庄三郎、同一本 小山田村吉之助、同一本 やす 同村善太郎、都合二十三本 (北家御日記、又兎モツケの條で述べた、「牛乗り」のことも見えてゐる。網魚とは、何網での意かよく判らないが、この村では最近まで鱒を獲るため、目の六きい丈夫な投網を使用したから、或はそれであつたかも知れない。)

明和三年六月五日 佐竹義邦侯筆録

一天氣曇ル 夕方雨 夜中雷少有之 辰刻比より門屋村釜淵へ河内、堅治同路同路鱒狩ニ參候 河邊に而直々晝食給候 鱒三拾七本上り候 夕方明神淵より釜の留迄瀬狩申候 是にて十貳本上り候 都合四拾七本

右之内、河子のもの或ハ門屋、西明寺兩肝煎、或ハ料理人などへ遣候而屋敷へ三拾本持參申候 暮半頃歸候 (同上御日記)

○明神淵の魚

この淵は三淵のうち、最も下流に位置してゐる。この更に下流にある中川村鷹巢の淵までの西岸は、斷崖をなして、紅葉時などは非常に美しい。途中の瀬と共に、魚

類の絶好棲息地であるので、明治頃までそれを覗つて活躍する河瀬が非常に多かつた。(角館町、蓮沼運助氏)

・明和三年五月八日 同上侯筆録

一今朝より河内、賢治、明神淵へ鱒狩ニ参候 三拾六本

手柄有之、内貳拾貳本持参ニ候 暮過歸ル

一右鱒、矢野舍人、小野崎彌三郎へ壹尺宛遣候 矢野毅

負世話申候故、是へも壹尺吳候 (同上御日記、河内は小

田野直武と共に關畫を描いた後の義射候、賢治は不遇のうち身を終へた、後の眠山のことである。)

○其他の漁

・山へは前述のやうに、ナメでも獲るが羽蟲でも釣る。

・ガメロ 矢張り笈で獲る。大きさは普通の鱒笈程であるが、材料は萩、但しアギだけは薄い小板を編んで入れる。猶ほ中に、タマガラ蚯蚓を實子に通して張つて置く。驚く程入つてゐるものである。(八柳氏)

・雑魚は雑魚タメで獲る。仕掛けは夏に川中へ石で環壘を積み、一ヶ所だけ魚が入るやうに口を開けて置き、中に柳、柴など入れて魚の隠れ場所とする。それに又、油殻即ち菜種の莖を交ぜて入れて置くと餘計入る。

秋になると、その入口へ雑魚ドと稱する大きな笈の口を當てる。そのドは、口徑二尺、長さ五尺程のもので、材料は柳か葭である。アギは矢張り薄板を編んで作る。

その準備が出来ると、中の柴を取除く。大魚は川へ逃げる積りで笈に入つてしまふし、小雑魚は罟網で掬つたり手掴かみにしたりする。(罟網は弓に三角帽の如き袋網を張り、短い棒を把手にした普通の網である)

タメは右のやうにして、河岸に氷の張る頃まで十日に一遍位宛上げて入つてゐる。

・カナギ メダカのことを斯う云ふ。

○漁の分配

牛乗りと云ふ事 この意味は、例へば家や倉の一番大きい梁木を、ウシと云ふやうに大きいと云ふ意であらうと思ふ。然し又、牛の背に乗つて海や川を渡つて來た神佛の傳説、堰の破れを防ぐため埋められた人柱の多くは牛の背に乗せられた儘であつたこと、更に淵に牛が落ちて死んだ傳説などがあつて、牛コ沼、牛コ淵などの名稱の由来を物語つてゐるものゝ、所々にあることなどを考へると、そのどれが當つてゐるものか私にはよく判から

ない。

先の殿様の川狩の際などでも、牛のりを三人に賜はつたとある故、大きい鱒の意にすれば、最大から次位、三位と呉れたことになる。

然し普通、川子達が組で淵の鱒突きをやる場合には、此の言葉に一種の不文律がある。即ち三本獲つた者へは一本、六本手柄した者へは二本、九本の者へは三本を牛乗りとして與へる。その率で進むものであつて、それ以外の數を手柄しても牛乗を取るハンデケップはないのである。(赤倉翁)

○抽籤の方法

・引籤 人數の多い場合、共同の漁の時などやる。先づ人數だけ籤を作る。一人がその束を後手に握つて、皆に一本宛を握らせる。そして他端のうちから一本を手探りに引いて「一」と叫ぶ。

人數のうちその手答を自分の籤に感じた者が一位となるのである。同じやうにして、二、三、四と次々叫んで引く。

魚は東一、北一といふ風に並らべて置いて、引いた順

序に與へる。西一とか、南一とかの並べ方はやらない。

・切籤 長短を作つて引かせる普通のやり方である。

・天保錢 二人の間で分配する時行ふもので、一種の詐欺籤である。長短二本の籤を作り、それを二つ折りにして引懸ける。長い方を全部自分の掌に隠し、短い方の二端を二本の籤のやうに見せかけて、相手に引かせる。相手はどのクジを引いても、結局は一本の短い籤の兩端である故負けてしまふのである。

「當ればテンポ」といふ言葉は、これから出たものであるといふ。(赤倉翁)

○調理法

・ナッツ 語源は判からないが、切込みの意である。鹽と麴で漬けるもので、鮎と鹽辛の合の子とも云ふ可きか。

主としてタナゴを漬けるが、鮎、鰯、鮒も漬ける。枡木内村では殆んど鮎と同意義になつてゐて、茸のムキダケなども漬けるし、更に南蠻のナッツまで作るといふ。

鮎の場合は、若鮎をブツ切りに入れて入れる。タナゴのものは、一寸ニガ味があり上戸の口に向く。

・鮎 鮎鮎は鮎を一度軽く鹽に漬け、それから夏粕に漬けるもので、珍中の珍味である。但し漬けるには、秋の下り鮎が旨い。

又これを鱈鮎のやうに御飯で漬けることもあるが、長保ちが難かしい。

雑魚の鮎は、飯と麴で漬ける。比較的堅いものである。

・鹽辛 鮎の腹から取出したもの全部に鹽を打込むは普通であるが、特に黒い腸を除いて、卵と白子でばかり作るものは、色よく品よく、味もよい。(佐々木氏)

○傳説及び民信

・片目鮎 この村の八津観音の本宮の臺地は、最近稀らしいストーン・サークルの墳墓が発見されて有名になった。臺の左側は、堂の澤と稱されてゐるが、其處の溪流に棲む鮎は片目であるといふ。

そもこの八津といふ地名は、左甚五郎が院内の観音堂を建て、から、丁度八ツ時に來てその観音堂を建てたことから生じたものなさうだ。その甚五郎が徒然のあまりであつたか、木屑を鮎の形に削つて溪流に放したま

ではよかつたが、うかり片目を忘れて付けなかつた爲め片目鮎が現出したものだといふ。(赤倉翁)

・豆の香 門屋村の舊家では、小正月に豆の皮と鯀の皮とを合せて煎て、家の廻りを撒いて次のやうに唱へる。

豆の香も ほがく

鯀の香も ほがく (新庄古老覺書、この行事に關する傳説の詳細は、角館町の條に於て述べる。)

・ナズ棒 上檜木内のネズの棒に相當するものである。

五月の田植の始めと植上げの兩日、及び半夏(御伊勢様の日)にやる行事である。矢張り朴の葉に御飯と小豆飯を入れて巻き、萱箸と鯀を添へて火棚の明ぎの方へ二つ吊るして置く。

此處では、アメると悪いからと云ふて、翌朝外づして食べさせる。その萱箸を腰に挿せば、田植に腰が疲れないといふ。(齋藤カノ姫)

・エ、事聞くやうに 五月節句に、筍、ヒデコ(牛尾菜のこと)などで耳孔をほじる眞似をし、「エ、事聞くやうに、悪い事を聞かないやうに」と唱へるは何處でもやるが、小山田部落では、それに鯀とワカメを添へるは變つ

てゐる。(同祖)

・東方朔 一般に占の事を恠う云ふてゐるが、それに依ると鱈の豊漁の年は稻が不作だといふ。八ツ目の漁はこれと反對であると。

・鮎 稀に田澤湖などまで溯つて入つてゐることがあるが、子を置く(産卵)と死んでしまふ。それ故鮎は、婚儀に使用する魚でないといはれてゐる。

嫁が子を産んで死んだら大變だからである。(赤倉翁)

神代村

この神代村は東を玉川、西を檜木内川が流れ、更に西寄りをして院内川が流れて檜木内川に合流する。

○梅澤沼

新百景、抱返り溪谷附近の沼である。夏漁よりも寧ろ冬季結氷時のザンガキといふ漁の方が盛んである。

其處の蝦は古來美味なこと有名であつたが、最近はその方へなども出さないで、村でばかり食べてゐる。

いつかこの沼でザンガキをした時、二尺四寸の鯉の獲れたこともあつた。

夏季使用の杓は圓盤を頭に附着けてゐるが、冬のザンガキに使用するものは、ゼエ追イ(ゼエは水片)と稱して、四角板を附着けてゐる。共に柄は二間程である。

その他、氷を切る、スズガラといふ矢張り二間近い柄をすげた鋤がある。

梅澤村森ノ腰部落の大石清四郎氏は、優秀な又鬼であると同時にまた、よき川子でもあるが、同家のトリコ、(入口側の土廊下)の梁を仰ぐに、右の如き道具の他に素張らしい魚扱がある。立派も道理、それは先代善五郎翁が特別註文で作らしたもので、名工の評判高い角館町岩瀬の吉田鍛冶に、刀を一本潰ぶして鍛へさせたヤスである。

當時の金で、米一俵かゝつたと云ふから、世の常の物とは相違するわけである。茲頃は八本ヤスを使用するがそれは六本である。穂先の鋭利なことは勿論、あの酷い玉川砂礫の上を舟で行く時、棹の石突代用はその部分を突張つても、いさゝかも穂先が狂はないといふ。

その柄は又柄で、三間といふ長さが檜の割材で出來てゐるから驚く。云ふ迄もなく、狂ひを防ぐためである。

善五郎翁は、それで鯉をよく八寸程のものから、百發百中に突刺したものだと言ふ。

し魚のいろく

・鮎 寒中の鮎を生きの儘呑むと、身體に藥だといふ。

勿論、小鮎を呑むのであるが、それでも呑んでから胃の中で動くのが判かるなど、氣持の悪いことを云ひ乍ら呑む人がある。

・ギギタ ギギのことである。

・豆ギギタ 小さい割に鬚が長く、色も黒つぽい。

・アブラッペヤ 背に黒筋がたつてゐる。川雑魚に似てゐるが、食べて味はチカ(ワカサギ)に似て、骨も軟かい。油粕を入れた鮎にはよく入るが、それから出たアブラかどうか判からない。

・フエ雑魚 油ッペヤの別名である。フエは「這ふ」の意かも知れない。

・ホッチャレ鱈 尾がホリ掘る爲めに傷み、産卵で疲れて流れる悲惨な鱈の姿である。その頃には、よほど川上へ行かなければ、生きのあるものは獲られない。食べても不味い。

・蟹棒 嬰兒の最初の糞のこと。

○俚語

・わだしや甚吾節 五十集屋店など出した様に

しつかり生臭盡しを取り集めてやつたれば

聲は鹽梅でその節は 後先判がらぬ鯉の節

文句は眼で知りナガエ

八ツ目嫁とりだ 鉤八ツ目の子だの婿だどて

鯉コ仲人で 鮎の娘コなど貰つたれば

嫁コの腰は、じよなくなち

姑嬢腰も、じよなくなち

仲人の腰まで、じよなくなち

・アネコ何處さ行く

葛籠コなど下げだねが

猫ね喰はせえる 鮎コ取ねえがど行つて見る

若しが鮎コ居んねやがら

蝦まさりの小雑魚

箆コもて、かつちやぐる(同村、伊藤永吉翁錄)

○ムガシコ

・澤蟹の由來 むがしあつたぞん。一匹の蟹が町へ柿買

・トゲコ この鬭争性のある、そして營巢に産卵する珍しい魚は、身體に刺も著しく生えてゐるので、トゲコといふ方言は鬭魚の意か、刺魚の意か判然しない。

輸入語でなく、真にこの地方農民の命名であつたら、鬭より刺の方が當つてゐるやうにも思はれる。

トゲコの鬭争を見てゐると面白い。雌が巢についてゐる間、雄は見守つてゐる。其處へ忍んで来る夜這コキ、(村人は夜這に来るものと觀察してゐる)は、どういふものか元氣がなく、しほらくと近寄る。

それを見ると雄は鱗を逆立て、刺をピンと張つて身構へる。両者は柳眉を逆立てた儘、直線的に、然も非常なスピードで擦り違ふ。と思ふと忽ち轉回して睨み合ひ又同じことをやる。そのタインの見事さ、鮮かさ、水泳の選手が研究したら、定めし得るところあるであらうと思はれる程のものである。

さうしてゐるうち、雌は又雌で、口から泡ぶくを出して、煙幕否、泡幕を張つて敵の目を眩ますのである。

(以上、同村、伊藤雄二郎氏)
・ソウミの串 耐火力がある。

ひに行つた戻り路、ドラメギのあたりまで来たたら、背負つてる籠の中の柿を食べたくて、食べたたくて仕様ない。

それから一つ位なら食つてもよからうと獨り合點して食つた。ところが又食ひたくなつた。又食つた。

さうして一つ食ひ、二つ食ひしてゐるうち、皆食つてしまつた。皆んな食べてしまつてから、どうも困つたことをしたと思つたが、他に仕様もなく種コばかり家へ持つて来て、それを蒔いた。さうしたら柿木が生えて、や

がて大木になり實が鈴なりになつた。

親蟹は喜んで、柿をもぐべしと横這ひに木登りを始めたところ、誤つて途中から墜ちたので甲良を潰ぶして死んでしまつた。子蟹が動天して其處へ行つて見たら、親

蟹の死骸から小さな蟹ツコが澤山、サワ／＼と這ひ出してゐた。それが皆んな今の澤蟹といふものになつたのだと。トンピンバラリのアウ。(同村、伊藤寛一君

十一歳の御話)

○異譚及び信仰、それから行事

・辰子の魚 角館の士族の某が此の村の院内山の澤へ入り、人知れず魚を澤山獲つて来てゐた。其處は觀音の信

仰から古來殺生禁斷の場所であることを充分承知しつゝ、そんな罰當りのことをしたのであつた。

さうして獲つて獲つて、遂に辰子の魚まで獲つた。(タツ子は田澤湖傳説のヒロイン)翌日その土が例のやうに院内澤へ入ると驚いた。山と山とに跨つて、大人が寝てゐるではないか。その脛の太いこと、流石不敵の士も顔を蒼白にし、腰を抜さんばかりに仰天して逃げて來たさうだ。(角館町、條田清治氏)

その大人は、八郎の寝姿でもあつたものやら。

・雑魚取り甚太郎と地藏 前述院内の金澤に一體の地藏があり、その御首が継ぎ更へになつてゐる。

それはこの村の國館に居た甚太郎といふ者の仕事である。彼は雑魚取りで生活してゐたが、或日どうしたものが甚だ不漁であつた。剩へ劇しい雷雨に遭遇したので、その地藏堂に雨宿りしたが、このやうに不漁なのは、この地藏奴が此所から見えてゐるからだといきなり首をもいで、後を流れる院内川の淵へ投じてしまつた。

叔、甚太郎我家に歸つて見るに、不思議や娘が佛壇に向つて合掌したまふ、その掌を離すことも、體を動かす

ことも出来ないで居るではないか。様々のことをして見たが、どうにもならないので、流石の亂暴者も、これは

てつきり地藏さんの崇りと悟り、元通り御首を付けて上げるから許して下さいと願つたところ、娘の身體が平常に復した。それで約束通り御首が附け更へられたのである。(角館町、藤澤清二氏)

・活き魚放流 次の社は、抱返り景勝の入口にあるもので、現在は抱返神社と稱されてゐる。

・九月十六日 水尺明神祭

仙北ノ郡若松の里に在り、別當修驗妙覺寺、此日參詣の諸人。活ル魚を奉、神子石といふ處の淵へ放つ也

(六郡祭事記)

右は現在もある信仰であるが、どういふわけか其處へギギタを放つことになつてゐる。(角館町、戸澤順之助祠官)

水尺といふ文字の解釋に就いて、菅江眞澄翁は「水尺は垂跡ならむといへる俗あれど、それは強語ならむ。水尺は濡木てふものにて、水の淺深を量ための丈尺の事也、歌に漂落とよめる、杖の事なり」と説明し、例に六郡祭

事記の右の水尺明神を引用してゐる。(同翁著「月出羽路」刈野水尺橋の條)

然し此處に異説がある。水尺はシバリ或はヘシリと關係ある語であらう。シバリは絞ほるなど、通じて、溪谷の極く迫つた地名となつてゐるが多い。秋田縣にもそれが所々にあり、然も定つて蛇がその間から抜け出したといふ傳説があり、大蛇或は龍を祀つた神社がある。

ヨドマリといふ地名も、専ら魚止マリと信ぜられてゐるやうであるが、魚類の潮上不可能の意ではなく、「兩止マリ」であつて左右から溪谷が迫つて、所謂進退谷まる場所の意であると思ふと。(中川村、鈴木篤郎氏)

蓋し新説たるを失はぬ。生保内盆地へ水が入らなくなつた時、玉川が抱返り溪谷を打破つて出て來たことは、地質學者の證明するところであるし、水の奔流を大蛇に例へ、或はその仕事と解するは頗る自然である。

抱返神社は全く明神であり、蛇を祀つてゐる。現在も社堂の中に、大蛇が居るやうなことを人々は言つてゐるのである。

又、角館町の下河原部落には「蛇走り」といふ所があ

り、昔大蛇が走つて玉川に入つたと傳へてゐるが、その地形を見るに、明白に舊河床で、蛇や龍で表徴される河水が流れ、玉川に注いだものと判断されるのである。

・豆ノ香の行事 村のうち、本町の伊藤家と千葉家では正月十五日の夕に

豆の香も ほがく

鯨の香も ほがく

東の方の切窓から

チエン(錢)ど金飛んでフエヤール(入る)

と唱へ乍ら、一升枥へ米糠八九合、豆の皮五勺、及び松葉、昆布、干鰯を混じたものを入れ、主人が先に立つてそれを左右に撒き乍ら三遍廻はる。

右が終れば、明ぎの方の雪の上へ田畠の形を作り、藁と豆カラ(タチ即ち莖)を植ゑ、枥に少々残したものを撒き、御神酒を上げて拜む。(故伊藤永吉翁)

中川村

此の村と角館町は、檜木内川一本を隔て、相對してゐるので、總ての點に於て共通するところが多い。

○鮎の話

西明寺村との間に、鷹巢の淵がある。其處には舊藩時代から築をかけたが、現在築禁制であるのに特に其處だけ許可を得て、大仕掛けに組んでゐる。

禁制以前は鮎もよく落ちて、一朝にマノグレヤ桶（馬槽）で二つも獲ることは稀らしくなかつたといふ。（同村戸澤小作氏）

鶉も使つた。これも禁制であるが、いつか解禁の日があるかと、その鳥を飼つてゐる人もある。

鶉使のコツは、川下から石を下げた網を廻はしてゆく時、鶉を網の内接部分に放すことである。真中では捕れない。（同村、青山一馬氏）

又網を使用しない場合には、網曳き（或は繩曳き）といふことをやつた。徑二寸から三寸程の、太繩の十間程の長さのものゝ所々に、河原石をブラ下げる。それを大勢で檜木内川と玉川の落合のあたりから、上流に向つて河一杯にして曳行する。そして時々中に鶉を放しては獲らせるのである。

夏とは云ひ乍ら相當難儀な仕事である。休憩の場所が

て行かないやうに、石を並らべたりしたものであつた。

（鈴木鶯郎氏）

○魚のいろく

・ホナガ 頼長の意であると思ふ。山谷川崎の邊では、雑魚とカネホリの合の子を、ホナガといふ。（同氏）

・油ハイ

寛政十一年五月四日 佐竹義文侯筆録
一夕飯過より百太郎同道、北澤へ釣ニ出候 油はい、八
九十手がら、暮少々前歸候（北家御日記）

勿論、現在のアブラッペヤのことで、ホナガ、カネホリ等と共に、ウクヒの一種である。

又、筆録者の義文侯は、文政四年と五年に江戸名所や角館江戸間の名所々々の花葉を措葉とし、二冊の本に纏めて遺して置いて呉れた殿様である。

・カネホリ この魚に限つて、清水とか溪流とか、とかく眞水にばかり居る。それが鱧夫生活に似てゐる故、金掘りであらうと。（青山謙三郎氏）

・鮎 俗に十兵衛トメと稱する淵は、青山十兵衛家の前であるが、その岸が又怖ろしく横に深い洞になつてゐて

大抵定まつてゐるので、家族の人達は鮎を入れるダシなどを背負つて其處へ行つてゐる。

鶉は必ず河原の大きな石の上に休み、時々思ひ出したやうにその大きな羽根を擴げたり、口を開いたりしてゐる。人々は足を投げ出して、煙草を吸ふてゐるか、或は鶉の腹綿を絞ぼつてゐる。それは頗る、なごやかな光景なものであつた。（雲然村、渡部小勝君）

友釣、即ち鮎をかけることも勿論盛んである。然しこれにはなか／＼コツがあつて、如何にも引懸けて置いた鮎ですぞといふ風に泳がしては駄目である。

鮎が自然に泳いでるやうに見せなければならぬ。

（鈴木鶯郎氏）

鮎の二年子と云ふことは、相當問題なやうであるが確かに居るものである。清水川などから寒中に鮎の獲れた例があるから。（同村、青山謙三郎氏）シヅカと云ふは清水、即ち湧水の流れる川のことである。

○小釣

よほど以前から行はれたものであるが、昔は今のやうに河岸へシートや幕を敷いたりなどせず、魚が水へ跳ね

同家の眞下あたりまで侵蝕してゐると云はれてゐる。

中に魚のうじよ／＼安住してゐることは判つてゐるが入口が狭いので誰も何とも出来ない。

昭和十年の夏、角館の青年三人が魚扱を持つて、その穴を覗きに行つたら、偉大な面構へのものである。

一寸見ると石のやうだが、確かに両眼が光つてゐる。

最初入つた者はヤスを奮ふ勇氣もなく逃げた。次に覗いた武藤末治君も逃げた。最後に「ギ」といふ仇名ある某がとう／＼突いたが、その手答が大變で引上げるまで大難儀した。

その正體こそ、何んと三尺二寸の大鮎であつて、それこそ孔子の弟子を負かした鮎の化物の如く偉大なものであつた。然も口を開けて見たら、屍體から食ひ取つたものか、子猫の首を呑んでゐたと云ふ。（角館町、武藤末治君）

・色鯉 その十兵衛トメの附近には、大きな色鯉が泳いでゐたが、他のそれより小さい鯉は宛もその家來かなんどのやうに、後に従つて泳ぎ廻つてゐるものであつた。一般に色鯉は雌だと云はれてゐる。（角館町、故平瀬貞

吉氏)

○フダデ網 チョナ網と稱する處は多いが、檜木内川沿岸の如き、専ら罾捕りに使用する所では、罾網と云ふ。然るにその中に在つて、この村ではフダデ網と云ふのである。(渡部小勝君)

○キリギリ、ヤマベ、鱒の問題

この三つの魚の關係は、釣人が集まると必ず問題になる。議論になる。或人は動物學者がかう云つてるとか、書物に凭うあるとか云ふと、自分が川へ毎日浸つて尻らんだ觀察では別だとか、異論紛々として果てしが無い。次にこの村の斯道の權威者二人の御説を紹介してみ

に
・青山一馬氏説 夏にオイ子が孵化して、一年間キリリとなつてゐる。二年生になれば、山べとなる。そのうち海へ下つて行くは全部雌で、殘留するは雄である。そして雌の産卵に溯上するを待つてゐる。

それ故、雄はなか／＼居ないもので、極く／＼稀に雌群の溯上に附着いて來ても、千尾に一尾の割と云はれるのである。

山べの一尺以上といふは、即ち残つてゐる雄である。雌の方は、ヤマベ時代の斑點が取れて來るが、雄の方は取れないで附いてゐるものである。

・青山謙三郎氏説 最初の年、秋菜莢の熟む頃に、ホリツクは、鱒とヤマベが夫婦となつて子を置くものであつて、(ヤマベは前から其處に居たもの) その卵は二十日位で孵化する。翌春にはそれが一寸一二分となり、その時が所謂キリリである。そして秋までには、三寸位まで育つ。その時は既に腹にシラコが入つてゐる。

そしてそのものより一年早く育つた、ヤマベと一緒になつて子を置く。
更にその翌春、即ち三年目の春には五寸前後まで育つ。

そのうちの大部分は海へ下るが、それをヨハダ(鮭膚の意)と稱する。殘留者はヤマベである。

即ちこゝに於て、昨年の雄が雌の鱒となつて下つて行くのである。従つて鱒の雄としてのほつて來るものは、千尾に一尾と云はれる位稀有である。

又、殘留者、即ち雄ばかりである可きヤマベのうちに

若し一尾でも雌が残つてゐるなら、それはシライトヤマベといふものだけである。

猶ほ鱒の雄のシラコは、婦人の白血、長血の妙藥とされてゐる。

・鐵城考 右のうち雄が雌となるといふことは、解し難いことである。鱒といふ魚は、從來産卵のため岸へ寄つて來るものを獲り、隨つてシラコのかゝるばかりに卵粒の整つた所謂ブリコ鱒を食べたものであるが、最近漁法が進歩して發動機船で沖合遠く出て、時でもないシユン以前にそれを獲つて來るので、ブリコも充分整形せず、一寸雄のシラコと區別つかないやうな、色や形をしてゐる。

だから鱒の場合もそれで、青山謙三郎氏が、二年子の腹に全部シラコが入つて居り、故に全部雄と見られたうちには、この鱒の場合のやうに、シラコと見えても早晚卵になるものが大多数あつた(即ち雌)ではないかと思はれる。

さう考へると、青山一馬氏の御説と大體一致してゐると思ふ。

然し中には、右のやうな説を頭つから否定して、鱒のホリツク所に、ヤマベだとか、キリリ／＼のうろついてゐるのは、鱒の折角置いた卵を食ふため待機してゐるのだと主張する人もある。

○海ソコベ 斑點があり鱒より大きい。肉はコンニヤク色して、味は甚だまづい。鱒のホリ付くをソコベといふが、これとは別物で、ソコベは鱒の産卵期間のみの名稱である。(青山謙三郎氏)

同じ村のうちでも、これを、海スクベと云ふ人もある。

一尺以上もあり鮭とよく似てゐるが、横腹に筋があつて區別出來ると。(武藤末治君)

○赤鱒 ホツツアレ鱒、即ち産卵の大仕事で悉皆軀體が傷み、元氣のなくなつたものを云ふ。(渡部小勝君)

○養殖鱒 この村は所々に水量豊富な泉が湧くので、最近各種鱒の養殖が非常に盛んとなり、縣内でも有数の養魚地となつた。

○俚諺

・組音頭

傳吾嬢くどつちやござる

澤口の沼コさ蝦すくに

蝦コさかづけて(かこつけて)茸採リ

・おけさ節(輸入年代不明といふ)

鱒はエー 鮎は瀬に鮎む、烏木に止まる

人は情けの下に住む(秋山郷土藝術)

○信仰

・生きた鱒コサシ 村のうち小勝田コガタ部落に太平山といふ、高い尖んがった山がある。その腰から北澤部落へ越す「越え口」に塞神の小祠がある。

昔キリシタンパテレンの法を得たいと思ふ者が、其處へ百日も参籠して念が通ずると、季節でない時でも海の魚であるコノシロが生きた儘その壇に載つてゐる。

そしてそれを食べると、完全にキリシタンの魔法を會得するのであつた。或る人が、その法を得て角館の町へ来て、いろ／＼の不思議を行ふて見せた話が傳へられてゐる。

・御富士堂にコノシロの繪馬 矢張りその太平山の麓に富士権現の社がある。ところが村の人々は、その権現を

かの子をあまり攫らつて食ふので、お釋迦様が彼女の一番可愛がつてゐる末子を隠し、悔悟させ、人肉の代はりに柘榴の實を食ふやうに教へた。あの鬼子母神と同じものにして祀り、その話をムガシコとして子供達へ語り聞かしてゐるのである。

その堂へ人々が、柘榴の繪馬を奉納するのは富士権現であり乍ら、鬼子母神の傳説を有する故判かつた話であるが、鱒の繪馬を供へることは面白い。關東地方で、鱒は人間の肉の味がするといふ所もある故、柘榴のやうに人肉代用の意か。(第二圖参照)

然し又、富士山の山ノ神が非常にこの魚を愛するたため、登山者が食ふことを忌むといふから、その信仰から出たのかも知れない。

元來この堂の後の斷崖には、藤の太莖が幾本も垂れ下つてゐて、上の山の峯で山伏の試験を終へた者が、最後にその莖を傳つて下りて来て、堂に籠るのであつた。

(試験官は今宮攝津守) それ故、その藤から出た藤権現と考へてゐたことであつた。

私はこれが前述、コノシロが見えたといふ生臭い塞神

と同じく、何かキリシタン事情に脈絡を持つてゐるものではないかと思つてゐる。

○河童の話

小勝田部落の甚助の家で放馬してゐたら、十兵衛下の淵の河童がそれを川へ引込まうとして、逆に既まで手綱に絡らまつた儘、引きずり込まれた。そして馬ウマ槽シヤウを冠ぶつて隠れてゐるところを發見され、その長い手脚で摺臼を挽かせられたり、散々苛ぢめられた揚句叩殺されるところを、漸く助命を乞ひ禮に一本の匙ウチを置いて行つた。

それで調合した薬が又、金創の妙薬で賣れて賣れて大金持となつた。

然し何代か後に、その河童が盗んで行つたか匙が見えなくなつてからは、家屋が傾き出したといふ。(角館時報)

以上で檜木内川を、玉川との落合まで下つたことにならる故、角館町の魚を語る前に玉川の水干から此處まで下ることにする。

玉川は、上流に八幡平登口の遊黒温泉があり、毒水が

流下する故、棲息する魚屬に對しても、特種な影響を與へてゐる。

田澤村

此處の魚に就いては、幸にその事情に明るい鈴木鷲郎氏から、いろ／＼と有益なことを聞き得た。同氏は教職の傍ら、獵人でもあり又釣の先生でもあつた。

最も驚異に値するは、世の常の人々が總てに象徴を持つとは反對で、徹頭徹尾現實一點張りなことである。

だから同氏へ、魚の傳説、民譚、俗信の類を語つて呉れと頼んでも忽ち拒絶されてしまふのである。

次の話は同氏が老後の不自由な御躰を、三里も隔つた中川村山谷川崎の山奥から、角館町まで運ばれて、私に語つて呉れたものである。

○鈴木鷲郎氏の御話

・岩魚の習性 この魚は二百十日が過ぎると、上流上流と溯り出水ウヅの箇所を見付けて産卵する。だから上へ行き次第大きな強いものがある。

産卵が済むと、それを守つてゐる。

所謂「魚止マリ」の邊に五六尾のイワナが止まることがあるが、間もなくそのうちの小さい方が下の方へ逃げて行く。それは共喰ひをするからである。

然し共喰ひと云つても、勢力を争ふて喰ひ付くものではなくて、眞實に飢えて嚙ちり付くものらしい。

人影を見て逃げた大きな岩魚が穴へ入つて見てゐるところへ、浅い方から小さな岩魚が逃げ込むと、頭からかぶり付いて、軀體二つに頭一つの怪魚のやうな恰好して水底を跳き廻はることがある。

この魚が長く穴に入つて潜ぐつてゐることの出来るのは、鮒や他の魚とは違つて、腹に浮袋がなく、背骨に添ふてそれを持つてゐるためとも云ふ。

岩魚のアダ喰ひは、誰も知つてゐる。夏の暑熱の頃など、小蛇が溪流を渡り、流れまいと横ふりしてゐるその頸筋にかぶり付く。

そのやうな凶暴性から、イワナの棲む淵に、他の魚は居ないと云はれる。

春が来れば、去秋の事情とは反對になる。即ちイワナは育ち次第、その場所が窮屈になるので、雪汁水ユキシヅメの溢る

を幸ひ下つて、適當の淵を見付けて棲む。それ故、溯上の場合とは反對に、上に小さいものが残り、下の大きい淵程大きなものが我張つてゐることになる。

岩魚とアメ鱒關係 岩魚のうちアメ鱒となるものは、普通と違つて背鰭に骸形があり、且つ人間に馴れ易い。

この二つの特徴は、最近放魚に依つて殖えたアメリカ鱒と非常によく似てゐる。

然しアメリカ鱒は、アメ鱒になるイワナ以上に馴れ易い。人爲陶汰に依つた種は酷いもので、川から獲つて来たものを洗面器などに入れて、一日二日と経過して空腹となつた時分に餌をやると、かぶり付く位喜んで食ふ。

これが岩魚であると、アメ鱒になるものであつても、餌を食ふどころか、人影がさすと洗面器の中で暴ばれに暴ばれて、板の間に飛び出て仕舞ふのである。

・ヤマベと岩魚の瀧のぼり技術

(ヤ)ヤマベは瀧壺からスウート浮んで一回轉を描き、又潜ぐつたと思ふと、シューッと水面から飛び抜けて一舉動で瀧を越す。

(イ)イワナは反對で、水底からひよろ／＼と出て來



て、瀧水の落下する最も弱いところを探して、ピンと飛び上がる。そして落ちた瞬間岩にびつたり、あの廣い兩鰭を吸盤のやうに擴げて密着する。それから又ピンと飛んで附着く。その動作を何度も繰返して瀧を越す。

・玉川毒水と魚屬 鱒と川雜魚ばかりは、毒の玉川を溯上する。毒氣の程度は、源泉から十里も隔つた檜木内川と落合に近い、角館の大威徳山麓を迂回する部分に涙川の名稱があり、水泳する者の目を刺戟する。

又附近の田畑に害あることは勿論、御茶なども濁つて飲めぬのである。

その地獄水を勇敢に突破して溯上するそれ等の魚が、左右から注ぐ眞水の溪流へは入らうとせず、さうした吐出口の邊にばかり居るのは不思議である。だからその眞水の溪流は、岩魚の獨り舞臺である。

毒水の酷い時は、鱒はこの村と生保内の境、先達川の邊までより溯上出來ぬが、若し上流の毒水排除工事が進んで、若干でもその氣が抜けたら、玉川部落の奥、小和瀬までも上ると思ふ。

・漁法

1、濁し追ひ 秋から子を置くため、小澤へ溯つてゐる魚を獲るため、翌春から夏へかけて行ふ方法である。

先づ上流の崖を崩す。それにどん／＼水を打掛けて、泥水を作る。掘崩す者、水を打つ者、なか／＼樂な仕事ではない。精一杯の仕事である。

そして川水の濁りに堪へ兼ねて、岸へ寄る魚を網で掬ひ上げるのである。

2、鵜追ひ 晩春から入梅へかけて岩魚を獲るものである。

先づ二間位の長柄の先を尖んがらして、一尺五六寸の下に鵜の羽か、鼯鼠の毛皮、或は葡萄皮などを下げて、鵜の軀體のやうに見せる。それから二三尺離して下に同様のもので附着ける。

それを持ち、自分の影を見せぬやうにして淵へ入つて行く。岩魚は八寸位のものでも、拇指一本の入るやうな狭い孔に身を潜ぐすと云はれる位で、巧みに身を隠すのが、鵜の長い嘴には突付き出されてしまふ。

その鳥に似たものが後から迫つて突付くので、潜ぐることをせず、すぐ旋回して大きく輪を描いて下流の瀬の

方へ逃げる。ところで、其處には別の人が罾網を漬けて待つてゐる。デグ／＼と手筈があるが早いか網を上げる。

然しその網番はなか／＼難かしいもので、初心者には網目に指をかけたたりして、感觸に備へる。それでも川流が急で、いろ／＼の木片などが流れて來るので、イワナだと思つて上げてしまふことがある。

イワナは網手がさうして一度失敗すると絶對瀬の方へ逃げない故、捕りつ外づすのである。

それに使用の網も、昔は麻絲であつたが、現在は進歩して絹絲を使用してゐる。

3、置き針 岩魚は晝は瀬から瀬になる點、即ち瀬波の消える點に食物が流れて來るので、其處に靜止してゐる。

然し夜は淵の方の餌を捜すもの故、芥を除けて白い石膚を出して、それに置き針をする。

仕掛けは竹を一寸位の長さに削り、兩端を尖がらして火に焦がして丈夫にする。中間を絲で結び、絲端を竹を鋭くして尾部を二つ割りにしたものに挟み、岩魚の大好

物である罾の口中から尻へ突刺し、竹針は口中に斜にはまつてゐるやうにし、絲端を棒に結ぶ。

棒は水底に岩や礫を載せて隠し、抜けないやうにして置く。

罾は勿論死んでしまふが、生きてゐるやうに見せないと、イワナは食ひ付かぬ故、腹を上らせぬやうに注意する。若し下腹を出しさうであれば、鰭に小石を載せたりして置く。翌朝行つて見ると、針を罾ごと呑んでゐるのである。

(鐵城曰、これは上楯内の置針と同じであるが、罾の體內を糸を通す手段や、置き場所の撰定など注意す可きと思ふ。)

4、刺網 岩魚は又、刺網でも獲る。よほど上流まで使用するが、その習性上一所に幾尾も居ないからあまり効果が無い。

普通刺網は、五寸の魚には五分目、七寸の魚には七分目とされてゐる。丁度鰓の部分にそれを引掛ける。

5、釣 この魚は翌日荒れる時などは喰ひ付かない。パツと晴れる時などは、馬鹿の物を唯取るやうによく附く。

一尾の魚を釣つたら、何より先にその腹を裂いて見れば、何餌で釣ればよいか判かる。

カッコ蟲といふ毛蟲もよい。川雜魚などは砂メグリでもよく釣れる。赤羽といふ羽蟲は恰好から旨さうであるが、ヒラーと飛んで來ては水面にバタと落ち、羽根をバタ／＼やつて又、スウーと飛んで行く。魚は、それが水面に下りた時、待つてゐましたよと云はぬばかりに、バクリやる。

そんな川で釣る時は、テンカラをその蟲の色恰好に似せて作らなければならぬ。

又、岩魚は掬ワラ(掬林)に多いやうだが、その邊の蟲は羽根も白いから、白つばいテンカラを作る。

テンカラの此地方へ入つたのは、約二十年前からのことであらう。

「岩魚は落しても、また釣れる」といふ人もあるが、そんなことはない。落したら最後、三日も釣れるものではない。若し直ぐ釣れるものであつたら、それは痛いことを知らない岩魚であらう。

又、岩魚の口は大きい故、釣が引掛らないで、ベロリ

出ることもある。よく釣絲を切られたなど云ふ人もあるが、實際はテグスが新しく、絲が脹付いた爲め(折れたため)そのはずみで切れたもので、魚が噛み切つたものではない。

ヤマベだと、絲を吊り上げると横に動くだけであるが、岩魚は上下に圓を描いて暴ばれる。だから吊上げるやうにすれば、屹度頬の薄い部分が裂けて落ちてしまふ。

大概の魚は蟻を食ふものである。あの小さい蟲を好んで食ふのであるから、テンカラは大きく作る必要がない。

寧ろチョッピリ付けて置くと、魚は殆んど露出してゐるその釣の先に跳ね付く。

それだから、付ける羽根は釣が何處等邊に落ちたかを如る釣人の目標に過ぎないやうなものである。

魚は一旦食つて、又潜つて呑み直はす。だから普通の餌釣の場合にはデグ／＼の瞬間上げては、落すことが多し。反對にテンカラは、魚が口を閉る刹那に上げなければならぬ。

但し利那といふても、それはカンである。目を閉ぶつても判かるやうでなければ、一人前とは云はれぬ。

・ツララズ カネホリの事

・ヘエヤッコ ツララズのことを又恠うもいふ。

・岩魚話二つ

A 駒ヶ嶽の裏合せ、岩手縣側に葛根田川が流れ、末が雫石川に注いでゐる。その上流に鳥越瀧といふ約三十丈近い瀑布があるので、瀧の上には一尾の魚も棲息しなかつた。

時代は判然せぬも、毎年田澤村からマンダの皮（シナの木の皮）を剥ぐに行く人々が、魚の居ない川も可笑しいものだと思つて、或る年ワッパ（飯を入れる曲げ物）に岩魚の子を少し入れて行つて放流した。

それが年を経過するにつれて、殖えに殖えても、あまり上にも下にも行けぬ地形故に、殆んどうじよ／＼する位になつた。

その状態がしばらく続いた。そして若し田澤の方から其處へ岩魚を獲りに行く者があつても、向の人々は、あなた方の御蔭で殖えたものだから、随意に獲つて行つて

下さいと云つたものであつた。然し最近の世相となつては、ハッパを仕掛ける者、ナメを流す者、果ては青酸加里で川焼きする者まで出て來たので、折角ワッパから放流された岩魚も殆んど盡きかけてゐる。

B よほど以前に田澤の湯へ行つてゐた時、國見と云はれてゐた男（出生地を姓にして呼ぶ）が、一尺七八寸の岩魚を三尾賣りに來た。

見るとその魚の背に魚扱疵がある。獲つてから二時間も経過しないらしく、漸く紫色になりかけてゐた。勿論國見は、獲つた場所を教へない。

さうした大物を他人に獲られては、自分の權威に關すると思つたので、時間に依つて距離を心の中で測定してみた。祖父森の裾にヒメエヤ濁があるが、その沼には鮎が何千となく棲息してゐる故、勿論岩魚の居る筈はない。

見當は小和瀬沼である。そこで早速仲間を三人連れてカンテラを燈し、道を照らし乍ら行つて見た。

然し案に相違して、その沼には別段の子細もなく、小鮎が靜かに遊泳してゐた。言ふ迄もなく、イワナの棲息

せぬ證據である。

その時、不圖誰か峯へ登つて陰へ行つた足跡を見つけたので、これだと思つて辿つて行つたら烏帽子沼へ出た。

見ると枯木で組んだ筏が浮いてゐる。それつと、先づ澤目を見ろと仲間へ檢分さしたら、小さい岩魚がゐるといふ。

澤目に小物が居れば、廣い沼に大物のイワナの居るは定規である。それで翌日、草薙といふ者を田澤湖畔の春山まで遣して、アメ鱒の刺網を借りて來らせてその沼を漁つたところ、果して大物三十五尾獲つた。

あんな愉快なことは、一生涯に二度とないものである。

その沼にも、以前は岩魚が棲息しなかつたのであるが、岩ノ目の門太といふ者が放したのが殖えたのであつた。

鐵城曰、門太の家は玉川から八幡平へ行く途中右手に見える一軒屋であるが、村では「バンドリの家」と云へば直ぐ判かる。（バンドリはムササビの事）

私が其處の長者館を調査に七八年前行つた時は、よく／＼のマツカ小屋であつたが、今行つて見ると、およそあの山中に不似合な宏壯な建物である。門太は一匹七八圓もする時、一冬にバンドリを五百匹も獲つて賣つた。

何千圓といふ大金を握つてみたものゝ、その奥山では使ひ途もない。仕方がないので、大きな家を建てた。

それが、そも／＼バンドリの家の由緒である。

○玉川部落の生活と魚

この部落の大深澤は名の如く一番深い澤で、その溪流は岩手秋田兩縣界の水干からの水を集めて來るものである。上檜木内村福田の善藏といふ又鬼は、今から十五六年前、そのカッチ（澤奥）で一尺七寸の岩魚を獲つたことがあるが、それが今日まで語り傳へのやうになつてゐる。（上檜木内村坂本の某翁）

○昭和九年に於ける營林局調査

・自小作農兼勞働者（男女十一人家内）の、一年間に買入れた副食物中の魚類

鹽鮭	三三、〇〇
鮭	一七、〇〇
身欠鮭	二〇、〇〇

鯨 五、〇〇
 鰯 五、〇〇
 鱒 九、七五
 生魚 一〇、〇〇
 煮出魚 三、六〇
 計 一〇二、三五
 ・純労働者(男女三人)
 生魚、乾魚、鹽漬 八、一四

・一村一年間の水産額は、僅か七十圓で、然もそれは殆んど玉川支流から獲る岩魚である。
 ・マンダの皮を、以前は南秋田郡五城目の商人に賣却したものであるが、昔からマンダ千株植えて置くと、一年中の魚代と税金が拂へると云はれてゐる。
 そのマンダ纖維と、ヘソ即ち麻絲を卷いたものは、八郎湖岸の漁民の需要が主であつて、それを以て魚網の原料としたのであつた。然し最近では紡績絲に駆逐されて、殆んど買手が無い。
 ・行事

(イ)夫婦は結婚後三ヶ年間、盆正月には連立つて實家を訪れる儀禮であるが、盆の時は、酒二升に岩魚二十尾内外と赤飯を持参した。
 (ロ)正月に親類同志の禮廻りがあり、酒一升到鱒五尾乃至七尾、又は鹽鮭の切目の大きいものを藁苞に入れて進物とした。
 (ハ)大晦日即ち年取りの夕方に、豆の殻と鱈の皮を共に炒り、家屋の周圍を歩き乍ら撒き

豆の香もホガ／＼
 鱈の香もホガ／＼
 蛇も百足も寄らぬやうに
 と唱へる。(秋田管林局編「玉川部落經濟實態調査」)
 此の村の田中幸榮氏の家では、正月十五日の晩、家族を全部家の中に入れ、晩の御馳走の汁の煮える間、主人が樹の中へ稗の糠と豆の皮を入れ、家のあたりを
 お汁の香もほが／＼
 豆の香もほが／＼
 と唱へ乍ら三遍廻はる。(田中幸榮氏)
 ○先達川に沿ふて

・岩魚 この川で夜、イワナを獲る者は、先づ地竹の干したものを標準備する。火にあぶつて脂を滲み出させ、それを束ねて火を燈し、松火として行く。
 その魚は上流に頭を向け靜かにしてゐるものであるから、容易に魚扱で突くことが出来る。(角館町、藤村彦吉氏)

環境の影響とも思へるが、この川の如きあまり急流でもない(但し比較的)所に居るものは、頭が大きく斑點も不鮮明である。然るに白岩嶽の堀内川のやうな急流に棲むものは、頭部小さく斑點が鮮明である。(角館町、宮本彰一郎氏)

・蟹場温泉の蟹 こゝにはその地名通り、澤蟹が澤山ゐる。然しそれを捕つて、他へ持ち出しては悪いと云ふことである。
 ・網子別かれ 本來は漁夫の共同魚漁解散の時の宴から出てゐるらしいが、いろ／＼の場合に使用される言葉となつたやうである。

この川に沿ふては、鶴ノ湯、蟹場、孫六、黒湯など、温泉が多いが、一週間なり二週間なり、一ヶ月なりその

温泉宿へ湯治に來て知り合つた人々が別かれる時には、「網子別かれ」と稱して離別の祝宴を催した。各自藝のありつたけを盡し、飲み且つ踊ることいふ迄もない。

長野町折目酒店では、東岳畫伯の描いたこの温泉の網子別れの光景のある、面白い畫帖を藏してゐる。
 この言葉は、東北地方殊に日本海岸寄りに多い言葉らしいが又、カムチャツカ方面への出漁者達が、彼地へも輸出したらしい。週間朝日に「カムチャツカの嵐」と題し
 酒は殆んど貴重品扱ひで、だから五ヶ月にもわたる漁期中、たつた三日間の休日―最初の「網卸し」と、舊盆、切上時の「あご別れ」と一時たまたの大漁祝に、ホンの目薬ほどしか出ないのだ。(昭和九、一一、一一號)
 といふ記事が見えてゐるから。

生保内村

・岩魚 仙岩、國見兩峠の水干からの水をあつめて流れる生保内川に棲むイワナは、その澤目によつて鱒が目立つて赤く他と區別出来るものがある。(同村、田口耕之助氏)
 中生保内の口から駒ヶ嶽(一六三七、四米)に登攀すると間もなく十丈の瀧がある。その瀧上に魚は絶對棲息し

なかつたが、よほど前に村の某が岩魚を持つて上つて放流した。それが殖えて、現在は相當居るといふ。(瀧へ來合はした村の某翁)

・澤蟹 これには鹽分を含んでゐるので、食鹽代用となる。山男や山姥を見たといふ傳説には概ねこの澤蟹を漁つてゐる形蹟を伴ふが、熊も澤蟹を嗜食する。即ち溪流に沿ふて巨大な石をその右側に倒し、それを捜してゐることも稀らしくない。

又古風な家では、沙蟹にして貯へる。それは小蟹を一升二升を麻袋に捕つて來て、腹部のエラを取去つて鍋で煎るのであるが、御飯の副食物ともなれば、又子供等のおやつにもなるといふ。(「旅と傳説」昭和一一、初號、藤原相之助先生)

・特種カッコベ 人によつて葛籠カッポの經をキノメ即ちアケビ蔓とし、緯を櫻皮として編み特別な魚籠を作つてゐるが、それに入れると魚が他の竹籠や、マダの雜魚袋へ入れて來るより變はらないと云つてゐる。(角館町、荒川正氏)

・オコジ 北秋田郡ではモウスケと稱して狐より怖は

がられ、仙北地方ではイヅナと稱し、それを使ふ巫女もある。學名、コエゾイタチを、此の附近ではオコジと云ふ。(田口耕之助氏) 山ノ神を喜ばず魚のオゴズと何等かその語源に關係あるらしい。

柳田國男先生の「山神とオコジ」に依れば、信州地方でも同じやうにその小動物をオコジと云ひ、山神の御使としてゐるし、武藏ではヤマネ即ち此の地方で云ふ小玉鼠もオコジと稱して、矢張り山神に關係あるものとしてゐるらしい。

・生保内節

鯉の瀧上り どういふて上げる

しんしよあがれとノヲ いふて上げる

(秋田郷土藝術)

白岩村

○堀内澤の鱒 仙北平野の奥へ入つて、奥羽山脈を北から南へと望むと、駒ヶ嶽の秀峯に次いで白岩嶽が美しい姿で聳えてゐる。抱返り溪谷は神代村水尺明神の條で述べたやうに、その西裾に深く喰ひ入つてゐるのである

が、更にそれから、堀内、邊奈垂などの深谷が分岐してゐる。

堀内澤は熊の棲息地として有名で、その奥約九百米高處に角館町の有名なマタギ犬飼養家であり、狩獵家である宮本彰一郎氏のマタギ小屋があるが、昭和十年、同氏はその小屋の前の溪流まで溯つて來た、一尺二寸の鱒を突いたことがある。(同氏)

そのやうにして溯上して來る鱒に、二種類あるやうだが、岩魚と同じやうに死んだ蟲は食はない。(同村、又鬼渡邊家榮吉氏)

○鱒と毒水 この玉川の毒水に稀に鮭がのぼることがあるが、全く稀有と云つてもよい。然るに鱒の如くが平氣で年々溯上するは、如何なる理由によるか。

或る人は、鱒は毒氣に對して抵抗力があるのだといふ。

又或る人は、鱒は元來生れ故郷に歸るもので、望郷の念の切なるものあり、歸らずんばあるべからずの心持で敢て冒險をしてまで、その毒水を突破して來るのだと。

然し此の疑問は、殆んど年から年中、その川を眺め、

溯上する魚屬を睨らんでゐる、上花園村の老いたる渡守の説明で氷解した。(渡守、千葉金治郎五十八翁)

「大ブガの雪汁が來れば、鱒が溯上を始めます」と。大ブガとは玉川部落の條に於て述べた、この川の最上流の深谷である。鱒はさうした雪溶水で河水が増大し、毒分の薄らいだ頃にのぼるのだから樂である。

然るに鮭の溯上する秋は水涸れ時で、毒分の濃厚な時である。

其後、私は又鬼渡邊家榮吉氏からも、同じ觀察を聞くことが出來てあつた。

又、その毒氣の薄い頃に、極く稀れではあるが八ツ目の溯上することがある。然しだん／＼毒氣に當てられて、それが病的に非常に肥大して、よろ／＼流れて來ることがある。土用が過ぎて水不足になると、毒が濃くなるので、大抵の魚は居堪らなくなつて下つてしまふ。(角館町、八柳啓治氏)

○鱒の漁法

・待場 春から夏へかけて、鱒の溯行する水路の上に小屋掛けをするものである。仕掛けは、岸から玉石を積ん

だ壘を築き、水路を開けてその向川中にもそれを短く作る。それに依つて河流が激し、泡立つて鱒の姿が見えない故、直ぐ上手に葉柳の束を横へ波除けとするのである。

扱小屋の構造は、田圃の雀追ひ小屋よりも原始的なものであるが、屋根から小さいカギを下げて、それに魚扱の柄に結付けてあるサバ口を引懸けて置く。

そのヤスの柄は、長さ十二尺から十四尺までもある故勿論、小さな小屋の屋根を突き抜けて出てゐる。

穂は六本、或は八本である。鱒突きは、坐はつてゐるところから足下の流れを睨らんでゐて、若し鱒が通るとその瞬間、カギから魚扱を外すなり突き下ろすのである。(下延村、故鈴木三左衛門翁)

一日のうちでも午前九時頃が一番多くのぼるもので、日の出前からも突くがその時刻ほど多くはない。猶ほ、この附近では、薄になつてゐる所を、ワダと稱する。

・箴 竹や柳のバボエ(軟かい枝)、鬼萱などを材料として編む。それを瀬に漬けて、入口まで魚を誘導するやう

に砂礫を掻き分けて置く。それには鱒の子や雑魚が入る。季節は六七月頃である。(千葉金治郎翁)

○馬鹿ヤマベ ヤマベのうち海へ行かないで残留するもの、即ちソコベをかう云ふ。(渡邊家榮吉氏)

○鱒役記録 この川筋、大威徳山下を中心として上下の鱒漁に就いて、天保年代の記録がある。

覺

文銀平目 拾五匁

右者仙北郡大威徳山下より上者、刺卷村舟場迄、堀川小澤共鱒役文銀拾五匁ニ而、去ル寅年迄持居候處、同年白岩三ヶ村より右持處之内、堀内澤他村え被仰付候而者、山之徒伐等之吟味指障候趣願申出候ニ付、堀内澤御引上被仰渡候處、段々申上候次第有之ニ付、堀内澤とわ淵より玉川落合迄四丁程之處、被加置度願申ト候ニ付被御聞届、四丁程之處被置文銀拾匁を以被仰付候處、白岩三ヶ村より壹里餘と申出相違之次第ニ付指紙引揚候處、最初申上相違候へ、御吟味被下度申出候故、白岩三村之村え被相尋候處是以相違無之事ニ申出候 何し難相分右御吟味筋追々可被相極已前格別役銀

相増申上候譯も有之候ニ付、堀内澤一圓相除殘川役去未年より當分與五左衛門、與三郎元年數ヲ以被仰付、段々引繼罷在候處、去申年過取立致候趣相聞御尋被成置候處、相違無之不届ニ付右川役同年より御引揚、仍願當酉年より亥年迄三ヶ年役、江川ニ申付候間右銀年々六月中上納可有之候已上

天保八年

小栗六左衛門判

西五月二日

佐藤良助判

仙北郡卒田村肝煎殿

(同年親郷肝煎役處御用留、八割村菅原三什郎氏藏)

○大威徳神と鮭の傳説 村の西方に大威徳山が臥牛のやうに横はり、その裾を玉川が洗つてゐる。川の毒氣で鮭の溯上せぬことは既述の通りであるが、次のやうな傳説がある。(此の山は角館町と白岩村と峯境になつてゐるので、現在は殆んど角館の神社のやうに考へられてゐる。)

むかし玉川には鮭が非常に多く、大威徳神社下の河原でも鮭網を下ろしてゐた。ところが何處から来るものか毎日背の高い坊主が一人来て、佇んで網曳きを眺めてゐる。そこで漁夫達が嘲笑して「坊主、鮭をやらうか」

と、要らないといふをキノメ(アケビ)の蔓で結はへ、無理に背負はせてやつた。ところが不思議なことに、以來玉川へは鮭が一尾も上ぼらなくなつた。その坊主は、實は大威徳夜叉明王様であつた。だから今でも、その神へ腹痛平癒祈願の者は、鮭とアケビを斷つのだと云ふ。

この傳説は次のやうにも語られてゐる。

玉川から鮭を獲つた人々が、早速河原で焼いて食ふことにした。丁度其時そこへ、赤い着物を着た子供が一人来て佇んで見てゐたが、人々が枯枝を蒐めてゐる隙を覗ひ、いきなりアケビ蔓で鮭を背負つて逃げて行つてしまつた。

その事あつてからは、玉川から鮭が獲れなくなつた。赤い着物の子供、それは大威徳様であつたのだと。

(角館町、武藤エシ嬢)

人々は腹痛の平癒祈願には、前述のやうに鮭を食べぬことを誓ふが、その御はたし(御禮)の時には生鮭を持つて行つて御禮に供へる。然し村では鮭を食べぬタブーがあるので、別當はその生鮭の仕末に困まり、結局は下げ

て近所の者へ呉れる。貰つた人は、早速それに鹽をかける。すると最早それは鮭ではなくて、鹽鮭である故差支なく食べられるのである。

同じやうに病人などへ鮭を食べさせ度い時も、一寸鹽をふり掛けて鹽鮭といふ名目だけ變化したものにするのである。(千葉金治郎翁)

右の傳説に類似のものは、例へば大隅の内之浦地方でカツラは恵比壽の大鯰ひなものだから、鯰で魚をくづつて持返る者には、以後魚を呉れぬと云ふ話や(高橋文太郎氏著「山と民俗」)、又、利根川國誌といふ書にある、同川岸東押付村の水神社の縁起である。

それに依ると同村の東方一里程の太平村に、御太平様と云ふ人があつた。その人が水神社附近で魚を釣つたので、水神大いに怒り給ひ、潜牛に乗つてその釣竿を奪はうとした。そこで太平は傍の蘆荻を投げて、カウボーイよろしく牛の角に引懸け、牽き合つてゐるうち牛の角がポツキリ折れてしまつた。以來、村人は水神の祟りを怖れて、蘆荻は一切使用しない。

その御神體は、欠角の牛に跨つて居るといふ。白岩村の大威徳夜叉明王も勿論、牛に跨つてゐるもので優秀な金佛である。参詣者は牛の繪馬を奉納する。それと云ひ、

蔓の絡らまつてゐる傳説テーマーであるところと云ひ、皆一脈相通するものらしい。

○鹽鮭 秋田縣一般にボダと稱し、昔は保太など、書いてゐる。自分の知つてる範圍内では、この鹽辛い魚の漬物を好んで食ふ人は、頭腦がよいやうである。理由は自分でも判らないが……。

白岩前郷部落に渡邊勘左衛門といふ人があつた。(安政四年三月十四日卒)その身の丈六尺に近く、強豪な人で、一食にボダ七切れを食べ、一日に精選白米七俵を呑き(普通三俵一人前)、田の畔を塗り乍ら道行く人と同一步調で話を續けて進行したといふ。(同村、渡邊爲吉氏著「白岩瀬戸山」)

勘左衛門の強豪と鹽鮭七切は、それを食べたから強豪であつたか、強豪故にそれ程食べたか判らないが、とにかくその異常な嗜好と因果關係がありさうに思へてならない。

角館町

◎魚の一般

ある。

ハラミゴは卵塊として孕み子でも、妊娠魚として孕み魚(魚をゴといふ場合は多い)でもよいが、カノの意味は何であるか。鹿畑は荒れた、よく／＼粗放的耕作地である。魚の雄であるカノ、即ちミノリのないことがそれと通じてゐるのではないかと云ふ人もある。(渡部小勝君説)

○大魚の呼稱 これも魚の種類、使用する人の職業などに依つて多少相違があるが、一般に棲んでゐる場所に重きを置く場合は、主である。澤山ある同じ魚のうち、特に偉大なものは、母と呼ぶやうである。

其他尋ねてみると、相當別稱がある。デッシュ、大材、大デヂ、機杼、菜板などがそれである。

又、大板羽鮓だとか、大羽鮓だとか、或魚に固着した名稱もある。(昭和一一、二、一〇、角館圖書館主催、魚の座談會)

○數へ聲

オト／＼／＼
アヒタ／＼
ミノロ／＼

○生臭いこと ナマグサイといふ語にも、幽霊の出る前に吹くナマグサイ風、それから物の激突の場合生ずるヒナマグサイ匂ひなどがある。然しこゝでは魚臭いナマグサイである。

その生臭さを、そうでないものと區別する必要は、嗜好の問題からではなく、佛に對する宗教的觀念からである。大體、臺所道具では、鍋、庖丁、俎板、箸などが、生臭鍋とか、精進鍋とか云ふ風に區別して置く。

俎板の場合であれば、生臭さを別にした他に、魚の叩きなど作る爲めに、特に叩き菜板を用意する。それには主として櫻材の小口(輪切)を使用する。

○魚の雅語 小兒は魚をジョジョと稱し、大人も小兒相手の場合はその語を使用する。

○雄と雌 雌はカノであり、腹中の白い臍物はシラコである。雌はメスであり、腹中の卵塊は魚に依つても呼稱を異にし、雜魚などでは單に子であり、鯀のものは、ニシノゴ、鱒のはブリコ、鮭はハララゴ等である。

妊娠を表示するには、ハラミゴと云ふが人間の場合にも通用して、ハラミゴ鱒など、嘲笑的に使用することも

ヨソアヨ〜
イサライイソ〜
モースモーモ〜
ナナスナナ〜
ヤスヤ〜
コノ〜
ト〜

(角館圖書館、藤澤清二氏採集)

○棲息所 河縁に水蝕作用、其他で洞になつてゐる部分
は、魚の絶好の安息所であるが、それをハエンと云ふ。
そして、そつした場所の魚を捜すことを、エバ捜しと
云ふが、縁場か居場の意がよく判らない。(同氏)

此の町では檜木内川岸の山鼻や、中川村分で述べた十
兵衛トメ、鍛冶下、檜木瀬、梨ノ木瀬、それから西山寄
りの土瓶淵、その落合まで馬鹿に長い馬鹿淵などが有名
であつたし、そのうち一二は現在も魚屬が豊富である。

(角館圖書館、蓮沼運助氏)

又、人爲的に魚の棲家を作つてやつて、一網打盡を計
畫するものに、石倉や溜があり、魚が必然的に落ちなけ

ればならない仕掛に築がある。

今日の五月蠅い程矢釜しい治水事業を持つ世の中から
考へれば、舊藩時代などは川の流れば自然に放任して置
いたと思はれるやうなものであるが、川筋をいためる漁
獲法などは嚴重に取締つてゐる。

・文政十三年九月七日 佐竹義文侯筆録

一 佐尾強助より植木正親え、去月二十九日相達候用狀

一 當二十四日御評定所御弋足ニ付出勤致候處、小貫九兵

衛御書付を以被仰渡候 上川筋小川とも川狩いたし候

ニ付、川筋え手入致。又は石倉と申もの積立、御普請

處え差障り候趣之書付今便差遣候間、御落手御取扱之

様致度候(北家御日記)

・天保某年 親郷役處記録

被仰渡御用品々 小館村始

覺

在々ニ而魚を取候ため、川前え築を懸、又ハ石倉を積
置候様之儀ハ、第壹川並ニも相拘リ不怪事ニ付、前以
堅く御停止被仰渡置候得共、年數相立候爲に自然相弛
み、近年處々築、石倉等拵置候様ニも粗相聞得、不濟

事ニ候 以來吟味之もの被差廻候間、萬壹右様之儀於

見當候ハ、急度無調法可被仰付候間、聊心得違無之様

ニ克々可致申渡候(菅原三什郎氏藏)

○釣に關して 魚に依つて相違する點もあるが、先づ釣

餌としては、飯粒(お漆の雜魚や鯉)、蚯蚓、蛹、ガムシ、

サスドリ蟲、蜻蛉、上ガリコ下ガリコ、薩摩芋、機織蟲

等を擧げ得る。

又、釣竿に關しては次の禁制がある。

・釣竿を女が過つて跨ぐと魚は附かぬ。男でも悪い。

・跨ぎ返させるが、それでもあまりよくない。

・竿の先に蜻蛉止まると、魚がつかない。

・河童の尻(アメンボ)が、絲や浮標に悪戯してもよ

くない。

・ヒラカ(ゲンゴロ)は、絲の途中に下がつてゐたり

それを切つたりする。キモリも悪戯する。(角館圖書館座

談會)

・釣してゐる人の針へ、ゴモズ(屑)が引懸つて上つて

來た時「何釣つた」と嘲笑されると、「クジラ(屑の詛言)

釣つた」と答へる。又、カッパレヤ(水へ落る事)して、

「何捕つた」と云はれると、「ハッコイ(冷いことをハッ
コイといふ。コイを鯉にかけて)捕つた」と答へる。

・文政四年五月廿四日に、幕府の大目付が角館へ來た。

それに備へるため前年から大騒ぎしてゐるが、その二

月には、次のやうな御觸れをして、北家御門前の濠の魚

釣まで嚴重取締つた。

文政四年正月 諸御用留書

覺

一 於御堀、魚を釣並ニ洗もの水遊致間敷候 以前に數度

被仰觸候御要害之御堀ニ而、右躰之義有間敷儀勿論之

事ニ候得共、不相止様相聞得候

此度御目附御下向ニ付而ハ、下々ニ至迄諸事相慎惣而

猥ケ間敷無之様何も可申含候得共、猶此節其向吟味之

者被相廻、右躰之者見當り候ハ、搦捕候様被仰渡候間

御堀端前之面々ニ心付、下々へも急度可申付候

二月

(筆者藏)

○昔の魚の種類 北家御日記、延寶から約百七十年間の
うちから、魚の名を拾つてみた。檜木内川や田澤湖で捕

獲したもの、賣りに来たもの、買ひにやつたもの、献上されたもの、贈答品、御土産物等々である。

・河魚 鮎、近江鮎、鰻、鱒、鮭、キス、鮎、小海老、雑魚、黒カラ、伊勢鯉、セイゴ、背黒、クキ、キリ、イワナ、ヤマベ、カジカ、タナゴ、サヨリ、似鯉、ハネコ、チカ、白魚、油ハイ、カマス。

右へ加工せるもの、鹽引(鹽鮭のこと)、鹽鮎、鮎粕漬、干鮎、鮎味噌引、焼鮎、鮎のウルカ、鮮鮎、鮮鮎、開鮎、干國鱒(但し粕漬干)

・海魚 鮭、鮫、王餘魚、アンコウ、大鯛、耳鯛、小鯛、鯛、鮫、鯉、平目、烏賊、ハタ、比良目、鯨、イナダ、鰯、アヂ、鯖。

右へ加工せるもの、鹽鯉、干鯉、干鱈、干チカ、鰯、干甘鯛、干鯛、粕漬ハタ、粕漬鰯、鮮鰯。

○河の字の附く魚 河鯛、河蟹、河雑魚、河鯉、河蝦、角館町の釣の名人、戸澤祠官が竿を延べてゐるところへ或人が行つて、「川魚も毎日食べてゐたら、飽きるでせう」と聞いたたら、「否、川魚は海魚のやうにムツクない(しつこくない)から飽きない」と答へたそうだが、全く

つた。(蓮沼運助氏)

・南の方面 久保田(今の秋田市)や土崎港へ、米や薪荷を積んで行つた船の歸帆(實際帆を掛けて)に齎らして来る魚を、岩瀬の濱(玉川岸)へ陸揚げして賣る者もあつたが、又、大曲方面から馬へ付けて持つて来る者もあつた。

大抵、五駄入ると二駄は角館町の需要に充て、他は附近の村々へ賣つたもので、魚を買つて食ふなどと云ふ贅澤な者はあまり居なかつた。明治時代でさへその状態であつたのである。それ以前の事は想像に任せ得る。(内藤直之助氏)

○昔の魚の値段

・天保四未年饑饉日記 忠勝記録(葛川村に知行を有せる人)
(天保五年五月) 山海の獵師狩人、殘ナク餓死、魚鳥ノルイ一圓ナク、鹽鰯壹疋ニ付十八文、鮎壹本拾貳三文、保太壹本壹貫六七百文、鱒壹本貳貫文位、鹽壹升貳百五拾文、諸品ノ高料言語ニ絶タリ

(鎮城日、鮎は鮮か)
(天保六年九月頃) 鹽壹升貳百文、保太壹本上ノ處貳貫二

その通りである。

然し川魚はあまり淡白で、寧ろ生臭い感じが多いと云つて、食べれない人も居る。

○輸入魚

・東北方面 仙岩峠を越して運ばれた魚である。種類は鮭、鮎、サガ、鰻などで、外にカゼ(海膽)などが来た。(角館町、内藤直之助氏)

あの峠は今日は、チリボリとより越す人もないが、昔は非常に賑やかな交通路であつた。當時の馬方節が今日まで遺つてゐる位である。

・西部方面 毎年舊十二月の暮から正月十二日頃まで、湯魚(八郎湖の)を賣る者が。南秋田郡から行商に來た。所謂、正月魚で、煎蝦、焼チカ、焼干(鰯)、烏賊の鹽辛等であつた。

山を越え、西長野街道をやつて來るのであつたが、七十貫匁もある荷を背負つて、疲れると槿木型の杖を籠の下方へ當て、立つた儘休むものであつた。

各屋々も廻はつて賣り歩いたが、大晦日近くなると、立町で戸板に載せ、朴ノ葉などに包んで賣つたものであ

三百文、古保田壹貫五百文、鮎ハ五文ヨリ八文迄、干鰯ハ壹匁百文、南部鰯壹枚五十文、アゴウ壹疋貳百文、大目ハ四五百文、平目壹枚十貫文ヨリ段々八貫文、五貫文大小ニヨリ値段アリ 鱒ハ壹本貳百文、鮭ハ五貫ヨリ段々大小ニヨリ直段アリ キス十疋ツナキ五百文、大鮎壹枚ニ付四百文、小鮎ハ壹枚五拾文ナリ 鮭ハ壹疋五文、鱒壹枚初ノ中貳百文、(渡邊爲吉氏藏)

・天保飢饉記録 筆録者不明 (天保四年)

一巳の十二月中より極究の者度々御吟味有之、一同一合の御救は不及申味旨、鹽、鮎、鯛、干鮎、昆布、烏賊、酒、醬油、粕、葛餅等迄度々被下置、(鎮城中略)

一鰯 一疋 拾七八文迄
一鮎 一本 拾文迄

右は預直段也(筆者藏)
・文久元年、魚屋書出し二枚、

一四百卅文 先月指上候

卅日

- 一 三百文 背黒三本雑魚共、さより七本
- 一 七百卅文 入五百文
- 五月三日
- 一 三拾五文 鯨五枚
- 一 五拾文 さより五本
- 十四日
- 一 六拾五文 雑魚
- 十六日
- 一 拾六文 鯨二枚
- 一 廿五文 にし
- 廿三日
- 一 四拾五文 雑魚五ツ
- 指引残り 四百六拾六文
- 五月廿九日 吉成様
- 記
- 一 四百六拾六文 先月指上候書出に有
- 五月卅日 入貳百五拾文請取
- 六月四日
- 一 五拾文 湯雑魚貳本

重藏

- 一 五拾六文 請取
- 十六日
- 一 卅文 いわす
- 一 廿文 湯雑魚壹本
- 廿四日
- 一 百八拾文 保太、鮒共
- 廿八日
- 一 貳拾五文 根花
- 指引残り 五百七拾七文外ニ廿文數の子
- 六月晦日
- 吉成様
- 重藏
- 一 文久元年西九月廿八日 御梓拜領源五郎出仕祝儀帖
- 一 拾文 ひやり五本
- 一 拾壹貫貳百文 あゆ七
- 一 貳拾文 鮒二十枚
- 一 五拾七文 鮭壹本
- 一 壹文 海老
- (筆者藏)
- 右は角館の士家吉成氏のものである。次のものは角館の殿様佐竹家のもの。

・明治四年御雑用錢請拂帳

- 一 八ツ目三本 六貫文
 - 一 保太壹本御求代貳拾五貫文
 - 一 御召上御用 背黒壹本代 三貫八百文
 - 一 鮫壹本 六拾八貫文
 - 一 鮒壹枚 四貫五百文御被召上分 (佐竹男爵家藏)
- 殿様の御食とは言ひ乍ら、随分高い値段の魚であつたことである。これで見ると、全く平民の口にボダ(鹽鮭)一片を入れることも難かしかつたわけである。
- 雪穴 雪小屋の中の穴である。二三月の堅雪の頃(日中溶けて夜きびしく凍る雪)、地中に、二間半に三間位の穴を下方をしぼめて掘る。
- それへ雪を詰めては踏み、詰めては踏みして固め、上に長木で屋根を組み、トバなどで屋根を葺く。更にその上に南瓜の蔓など這はして、日光の強く當るを防ぐ。そうして貯藏した雪を、晩春から鋸で切り出して魚屋に運ぶ。
- シギ穴 雪穴から運んで来た雪を魚屋では、店の土間と臺所の境の床下に、板作りの五尺に六尺、深さ三尺の

大箱を作り、中に詰めて上に魚を並らべ冷蔵庫とする。その箱の上には板が蓋されており、圍爐なども作つて店の人が座はつてゐる。(角館町、太田雄治君)

○串 この材料としては、野茨、虎ノ尾、サビタ、鐵等がある。

普通のツクシ状のものは、木グシと云ふ名稱に含まるが、それに又、割串がある。太いものの頭を二つ割にして、間に魚を挟さみ、上端を藁で結ぶか、或はタマクラと稱する土環をはめる。

又、同じ割串ではあるが、挟みの部分を鐵で作り、下に木の柄をすげたものを金串といふ。これには鐵環を用するが、挟みの兩頭を外へ開いて、タマガラが落ちない仕掛けをして置く。

花見團子ならいざ知らず、串魚に嚙ちり付くことは勿論蠻的である。それは子供などのよくやることであるが「魚を串刺の儘食べると、死んでから咽頭を串刺にされる」といふて、戒めてゐる。

○ハラシ 魚の切目の、腹の方部分を云ふ。

○魚骨 魚の骨は、ホネと云はず、トギと云ふ。腹部の

細いものは、特に小トギと稱する。だから咽頭に魚骨を刺せば「トギ立てた」と喚くのである。

鮎は小トギが多い故、食べる時、唇を固く閉ちて嚙むと決してトギを立てないものだ、子供時代に教へられ、真面目な顔して食べたものであつた。精神を緊張させるためであつたらうが、そうすると不思議に引つ掛かからなかつた。今でも鮎を食べる時は、無意識にその構へをすることである。

若しトギを立てた場合、御飯を嚙まずにグッと呑み込むことは何處でもやることであるが、他に四つの療法がある。

一番簡単なのは、その同じ魚の骨を頭へ載せることである。又は魚の入つた皿でもよいさうである。(角館町、小松惣助氏)

佛壇の花瓶の水を呑むも、一方法であるといふ。

然るに象牙の箸で咽頭を撫でると、骨が抜けるといふ呪ひは何から出たものか不思議である。町では御小人町の故遠藤桂風先生の御宅にそれがあるといふので、皆が借りに行く。但し過つて、それで上から下へ咽頭を撫で

ると、トギは益々深く刺つて行く理屈だから、逆に下から上へ撫で上げるべきだといふ。(故鈴木三左衛門翁)

長野縣の小縣郡や、關西の神戸市などにも同じ風のあることが報せられてゐるが、(旅と傳説「民間療法」後者はその時の唱言に「うののぞく」と云ひ、それが鵜の喉の意であるといふ。象牙の箸の理由も判かるやうである。

骨の問題ではないが、天保の大飢饉の節、人々が手當り次第何でも食ひ喰ひ、時疫流行のことあつたので、藩では民間にいろくくと親切な注意をした。その一つに天保八年御用留 親江役處記録

一切の食物の毒にあたり煩に、大つぶなる黒大豆を水にてせんじ、幾度も用てよし。魚あたりには、いよいよよし(菅原三什郎氏藏)

とある。これは農政全書から採用した療法の御觸書であつたこと、天保八年六月十七日、佐竹義術侯筆録の北家御日記に記されてある。

○比喩と民俗
・網上がり 網、殊に曳網は上げる瞬間までが楽しみな

ものである。上げてしまつたところへ行つては、其處にどんなに澤山魚が獲られてあつても面白味が半減する。それで、今まであつた仕事が無くなつたり、又期待に外づれて啞然とした場合に「網上がりだ」などと云ふ。

(藤澤清二氏)

・ササメ鳴らす ササメは鰓である。饒舌な者へ「あまササメ鳴らすな」といふて、たしなめる。魚の鰓を、バク／＼やる習性を人間にしたことは面白い。(同氏)

・魚の目を食べると、身體に魚ノ目(疣眼)が出る。

○室惠比壽の御幣

御幣にいろ／＼の像を刻むことは邪道であるさうだが此地方では、未だそれをやつてゐる。

八幡社には鳩、稻荷に狐、水神に神形、久惠比古には案山子の姿等々。醤油醸造業の家では、ムロ惠比壽を祀るので、その御幣を切つて貰ふ。これには、大判、辨、鍵、其他金に縁のありさうな物は何でも刻み下げるが、鯛を下げることは決して忘れない。(第三圖参照)

○魚の贈答

・何魚といふわけではないが、サガ、鱈、鱒、鮭、鯛

甘鯛等を臺所で料理する時、その尾を切つて流し場の軒板、或は庖丁箱などに張つて置く。そして見舞品の上などに載せてやる。

それは末廣の意に解されるが、そうではなくて、生魚の御見舞品がないため、その代りに附けるもので「ピンギ聞き」、即ち病態の便りを聞く意であるといふ。

尾もなければ、千チカ(ワカサギ)の一二尾ものせてやる。(門脇堅治郎氏)

・生魚 生魚を贈る場合には、容器物が籠、皿、砂鉢、へぎ、盆等に區別なく、若しそれが川魚であれば背を先方へ向く様に、海魚であれば腹を、又川雑魚の如きを澤山贈る場合は、頭部を先方にし腹が右に向くやうにして贈るものだといふ、難かしい作法がある。

・殿様階級の贈答

(a) 正徳四年四月初日 佐竹義命侯關係記録
一明日、横手へ御使者、山方宇門被遣候

御音信之覺

御太刀目録 大學様へ 若殿様より
御肴 あら二本、御同人様へ 殿様より

同 いせこひ二本 横手奥様へ 御同人様より
 同 きす十五 御同人様へ 此方奥様より
 同 小鯛 御同人様へ 若殿様より
 (北家御日記)

(b) 享保二年二月初日 同上侯關係記録
 若殿様御年取御祝儀

御祝儀被爲進候覺
 一御前より銀子壹枚、若殿様へ被爲進候
 一奥様より銀子壹枚被爲進候
 お高様よりお肴一種、大鯛壹本
 お吉様よりお肴一種、鮒拾枚
 又八郎様よりお肴一種、鯨拾枚
 右之通被爲進候

御祝儀指上候覺

鯨貳本 主水、造酒、孫右衛門
 鯨壹尺 貞宗、貞光
 鯨貳拾 庄右衛門、七左衛門、喜兵衛
 鯨拾 休意
 あかう二 今宮織部

鮒拾枚 蓮沼七左衛門
 鮒十枚 定左衛門、彌兵衛、藏人主
 平目一枚 道雄、禎庵
 右之通献上仕候

一小林市兵衛肴一種鮒十五枚献上仕候
 一植木孫右衛門女共御肴一種鮒十 同上(北家御日記)
 (c) 享保十九年元旦 佐竹義據侯關係記録

一今日年始之御祝儀に御隠居様へ大鯛壹尾、お高様へ鮒五つ、御前様より被爲進候 御隠居様へ奥様より鮒十枚、お姫様より鮒五つ被爲進候 お前へ御隠居様より鯨拾、お高様より鯨壹尾被爲進候 お隠居様より奥様へ鮒拾枚、お姫様へお手遊品被爲進候 御前へ奥様より鯨拾、お姫様より鯨貳尺被爲進候 御前より奥様へ鮒十枚、お姫様へ鯨壹尺、奥様へお姫様より鮒五枚、御同人様へ奥様より鯨壹尾
 右之通被爲進候(北家御日記)
 これでは一家内で、魚の贈答ゴッコをしてゐるやうなものである。然し正月魚として、仙北の山中の町にどんな魚が入つてゐるかが判かる。

鯨はカナガシラであるが、鯨の多いこと注意す可きである。

(d) 明和二年四月七日 佐竹義邦侯筆録

覺

一寶曆五亥年 恭温院様御入部之節御領内、湯澤御旅館え飛札ヲ以親御機嫌申上候
 但先倒御肴致献上候得とも此節御押故不其儀
 一大麻刈御途中え罷出候節御旅館え例之通使者ヲ以御肴一折致献上候(北家御日記)
 右は此の地方の支配者であつた北家から、藩主への献上肴である。

○觸賣と魚漁禁止

此の地方としては、支配者或は藩公の重大な精進日には、漁獵が禁止されたし、又、支配者や藩主の家族の不幸の場合には、忌として一定期間、觸賣や漁獲禁止のお觸れがあつた。

・元祿六年七月十四日 佐竹義明侯筆録
 一扱當町商も一昨晝過より免候
 盆之市故○品免候 肴等ふれ賣も昨日より免候 盆中

鳴物ハ廿日留候也(北家御日記)

右は同月七日に御新造が逝去したので、その一七日目の御觸れである。

・元祿十六年七月初日 佐竹義命侯筆録

一六月廿八日付にて久保田より御書付到來
 一魚店、見せ出候儀今日より御免候事
 一魚類觸賣之儀、給人町御忌明迄停止也 其外町々今日より御免候事
 一精進物觸賣給人町共に何方も今日より御免候事
 一獵致候儀、明後晦日より御免之事
 右之通御會所より被仰渡候由、黒澤三右衛門より申上候故此方御町へ被仰付候(北家御日記)
 右は前の六月廿三日藩主義處公が、横手で病歿された爲めの忌である。

・又、寛保二年二月に藩主義堅公が江戸で逝去の時は、十三日間漁獵停止の御觸れが出てゐる。(同上御日記)
 ・それから藩主の室の逝去に際しての例としては、文化十三年正月九日 諸御用留書(親御役處)
 仙松院様御事御病養無御叶、當月十四日午ノ下刻被遊

御逝去候段、同日江戸出足御飛脚只今來着申來候間此段被仰知候依之(鐵城中略)

一漁獵之儀當廿二日迄被停止候

一魚類觸賣之儀は、久保田在々共に侍町被停止候 限之儀は追而可被仰渡候(菅原三什郎氏藏)

仙松院は天樹院公、即ち佐竹義和公の室であつた。

○話 狐が魚苞を持つてゐる者を騙ますことは何處にもある話である。こゝに肴屋が化かされた話がある。

町の人氣者の某肴屋が横町の角まで來たら、其邊の様子子が何となく違つてゐる。左側が田で右側が屋並な筈なのに、それが逆になつてゐるではないか。

變だと思つて、お寺の門前の臺石に腰を下ろしてゐたら、中から女中が出て來た。魚を買ふといふ。

然もダシの魚を皆買ふといふ話。そして猪のついた拾圓紙幣を渡して行つた。皆賣れて、よかつたと思ひ先づ一服と臺石に又腰を下ろして、煙草入からキセルを出して一服吸ふたら、四邊の景色が又別になつて、毎日見てゐる通りの有様となつたのであつた。

ハテナと思つて財布の中を見たら、札と思つたのが木の葉、然してダシの中には魚が一尾もなかつた。(富木友治君)

の葉、然してダシの中には魚が一尾もなかつた。(富木友治君)

◎各魚

○鱒

・鱒とヤマベは何處でも問題になる。鱒はどれを獲つて見ても鱒ばかりで、雄は千本中一本と云はれてゐる。

然るにヤマベは反對で鱒がなか／＼見當らぬ。鱒の子には、必ずヤマベが附着くやうである。(八柳啓治氏)

・出鱒 早春に見る鱒で、ヤマベによく似てゐる。

・ホチャレ 産卵鱒のことで、ソコベと同じもの。

・鱒獲り言葉 「鱒くどり」は鱒を突く人である。

延寶五年の北家御日記に「鱒かゝせ候」といふ文字が見えたが、これは釣で捕らせた意である。

「セゴ石」といふは所謂鱒カキが、水底で待機してゐる時、釣を載せてゐる石のことである。その者の方へ鱒を追ひやる爲め石を投ずるが、それには名がない。(角館町、陶理造氏)

だから此のセゴ石は、佐藤信淵著の「漁村維持法」にある勢子石と稱する、海魚の漁に沖に沈めて置く石とも

性質が違ふのである。

「待場」即ち鱒を待機して小屋の中で突く場合、例へば今朝の九時半に一尾を突いたとすれば、翌朝のその同時刻にも、必ず別の鱒が其處を通るものだといふ。(武藤末治君)

「大目打」は、鱒を獲る投網を特にかう云ふのである。

「上ぼり築」といふものがある。築に故意に穴を開けて置くと、鱒の類がその穴下から落ち水に飛び溺るが然し、水勢に負けて跳ね返されて築に落ちるのである。

(同君)

「逆築」と云ふもある。別段逆に川下へ向けて作るものでもないが、築の傍を鱒が潮るやうに水路を開けて置き、然も直ぐ先が支へるやうにして置く。そこで行詰つた鱒が、失張り築に注ぐ水勢に押返されて落ちるやうに仕掛けるものである。(蓮沼運助氏)

・鱒を獲つた記録

(a) (瀬狩) 明和三年六月十一日 佐竹義邦侯筆録

天氣吉 日入之頃より雨

一晝前より山鼻上より太田止メ下迄、瀬狩有之、河内、

堅治參候 鱒九本手柄有之、我等歸候節、太田ニ而暫ク見物申候(北家御日記)

山鼻は先にも述べたやうに、楡木内川岸であり、此の町の象徴のやうに巍然と聳ゆる古城山フルシロヤマの北西出鼻である。

(b) (鱒狩) 天明八年六月十六日 佐竹義躬侯筆録

一山鼻鱒狩有之晝より參候 奥始惣容參候 晝ハ同所に而遣ひ候 手柄八十四本、近年珍敷事也

一横手へ賃夫相立、右手柄之鱒五尺遺候

一鹽谷左膳へ鱒二尺手紙を以遺候

一家老とも、膳番とも、芦野織部、納戸役當番、百太郎

附頭役當番へ一尺宛遺候

一今日供に而參候道益へ二尺、其外小姓共五人へ壹尺宛遺候(同上日記)

(c) (鱒をカケる) 元祿三年六月廿二日 佐竹義明侯筆録

一天氣上々吉、殊之外暑氣也 土用入候而今日程酷暑無

之、惣而當年へ暑氣甚也

一鵜崎淵ニ鱒多居候由、川入之者共申候ニ付、自分ニ而かけ候様こと申付候 我等も出見候 三右衛門も呼候

我等見物候内へ只二人捉候 其後段々ニかけ、八つ半頃より仕廻候 貳拾四本惣而取候由也 臺所えも四本爲上候也(同上御日記)

鵜ノ崎は、山鼻から一町も下らない下手であるが、今日では淵らしい淵もない。

(d) (葭竿にて) 寶永五年四月廿五日 佐竹義命侯録 一歩行、高畑市郎兵衛か川へ參候而、やまべ魚をつりニ參候而 鱒をつり候とて献上申候 尤小キ鱒ニ候へとも、よしのをほニてつり候へ上手と相見得申候 (同上御日記)

葭竿といふはその製作が、なかなか面倒なものである。

拇指位の葭の生える谷地のある附近の人に頼んで、春頃から生えた儘のもの、下方の葉を削いて貰つて置く。

さうして、いゝ加減の月日が経過してから又その上の一節の皮を削いて置いて貰ふ。そして死なずに育ち、然も肉が締まつて丈夫になるやうにするのである。

秋になると、それを切つて三四尺の長さのものとして織ぎ、織目は眞綿で巻き漆をかけて密着せしめる。

輕くて丈夫な竿が出来上がる。神宮寺の大浦沼には、それを作るに上等な葭が生えてゐて、角館あたりからも知人へその育て方を頼みに行く者があつた。(故鈴木三左衛門翁)

その葭竿では、一尺以上の鱒でも騙まして弱らしてから引けば揚げるによいものだといふ。(蓮沼運助氏)

鈴木、蓮沼兩家には、現在もその立派な釣竿を傳へてゐる。

(e) (小釣で鱒) 寛保三年閏四月七日 佐竹義據侯筆録 一天氣吉ノ夕飯後、柳橋友右衛門小つりニて、目ノ下壹尺七寸之鱒手柄持參致候 仍而鳥目貳百文とらせ候 (北家御日記)

・シヨ鱒 鱒の鹽引は鮭の場合のやうに、ボダと云はず鹽鱒といふ。北海道邊から來るらしいが、あまり旨いものでもない。

・古疵と鱒 鱒を食ふと、三年の古疵が起きる。(荒川正氏)

・淺利摩國の話 少し前に、町に本名は何と云ふたか判からぬが、かういふ名の人が居てあつた。

奇人變人の部類に屬する人で、釣がまた大好き、但し大天狗の部であつた。

客が來ると「こんな大きな鱒の王を釣つたよ」と、二三尺も兩手を擴げて見せるので、妻君が傍で見兼ねて、「法螺もいゝ加減にしなさい」とたしなめると、その大きく開いた手を五寸程に縮め乍ら妻君の方へ廻はして、「ナア嬢」と云ひ続けるのであつた。(内藤直之助翁)

・鱒の鮮 現在は作る人もあまりないやうであるが、昔はこの魚の肉の鮮も作らへた。

寶曆五年五月廿五日 佐竹義邦侯筆録

角館より此度持參之鱒之鮮、表向献上も如何に候故、今日阿曾村養宅呼候而御内々に差上吳候様申談候 (鐵城中略) 養宅所より伊東傳之丞所へ以手紙右兩品差上候處に、早速御風味被遊、思召にもお叶被成候由此段申遣候様に御意趣申遣候 (北家御日記) 當時の藩主は佐竹義明公で、義邦候の献上品のうち他の一品は、角館酒であつた。

○ヤマベ

動物圖鑑によると、東北地方のヤマベは學名のヤマメ

であつて、東京方面でヤマベと云ふはヤマメとは別で、オイカワといふものであると。 當町の釣の名人、條田清治氏の御説では、キリギリ即ちヤマベは、北大の大島博士の確證の如く、五六月頃川へ溯上して來るサクラ鱒の子であるといふ。 つまり初冬に河の上流で生れた幼魚は、雌雄共翌年を河中で過し、二年目の春の一年魚の出る頃一齊に下つて行く。其理由は判からないが、雄のうちで殘留するものがある。又稀に雌の殘るものもあるが、それは殆んど目につかない位である。それ故、やがて海から溯上して來る時は、雌百尾に對して雄魚は十尾から四十尾位の割合で來る。

だからヤマベは鱒の一年魚の雌雄と、二年以上の雄魚なのである。その棲息所は滯でなく、親鱒の居る上流瀬である。釣餌は毛針が萬人向きであり、蟲としてはクダ蟲の幼蟲がよく、六月中旬からは大形の釣がよいやうである。

八九月の頃になると冷い場所を求めて、谷川や泉川へ入る。そしてあまり餌につかないので技術を要するが、

然し釣り上げると六七寸の大物である。(昭和一〇、七、五、角館時報、同氏稿)

又次のやうに説明する人もある。

キリギリは鱒の子が秋に生れてから二年後のもので、三歳になればヤマベである。ヤマベのうち鮭の膚色をしてゐるものがあるが、それをヨハダと云ふ。これは三歳の春には雪汁水に乗つて海へ行く。(八柳啓治氏)

魚もヨであるが、鮭の魚を單にヨと稱する所は多い。それ故、魚膚でなく鮭膚かも知れない。

キリギリは脂も相當あり、頭ごと食へる。檜木内川でこの魚を釣るには、黄羽色のカンテラがよいし、雑魚だと一般に黒つばいものがよいやうである。(赤平東一郎君)

角館では、どういふわけか、五月三十一日には必ず雨が降つて、そしてヤマベが釣れるといふ。それから又、産婦はこの魚を食ふものでないとも云はれてゐる。(小野納藏氏)

○鮭鱒と鮭子

この名前の通りで、どつちにもつかぬ混血兒のやうな魚が檜木内川に居る。鯉鮒と云へば鯉のことであるが、

これだけはその二つの名のどつちにもつかぬ。(八柳啓治氏)

又、三十年程前までは、早春に鮎瀬川のチャラ／＼する瀬で、サガ子と稱して釣針へ蚯蚓をつけると、約二三寸の魚が面白いやうに釣れたものであつた。サガ子は鮭の子の訛りかも知れない。(蓮沼運助氏)

○鮭

鮭とも云ふが、一般には「鮭の魚」と稱する。

今日であると金さへ出せば誰の口にも入る鮭も、昔は平民の口になど容易に味ひ得るものではなかつた。殊に初鮭となると、値段も高く、殿様階級でも珍重したらしい。

延享二年十月十六日 佐竹義據侯筆録

一今日、川鮭一尺、四百五十錢＝取候而、奥へ進候(北家御日記)

同四年九月十六日 同上侯筆録

一今日初鮭到来、表と此方＝而寄合、一貫文＝調候(同上)

・南部の鮭 「南部の鮭の鼻曲がり」と云ふ言葉は相當範

圍に擴まつてゐる。この地方の鮭は附近の川鮭もあつたが、大部分は仙岩峠を越して南部(岩手縣)から來たものであつた。

寒中などは峠の雪深く、到底生保内まで持つて來ることが出来なかつたので、峠のお助け小屋に、スミ貝などと一共に置いて行つたもので、其處を中繼として無言貿易が行はれた。

その鮭は今日の冷凍物のやうに、非常に不味いので、少々味の變はりかけた他の魚までを「南部の鮭のやうだ」と云つたものである。(内藤直之助翁)

寛政六年、人見蕉雨の著書にその貿易を次のやうに説明してある。

角館の奥、生保内村よりの形道をゆき、南部岩手郡橋場村へ至る同じく嶮峻の道なり。中途の山懐に無人屋あり。旅客道路に行くらせば是を中宿となす爲に、小鍋・椀やうの物も備ひ置くは小安村より仙臺へ越る山道の中宿と同じ事なり。

我國より南部へ送る荷を是迄負ひ來り、屈所の記號して此中宿へ置歸る。南部より此方へ至る荷もかくのこ

とくして是宿へ置歸るに、互に行かれば戻り道にはかの主なき荷を負ひ歸り、記號の方へ達るは是もかの易荷の心にひとしかるべし。(黒甜瑣語)

又延寶六年の佐竹義明侯筆録を見るに

一近年南部へ荷物通不申候 此末通り候様に被仰付被卜度候 素々は千駄余通り候(北家御日記)

などの事がある。

扱、南部の鮭の鼻が何故曲つてゐるか、産卵期の雄の鼻先が延びて曲がるものだといふ人もあるし、又單に鮭は育ち次第鼻が曲がるものだといふ學者もある。(田中茂穂氏著「魚と人生」)

北上川の鮭の、丁度その頃に育つたものが國見峠を越して、この仙北地方へ輸入される時、その鼻先のカーブがいやに目立つので、人々は南部の鮭ばかりが鼻曲がりであると曲解した。そして鼻筋の曲つてゐる人など見ると、それを連想して南部鮭の絶對來ぬ今日でも「南部の鮭の鼻曲がり」と叫び嘲笑するのである。(蓮沼運助氏)

町の富める町人などは、殿様への進上物にその初物を手に入れた。

延寶六年八月四日 佐竹義明侯筆録
 一山田三郎右衛門、自南部到來由ニテ鹽之鮭進上申候
 尤初鮭也 御小座へも上候也 隼人詰前故、幸ニテ振
 廻候(北家御日記)

右の山田氏は中町の豪商であつた。又、到來物ではな
 く、必要があつて生鮭を南部から態々求めるやうな場合
 は相當値高であつた。

享保八年九月八日 佐竹義命侯關係記録

一昨日、南部を被仰遣候生鮭參御求ニ候 但し代壹本、
 壹貫貳百七拾文に候 是ハ若殿様御病氣可爲上被思召
 候て、おさかなやへ被仰付候故參候
 上々様初鮭故被召上候(同上御日記)

・一夜味噌漬 鮭、鱒、鮫、鱈、岩魚などを味噌に漬け
 置いて、その翌日、或は二三日後に食ふことを云ふ。
 ナメで獲つた岩魚なども、かうして置けば旨く食へ
 る。(太田雄治君)

・鹽鮭 これをボダと秋田縣一般に、昔から稱されてゐ
 る理由はよく判からない。いろ／＼の説が唱へられてゐ
 るが、私はそのいづれにも頷くことは出来ない。

(a) ボダは干魚の轉訛である。ヒは「火」、ナは「だ」
 に訛ると。(秋田魁新報、昭和一一、九、一九、奈賀川八十氏)

(b) 牡丹鮭といふ肉色鮮紅の鮭のことが轉じて、ボダ
 となる。牡丹餅のボダと同じと。(秋田縣人雜誌九年四號、
 寺戸繁郎氏)

(c) 佐竹藩で人民の奢侈を戒める爲め、魚類輸入を禁
 じたことがある。然し鹽鮭だけは大目に見る内規であつ
 た。

それでも大びらに積んで来るわけにもゆかないので、
 その上を槽(ボダ)で蔽ふて「荷は何」だと聞かれると
 「槽です」と答へたことから、さう云ふやうになつた。
 (「秋田」十一年二月號、細谷則理氏)

(d) 北海道で鮭をブナと稱してゐるは、その魚の味の
 特によいのは、海から河へ入りだての、未だ河口附近に
 居る時で、その時の皮の色が山毛櫨に酷似してゐるか
 ら、さう呼ぶのであると。(魚谷常吉氏著「魚料理」)

我國のうち海魚の鮭を、ホタといふ所は二三ヶ所ある
 やうであるが、これとても鹽鮭とは關係ありさうもな
 い。

唯それは、此邊でホウマチ錢(穗待ち、賣待ち、帆待ち
 等と様々に解釋される)のことを、ホツタ、或はホツタ錢
 と稱することの研究資料として役立つやうである。

即ち朝など海岸を歩いて居ると、その美味な魚の大き
 なものを偶然拾ふことがあり、それを「ホタ拾つた」と
 云ふ所があるといふからである。

・單に鹽した鮭と云へば三種を擧げ得る。
 (a) 普通、ボダ或は鹽引と稱するものである。
 (b) 鮭は秋のものとはかり思つてゐるところへ、時で
 もない時、北海道あたりから甘鹽(薄鹽)のものが來た。
 それを「時知ラズ」と云ふたものである。

(c) 秋アチと云ふは、秋獲つた鮭を鹽漬にして、年内
 に食ふものである。(内藤直之助翁)

最後の秋アチといふ言葉がアイヌ民の間にもあるとい
 ふので、内地のものもアイヌ語であらうと云ふ人もある
 が、それは寧ろ日本人から輸入した言葉であらう。

・ボダ一本買へぬ人達 少し前までは、町のうちでも、
 村中でも、正月になど鹽引を一本儘買へる家といふもの
 は殆んどなかつた。餘計で半分、或は四ヶ一を買つたも

のである。

そんなことから「買つた四ヶ一、小さく見える」とい
 ふ言葉も生じた。四ヶ一とは魚をオロした(背骨に沿ふて
 二枚に切り離すこと)ものを更に二つに横断したもので、
 つまり全體の四分一のことである。

魚屋は公平に置いて行くのであるが、稀に漸く買ふ人
 の目には、それが小さく見えるといふ意である。

極端な話ではあるが、始めて鰹節を見たら魚を干した
 ものとは信じ得ず、何か煉り物の類と思つたり、鹽鮭の
 頭を見て吃驚りした子供があつたといふ。眞に嘘のやう
 な眞實の話である。(内藤翁)

然し鹽引は、此の土地でばかり高級副食であつたばか
 りでなく、江戸の身分ある士は勿論、京都の御公卿さん
 達にもそれが贈られて、甚だ珍重されたのであつた。

元祿二年卯月十一日 佐竹義明侯筆録
 一當十三日、後藤民部事、京え登、田中三左衛門代之田
 先日爲免候ニ付、中院殿、高倉殿、徳光院殿之船便ニ
 鹽引遣申候儀狀遣候 慶壽院殿、武者小路殿えも右同
 斷、山下父子にも鹽引壹尺宛遣候也(北家御日記)

右に對し、八月九日京都の方から夫々返禮の品物が届いてゐるが、中に匂袋などもあつた。(同上御日記)

・鮭鮓の秘傳 鮭の鮓は旨いものである。然しそれを漬けるに秘傳がある。角館町に於ける漬物の名人、太田菊子嬢の漬方を公開するに、先づ桶の底部に餅米を堅い位に蒸したものに麴を混じて敷く。その上に鮭の肉をナンへに切つたものを並らべ、鮭の卵、大根及び人参の薄切に酢を僅か入れ、鹽で味付けたものを振り交ぜる。

その上に又御飯と麴を載せ、表面に笹葉を敷く。そして桶に内接して井戸繩を巻き押へる。そして出来た層を、一ヘダイと云ふ。

一つの桶に幾ヘダイも漬けるが、取出して食べる時、そのヘダイがこれまで食べた量、或は残りの部分の目安となるのである。(太田雄治君)

・メフン 鮭のアバラ骨の内側に附着いてゐる、血綿のやうなものである。それを蒐めて鹽をふり、鹽辛狀としたものを嘗めつてゐると心臓病に效能があるといふ。

(角館町、菊地ウツ子)
メは雌でなく、ヤマメやゴマメのメの如く魚の意があ

り、魚羹の意かも知れない。薬とでも覺悟しなければ、なめる氣のしない特種な味ひである。

・士家に鮭買立や鮭網参加禁止

(a) 寶曆六年正月 御用所惣御張出寫

向後、支配御目附被相止、檢使等被指出候處ニ一鮭御買立は御檢使斗 (鐵城藏)

買立とは、藩用鮭の買上のことである。

(b) 嘉永六年五月 町送來翰

鮭引網、百姓町人名前を以、諸士相加り候段相聞得、御役鮭之儀ハ御献上御進物御用ニ相抱候事故、以來内通たり共、諸士相加り候事、天明之度嚴ニ被仰渡候得共、追々相弛近來ニ至、諸士相加り候様相聞得、依て右様之儀嚴被停止候間、萬一心得違相加り候もの有之節ハ急度無調法可被仰付候間、此旨可被相心得候

八月

(同上藏)

士族が百姓や町人名義で、鮭網の組合へ参加することを禁じた仰渡で、菅澤給人組頭への來翰である。

・ハララゴ 櫻の實はサクラゴである如く、鮭の腹の中

の粒は腹ラゴである。偏だけ魚と蟲で違ふも、作りが偶然圭で同じ蛙は、あの寒天に包むだやうな卵を産む時「鮭の子になれ、鱒の子になれ」と祈念するやうである。

生れ出て来るゲラクタ(オダマ杓子)は、色こそ黒けれ魚の姿をし、大體鮭や鱒の子に似てゐるので、蛙は大満悦である。

然るに間もなく足が一本出、二本出て、折角の尾も落ち、不肖の子でないものが出来上がるので、全く悲觀してしまふさうである。(太田雄治君)

・舊河床のハララゴ お祖母さんの小さい時分といふから、最早百年も前の話である。町の山根の大川前の首出を繋した時、マナゴ(玉石)の間から鮭のハララゴが、たつた今絞ぼり出したやうな色して、出るも出た、半器に一杯出たといふ。(蓮沼運助氏)

同じやうな話は、所々にあるやうである。

・釣餌として 新聞紙に並らべて、生干したものを箱に入れて持つて行く。前夜、大根スリ(オロシ)を混じて置けば、工合よくなつてゐる。ハララゴの鹽漬、即ちシヅ

ゴでも釣れるといふ。(角館圖書館主催魚の座談會)

・シヅゴの不思議 筋子か、鈴子かよく判らないが、この鹽漬のハララゴを湯漬飯にかけて食べると、咽頭に支へ易いもので、うっかりすると生命を奪はれることがある。(太田雄治君)

・鮭と凶作 鮭は主として秋の荒れる頃、河川を溯つて来るが、餘計な年は不作だといふ。理由に鮭ノ魚は、ソダツ薬(素立薬)に包まれ度いといふて登つて来るからだといふ。素立薬は稔りもなく、猫の鬚のやうにピンとしてゐる稻株のことである。(陶理造氏)

・ボダの鱒 これを食べると、髪がよくなるといふ。(角館小學校迷信調査、昭和一一、六)

・謎 (問)朝まに起きで、赤げや鹽鮭コ挟むもの何アに (答)火箸

炭火など赤いことが、鹽鮭の肉色に似てゐるといふので「ボダコ附けでやるか」とか、「ボダコ呉れる」とか云ふ。永い間、雪に閉されて爐邊に親しみを待つ子供等は、昔からの鹽鮭に對する憧憬の反映か、紅く燃える炭火さへそれに擬して遊び満足するのである。

・鮭の王 舊藩頃の蓮沼七左衛門と云へば、秋田藩でも著名の經世武士であり、炮術家でもあつた。秋になるとよく野郎を連れて、火ブリ或はヨグリに出掛けるのであつた。

或晩も例の如く簀笠姿で舟に乗り、山鼻の淵へ行つた。

火影で見るに大鮭が居る。直ちに鉤を引掛けた。その鉤は八つ目鉤に似たもので、長い竹柄が付いてゐた。

うまく懸つた。ところがその鮭はどんなに大きいものか、いくら引張つても上がらないで寧ろ舟の方が持つて行かれる。

さうして引きつ引かれつしてゐるうち、外づしてしまつた。見ると外づれるも道理、あまりの強行に鉤が延びてゐたのであつた。

二三日経つてからのこと、川下の長野町の御役屋へ、あまり稀らしく大きな鮭だからと云つて、拾つた大鮭を届けた者があつた。それは嘘偽りなく編木幅（一尺三寸四方位の盆）の鮭で、人々は鮭の王と語り合つたが、まさしく七左衛門の懸けた鉤疵を負ふてゐたのであつた。

（蓮沼運助氏）

○鮎 この魚は檜木内川のうち、角館町に沿ふてゐる部分にも産卵するが、あまり深味へも子をフラない。（フルは置くと）その證據に尾があまり痛んでゐない。

但し産卵後の軀體は、見るも無慘に荒れてゐる。それこそ二目と見られぬ姿である。（角館町、柴田保太郎氏）

鮎が溯つたか否かを見別けるに、岩の苔などを食べた痕を見るが、それに別段の名前もなく、唯、ナメつた痕とのみ云ふ。（八柳啓治氏）それは正面から上下に、ガクリと咬み付くものではなくて、口の横丁でナメるものである。大鮎の嘗めつた痕の大きいことは勿論である。

（角館中學校、手賀順造氏）

習性として濁り水には案外弱く、岸へよろ／＼して来る故、鮎より先に網へ入つて来ることもある。然し水が笹目色になると元氣が出て来る。（八柳氏）

鮎の玉なして岸に寄つて来ることを、ザルに来るといふ。茲頃はそんなことは夢にもないが、もとは晩方など岸の杣のあたりに寄つて来るのを、サツテ網で雑作なく

掬ひ上げることが出来てあつた。但し網は絹製で水切りがよく、素速い動作の出来るやうにしてあつた。（武藤末治君）

鮎は又、ミヨ／＼蟬が鳴かないうちは釣れぬと云はれてゐるが、あれは嘘だ。（手賀氏）

・漁法

（a）錨釣り 所謂ザルに來た明治三十年頃には、檜木内川本流は鮎瀬川の方であつて、土瓶淵の下や落合の邊には眞黒になつてゐたものであつた。

其頃誰が氣付いたか錨釣りと云ふことが流行つた。即ち笠縫針（角館は菅笠の産地として有名で、藩公の笠なども作つた）の三寸程のものを焼いて鉤を作り、三本程寄せてよく糸を絡らんで錨狀に緊縛し、その上を更に鉛で巻き釣兼鏝とした。それを四間程の麻絲に結び、更に二三尺の短い竿につけて、岸から鮎の群へ放り投げては引いたり緩めたりして手加減する。

手答のある時、素速く手繰ると鮎がかゝつて來る。その方法で一日に、八九十乃至百までも獲るものであつた。（蓮沼運助氏）

（b）友釣り 繩張り争ひの習性を利用したものであるが、又雌雄二尾をつけて放し、他の雄の寄つて來る三角關係を利用して釣る方法もある。（柴田氏）

普通の友釣の場合、一番最初に向つて來るのは其處に居る一番大きいもので、次々と懸け上げられると遂に、四より小さいものまでが引懸つて來る。これで見ると鮎は、よほど鬭争性の強い魚であるらしい。（手賀氏）

（c）ハネ網 先づ河原で一時間以上もかゝつて、マルといふものを作る。井戸繩に青笹葉、柳枝などを一帯に付けたものである。處々に、宛も石器時代の錘石のやうに河原石の兩端を缺いたものを、繩で結んで附着ける。笹葉の代はりに鴉の羽など附ける者もあるが、魚はそれを鴉と思つて跳ね上るより寧ろどこまでも潜ぐつて行くので駄目である。

さて登場人物は、丸曳き、陸持網持である。三四人の丸曳きは始んど乳きり入つて、上流から下流へ川一杯になつて、マルを曳く。石は底をスレ／＼に引かれ、マルは僅か浮いてぐる／＼廻はるので、鮎は驚いて水から飛び出る。

同じ場所を二度繰返して曳く時は、モミ返すといふ。網持は大抵三人（一人に網一ガラ宛）、水の都合などで多くして四五人までであるが、マルより二三尺後方へ網を横に構え乍ら進む。そして飛び上る魚を巧みに揃ひ入れ、ウデ木で、ゆすぶり按配して下に附いてゐる網袋の方へ落とし入れ、その口を握り締めて又次の鮎に備へる。網は一丈二尺程の竹二本の一方を結び、其處から二尺五六寸のところを朴で作つたウデ木をはめ、先端が四尺程の間隔に開くやうにする。それへ僅かたるめて上等の絹網（軽いことを必要とする故）を張り、その延長がウデ木の下で深い袋になるやうにしたものである。

陸持は一人であつて、陸持籠と稱する茸狩に使用するやうな偉大な籠を背負つて、陸を附着いて行く。

籠の中には履き換への草鞋、着更への衣裳（盆頃にやるので歸途は相當寒い）、握飯、鉈（串を削つたり、薪を切つたりする）などが入つてゐる。他に獲つた魚を容れる籠も下けて行く。

明治三十年頃、七人で組んで千二百尾も獲つたものであるといふ。

分配は平等で、陸持も一人前である。場合により網を出した者へ、別に少々餘分配することもあつた。（蓮沼運動氏）

このハネ網も最近禁止になつたので、川をこぐさうした人々の姿を見ることは出来なくなつた。

(d) 鵜 この鳥は大きい魚を咬へると呑み込めないの、陸へ引上げやうとするものである。然し鱒などを二羽で咬へて岸へ引張つて来るのを見ることもあるが、あれは協力でなくて奪合ひのやうである。

又八ツ目など咬へると、嘴へ巻き付かれるので、如何にも氣持悪るさうに岸へ引くものである。（角館町、藤原平左衛門氏）

猿も木より落つてもないが、鵜程のものも獲物に夢中となり、あまり勢よく魚を追ふて、魚の逃げ込んだ沈槽の間に首を突込んで死ぬことがある。（渡邊小勝君）

盛かり鵜を使ふ頃だと、鵜使が出掛けたと聞くと、五十集屋が行つて、獲つた鮎を買込んで、ダシに入れて来て大勢捕つて「鮎、鮎、大鮎！」と觸れて賣りに來たものであつた。（蓮沼氏）

鵜を遣ふためには、先づ鵜を用意しなければならぬ。

舊藩時代には誰彼と、勝手にそれを飼養することは出来なかつた。百姓町人は、勿論眞似も出来なかつたし、假令武士でも人数が定められ、大體御與下八人、御家中七人と合計十五名位に鵜が預けられてゐるだけであつた。

鵜は

元祿十七年七月六日（寶永元年） 佐竹義命侯記録

覺

鵜拾五、佐竹左衛門殿用所ニ神宮寺玉川邊ニ而取候事不可有異儀者也

申七月四日

權太夫印判

（北家御日記）

といふ風に、ちやんと許可を得て神宮寺玉川べりから捕つて來ることもあつたが、又現在の南秋田郡方面からも捕つて來た。

明和四年七月二日

佐竹義邦侯筆録

一先日より秋田郡鵜刺ニ差越候小野崎儀兵衛、高畑市郎

兵衛など今夕方歸候 大崎村濱、飯塚村、五十目村之内、右三ヶ所ニ而鵜六ツ手柄、右之内一ツ途中ニ而落し、五ツ持參申候（同上御日記）

さうした鵜も、甚だ罪を作つたことがある。それは鵜遣の士族達が、そのスポーツに夢中になつて、學問をおろそかにしたからである。

文化二年三月十六日 佐竹義邦侯筆録

覺

近年郷校御取立一統御教導被成候處、今以眞實出精之念薄キ故ニ候哉 近來鵜使等甚増長致候儀相聞如何之事ニ候 以來鵜遣候ものは爲相伺、夫々吟味之上可被申渡候 惣而右體遊逸之ため、文武之業、等閑ニ不相成様嚴ニ可被申渡候以上（同上御日記）

近來とある故、その時に始まつた遊逸でもなかつたらしい。それにこれが未だ残雪深き三月の仰渡である。相當藩の方へ心配をかけたものらしい。

又、先に述べた殿様の忌の間、或は精進日に於ける魚獵禁止を給人共が支配者に面當てのやうに破つて、問題

を惹起したこともあつた。

寛政十年五月廿九日 佐竹義躬侯記録
家老共出候

一此間鳴物停止申渡候砌、與下とも鶉遣候趣相聞得、且今日又四郎歸候節、表町西側へ鶉据候而入候者見當候乍示間遠ニ而誰と申事も、入候家も不相分候由ニ候併此間鮎爲調候ニ賣拂候ものも有之候得へ、彌相違無之義甚我等を輕じ候次第ニ候 仍而又四郎忌明之上へ右之趣申立候間、前以鶉持候面々へ斷置候旨、書付を以組頭共へ申渡候様ニ申付候(同上御日記)

これは北家の御新造、靈鷲院殿鐵巖幸笑大姉御逝去の忌中に起きた一件であつた。次のものはまた、徳雲院、即ち元祿十六年逝去された藩公佐竹義處の精進日やつた鶉遣一件で、百年以上経つた佛の命日である。

文政三年六月廿三日 佐竹義文侯筆録

一今日ハ徳雲院様御祥忌日ニ有之候處、與下之内、岩瀬川へ鶉遣ニ出候様相聞得候ニ付、歩行目附庄兵衛申附吟味爲致候 無間、茂右、庄兵衛罷歸リ申候へ、與下之内、金丸外記、河原田新右衛門、小野崎金右衛門、

へ申付忽々之様ニ積ヲ得候も氣之毒ニ候 仍而左様之儀無之已前、惣觸ヲ以吟味筋申渡候様ニ致度、左候へハ夫ニ準シ支配下へ屹度申付方可有之、此趣御直談申度申來候由段々之次第被申候

全く蹴瀬邊之儀此方にて承知不申候 昨日彌太郎より手紙ニ右之趣被申越候故、則昨夕歩行目附其邊へ吟味被指越候所、子細も無候得とも、近郷百姓共並蹴瀬舟守へ屹度申渡置候 段々彌太郎念遣候儀ニ候得共、兼而被存候通、此方與下一件爾今落着も無之、此砌尤御國一統之御制禁之滑打とハ申ながら、又此方慰候障ニ相成候事も交り候へ、此節ケ様之小事ヲ嚴敷吟味筋申觸候儀延引有之候

扱近來も上河之方ニ而、滑打之風説有之故、向寄々村々へ屹度吟味申候様に申渡候趣も有之、是等之含を以彌太郎與下之與頭へ、彌太郎一存ヲ以心得候義内意申候而可然哉ニ候 此方よりハ格別ニ申觸候儀者、重々延引之段委細申談候處、至極尤之義ニ被取受、左候ハ與頭へ内々心得之儀可申含由挨拶ニ候(同上御日記)

殿様漁日記

絲井七五郎、佐藤内藏、原田小四郎、鹽谷右膳組下、絲井文六ニ違無之旨申聞候

一暮頃家老共呼候而、前條鶉遣一件儀申候 何連吟味之次第趣意鶉遣ニ出候儀右面々指留候事ニ申附候

同晦日

一當廿三日、與下鶉遣之面々、河、金、小、絲、佐、原、右六人不行狀之旨ヲ以、内意病氣可申付、右膳組下絲井文六事ハ屋敷番ヲ以、内々右膳へ申達候様可取扱家老共へ申附候(同上御日記)

(e) ナメ これは今と變はることなく法令で禁止されてゐた。特に許されてゐる殿様だけは差支なかつた。然しそれでも常民を始め、士族でもその禁を犯す者は多かつた。

明和四年七月三日 佐竹義躬侯筆録

一夕飯飯、鹽谷彌太郎被參對面申候 此間蹴瀬邊ニ而、滑打之催相聞得候 右人數之内、彌太郎與下も有之様ニ相聞得候 右之趣此方ニ承知も無之候

萬一此末右之徒有之、彌太郎へ申斷等ニ而も有之時も制法相犯候事故、不容易取扱ニ相成、曾而彌太郎與下

次のものは、延寶三年と四年に於ける角館地方の支配者佐竹義明侯の鮎漁日記である。繁雜のやうであるが、之に依つて漁法の種類は勿論、その季節的區別、天候關係、各漁の捕獲量、お留川の範圍性質などを知らることが出来る。

これは勿論、漁日記として纏められてあるものではなく、右二ヶ年間の北家御日記中から、順序に拾ひ書きしたものである。

延寶三年五月三日 佐竹義明侯筆録

(夜飯捕及び、ハネ網と門限)

去月廿八日晚、攝津守組下夜廻致候處ニ、四ツ以後二人三人谷地町ニ而燈灯なしニ通り候 調候へハ青柳武兵衛下人ニ候 申付にて夜かちか取ニ參候 四ツ打候ゆへ歸候由申候 就夫今一組ニ相談申、武兵衛處へ届遣候 武兵衛申候へ、如何ニも拙者下人ニ候 内一人ハ運沼七左衛門下人之由武兵衛申付候而、かちか取ニ遣候 四ツ打候ゆへ迎に人遣可申と存候 兎角いたし延引申候由ニ候 此末も、はね網などニ出候而夜ニ入罷歸候も可有之候 左後へ、まかへ者御座候も知不

申候か如何、先内々御手前へ申遣候様ニと攝津守申候由也(鐵城註、青柳武兵衛は、此の一件で彌勒院へ入寺して罪を待った。)

同廿日(ハネ網)

天氣吉 はねあみ、足輕又、歩行之又助など遣候 晝返不出来に候故、歩行佐五右衛門を檢使遣候 晝過より多はね候而、以上六十年取候而暮過ニ歸候

六月十六日(アメ打)

一朝曇、四ツ時分より晴、天氣吉、暑氣也 明々に福松同道候て此方出、西明寺へ行候 正右衛門、典膳へ先へ遣候 供ニハ彌兵衛、數馬、平内、助内、友之助、理兵衛、與五右衛門、理助也

先、鴻野川あめ打候所ニ近年ハ關とめ有之候ゆへか、あゆも不登と見へ一圓無之、夫より大河打せ候 あゆ九十斗、鱒十本取候 上荒井村肝煎徳左衛門出、菓子など指上候 晝休大川邊也 七ツ以前ニ出、暮少前ニ歸候

同廿日(ハネ網)

今日、集人ニ鵜崎より川ゆるしにて、はねあみ出させ

候 百斗取候由也

○廿三日(同上)

天氣上々吉 今日、はね網出候ゆへ、夕食過ニお見物申候 鵜崎にて鐵炮など打、暮合ニ歸候 鮎百斗取候

同廿五日(アメ打)

明日天氣能候へハ鵜崎にて、あめうたせ候筈也 あめは梅澤村へ數馬申付詵候由、此方にてもとらせ候也

同廿六日(同上)

あめ打、朝天氣吉、八ツ時分より雷雨にて夕立候 無間も晴候て天氣能候 鵜崎へあめ打ニ出候筈也 大殿様ニも昨日ハ御出御覽可被成と被仰候が、今朝ハ又御思案替候哉、御出有之間敷由也 あめ之事ニ付少々御腹立も有之候か、後ニハ御聞わけ候 乍去御出有之間敷候 晩程ハ此方へ御出、御膳可被召上候由也 雨はれ候と出候 梅澤へ詵候あめハ二十七丸來候 此方にてとらせ候共ニ、三十九餘也 三尺まわり也 鱒かけ候者、入江村之彌左衛門、赤平之助左衛門と申候 兩人呼候 家中よりも若キ者共ハ不殘出候 金左衛門、縫殿之助も大殿様昨日より仰付出候 八ツ過ニ



出候 孫右衛門も出候

鮎百六七十 鱒四本取候而七ツ時分歸候

お殿様ニハ御膳御開き候ゆへ、御小座にて十兵衛相伴にて被召上候 (鐵城註、大殿様とは、高倉大納言永慶卿の御二男で、北家へ養子となつた義隆侯である。)

同廿九日(ハネ網)

朝少々曇 五ツ前より晴、天氣上々吉 今日、はね網出候 鮎四十五取候

七月二日(鵜)

天氣吉 如昨日風吹候 時々止候 晩方ハ定り候 暮過ニ一通り雨降則止候 八ツ時分我等、福松、栗木瀬より鵜崎迄鵜遣候を見物申、七ツ前ニ歸候

鵜、先、當分四有之候 典膳一、數馬一、三右衛門一 宇門一也 數馬、三右衛門組下之深谷四方之助、宇内鵜遣候 民彌など出候 落合より久左衛門が下迄遣候 鵜初心、又使手も初心ニ候哉 鮎も無之候也 鮎ハ以上十八か取上候

同六日(ハネ網)

朝より薄曇 晝過ニ日見へ候 七ツ前より又薄曇也

はね網出候處に三十餘取候

同八日(鵜)

天氣吉 昨夜中ハ雨一通り降也 鵜、上ミ川え出候處ニ、鮎三十爲食歸候

同十一日(ハネ網)

天氣中、時々雨降、雷も少々鳴候 夜中雨也 一通り宛降 今日、はね網出候 鮎二十一取候

同十二日(鵜)

朝より曇 時々雨降曇涼敷 今日鵜出し鮎二十五取候

同十七日(同上)

天氣上々吉 今日鵜出候 水多候ゆへ漸 鮎十五取候 六之助鷹野ニ遣候處ニ鵜少ク候て、不爲捉歸候 今日大殿様より湯澤へ飛脚被遣候 鮎被遣候 奥よりハ麥粉など遣候也

延寶四年五月廿六日(ハネ網と鵜捕)

天氣吉 今日初而、はねあみニ出候處ニ鮎六十四取候 當年も鮎多候由申候 鵜預り候者聞候ニ有之候故、大殿様へ申上候而預ヶ候筈也 横手なども判紙ハ七太夫より出候様ニ聞候ゆへ、當年ハ判紙なしニ此邊にて爲

取候也 孫右衛門、典膳、平内、主税、常世源兵衛、彌内、權右衛門、黒右衛門八人也

同廿七日(御留川)

孫右衛門ニ申付彌、鶴ノ崎ノ上ノ瀬より下大風呂迄留川ニ致候ニ付、勝樂衆並、所化殿衆與下へも申遣候又町へも十兵衛所へ申遣候 尤例年と去年より申候へ共、少々上下にてへ、あみ等も遣候由聞候故、彌申付候也

同廿八日(ハネ網)

天氣上々吉、暑氣也 今日、はねあみ出候故、九ツ半頃より福松同道候て鶴崎へ行、段々見候て栗木瀬より七ツ前ニ歸候 鮎惣九十二取候

六月十八日(鶴)

天氣上々吉 今日鶴初而出し候 我等も福松同道にて屋敷之遣候を見候 鶴ハ先、五有之候 水多候ゆへ一日遣、漸五十斗爲喰候

同廿日(ハネ網)

朝曇、少々雨、無間晴候 村雲にて晝過に二三度雨、其後晴、天氣吉、暑氣也 我等福松へ、はね網見物ニ

川へ行、八ツ過ニ歸り候 鮎ハ暮迄に九十餘取り、七ツ時分料理出し候 大殿様ニも御出、書院にて召上候 孫右衛門御相伴申候

同廿二日(鶴)

朝少々曇、段々晴、夕部ニ成、上々吉、暑氣甚也 今日鶴出候 水多候ゆへ如存ニ不成、乍去鮎六十餘取候

同廿五日(ハネ網)

朝曇、雨降、四ツ前より晴、夕部天氣吉 今日、はね網出候所ニ鮎八十六取候 水少々多候故、如存不被取候 鮎ハ多候と相見へ候

七月十日(同上)

天氣上々吉 今日は數馬にも留川之内ゆるし、はねあみ爲出候 是ハ親此方ニ湯治歸ニ逗留申候ニ付、臨ニも無構免候

同十一日(同上)

朝より天氣上々 八ツ頃ハ少々曇、少斗雨降晴、夕部天氣上々、月殊之外さへ候 今日ハ孫右衛門ニ川ゆるし、はねあみ爲出候 是ハ昨日あ爲たより望候 正右衛門、十兵衛ニも盆後ニ出し候へと昨日此方より救候

同十二日(同上)

雲かゝり候 我等へ、はね網見物に行候 ふく松ハ其前より行候 今日ハ、はね少々候 七ツ前ニ觸候 今日之はねあみ暮合迄ニ鮎六十取候也

同十六日(同上)

天氣能 今日、はねあみ出候 あゆ八十七取候也

同十七日(同上)

終日曇、雨時々降、夜中つよし 今日ハ留川の内、十兵衛ニ赦、はねあみ爲出候也

同廿八日(同上)

天氣上々吉、此頃無之日也 今日ハ正右衛門、はねあみ出し、漸に十斗取候由

八月二日(同上)

天氣上々吉 八ツ過より薄曇也 今日ハはねあみ出し候水も高く其上、もはや、はねかね候て、漸四十三取候 (織城註、はねかね候とは、子を抱く時分だからである。それ故、その頃から鶴の使用が盛んとなる。)

同七日(鶴)

天氣吉 七ツ過ニ市正より飛脚にて大殿と我等ニも精

濱小鯛十五宛遣被申候 源一郎兩所よりも文來候也

今日鶴出候處ニ、水いまた多候ゆへ、大河ハ如存不成候由也 乍去、鮎百四取上候 鶴七ツにて使候

同八日(同上)

天氣上々吉 此便ニ我等より儀右衛門内へ鮎鮎五十遣候也 今日も鶴出候 鶴不出來にて漸五十六取候也

同十一日(同上)

朝曇、段々晴、天氣吉 今日も鶴出候ニ付、四ツ前より鶴ノ崎へ行見物候而、晝時分歸、無間も御小座へ參、八ツ前ニ歸候 鶴八ツ出、上河へ使候 鮎薄キ故以上六十八取候

同十四日(夜川鶴遣)

天氣上々吉、暖也 夜中月殊之外さへ候 今日常代源兵衛、大内權右衛門、西明寺村へ夜川鶴遣ニ遣候ニ夜居候様ニ申付候 今日此方にて鶴出候處ニ、鮎七十六取候 昨日ハ自分ニ出候ニ能仕合、鮎之多候ニ出合候と見え、鶴五ツにて三百斗取候由申候 昨今共ニ下河へ出候

同十五日(鶴)

朝日見へ段々曇、風吹、夕部月不見、雨少斗降止
今朝湯野村より源兵衛、權右衛門、鮎十五上候、鵜も
不働、其上鮎少ク候故、漸如此之由也 本日も鵜出候
上河へ行候 不出來にて十七取上候

同十七日(同上)

朝曇、段々晴、天氣吉、風少々有之候 夕飯準人など
ハ鮎振廻候 今日鵜出候處に八十二取候也

同廿日(同上)

終日くもる 八ツ半頃より夜ニ入迄雨降 今日鵜出候
處ニ鮎六十七取候 天氣しかと無之、早ク歸候 自分
鵜ニ出候時分ハ百餘昨日も取候 兼而も左様ニ候ゆへ
斷り候

同廿二日(同上)

天氣吉 晩方少々曇、夜中晴ル 今日も鵜出候 鮎百
ニ取候

・鮎大漁記録 所謂御留川の鮎故、豊漁な筈ではあるが
それでも例年に比して多い年は、多い年と云へるわけ
ある。

元祿八年七月十六日 佐竹義明候筆録

一天氣大抵能、夜中月さゆる 今日與下ノ鵜ニ此方家中
能鵜入テ十二出シ候所ニ、鮎千三拾取候也 當年ハ夥
敷鮎有之候也

八月四日

一朝曇、段々天氣能、乍去雲ハ有之候 昨日之雨にて昨
夜中より今未明迄 築え夥敷鮎落入、惣合七千五百程
落候 雜魚も少々有之候由也 屋敷えハ、千取候 殘
分ハ築かけし長屋之者共配分爲取候也
何茂拂候而、入目壹倍取遺由也

上川築えも落候由、數ハ不聞候か此方よりハ少ク可有
之候 四ツ過より我等ハ、お留里兄弟、お高同道也
築え行見候 夜明迄ニハ、水も澄、水不落、我等杯居
候内漸十六七落候 お留里様は八つ前ニ歸候 無間も
我等も歸候也 今年ハ近年無之鮎多候也(鐵城註、翌智
は少々より落ちなかつた。そして六日の晝に六百餘落ちてゐ
る。)

同月十三日(壹萬尾の鮎)

朝より終日村雲、雨も時々少つ、降、晩方ハ天氣能候
夜中餘程降候故、河水も餘程増候 築ニ鮎、夜中より

夥敷落候由聞候故、朝飯前五つ前より我等父子も行見
候 不絶十、二十斗宛落候 晝前ニ歸候 勝樂衆釣四
郎殿役人、尤家中役人共迄不殘鮎遺候 鱒も十二本落
候

鮎ハ惣八千八百餘落候 數も儲と留兼候 大方者壹萬
許も落可爲申と申候也 今迄不聞事也(北家御日記)

元祿九年八月十九日 同上候筆録

一朝曇段々天氣能候 晩方ハ又曇候 昨夜中かけ候築に
鮎惣千三百斗落候由候 屋敷えも三百斗遺候 外ハ先
ニ築拵候者共ニ出候(同上御日記)

正徳二年八月廿一日 佐竹義命候關係記録

一御築へ鮎三千餘落 お前へも六百餘上申候 殘ハ御築
拵候者共ニ被下候 右鮎百五拾、奥様へ被遺候 同五
拾、若殿様え

一右鮎五拾宛、主水、造酒ニ被下候 嘉右衛門代ニ金五
郎ニも被下候(同上御日記)

・献上及び御拜領鮎

(a) 献上鮎 これは義文候父子が久保田の城へ伺候の
節に、藩主義厚公へお約束した鮎であるが、矢張り鮎が

罪を作つた例で、若し萬一それに不始末などあつてはな
らぬと、随分苦勞させられた。法度のナメを上流で打つ
者があつて、その取締に狂奔しなければならなかつたの
である。

文化二年七月十一日 佐竹義文候筆録

則、御意有之候故、父子共拜伏、様々御啗中ニ國鱒、
湯之水、築鮎獻候事ニお約束ク申上候

同十五日

一鮎献上申候事ニ御約束申上候 然者兼而御停止之、な
め上川ニ而打候段相聞得候 尙更なめ増長致候事ニ而
者、献上ニも指支候事故、急度吟味致候様、親江共へ
申付置候様、平二右衛門、九兵衛へ申付候
八月朔日

一賃夫ヲ以、小林惣助より達候用狀左ニ
一先頃御出府之節、其表築鮎御献上被遊候筈ニ御直々御
約束被成置候故、榎木内川通、兼而折節なめ打等有之
ニ付、右體之儀致間敷段御内々親江共へ相觸候様ニ被
仰渡候處、近來川目通なめ打候事ニ相聞得候
親江より定而川目通り村々へ、内々爲相心得候事ニも

可有之候得共、夜中大體之儀致候事ニ有之様相聞得候兼而御停止之儀故、左様之致業ニも可有之候得共、不届之至ニ被思召候 依而者右體之致業に而者、お約束之築鮎もお獻上無覺束被思召候

兼而御停止之なめ打候儀有間敷致方ニ有之候間、此旨郡奉行へお内々お斷被成置候而、私共之内罷越、右なめ打御吟味有之様可相談等之趣被仰遣、輕部剛太え罷越候處、近來不快ニ而指入罷在、對面致兼候ニ付、御用之次第以手紙申遣候様致度由ニ付、私共申合之上右被仰遣候趣、書載を以申遣候處、川前村々へも可申渡、猶又支配之御足輕も相廻候様可申渡候間、御序宜申上吳候、右剛太より申來候

同廿三日

一鷹の巢築より鮎百上納、右之内三十味喰漬一桶、三十糟漬一桶、外ニ國鱒鹽引五尾箱入ニ致、今晝立ニ飛脚相立、屋形様へ兼而御約束申上候 故獻上申候、國鱒へ只御覽一通り之由、屋敷番處へ使者勤申述候様申付候

同廿五日

・食べ方 鮎、殊に鹽振り焼きの鮎を食ふには、先づ頭を噛み食ひ、それから尾の附根の肉を爪で兩側共、僅かむしり起す。其場合、肉が腹の方で附着いてゐるやうにする。次に腹と背を、拇指と人差指の腹で順々に押す。然る後、鱒の場合とは逆に、尾の方から骨を引くと工合よく抜ける。(手賀順造氏)

鮎は、あたられぬ(食痛しない)と云ふも、青酸加里でやつたものは腹綿が溶ける。晝頃それで獲つて來たものは夕になつて食べるには若干躊躇せざるを得ない。(内藤直之助翁)その劇薬の氣は、魚の鱗を魔痺するものであるが、あまり時間の経過せぬうちに、眞水へ入れると蘇生する。(松田直治氏)

又、此魚の腸の鹽辛は、此の附近でもウルガと稱するが、云ふ迄もなく酒の肴に持つて來いのものである。

これは如何なる成分からか、婦人の乳の腫れた時、又はネプト(腫物)に附けると非常によく利く。(三沼巖氏)

○鯉

此の附近では一般に、鯉を鯉鮎と云ふて、二つの別々の魚の名を附着けて呼稱するは面白い。林檎を矢張りこ

一久府より飛脚歸候 屋敷番より膳番方へ用狀を以申來候へ、獻上之鮎、國鱒御膳番當番小助川武膳へ掛合指出候處、お約束之鮎被指上御歡被思召候 且國鱒之儀者、何邊御手入被成置、江戸表へ被指登候趣、右武膳を以御挨拶被仰出候由ニ候(以上、北家御日記)

(b) 御拜領の鮎 角館の殿様は、右の如く獻上鮎に就いて氣苦勞したが、又藩公から頂戴した鮎であれば、假令精進日であつても、精進を下りて、それを食へなければならなかつた。(久保田藩府中のこと。猶ほ「精進下りる」は、生奥物を食ふことである。)

享保二年七月廿六日

佐竹義命侯關係記録

一今晝頃 御城下より御膳番赤津平馬奉御手紙參候

品者、添川御築鮎お拜領ニて右御禮ニ高柿嘉右衛門を御城へ被遣候 右鮎を今晚御夕膳ニお料理ニ被遊候

今日ハ御精進日ニ候得共、右之通故被召上候 井上藤右衛門有合候故御相伴仕候 孫右衛門も被下候(北家御日記)

・産後鮎の名稱 鯖鮎、煤ケ鮎、下り鮎等と云はれる。

のあたりで林檎梨と云つてると好一對である。

鯉の眞中筋の鱗は、大小に關係なく三十六枚あるもんだといふことを、田舎の人は物識りの一つの象徴のやうに語る。

・民信一束 緋鯉と眞鯉の鱗は、よく注意してみると、樹木の年輪に似たやうな、あの線が違ふといふ。(條田清治氏)

(a) 鯉と天門登、或は紫蘇との食ひ合せは悪い。(文政十年「救民妙薬」)

(b) この町では五月の節句の早朝に原で露踏みをし、それから川へ行つて顔を洗ふ行事があるが、洗ひ終つて南の空を拜すると、鯉の御姿が見えるものだといふ。(荒川テツ姐)

(c) 二十三日 この信仰は、昔は相當熾烈なものであつたらしく、彼地此地に、その文字を彫付けた石塔が建つてゐる。講は正月、五月、九月と三回あつて、正月は寶珠形、五月は蠟燭形、九月は御船に乗つた彌陀三尊が拜まるといふ。然し中には九月のものは、金色の鯉のお姿に拜まるといふ善女もある。

全く同夜、山の端から紅焰の光波に揺られて出て来る三日月は、右端が太く見えること故、目柄(目の加減)で聖なる船とも、鯉とも見えることであらう。(旅と傳説十年第六號の拙稿「光と民俗」に詳述)

(d) 山鼻は檜木内川と院内川の合流點で、古來鯉が多く棲息してゐるが、その淵の主である大鯉を見れば命がないと云はれてゐる。(故三木幸君)

・鯉女のムガシコ むがしあつたぞん。或る男、飯食はぬ女房を欲しいと口辯に云つてゐたら、何處からか若い女が来て女房にして呉れといふ。女房にしたところ、飯も食はずによく働く。

然も女の煮るお汁ときたら、旨いの旨くないの話でない。舌も抜けさう。頬ベタも落ちさうであつた。

あんまり旨い。何をダシに入れるだらうと、こつそり節穴から覗いて見たら、その女と思つたのが實は大きな鯉で、自分の軀體を鍋に入れて、ゴス／＼擦すつてゐるではないか。男は動天してしまつた。

やがてその汁をすゝめられたが、氣持が悪く顔をしかめて居ると、女はそれと氣附いたと見え、「貴方は、妾

のダシを入れるところを覗いたでせう。何を隠さう、妾ば鯉です」と云ひさま、ザブーンと庭の泉水へ飛び込んでしまつたど。(内藤直之助翁)

○鮎

鴉の雌雄の判断つかぬやうに、鮎の雌雄の識別は難かしいが、一般に雌は雄よりも軀體が長いと云ふ。もつと委しく觀察すれば、雄は雌よりも脳味噌が重いか。

鮎は子を抱いてゐるものばかり多く、鮎に雄ありやなどいふ話も出るので、この區別を知つて置く必要があるかも知れない。

この魚も鯉と同じく、一回呑んだ餌を、又一寸出すものだといふ。

泥鮎といふは、主として沼に棲息し、身體が平らべつたく、そして鱗に赤味がある。これが泉水(池)へ入ると雑魚が殖えるといふてるが、事實はその入つた鮎だけの數が殖えて見えるものらしい。(太田雄治君)

・鮎料理を含む子守唄

えへ子買ふどて 父親金盗んで
橋の畔で ごと石拾るてなア

砂で磨いて

紙をくるんで

横屋女郎衆は

行けば餅搗で

酒の肴に

鮎の煮こもり

猫コに取られた

「救民妙薬」

○タナゴ

「水落雑魚に、稻タナゴ」といふ言葉があり、タナゴは稻刈時分が一番味がよいと云はれてゐる。(吉成直太郎氏)

町のうちでも細越の人達は、甚之亟堰などへ行くと、釣つていゝ加減になれば、籠に木葉を敷き、腹を絞ぼつて腸を出してその上に置き並らべ、用意の鹽をふりかける。又いゝ加減になるとその上に葉を敷いて、鱗を並らべては鹽をふる。

百二十尾も釣つて、それを繰返して家へ持つて来て、焼いて食べると鹽加減もよく、非常に美味である。(藤澤

清二氏

此邊で、シ・ウブ・タナゴと云ふは、學名サクラタナゴであるそうだが、頭に星があつて、それが發情期になると餘計判然とするといふ者と、それが雄であるといふ者、否そのタナゴに限らず、どのタナゴにも見る現象だとする者等々異論がある。(角館圖書館主催「魚の座談會」この名稱は、菖蒲の咲く頃に獲れる故その名があると云はれるが、一體に大きくて鱗が赤い。(藤澤氏)

タナゴは一般にニガイとされてゐるが、別に、ニガタナゴといふものがあり、それは小柄である。

・記録 タナゴに關しての次の記録などは、この土地のものとして古い方であらう。

寶曆三年七月三日 佐竹義邦侯筆錄

天氣吉 かはることなく、夕方河へ出候 たなこ網かけさせ見物申歸候 (北家御日記)

寛政十一年八月三日 佐竹義文侯筆錄

一今日へ留川鵜爲遣候ニ付、我等と百太郎出候 百太郎

へ我等より先ニ歸候 手から二百五十有之候

右鵜濟候後、佐尾五郎太ニ、たなこ網掛させ候故見物

に八ッ過より新造と百太郎參候 又我等より先に歸候
我等ハ暮少々前に歸候て、たなこ手柄二百餘リニ候

(同上御日記)

殿様が、タナゴ網に行つたら思ひ設けず人間のタナゴ
が網へ入り、商人は算盤を撥いて居ればよいぞと、その
本分を諭した面白い記録がある。

享和二年六月廿七日

同上侯筆録

一我等鷹之巢へ、たなこ網かけニ出候 歸りに留川へ掛
候 手柄五百餘りに候 右留川ニ掛候内、何方より參
候ものニ候哉 同所へ、たなこ網掛候故歩行共へ申付
名前爲承候處、上新町小林治左衛門名子之もの周藏と
申者之由ニ候

右歩行之者、小姓逸平太迄申聞候 右町人留川と申事
甚不案内之由ニ候 仍而歸之上、篠原與左衛門へ申付
是迄町へ者留川之儀不申付置候間、右留川之儀、甚兵
衛手元へ申遣可申付置、且右周藏此度へ表向呵之義ハ
可免候間、商家之もの家業ハ打置殺生等に相泥候儀、
風俗忘候次第不宜、且不心得ニもせよ留川相破候義不
届ニ候間、右之義岡部甚兵衛手元より呵置候様可申付

右與左衛門へ申付候

(同上御日記)

○雑魚

文字通り雑魚である故、一つの魚を指さぬこと宛もウ
クヒに様々のものがあると同様である。それでも大體、
春から川を溯上して來るものを、群來、或は群來雑魚と
稱し、清水川や沼などに年中居るものには、いろ／＼の
名前をつけてゐるやうである。

カネホリは澤目に多く居る雑魚である。あまり食食な
ので、ホイド雑魚(乞食魚)とも云ふ。(蓮沼運助氏)

一方、油ッベと云はれるものもこれと全く同じもので
山形縣でアブラバヤ、福島縣でカネホリ、關東でニガ雜
魚と云ふてゐると。(條川清治氏)

又、ガツギ・ベエヤと云ふものも居るが、名だけ違つ
ても同じものかも知れない。それは釣にかゝると酷く泳
ぎ廻はるので、どんな大モノかと思つて上げて見ると、
それである。だから釣人には嫌はれるのである。(藤澤清
二氏) 古川筋などには多く見る魚で、長さ二三寸、鰻魚
小さいやうなもので、下唇が長い。(松田直治氏)

ガツギは眞菰のことである。ガツギ・ベエヤは、ガツ

ギのハヤの訛つたものかも知れぬ。

この魚は又、平鹿郡では、谷地ミゴと云ふと。(齋藤健
一郎氏) 此の附近で谷地ミゴと云ふは、院内川や古川筋
に多く居るもので、ミゴイの小さいものである。(蓮沼氏)
そのミゴイといふは、雜魚の形をしてゐるが然し、ちや
んと鱗がある。頭は割に平らべつたい。狡るくて、なか
なか釣針にはかからない。食べても旨くない。(藤澤氏)
それから、ホナガといふ雜魚も居る。これは澤目には
あまり居ないで、川に多い。入梅の頃に獲れる。

群來雜魚に似てゐるが、嘴が長い。どこか、カネホリ
に似てゐる。一尺以上のものになると、鯰釣に附着けて
置く餌鮎まで食つてゐるものがある。

どことなく盗人カタギ(風塵)してゐて、晝は殆んど姿
を見せず、主に夜出るものである。(八柳啓治氏)

このホナガは、頬長であらう。若し嘴の長いことを云
ふなら嘴長と云ふ可きである。

魚の場合でも嘴の字は使はれる。例へば雜魚を小さな
容器へ入れると、あつちへ打突かり、こつちへ打突かる
が、それを、ハシツグと云ふからである。

いつか鵜が一尺以上ある、この魚を追つて來て獲へた
ことがあるが、何となくガツギ・ベエヤの大きいもの、
やうに思へる。(渡部小勝君)

漁法 雜魚である故、漁法もさまざまである。
・釣 群來雜魚を釣るには、瓜木蟲が持つて來いであ
る。

又、洪水とか何かで河底に變化のあるやうな時は、蚯
蚓がよいやうに思ふ。風のある時は、軽い蟲の方がよい
やうである。

角館では、どういふわけか、東風は釣れぬといふてゐ
る。(角館町、石川直樹氏)

一體に川の濁つてゐる時は、鬚長、ハタギ(イナゴ)、
或は蚯蚓で流し釣がよい。野面でも洪水で濁水が上がつ
てゐるところでは、その方法で釣れる。(蓮沼氏)

季節に依る雜魚の棲息所をいふならば、春は瀬の下方
夏は瀬釣をやる。但し、秋は水泳が盛んなので、魚が沈
壁の下へ潜ぐつて困まる。秋は瀬でも下でもよい。(月澤
順之助氏)

・追ひ突き 鮎、タナゴの類も、この方法に依る。エブ

リと稱する追棒（五六尺の棒の先へ、別に木片を打付けたもの）で突き出し、別の者の備へてゐる罾網へ追込む。
・持網 別に待網とも稱されるが、四ツ手網のことである。河岸の適當な場所へ高く臺を設備して置く。それは持場である。（刈和野邊では、モツバと詠る。）

出水の時の如き、濁水の場合に獲物が多い。然し濁つてゐて、透しが利かないので、魚が網に突當る感覺で上げる。雑魚ばかりでなく鮎も獲れる。

早いうちがよいので、午前の二時頃未だ四邊の暗いうちから起きて行く。相當辛らいが、又楽しみなものである。（蓮沼氏）

・川干 排水して干潟の魚にしてしまふ方法であるが、士族達がお留川と知つてゐて、それをやり難に制裁されたことがある。

寛保四年四月廿日 佐竹義據候筆録

一昨日吟味申候河干致候者、今日遠慮ニ被仰付候 靱負へ役儀不相應依而役儀召放遠慮被仰付候 尤御條目、外兩人へ口上にて申渡候
（北家御日記）
・石倉 川の中へ玉石を隠くれ場として積み、魚が寄へ

た時分を見て四邊へ網を廻はし、石をほごして獲る。

・附巢 ツグシと稱し、これから獲れる魚をツグシ雑魚といふ。川中に石を積み、産卵に都合よい場所を作り、寄つて来るを上から投網を打つのである。（投網ばかりでなく、一般に網は一ガラ、フタガラと數へる）

「コロドあ附く」といふことがある。春、奥山の雪汁が流れる頃、未だ人々が附巢を設備せぬうち、雑魚が川を溯つて来て、ホリ掘り産卵することである。

それは殆んど大物ばかりで一尺二三寸のものが揃つてゐる。（蓮沼氏）

コロドは古語のコログツから出たもので、自由勝手の意味である。人間が産卵に都合よい場所（但し魚にとつては危険）、即ち附巢を拵らへて呉れぬ前に、手前勝手に場所を捜して産卵するものとの意である。

魚から見れば、人間の方こそ随分コロドな話である。この言葉は、ジゴロ（自分勝手）など、云ふ言葉と親類であるらしい。

ツグシといふ字も、洲を作る意とせば築洲であらうし、營巢の意とすれば附巢でもよい。

次の記録に依ると、ツグシの準備から魚獲までの順序それから季節、その準備に精進日まで關係することを知らる。

寛保三年三月廿七日 同上候筆録

一天氣吉 附巢用兼而申付候故、桂田藤治今日忌免候

四月四日

一植田新左衛門、付巢用事故、今日忌免候

同七日

一今日、附巢初而、具起、四五十手柄、十斗上ケ候

同十七日

一天氣吉 夕飯後より附巢え行き、背黒四ツ、具起四五十、今朝より取合百餘り手柄暮前歸る

同廿日

一天氣中、終日曇 四ツ過より附巢え出ル 河原ニ而晝、雁之料理有り、供、深谷喜内、十治、庄右衛門、勘右衛門、彌税、勘助、魚三十餘手柄、暮時歸る

同廿二日

一天氣吉 夕飯後より形右衛門附巢え行き、具起、百取來候 供廻りにも少々宛吳れ候 夫より山鼻附巢へ行

き具起四十持參、七ツ半時歸候

同廿六日

一快晴（鐵城上略）無間茂、附巢え行候 魚三十程取り候 右内少々持參

同廿七日

一快晴 今晚附巢より具起三十程、七郎兵衛持參 閏四月五日

一天氣中、晚方晴 夕飯後より附巢え奥様、奥なと御同道申出候 具起七八十手柄 強飯被下候 奥より、あんびん持參 暮前我等は御先へ歸ル 無間御歸被成候

同六日

天氣吉 御夕飯濟、御暇ニ而歸り無間も附巢へ行き、具起三四十手柄、暮前歸る（以上、北家御日記）

・ザンガキ 冬季、氷を割つて雪を打込み掻き廻はし、苦しがつて飛び出る魚を獲る法であること、先に述べた通りである。

・雑魚袋 マダ即ちシナの木の纖維を、石疊みに織つた布で作る。大きさは一定してゐないが、普通、高さ四五程、幅三十五程、口の兩側は七程まで裂けてゐる。

その片方に紐が付いてゐて、魚を入れてから口を絡らむやうにしてある。

生き膾 小魚を生きの儘、酢味噌とする料理で、主として冬季のザンガキの時に作る。それにモロミ(酒)など入れると、甚だ美味である。(内藤直之助翁)

習性 「雨降る前に雑魚跳ねる」といふ言葉があるが、これは人間にも適用出来るものか、雨催ひになると子供達が賑やかに騒はぐやうである。

日がパッと水面にさすと、雑魚がよく水面に浮んで口を描へて、バク／＼やるのは、水中に日光が挿し込んで塵がキラ／＼輝いて、目が見えなくなるためだといふ。(太田雄治君)同じやうな現象は、小川の両方を堰止めて

中の水を掻き出して獲る時にも見る。即ち魚は反対の方の水面に浮んで、バク／＼やつてゐる。然しその場合は水が濁つて目が見えなくなるのか、或は水の動揺に酔つてのことか、濁り水で苦しくなるのか判からない。然し水を掻き出す方へ来ることは、危険だといふ意識だけはあつらしく、必ず反対の方に浮ぶ。

格言、譬、其他

どれ位獲れたか聴くのだらうと思つたので、底の抜けた葛籠を振つて「今朝がら風吹いで、こんけやり／＼」と答へた。

馬鹿婿は、なるほどあゝ云ふんだなと合點して、姑の家へ行つてその挨拶をした。その家では呆きれてしまつた。やがて圍爐に鹽鮭を炙ぶるのを見ると、嫁をつゝいて「これや何といふもんだ」と聴く。嫁はカンジ悪りくて(きまり悪く)返辭しない。

此度は餅を焼いたら又聴く。困まつてしまつて「この人、オヘシ人だ(きまり悪い人だ)」と云つたので、餅どてオヘシと稱するものと心得た。そのうち鐵瓶をかけたら又聴く。嫁もあきれて「なんだつて此の人、面目ねや人だ」と云つたので、鐵瓶はメンブグ也と覺えた。

そのうち鐵瓶が沸騰し、溢ふれて灰神樂を演じた。婿は動天して「オヘシあ湯吹で、面ブグあ、灰まぶれだ」と叫んだのであつた。トッピンバラリのブウ(渡部小勝君)

雁の眼さ灰入れ 善い爺さんと悪い爺さんが居てあつた。或晩二人とも川へ築をかけに行つた。

- ・雑魚陸さ上がったやうだ
- ・慧がし雑魚、陸を上る。(知つたか振りの失敗)
- ・さま見れ雑魚、猫嚙ぢた。(嘲笑)
- ・見だ雑魚大き。(逃した雑魚大きいの意)
- ・雑魚捕り嘔吐ぎだ。(同上)
- ・溯れば下だる川雑魚。(當然の事の意)
- ・一尾刺の人間 (一人前の人間の意。大きい雑魚になると一串に一尾より刺れないからである。)
- ・ゴモンズ雑魚(ゴモンズは塵埃の義)、極く小さいザツコの意であるが、人間のガラクタを嘲笑する場合にもかう云ふ。

ムガシコ

馬鹿婿話 むがしあつたぞん。或る所に一人の馬鹿婿が居てあつた。嫁の實家へ正月禮に行くと思つたが、挨拶が判からない。隣の爺へ聴きに行つたら、ザンガキに行つて居ない。捜すに田圃へ行つて見たら、遙か向に爺が居る。そこで遠くから「爺ちや、正月禮に行つて何とお瓜開きすればいゝか」と叫んだ。

生憎風が強くて、爺の耳に意が通じない。爺は多分、

悪い爺は、何でも上の方がよいと思つて、上へかけた。そして翌朝小早く起きて行つて見たら、雑魚は一尾も

ゐないで、白い小犬が一匹引掛つて泣いてゐた。下の築を見ると雑魚が一杯落ちてゐるので、それを皆盗取つて、その代はり犬の子を授り込んで行つた。

後刻、善い爺ちやが行つて見るとその有様なので、可哀想に思つて懐へ入れて來た。そして椀で御飯を食べさせると椀だけ、砂鉢で食べさせると砂鉢だけ育つて、爺の山行きには、道具を背負つて行くのであつた。

或時、その犬は爺ちやへ鹿を捕る方法を教へた。爺さんが大きな聲で

あつちの鹿もこつちや來い
こつちの鹿もこつちや來い
と叫んだら、彼方からも此方からも鹿が澤山に集まつて來たので、犬は片端から噛み殺した。

爺ちや婆ちやが、それで鹿汁を煮て食べてゐるところへ、隣のヒコ／＼婆々が火種コ貰ひに來て、その光景を見て羨やましがり犬を借りて行つた。

翌朝、悪い爺が犬を連れて山へ行つたが、唱言を間違つて

あつちの蜂もこつちや来い
こつちの蜂もこつちや来い

と叫んでしまつたものだから、山中の蜂がブンブン飛んで来て、爺を刺しに刺したので大に怒り、犬を叩き殺し、コメ木の下へ埋めて来た。よい爺さんが犬を催促に行つたらその話。泣く泣くそのコメ木を伐つて来て臼を掘つた。そし婆さんと二人で

爺ちや前さば 金下りろ
婆ちや前さば 米下りろ

と唱へ乍ら挽いたら、其通り錢と米が、ツロツロザクザクと落ちるのであつた。

隣のヒコヒコ婆々、その有様を見て驚嘆し「オヤオヤ此家、昨日まで貧乏だと思つたに、何んとして金持になつたでや」と語るので、正直に語るとその摺白を借りて行つた。然し、いざ挽く段に文句を忘れて

爺コ前さ 糞下りろ
婆々前さ 小便下りろ

と唱へたもんだから、其通りのモノが下りて臭いこと。悪い爺が怒つて叩き割り、窯へ燻べてしまつた。善い爺様、臼を催促に行くとその仕末。せめて灰コでも持つて来て、數行の過雁目懸け

雁の眼さ灰入れ
雁の眼さ灰入れ

と叫び乍ら撒いたら、雁が皆盲目になつて落ちて来たので、それで雁汁を煮、舌鼓を打つてゐた。そこへ又隣のヒコヒコ婆々、話を聞いて「俺家の爺コさも」灰を貰つて行つて、屋根に上げ撒かせたところ、何を狼狽へてか

爺コ眼さ灰入れ
爺コ眼さ灰入れ

と唱えてしまつたもんだから、灰が皆目に入り大騒ぎしてゐるうち、屋根からゴロン／＼と轉り落ちて来た。

軒の下で親押しを振り上げて、今雁が落ちて来るか今来るかと待機してゐた婆々は、いきなり爺を雁と間違へて、叩きのめしてしまつた。なあ、綾重々錦更々御葉之松原トツピンバラリのブウ(渡部小勝君)

右の親押しは代はりに、小長柄として語る娘もある。

同型の民譚は南部地方にもあり、故佐々木喜善氏著の「聴耳草紙」には、この後日物語も紹介されてある。

勿論これは花咲爺の祖型であるが、前提の築の部分は何時の頃か取去られ、殿様の行列が過雁に入換へられたものであらう。

○ヒヤリ

冬になると八郎湖から獲つて賣りに来た。鴻雜魚は一般に小さいが、これは又特別大きく、一尺二三寸あり、全く川雜魚に似てゐて、赤い筋もあつた。

國鱒同様、味に癖がないので産婦魚とされたものである。あまり旨いものでもなかつたが、焼いたり味噌煮でもすれば、まづ食へた。(蓮沼氏)

○鱈

川で此の魚を釣ると、あまり大きいので人間の方が逆に引張られて、溺死することがあるといふことを、子供の時分聞かされたものであつた。

「スズギのハマ焼、大失敗」といふ言葉がある。ハマ焼は丸焼のことで、御祝儀の時その雌雄へ、數の子など附

け、大根枕に交互にして置く。嫁に早く逃げられた時などうかう云ふのである。(太田雄治君)

○チカ

ワカサギのこと。八郎湖産であるが、昔からチカ、焼チカなどとして賣りに来た。現在は生チカも来る。

天扶羅もよし、味噌煮も旨い。

○ウルミゴ

メダカの方は全国的に多いらしく、秋田縣だけとしても相當多い。川一本隔つた土地で、別々に呼稱することも稀らしくない。此の町だけでも、ウルミゴ、ウルゴメ、ウルゴミ、ケヤナギなどの別名がある。

又或人は、ウルミゴはメダカばかりでなく、一般に雜魚の幼魚を云ふとしてゐる。これが檜木内川一本越して、雲然部落へ行けば、ウルメと云つてゐる。

町でウルミゴと云ふは、ミゴヒに似てゐるからではないかと、考證する人もある。(齋藤賢一郎氏) 然し又メダカは産卵期になれば、ブリコ(卵塊)を下げて泳いでゐるもの故、その點他の雜魚の稚魚とは區別出来るとも云ふ。(戸澤貞一氏)

享保頃出来た「和漢音釋書字考節用集」といふ、長い
題目の書を見ると

浮、鱈、細魚、鮓

と振假名された文字がある。共に稚魚のことを言つて
ゐるらしい。

子供達は川へ行くと、手拭の端を二人で持つて、曳網
のやうにして陸へ次第に寄せて、此の魚を掬ふ。それを
河原石の上に並らべて乾かし、焼干（鱈を焼いて干したも
の）が出来たなど云ふて遊ぶ。（故三木幸君）

○鰈

此の魚は稀代に石の裏側へ産卵して置く。それは丁度
山の黄イチゴのやうな色ヅバサをし、又それ位の大きさ
の塊となつて附着してゐる。（蓮沼氏）この卵は釣餌とも
なるが、採取した時直ぐ掌に入れて口で水氣を吸ひ取ら
ぬと、葛籠などへ入れても直ぐ崩れてしまふ。（荒川正氏）
鰈は往々自分の子を食べが、それを又鰈が食ふ。その
やうに鰈に喰はれる程度のもは、一寸程の長さで、動
作が非常に敏捷である。それを當才鰈といふ。（故三木幸
君）

ある。色は黒味の紫色である。

なるほど腹部に吸盤形ものが附着してゐる。然しそ
れは腹鰭が二つ合つて、その形になつてゐるのであつ
た。

試みにガラス壺へ入れて水を揺り、底から覗くにあま
り平滑な故か、それ程の吸着も見せないが、とにかくそ
れを盃を伏せたやうにして、若干動くまいとする氣配は
見えた。

同君が不審を立てたのは、その魚が水に流れまいと、
石に吸ひ着いて、體が曲つても附着してゐた爲めであつ
た。私の見方がルーズでもないのに、動物圖鑑にもそれ
とそっくり同じ魚は見出し得ない。

私はその魚を彼地此地持歩いて、町の人々へ尋ねたら
鍋カジカだと云ふ者、鍋カジカを心得て居てもその魚は
見たことがないと云ふ人等、様々であつた。人々の魚名
の觀念の判然せぬに驚いたことであつた。（これは後々こ
とを思ひ、フォルマリン漬として、角館高等女学校の標本室へ
寄贈してある。）

カジカは洪水を豫明し、又は瀬にしがみ付くため小石

又鰈は大體、ゴリ鰈と稱する小型と、鍋鰈と稱する大
型ものと區別する人もある。それから又、楢ノ木鰈とい
ふは、一番普通に居るもので、その色彩が直接楢木の樹
膚に似てゐるといふではなくて、楢ノ木石と稱する西明
寺村大石獄の澤奥から轉がり流れて來る花崗岩（石英、長
石に鮮明な黒雲母を混ず）の色に似てゐるからである。

そしてその種のもは、當然河底のその石に附着して
自分を保護してゐる。

鍋カジカの名稱に就いて人々は平常何氣なく云つてゐ
るやうであるが、「どう云ふ理由で」と尋ねると、異論
紛々だから驚く。私自身は、宛も鍋コダンブリが黒蜻蛉
のことであるやうに、色が黒いからだらうと思つたが、
鍋の蓋のやうに全體がベッタ廣いからだといふ人、腹鰭
が鍋を伏せたやうだとする人、咽頭に鍋の如き黒輪があ
るといふ人等々様々である。

昭和十一年の夏、武藤末治君が吸盤を持つてゐる不思
議な魚だと云つて、楡木内川から獲つた魚を私のところ
へ持つて來て呉れた。私の素人觀察では、鰈ではなくハ
ゼ科のものであらうと思つた。理由は口が小さいからで

を故意に呑むとは、この土地でも昔から云はれたこと
である。この現象は北海道利別川監視人の新発見のやうに
東京朝日（昭和一一、三、一九）、並びに讀賣新聞（同一〇、
八、一七）の兩紙へ紹介され、又岩魚にもその事あると
は、東京朝日（同年同月十五日）にも發表されたことであ
つた。

私は岩魚や鰈のあの大口を以てしては、上流に向つて
ゐる時、必ずや小石の二つ三つ位は入り込む可能性があ
ると思ふ。それが天候豫知と關係あること、科學的に證
明することは困難であらうと思ふ。

然るに此の武藤末治君の採集して呉れた魚は、生憎口
元が小さく、小石など呑み込めさうもない。果して腹鰭
に吸着力があるなら、神様が大口を開けて石を呑込む代
はりに與へ給ふた特別の仕掛けであるかも知れない。

・漁法

(a) 鰈釣り 餌はガムシである。これは川中の古い石
など起すと網を張つてゐるもので、綠色に光り嘴が二つ
に割れてゐる。二尺程の棒先に、この蟲をつけた釣針を
紡績で結びつける。そして鰈の居る岩間へ下げてやる

と、必ずそれをデグッと一回ひく。上げるか早いか、グル〜と棒を振廻はすと、落ちないで却つてよく引つかかる。

これは多く川中でやる釣方で、岸で釣る時はその必要なく、陸へ上げるやうにすればよい。この簡単な方法では、魚扱で突くよりも餘針獲ることがあるから面白い。

ガメロ、ギギタなども此の方法で獲る。(故三木幸君)

(b) 鰍突き 鐵の薄板で拵らへた籠へ、松コッパを入れて燃やし、その明かりで静止してゐる鰍を突くは、夜カジカ突きで、他は日中に突くものである。

その魚扱は二尺程の柄のついたもので、四本穂が多い。

昔、武士の下人が、鰍突きの歸り無提燈で来て問題になつた事は先に述べた通りである。

(c) 手掴かみ 頻る原始的な方法である。上手な人は突くことをせず、水中の石を両手で抱いて、その下側に居るものを捕へる。これはよほど馴れた人のやることである。(故、三木君)

(d) 石ハッパ ハッパはダイナマイトのことであるが

これ亦、南洋土人の漁撈を想はしめるやうな原始的なものである。即ち、よくよく瀬の所で大きな石を叩き落して石打をかける方法である。骨の折れる仕事である。

町の京極某氏は、その名人と稱さる。(蓮沼氏)

・石焼 青天井の下、即席料理法である。ワッパ(曲げ物)の中に味噌を溶いて鰍を入れ、焼石を投じて煮る方法と、川原にある平滑な石の面に味噌の土手を作り、中に魚を入れ、その石を焼いて食べるのである。(蓮沼氏)

・文獻

(a) 焼鰍 藩公の江戸より歸藩するを、大曲までお機嫌伺に出た時のこと

正徳五年六月十二日

佐竹義命侯關係記録

一 お獻上物 蕎麥粉一斗三升入

一箱 殿様

焼鰍 二百串入

一箱 若殿様

(b) 鮓鰍 若殿様元服のため久保田へ行つた際、用頼役並に出入の面々へ遣したお土産中に、鮓鰍を壹桶宛三十六人へ贈つたことが、天保二年の義術侯の筆録に見えてゐる。

(c) 杜父魚は鰍 安永頃角館の士、須藤半五郎著「烏帽子於也」に次の事がある。

杜父魚は霞の降る時に のつけに反り腹うたせ

かくふつと云ふ魚なり

かくふつの浮く湯豆麩の食かけん

古き發句なりと聞く

本草吟味致さるべし

・謎 河の中のカッカカ 答 鰍

・越場の鰍 越場は草刈、魚釣人などが近路としてこいで渡る瀬である。常に人影を見てゐるので、人馴れしてゐて、獲れそうに獲れない。狡るくなつてゐる。

人にも適用する。(蓮沼氏)

・鰍突き 嬰兒歴殺である。明治中期頃まで、一家に子供は二人位に制限してゐた村が町の近くにある。さうした家に何か凶事があると、「あまり鰍突いた罰だ」などと云はれた。又「生れた筈なのに、見えないではないか」などと聞かれると、「あゝ鰍突きにやつた」とか、「筈探りにやつた」とか答へたものである。前者は歴殺、後者は山へ棄てた意である。

・ムガシコ 或時、山の木と、里の木と、それから海魚

とが會つた。そしてお互に自慢話を始めた。

海の魚は「お前達、山に木あり、里に木ありであらうが、海にはたつた一尾で、五里鰍といふものが居りますぞ」と云ふた。すると山の木は長さは、「負けるかも知れないが、俺の方の山には一本で萬呎と云ふ木がある」と自慢した。

ところが最後に控へた、里の木が「お前達の話も大したものだが、里の方には一本の直径の一町(銀杏)もあものがありませんからね」と云つたので、海の魚も山の木も負けてしまつた。(渡部小勝君)

○グンズ

鰍は居るが、グンズ即ちハゼは此の邊には殆んど居ない。肴屋の店に陳らべられるものは、皆、八郎湖産である。十二三尾を藁に刺したものを、宛も椎茸などのやうに一連といふ。

昔は尾花の咲く頃、大きなグンズが秋田の方から来たもので、それを人々は、尾花グンズと稱したものである。(蓮沼氏)

○ガメロ

ガメロは不恰好な鯰のやうな形をして、赤い色してゐる。ギギタは姿は大體同じで色が黒い。兩方共、發聲魚であつて、それを魚叔で突いたり押えたりすると、ギギギギと、丁度土龍を押えた時のやうな音を出す。それを「ガメロが泣いた」とか「ギギタが泣いた」とか云つて騒はぐ。

又子供達は前者を獲れば「赤鯉コ捕つた」、後者を獲れば「黒鯉コ捕つた」と騒はぐ。(故三木君) 或る人は、ガメロの鬚は白いと云ふがよく判からぬ。

○ギギタ

色こそ相違するが、共にギギでありガメロと兄弟分である。

七月頃、子を置くもので、鯿より旨いと云はれてゐる。

先に鯿の條で引用した「烏帽子子也」といふ書には、「ギギもガメロも河蚌也」と書いてある。

○鯿

・奥羽線の通ずる頃まで、仙北地方へ仙岩峠を越して鯿

砂メグリが八ツ目の子か否かといふことは、丁度、ヤマベは鯿の子か否かの問題のやうに、魚捕仲間の話題にのぼる。

これは河の幼年期の部分や、小川の砂地に棲息する、體長最大十種位のものであるが、砂に頭を突込んで直ぐ別の所から顔を出したり、五月蠅く動くものである。(故三木幸君)

所によつて、これを七日八ツ目と云ふは、七日にして生れるからだと云ふ。(太田雄治君) そして、八ツ目でない證據に俗に目と云ふ孔がないといふ。

又、釣八ツ目と云ふあの八ツ目型の小さいものを、八ツ目の子といふ人もあるが、あれはあれ以上は育たないものである。(八柳啓治氏)

この砂メグリは、ウメの女郎と等しく、鯿釣りの餌として最上のものである。

○八ツ目

此の魚の豐漁の年は、世中がよいと云はれてゐる。つまり豐年萬作だと云ふのである。又、八ツ目の多い年は鮎も多いものだといふ。(荒川正氏) 氣象的關係に基くも

雲丹、其他種々の物資が輸入されたことは既述の通りであるが、逆に此地が輸出したものに鯿がある。

それは明治十年頃、旅籠賃の二十錢臺の時分であつたが、此地で一升二錢五厘で買ひ集めたものを、農開期を利用して、峠を越して向まで運べば、樂に四十錢で賣ることが出来てあつた。(角館町、古村有屋主人)

賣先は多く旅館や料理屋で、それに卵を按配したものは上等料理の部に屬したものであつた。運搬量は一斗四升位のもので、それを二つの桶に分けて入れ背負つて行つたものであつた。(角館町、古村有屋主人)

大正天皇陛下の未だ皇太子様であらせられた時分、秋田へお成りになられてあつた。其の時、お慰みにと御覽に入れた赤鯿がお氣に召して献上となり、それに數が不足といふので、全縣下を捜させたことがある。

そのやうに稀有に思はれてゐた赤鯿も、この町の田町邊の赤土の苗代などには時々見受けたものだといふ。(蓮沼氏)

○鯿

南瓜と鯿は食ひ合せが悪い。

○砂メグリ

のか、それと亦他に何か因果關係のあるものか、とにかくさう云はれてゐる。

八ツ目は檜木内川を溯つて、来て或るものは院内川の如き支流へも入つて行く。そしてホリを掘り産卵する。

其處へ行つて見ると、澤山の八ツ目が、うじよ／＼してゐるが、それを計畫なしに捕まへようとすれば皆逃してしまふ。そんな時は下流で待つてゐて、ホリを掘らうとして石を口に吸着けては運んで來るのを、一尾二尾と片端から捕ると全部掴まへることが出来る。

手掴みには、西洋手拭を掌に捲いて行くが一番よろしい。でないと滑べり逃して仕舞ふばかりでなく、手に吸着いて氣持悪いものである。

魚叔など持つて行つた時、若し突き外づすと、あんなナヨナヨしたものであるが、凄いスピードで逃げるものである。(角館町下川原部落、佐藤多一郎氏)

八ツ目が鯿と同じやうに、目の薬と云はれるのは何處も同じであらう。かうした長い魚、或は蛇の如き長虫を切殺す時、五ツ切にしないと死な／＼いものだといふ。

○鯿

「鰻の片のぼり」といふ言葉がある。下るを知らず、唯ひた瀕りに瀕ることである。(蓮沼氏) 學界では海のシラスが鰻の子であるといふことだけが判かつてゐるが、産卵場所が海洋の奈邊かは、全然判からないといふ。

此の地方では、曾て檜木内川へ放流した當時は若干居たが、現在は田澤湖に僅か棲息する外、他には殆んど居ない。

前述のやうに鮎は岩手縣方面へ盛んに輸出したに拘はらず、この鰻は奥羽山脈を越して運んで來なければならなかつたのである。明治時代まで、箱へ入れてそれを運んで來たものであつた。(蓮沼氏)

その運搬記録の一二を擧げて見んに

- ・寶曆五年七月七日 佐竹義邦侯筆錄
- 一南部より昨晚、鰻取よせ候 鹽にて參候 仍而味噌漬
- ニ致候 屋形様へ献上申候 御桶へ入候
- ・享和元年八月七日 佐竹義文侯筆錄
- 一先頃家督御禮相濟候ニ付、御夜食代り之内慮にて屋形様へ差上候活らなご、高橋囚獄より相達候
- 夜通飛脚ヲ以屋敷番へ膳番より爲遣、右取扱いたし候

候(北家御日記)

右のうち屋形様とあるは義和公のことであり、高橋囚獄とあるは、生保内口の關所守である。遙々奥羽山脈を越して角館まで無事に來た鰻が、久保田(今の秋田市のこ)と)まで行く途中廿五本まで落ちた(死んだ)とは距離が長過ぎたか、水が悪かつたか、運搬が悪かつたか、或は又その全部の影響かと考へさせられることである。

- ・文化二年四月廿七日 同上侯筆錄
- 一千三郎=食養のため、鰻爲給可然、三益申聞候故、高階囚獄へ申付、南部之取ニ遣候

五月三日

一千三郎食養之活鰻十五本、高階囚獄より相達候 (同上御日記)

殿様階級、殊に子煩悩の義文侯であつたればこそ、醫師の勸告に依り生き鰻を取寄せたのであつて、常民では今死ぬといふ病人を前にしても、出來ない相談であつたのである。猶ほ「爲給」は、「食うべさせ」である。

- ・鰻と酢の物、或は銀杏との食ひ合せは悪い。(救民妙藥)
- 鯨

様に可申遣申付候 屋形様へハ、廿一本可差上、但馬、小膳、齊へ右うなき三本宛可遣、赤次平馬町田代之進右兩人へハ、彼是之禮に二本つゝ遣候様可取扱爲申遣候 同十一日

一先日久保田へ遣候飛脚歸候 屋敷番より膳番共へ達候用狀左ニ

一此度被獻南部活鰻三十五本之内、廿五本途中ニ而落候而、漸々拾本活候而相達候由、仍而餘り數不足ニも有之候間、落候分相交都合廿壹本之献上に仕、如何可在之哉之旨、御膳番方へ内々取合指圖に向可然之義、八郎様へ御親申上候處、其通取扱可然由故御膳番當番小野崎七太夫へ、前條之旨取合候處、落候分も交候而被指上可然申聞ニ付、活鰻拾本落候分拾壹本、都合貳十壹本に致一箱差出被獻之儀取扱、猶御至來之鰻被獻候次第並今度御家督御禮被爲濟候ニ付、御夜食替り之被獻御内慮之趣、菅谷小隼人差圖形向イ、此度被仰上候御趣意、七太夫ニ申演候處、小隼人申傳之儀兼而承知罷在候故、其旨申上可指上由ニ而鰻御前へ差上候處、珍敷御看ニ而、殊之外御滿悅ニ被思召、宜申遣被仰出

鮎類といふ言葉はポビラーであるが、此の地方ではそれは言はず鯨類と云ふは面白い。(故三木君) 尤も鯨のヒゲは、鮎のものより細長く顯著ではあるが。

昔は鯨は殆んど居なかつたが、大水が出る度に雄物川から檜木内川、更に小川の細流まで溯つて來て、他の魚をどん／＼喰ふギヤング振りを發揮するので、魚捕運は非常にこぼしたものである。

卵は餌をつけない粟餅のやうな粒であるが、あたると云ふて一般に食へない。殊に産婦には悪いと云はれる。

○蝦 (蓮沼氏)

沼などに小蝦は居るが、スガ蝦など云はれる大型の蝦はあまり棲息しないやうである。網を持つて雑魚や鰯などを取りに行くことを、「雑魚スギに行く」「鰯スギに行く」と云ふが、蝦の場合もそう云ふ。スギは掬ふの訛であらう。(故三木君)

・横蝦 旋毛曲りの者をかう云ふ。

・ムガシコ むがしあつたぞん。鷹と蝦が大變仲がよかつた。或日のこと、鷹は蝦に向つて、俺は明日から三十

日かかつて世界を一廻りして来るからと云ふた。
そして翌朝、大空へ舞ひ上つて矢のやうに速く飛んで
行つたが、眞實に三十日目に反対の方から飛んで無事に
歸つて来た。

いろ／＼と鷹から珍らしい話を聽かされたので、蝦も
廻つて見たくなつた。そこで鷹のところへ相談に行つた
ら、お前のやうな脚の弱い者では容易でないから止めろ
と、しきりに諭したが、どこまでも行くとハム（言争へ
る）ので、それなら行つてもよいが、なるべく山を通ら
ないで、海や河岸を通つて行け。山には處々火を噴いて
ゐるところがあるから、焦げて死んでしまふぞと呉々も
注意した。

折角親切に教へて呉れたのであつたが、蝦は根性を曲
げて、山の方、山の方とばかり歩いて世界の半分も廻つ
たが何事もなかつた。そこで愈々鷹の話は嘘にきまつた
と思ひ乍ら、山ばかり歩いたところ途を迷つて、或る高
い山をうろ／＼廻つてゐた。

ところがそのうちに怖ろしい音がして、その山が破裂
したと思つたら、大きな岩塊が飛んで来て蝦の腰へ酷く

當つたので、蝦は其處へ倒れてしまつた。

一方鷹だ。蝦の歸りがあまり遅いので、心配になつて
飛んで行つて見たらその有様。然し親蝦は死んでしまつ
たが、その死ぬ時子蝦をウヨ／＼産つたので、鷹はムド
ツラ（可哀想）に思つて、子蝦を皆自分の翼の上に載せ
て連れて来た。

ところが子蝦は親蝦が腰を打つて死んだので、どれも
これも皆腰曲がりばかりであつた。それだから今でも蝦
の腰が曲つてゐるのだと。又蝦が海や川にばかり住ひた
がるのは、その鷹がよく／＼親の死さまを子蝦達へ語つ
て聞かせたからだといふ話だ。トッピンバラリのブウ。
（角館町、吉田誠一君）

○蟹

蟹と云へば川蟹もあるが、多くの場合澤蟹を語つてゐ
る。その股間を越中禪式に蔽ふてる物を、禪といふ。

然し雌はその中に卵を包むでゐる故、あの場合は腰巻
かも知れない。

嬰兒のひる最初の糞を、蟹棒と云ふことは神代村の條
で述べたが、隣接してゐるこの町では、それを蟹糞、或

は金滓カネヅなど云ふてゐる。又、その口から微かに出す泡
ぶくを、蟹泡といふ。それから又、蟹眼、蟹足などの語
があり、共に異常な目付や足の運びである。

薬屋へ行くと、澤蟹の申刺を辨慶に刺して置く。黄疽
の薬だといふ。

漆とこの蟹との關係は妙である。漆にかぶれた者がこ
れを潰ぶした汁をつけると癒ほるといふことは、さまざま
不思議でもないが、漆と祝言するとは稀代なことであ
る。

即ち漆にかぶれると、漆の木と祝言すると稱して、幹
に蟹の爪を立て、それへ酒を一杯かけ、自分もまたその
盃で飲むのである。

そのやうに蟹は漆を解消させる力を持つてゐる故か、
塗師は蟹を非常に嫌ふものである。（角館町、故平瀨貞吉氏）

反對に、蟹を食べて悪い者に葺手（屋根屋業）がある。
若しそれを食べると屋根から墜落するといふ。その仕
事が横に進む性質から忌むものかも知れない。

蟹を禁食してゐる人は、難船しないと云ふのは勿論そ
れが金比羅様のお使だとされてゐることから生じた話で

あらう。

「蟹甲良だけ」或は「蟹甲良だけ穴掘る」と云ふは、身
分相應の事をして居ればよいといふ義である。

これの鎌詰はよく中毒を起すが、氷と食べても亦、棗
との食ひ合せも悪く、殊に鉄の毛を食べると極く悪いさ
うである。

三月の節句には、魚を水盤などに泳がして供へ、又料
理で岩や山の形を作つたものへ、澤蟹を焼いて赤くした
ものを配して飾つたりした。（蓮沼運助氏）家に依つては
申の儘供へ、後に子供達へ食べさせたりした。（三木幸君）
澤蟹に鹽氣ありとは、何處でも云ふことである。
ムガシコ

蟹の恩返し 或る村の長者殿に一人の娘が居てあつた
ぞん。その娘が毎日毎自家の前の小川で椀を洗つた。

ところが其處に一匹の蟹が棲んでゐて、お飯のコボレ
など食べては大きくなつてゐた。

その村の近くに大きな古沼があつて、其處へ毎年一人
宛若い娘を人身御供に上げないと、田畑が皆荒されてし
まふ。或年その長者殿の家に、白羽の矢が立つた。

皆の悲歎のうち、娘は白装束をし、白木の棺に入れられて古沼の畔まで擔がれて行つた。村人はそれを古い御堂の中へ置いて、後をも見ずに逃げ歸つた。

その夜丑滿頃になると、生臭い一陣の風、娘は生きた心地もしない。何か大きなものゝ、スツて来る(滑つて来る)音がして、その棺をぐる／＼巻きにし、めり／＼毀はして中の娘を食ひにかゝつた。それは目玉の爛々と輝き、焔の舌を吐く大蛇であつた。

丁度その時である。何處から來たものか、澤蟹がワサワサと眞黒になつて寄せて來た。そして皆が、その大蛇の鱗の隙間隙間へ入つて、鉄で肉を挟さみ切る。

蛇は苦しみのあまり、どだんばつたんと、のたくり廻はつた揚句其場に斃はれてしまつた。さうして娘は無事に救はつた。

それ等の無数の澤蟹は、毎日娘の滴ぼす残飯を御馳走になつてゐる蟹に頼まれて集まつて來たものであつた。

(太田雄治君)

この蟹の報恩譚は、京都市外普門山蟹満寺の縁起にもなつてゐるが、東北地方の彼地此地に分布してゐる。

ガシユがその縁起から出たか、縁起がムガシユの潤色かよく判からない。大方は後者と思ふ。

○佐藤多一郎氏の御話

下川原部落は角館町に屬してゐるが、町から望むと大威徳山續きの山々に遮られ、あの陰に聚落があるとは考へられないやうな所にある。

それは昭和十一年舊正月廿日であつた。私は大威徳スキー場ヒュッテの爐端で、スキーに疲れた脚を延し、一盃交はし乍ら同村の佐藤多一郎氏から次のやうな話の數々を聞くことが出来てあつた。

・鱒 この魚が、玉川の毒を犯してまでも産卵に溯上するは、生れ在所へ歸り度いが爲めである。人間だつて生れ在所へ歸りたがるではないかと、或る潜り(鱒突く人のこと)が私へ語つたことがある。

鱒を獲るに、瀬待チと云ふ方法がある。それは川へ波除ケと稱する石積をし、瀬の下に瀬を作り、溯上する鱒を突く設備である。朝と夕に多く溯るものである。

晝は勿論、水底が明かるくてよく判かるが、夜は暗いので所謂夜待チをやる。それは特に鱒の坐はる場所へ、

白い石を敷き並らべて明るくして置く。すると別段燈火などなくても、その上に鱒が坐はると黒白が判然するので、上から容易に突くことが出来るのである。

・雑魚 村の葭谷地は今でこそ浅くなつたが、昔は赤淵など、云ふ途方もなく深い淵があつた。(鐵城曰、此の淵には、彼の米良の上漆の昔話と、全くテーマの同じムガシユが傳へられてゐる。唯、兄弟の探りに行つたのは漆でなく朱となつてゐるだけで、日本的に稀らしい類似譚である。)

現在でも冬になると、その廣い谷地のうちの清水川へ大きな筏を漬ける。材料は竹を使用することもあるが、多く柳で、口徑一尺五寸、長さ四尺五寸位、中にアギのあるものである。

冬の魚は多く静まり返つてゐるものであるが、清水が湧いて温くんでゐる故か魚が動く。ある冬に、一尺以上の雑魚の二十幾尾か鮎詰めに入つてゐるのを上げたことがある。

一般に春雑魚は、川の上層、秋には底を溯ぼるとされてゐる。水温關係であらうか。

・鯉 春の彼岸になると出ると云はれてゐる。

・類ヅレ 他の村で類ナガと云ふ魚で、これは群魚雑魚より後に溯つて來るものといふ。

・鮎 あの菅澤の赤川には鮎が多いので、或日の夕方草刈に行つた時、置き針をして來た。翌朝、朝草刈りに行つて上げて見たら、約三十本近くの釣に全部大鮎が附いて、がわ／＼やつてゐる。それを用意の雑魚袋へ入れて秣と共に背負つて來る途中、村の有力家の某老人と遭つた。老人は素速く背中の囊に目を付けた。

そして「莫大に何だか背負つて來たではないか」と云ふ。「いや一寸鮎コ獲つて來たばかりダス」と謙遜したが、是非見せろと云ふので口を開けたらその鮎。

何處から獲つたとあまり聞くので、嘘も言はれず赤川からと教へた。ところでその老人、夕方こつそりとその川へ行つて置針したが、翌朝行つて見ると唯の一尾も附いてゐない。そこで當然、私が嘘の場所を教へたと文句を言つて來た。

どんな工合に置針したかと聞くに、底に針の届くやうにしたといふ。ところがどうして／＼、鮎は誰の針にも附着くものではなく秘傳がある。即ち水面から五寸程下

げて置くと、必ず喰ひ付くものであると私に傳授されてその老人は頭を掻いて行つたことであつた。(この實話など聴くと、先の花咲翁の祖型、好い爺と悪い爺と築かけたムガシヨの卵のやうに思へてならない。)

・鮭女の話　むかし一人の獨身者が女房を欲しいと云ふて、大威徳神社へ祈願した。三七日目、即ち二十一日の満願の日、眞白な鬚の白衣の爺さんが現はれて、汝の願を叶へてやる故、石段の三段目で待つて居れといふ。

行つて見ると、若い綺麗な女が嬰兒を抱いて来て、その男に一寸抱いてゐて下さいと云ふ。ところがその嬰兒が、だん／＼重くなつて、とても我慢も何も出来ない位危く下の淵へ落さんばかりを、ガリコ囓んで(堪へ忍び)ゐたら女が来てお禮を云つて受取つた。

すると不思議、何だか自分の軀體に力が出て来たやうに思へた。女の云ふには、貴方はそれで丈夫な身體になつたから、妾は嫁入りしてもよい。明日妾の方から行くから仕末して待つて居て下さいといふ。

男は大いに喜んで、歸つて待つてゐると翌日やつて来た。そして夫婦となつた。

の、稱であり、鹽を振つたものは鹽カド、振らぬものは生カドである。

ニシ又はニシンと云ふは、カドを裂いて干したものであるが、それは二身であると云ふ者と、二親であると主張する者がある。いづれが眞なりや、いづれも當つてゐないかも知れない。

鯉の字は、昔の本を見ると鮎とも書いてある。非と否とは相通するからであらう。車前草の莖をもんで強靱にしたものをニシと稱するは、何處かこのカドのニシと氣分の似たところもある。

數ノ子の事を秋田縣一般に、ニシノゴと稱するは、カドをニシと稱することから出た名でなければならぬ。何故なれば、裂いて干されたニシの子であるとするれば、それは理窟に合はないからである。然し最近は、よほど山奥まで數ノ子と稱するやうになつた。

ミカキ鯉なども、ミガキ鯉と云ふので、身欠き(盤きにも通ず)よりも寧ろ磨いた鯉でもあるかの感を強く持たれる。

大きいカドは、大イタバ・カドである。それも板羽で

扱、その女の料理のうち、吸ひ物が何とも舌の根も抜ける程おいしい。あまり旨いので、何ダシを使ふのだからと、こつそり節孔から覗いて動天した。女が裾を捲くり鍋を跨いでチヤア／＼小便してゐるではないか。

男、千年の戀も一時に醒めた心地して、女を詰つたところ、女「正體を見られた上はこれまで」と、水屋へダボーンと飛び込んだと思つたら大きな鮭の魚となつて、大威徳の淵の方へ泳いで行つてしまつたといふことである。(鐵城曰、これは諸國に多く、この角館町のうちでも二ヶ所にあるお産力の傳説と、先に語つた鮎や鯉の報恩のムガシコと結合したものと思ふ。)

・大威徳神を祀る花園村ではそれ故決して鮭を食べないし、願をかける時はそれを一尾儘供へる。若し鮭のない時は鹽鮭でもよろしい。(以上佐藤氏)

○鯉　鯉をカドといふは、アイヌ族もそれをカドと云ふ故、アイヌ語であらうといふ人もある。ところが何んぞ知らん、カドは立派に大和言葉であつたのである。カドと云へば、生と鹽物とを問はず一尾儘に完形のもの

あるといふ人、否、板葉であると説く者などがある。

カドを觸れる者は叫ぶ。

カド／＼　大イタバカド

鯉の料理として、カドヌダがある。その魚のシユンは宛もサシピロ(青葱)、ヒロコ(ノビル)の出る頃なので、カドの切身へそれをよくもんで入れ、酢をさして食べるものである。膾である。

何魚に限らず、鹽を軽くして漬けるものは一鹽ガケであるが、これは勿論永持ちがしない。反對に鹽ッピリ鯉と云へば、鹽鮭の如く鹽辛いものを云ふ。必然一年以上も保存出来る。

家族六人の、町の一中流家庭ではそれを年に百枚漬ける。其際振りかける鹽は二升ほどである。又田舎ではこの魚の首で鹽辛を漬ける家もあるさうだが、大なる悪食と思ふ。

鹽辛をあまり食べると聲が喰がれる。それを食べた故でなくとも、風邪などで喰がれると「鹽辛聲」などと云ふ。

・カド炙ぶり　一年のうち、日を定めて山遊びをする地

方は所々にあるやうであるが、角館では、カド炙ぶり或は歡樂といふ行事がある。四月三日即ち神武天皇祭の日に、各町内の者が酒肴(必ず生鮓を持って)を携へて近くの山へ登り宴を催すのであつた。これは古くからもあつたらしく

天保六年四月四日 吉成助久筆録

一御日和 山へ酒登升持參致參、大酒致候 上隣半二、
藤九郎、奥之助、善五郎、又五郎、女達まで候
(萬覺、吉成直太郎氏藏)

これは前の三日に行くべきところ、その日は大雨で中止したからであつた。

明治年代には官公署の御役人さん達の仲間に盛んであつたが、現在では大人としては私共シロイフイル仲間が大威徳スロープで、名残のスキーイングを享樂し、カドを炙ぶるだけで、それ以外は子供達が思ひ思ひの山で辨當開らきをするだけとなつた。

・口遊びや諺など

(a) 猫の鼻さ餅(豊節といふに同じ)

(b) 猫々 ニシ呉ら 尻尾振れく

(c) 藥罐テラく 元結要らず
モチ買ふ錢コで酒三杯
酒の肴に 鮓三本

(d) きん子く 鮓三本

誰に食はせどて買つて來た
金平に食はせどて買つて來た

(註) 薬罐で輪を作り、その輪を中程で二振り程振て其點を濡らし、兩輪を兩指へ掛けて交々動かすと鳴る。その時の唱言)

・豆の香 玉川、門屋、本町などの條に於て少々述べたものである。元龜、天正の頃でもあつたか、角館城主戸澤氏と叔父淀川城主との間に骨肉争ひがあり、角館城は淀川方の重圍に陥入り、兵糧盡きて落城間近しと見え、親戚の間柄である南檜岡城主小笠原氏の援兵が到着し、敵を追ひ持つて來た米や豆を城兵に振舞つた。

餓兵共はその匂、その味に蘇生の思ひをし

米の香も ほがく

豆の香も ほがく

と叫び乍ら踊り狂つたことに由來するといふ。(南檜

岡村、相馬尚治郎氏)

然しこれは戸澤氏の發祥地、岩手縣の所々にあるものと全く同じものである。秋田縣内でも右の地方の他に、「鮓の香」の文言は入らないが大體同じものが、神代村柴倉、中川村寺澤、雲澤村雲然、白岩村上花蘭、長野町鶯野、土川村柳澤、北秋田郡十二所等々にあつたものである。要は鮓の皮に限らなくても、焼カガシなどと同じく「何焼く、か焼く、鮓の頭焼く」の鮓の頭でもよいのであらう。生臭い匂ひを漂はせば、厄拂ひ出來たのである。

然し此の行事は、鮓や鮓などの如き海魚に對する、山村民の交渉を知り得る點に於て價值あるものと思ふ。
・瘡瘡秘佛と生鮓 昔の人々が瘡瘡で苦勞したことは云ふ迄もないが、就中殿様階級はその災厄から逃れたいものと、醫師よりも寧ろ神佛に頼むことが多かつた。
角館の佐竹家では、此の病氣で天折した方も多かつたので、代々の殿様は頗る神經過敏であつたやうである。

次の記録は、久保田の武茂權太夫の秘佛を借りて禮拜した時の模様であるが、お供物として生鮓か、頭付鮓と

あるは面白い。

元祿五年三月十一日 北佐竹義明侯筆録

一今日秘佛、新造、お留里も拜候ニ付我等も五ツ時分小座へ行候 彌勒院ニ指置、石井貞右衛門遣候而受取申候也 家中之悴共瘡瘡不仕者共大方出候也 今日八留置明日返候筈也 様子ハ机之上ニ箱明候而置候内ハ何ニ候哉 尤不見紙ニ包候而、上ニ瘡瘡御守神と書付有之候 新敷木具ニ、同椀ニ小豆飯もり、向ニ生鮓を二つ焼 (土器二置) すへ候也 鮓無之時分ハ頭之付候羽にしん二本置候由申來申候

扱拜候而後、右之本尊を取臥載申其後右之飯少被下候也 前日より精進申候 拜候而ハ備物ハ取、杉原ニ包翌朝川え流候由、右椀等ハ能々被指置、重而瘡瘡致候時分右之通ニ調候而、瘡瘡神え備候由也

右之秘佛ハ正洞様乘次よりお持參被成候お守本尊之由也 今ハ武茂權太夫所ニ有之候也 (北家御日記)

秋田縣人が此魚を戀ふるの心持は、江戸子が鯉や秋刀魚を待望する心持とは別で、一時的のものではない。

生鰯としての料理は勿論、鹽鰯、脂鰯の貯蔵物とし、鹽辛、鹽汁として變形し、その味を賞美するからである。

山入りの農村で殆んど一年間を通じて食べるは、この魚と鰯である。

ハタ／＼の豊漁な年は稻が不作だと云はれてゐる。然し昭和十年などは大雪で、所謂豊年の兆であつたに拘はらず、この魚も豊漁であつたので、農民達はどつちの話も信じてよいか迷つたことであつた。

あまり豊漁な時は、急に海岸で處分出来ないのので、其場で鹽して送る。それをエンチコ鰯と稱するが、鹽致候鰯の意であるといふ。(齋藤賢一郎氏)漢學者の命名が随分むづかしい名前をつけたものである。然しこの文字は相當古い頃からの記録に見えてゐることである。

此の山處の町は又、山處だけ餘計ハタ／＼の到来を待ち焦がれてゐたもので、初物が来ると「鰯廻はし」と稱して、皿へその向きに依つて、二尾とか五尾とか載せて顧客へ配つたものであつた。それは肴屋の顧客に對する平素の御禮であると同時に、漬ハタ／＼を澤山買つて貰

ひ度い心持も含まつてゐた。(蓮沼運助氏)この初物配ばりのことは、享保十六年の北家御日記にも見えてゐる。
・鰯の母 土藏の奥や床下に埋まつてゐるお金が、自己の存在を人間に知つて貰ひ度い時は、いろ／＼の不思議を示顯する。それを「金の母」が何々したと語る。

その場合の母は寧ろ、金の精靈の意であるが、魚の場合には一番大きいものゝ意である。

昭和五年十二月二十三日の朝、山本郡八森村字茂浦の越中與一といふ人の獲つたハタ／＼は、體長九寸八分五厘、目方六十二匁、卵塊二十匁、卵數二千九百三十五粒あつた。普通は五年魚でも體長約七寸程で、卵數も二千二百粒位のものであるといふ。(小野進氏著「鳥獸虫魚」)

然るに昭和九年十二月廿六日、蓮沼運助氏宅で町の肴屋から買求められた鰯のうち、體長實に一尺一分、目方六十五匁のものが一尾入つてゐた。しかもそれが産卵済のものであつた故、卵を抱いてゐた時の重量は九十匁を突破したと思ふ。これこそ眞實に鰯の母であり、最長レコードであらう。

昭和十一年十一月二十三日、私の家で買ひ求めたもの

(雌)は、八寸八分であつたが、それでも他のものより一寸以上大きく、随分目立つて見えてあつた。

最近漁業が進歩して、従來のやうに産卵のために岸へ寄るものを持つて獲るではなくて、發動機船などで沖合遠く出て、ハタ／＼の本據を衝くからかうした王將が獲れるのかも知れない。

此の魚は右のやうに一年の大半、人々の糧となるものである故、他の魚の駄送禁止や、料理に使用法度のことある場合でも、特に許されたことは次の通りである。

・文久二年三月仰渡 親郷役所記録

(a) 生ま魚、鰯、鰯へ御指構ひ無之候得共、右之外駄送ニ而在々差遣候儀以來被禁置候事

(b) 膳部之儀者、大禮たりとも汁之外、平皿之内壹つ香のものに可相限、惣して焼物、鹽鰯、鰯ニ可相限事 (菅原三什郎氏藏)

・正月の獻立 文化文政、天明頃の角解の士家の獻立を見るに、矢張り現在のやうに、ハタ／＼が主役である。

(a) 文化頃の一士家

すし鰯、なます皿、「豆腐、牛房、大根、芹、干わらび

汁、載餅、數の子、鰯子皿。(鐵城藏)

(b) 文政十一年に、町の吉成助久といふ士が書き遺した、「家例覺」に

正月元日 若水波 朝、大豆からにて火をたき初朝ぞうに ぶりこ、數の子ひたし 黑豆と、こんぶ、かうかのにも

晝食 なます 汁十二月卅日之通

神々様御松へ朝の、ぞふに、晝食に備る 夜手廻盃事 (吉成直太郎氏藏)

猶ほ十二月卅日の分は、汁、大根、にんちん、ねぎ、ぶりこ、ふのりとある。ぶりこは鰯の卵塊のこと。

(c) 天明元年經世士家として有名であつた、蓮沼舍翁が子孫のため書いた遺訓「井蛙談」に、(抜)

正月元日 終日禮廻りにて迷惑の儘に、濃味噲にて雜飯也 廻シハ大根干蕨也 皿えハ數の子、ぶり子、臨えハ昆布煮付也

夕飯の膳菜ハ、汁ハ大根、皿ハぶりこ、煮物ハ大根牛房干蕨、餅か干鰯を濃味噲にて、蓋えハ昆布煮、納豆、引物ハ鰯の脂壹疋、保太か鹽鰯の切目一つ

二日 朝飯ニハ鯨煮物膳え付候も引物へ止メ
 六日 近き親類共、年始振舞致候 右料理ハ秋鮭の子
 を求貯置汁ニ致、鯨ハ海老か保太のひつ大根鯨也 平
 ハ干鰯、干鰯見合可拵、夫共ニ小肴か鳥類歳暮杯ニ貫
 ひ候ハ、汁ニするもよし
 十一日 藏開也 年男おかの餅をほこし、御神酒、數
 の子、國鰯を添て藏え備、手廻共参りいたゞき申候
 右國鰯ハ舊冬歳暮貴候を貯備申候 正月百姓共より貴
 候事も有之候 是ハ見斗らひ候而別而求不申候様ニ可
 致事(鐵城曰、便宜上、正月以外も拔書す)
 十二月五日 室夷 豆の料理拵、鹽鰯御膳え付備申候
 晦日 夕飯料理 汁ハ大根、干鰯、煮物ハ干鰯牛房、
 豆腐、干鰯也、にしん也共、皿ハぶりこ也、海老也
 鯨ハ鯨のすし壹疋、保太也、鹽鰯也
 (角館町、河原田次繁氏談)
 ・鯨 鯨の鯨などは、鮎壽しであるが、この魚の場合
 は魚名が下になつて「壽し鯨」と呼稱する。鮎鮎に次い
 で旨いものである。お正月の御禮に、これの頭付はなく
 てならぬものである。

農家では、これの少しく鹽氣を強くして漬けたものは
 五月の田植時分まで食ふ。その頃になると、最も旨い時
 と、最早腐る時の境目で、殆んど肉が溶けんばかりにな
 る。これの漬方にも、いろ／＼と秘傳のあることであ
 る。
 普通鹽漬ハタ／＼の量は相當大きいもので、中流六人
 家族の家では鹽二升を按配して、この魚の八貫入一俵を
 漬ける。
 鯨ハタ／＼に就いて笑話がある。野良くらし、寝て、
 食ふやうな者を「すし鯨」と嘲笑する。するとその背干
 (のらくら者)は「すしハタ／＼も、寝て、石を抱いてゐ
 る」と云ひ返す。つまり唯寝てゐるやうだが、あの重石
 を抱いてゐるぞといふ意である。
 ・鹽辛 小さいものを選んで投するが、贅澤と思ふ程美
 味である。田舎へ行くと頭だけで造るものもあるといふ
 が、先の鯨の頭ほどでもないが、稍惡食と思ふ。
 ・ブリコ 何魚に限らず雌の方は、肉の量から云へば不
 足であるが、それでも皆ハハラミゴを食べたがる。それ
 はハタ／＼と鯨に於て殊に顯著である。然しこの魚の子

即ちブリコは、ポリ／＼音のするを面白がつて、あまり
 一度に食べ過ぎると、お尻を詰めてしまふ。

數の子よりは、遙かに不消化である。
 ・民信と口遊び

(a) この魚を串に刺して焼いて抜く時、身が附着いて
 よく離れないならば、一度舌で甜める眞似をすると容易
 く抜けるといふ。他の魚でもやることはあるが、主とし
 てハタ／＼を焼く場合の秘事であるといふ。(太田雄治君)
 一種の氣合かも知れない。

(b) ハタ／＼を食ふと疝氣が起る。(荒川正氏)

(c) これを焼いた時、口を開けば其年豊漁、閉ぐやう
 であれば不漁。

(d) ブリコ ブリコ 何處旨めや
 此處旨めや

(と云ふて頬に手をやる)

○鯛

蝦で鯛を釣るといふは普通であるが、此の地方では、
 「飯粒で鯛釣る」といふ。この魚に關しては

・享保元年十一月廿八日 佐竹義明侯關係記録

今日、お吉様御元服被遊候次第
 御元服御道具一箱 内帯二筋
 鯛 二尾 御樽代三百疋
 右ハお吉様え御東様奥様より
 鯛 一折
 右ハ殿様え 御同人様より
 平目 一折
 右ハ奥様え 御同人様より
 平目 一折
 右お吉様え 御東様より
 鯛 二十
 右は御同人様え御東様御隠居様より (北家御日記)
 と云ふやうに御祝儀の贈物として到來したり
 ・延寶六年三月廿九日 佐竹義明侯筆錄
 一天氣大體也 五ツ半頃大殿様ニハ此方御立、大曲へお
 出ニ成候(鐵城中略)
 糟付小鯛二十獻上 茂右衛門へ大鯛一尾遺候(同上)
 と云ふ風に、その魚の粕漬や大鯛を贈つたり、又或は
 ・同年六月六日 同上侯筆錄

大殿様へハ糟漬小鯛、我等二同鮑到來候(同上日記)
といふやうに到來もしてゐる。但しこれは久保田の梅
津半右衛門から贈られたものであつた。

右のうち此の地方から贈つたもの、例へば小鯛粕漬や
大鯛の類が果して角館の土地で用意したか否かの疑問が
起るのであるが、

・元祿八年四月七日 佐竹義命侯筆録
一今日之市ニハ夥敷香來候 大鯛等殊之外下直之出也、

(同上日記)

など、あるところから判断すると、矢張り土地で購ふ
たものらしい。然し干鯛の類は江戸で用意したと見え
る。

・享保元年九月晦日 佐竹義明侯筆録
一屋形様え御祝儀御目録ニ而、干鯛一打
一御臺様え御祝儀御目録ニ而干鯛一打

(同上日記)

・鯛車 木地ひきなどの作つた玩具で、鯛が車へ乗つて
ゐるものである。昔あつたもので、今では全然姿を没し
てしまつた。

○平目
享保元年十一月廿八日の北家御日記にも見えたやうに
贈答品としても、使用されたらしい。

「左ヒラメの右カレヒ」など、云ふ言葉はあるが、平目
の目は、いつも左にあるものとも限らないやうである。

○鱒

「雪道と鱒汁は、あと程よい」といふ言葉がある。勿論
雪道を先になつてコダ(ぬかつて)人は難儀するし、後に
附着いて行く人は樂である。同様に鱒のお汁も、上の方
を掬つてゐるうちは、あまり旨くもないが、底の方にな
ると崩れた肉(崩れ易い)が溜まつてゐて、随つてダシも
濃く旨いのである。

鱒の腸は宛も人體模型の腸か、腦味噌を想はしめるも
のであるが、これを菊綿と稱する。生まの儘へ醬油をか
けたり、煮物にしたり、お汁に入れたりして食べる。

そのお汁を角館町の一部で、サンベ汁といふは不思議
である。(伊澤養太郎君)

サンベはアイヌ語の心臓であり、また此の土地の又鬼
(獵師)言葉の心臓であるからである。但し又鬼のうち

でも、獸類のサンベツルは心臓ではなくて、太い長い血
管であるといふ者もある故、寧ろ藝の意があるやうにも
思へる。何處かに混淆があるのであらう。
婆々舞といふ踊の語に、鱒汁を唄ひ込んだものがあ
る。

(一) 婆々に娘三人あつたどせや

一人は濱に 一人は山に 一人は里に
嫁にやつたどせや

濱の娘がら婆々に來いどの、こどづげだ

婆々行つてやれ

(二) 足半雜履に マッカ杖

淺黄の手拭 頬冠むり

風呂敷包を しようかけで

いちやまぢや 出掛けだ

トン／＼トロスコ ストン／＼

(三) 婆々よぐ來た／＼なア

横座さデンと据ゑられで

濱の慣ひどて 鱒の頭御馳走した

婆々一杯食つてやれ

(四) 奥歯で噛んでも ガッチモチ
前歯で噛んでも ガッチモチ
あんまりドン腹ぶち焼けて

なーんも言はねやで歸つて來た

トン／＼トロスコ ストン／＼(角館町、千代忠氏)

○鯉

鯉を釣るに鈴羊(單に、シンともいふ)の角を使用する
と、非常によく付くといふ。それだからその獸(現在禁獵)
の角は高價で、普通三圓、飴色の上等品は三十圓で、氣
仙方面へ賣れて行つた。菅江眞澄翁は、その著「月出羽
道、仙北郡十一卷」にも次のやうに書いてある。

山羊の角に鈎を付けて、鳥賊の脚をいさゝか副て、海
上を投ありければ、それを鱸なりと思ふにや、それにて
鯉、鱒などを釣る事あるなり

方法は、その角を先から約三寸程切つて、中に鉛を入れ
て重くし、先に釣針をつける。海面に鱒をバラ撒いて、
それを下げてやると、鯉が面白いやうに食ひ付く。

アヲの角が水へ入つて美しく光るためだと云はれてゐ
る。(土橋本内村、又鬼赤上正治郎氏)

○サガ

別に「目ヌギ」或は「大目」など、稱してゐる。矢張り昔から此の山處まで輸入されたもので、多くは仙岩峠を越して、南部方面から来たものであつた。

町の人々は、大曲の方へ年始に行く時は、同じく目出度いといふので、鯛代はりによくこの魚を持つて行つたものであつた。(内藤直之助翁)

昭和四年九月廿一日、角館の岩瀬町の肴屋佐々木竹五郎氏が、大きな姿賊の腹を裂いたら、丁度ムガシコにあるやうに、中から珍らしいものが轉がり出た。

それは二つの部分から出来てゐるもので、高さ約三厘米径二、五厘米程の深鉢型のものへ、それに内接する球がはまつてゐるものであつた。但し深鉢と云ふても、中の凹みは比較的浅く、その球の半径が没する程度である。

兩者共、頗る美麗な薄紅色を呈し、外面頗る平滑である。然して外を包んでゐるもの、内部には方解石形、口邊に放射状の結晶が見え、球は全部放射状結晶から出来てゐる。結晶も硬度も、頗る石膏に似てゐる。

〔第二十五圖参照〕

それは恐らく、丸い球が先に出来、後に他のものが不規則な形状で出現したが、腹中で轉々してゐるうち漸次球を受入れる形になつたものと想像されるのである。

「ヘイサラハサウ」即ち酢答の一と思ふ。

○鱧

コノシロは食魚といふよりも寧ろ呪的意味に於て知られてゐることは、中川村富士堂の條で述べた通りである。

昔の武士は、此魚を非常に忌むた。理由は

・此城を食ふ鱧がそれに通ずる

・繩かゝる 背緒から尾緒へかけて、細い繩のやうなものが纏れてかゝつてゐるので嫌つた。

・切腹を命ぜられた武士の前に据ゑる御膳に、この魚が供へられた。

・鱧を焼いてゐるうち 落したりすると「此城を焼いて落す」だなど云ふて氣を悪くした。(以上、蓮沼運助氏)

然し又、太田道灌などは「九城が手に入る」といふので、吉兆と喜び實際その數の城を手に入れることが出来たといふ。

今日、運動選手が「敵に勝つ」と擔いで、盛んにピフテキヤカツレツを食ふの類である。

・子を育てゝゐる人は、この魚を食べない。判然とした理由もなくさう云つてゐるが、これには深いわけがあること、後條「秋田市」のところ詳述する。

○キミヨ

北家御日記などでは、このカナガシラを鯨と書いてゐる。

この山の町ではあるが、贈答品として昔は相當使用されたものらしい。これを産婦魚と稱するは、癖のない味故、病人などへ贈つても無難だといふ意である。

○アガヨ

アカエを赤魚といふ。

○カスベ

アガヨと若干似てゐるが、少々小さい。所謂「干カスベ」で、干物として北海道から来る。

○アブラコ

ホッケの生まなものを、アブラコといふ。(蓮沼氏)

○鯨の皮

普通の鯨の皮を剥いだものを、板に釘打ちにして張り天日に干して角館名産の樺細工の荒仕上げに使用する。

(太田雄治君)

刀の柄に巻く猫鯨の皮は、あの通り石のやうに堅いものであるが、突起をすつかり根氣よく擦り取つて平滑なものとし、それで脇差の鞘全體を包んだものがある。

太田致就といふ角館の士族の細工であるが、その根氣には敬服する。士族のうちには、今日の専門家も及ばないやうな、いろいろの細工をする者が居た。

現在町の主要産物となつてゐる樺細工なども、士家の内職であつたのである。

○鯨

正月に北家の家臣達は、御家例と稱して、鯨五枚を持つて御屋敷へ年賀に行くのであつた。ところが或る士がどうしても鯨四枚より手に入らなかつた。四枚は勿論、死に通じて縁起が悪い。然し「何、ヨカレだ」と云つて其儘持つて行つたといふ話がある。(角館町、柴田正男君)

・口遊び(小兒を抱いて、火にその手を温めてやり乍ら) 鯨コ焼いで

引つくりやがして焼いで
お皿に取つてお醫酒をつけで

アモノど食つて仕舞へ (角館町、門脇開郎君)

○ソイ

民謡追分節の掛聲に「ソイッソイ」といふがあるが
又「ソイ、アブラコ、カレマガリ」と魚名を並らべるも
ある。

○ボラ

この邊では阿呆を、ボラ、或はコケと云ふて嘲笑する
が、鯛は鼻先までコケラがあるためだと。(齋藤賢一郎氏)
○鯛 谷ウツギを鯛花といふ。鯛の来る頃咲くからだといふ。
それでこの花は、幸か不幸か、佛壇に供へない。

大羽鯛は其頃のものであるが、そのうちの七ツ星イワシ
(班點七ツ)は旨いと云はれてゐる。

又、背タグレ鯛といふものも少し前までは来た。楕圓
の桶(五升程入る)に入れて来た鹽辛である。その鯛は背
の皮が剥げた位が非常に美味なので、その名稱を負ふた
ものである。大根下ろしでも置いて、酢をかけると結構
なもので、店ではそれを山のやうに積んで賣つたもので

あつた。

(松田直治氏)

鯛粕といふは、田へ入れる肥料で、山本郡の海岸や津
輕方面から輸入された。脂を絞ぼつたもので、吠などへ
入れて来るものであつた。

鯨や鯛の呪的效果に就いては、「豆の香」の行事でも
述べた通りであるが、干鯛或は焼干で次のやうなことも
する。

・幽霊に來られると怖い人は、枕もとに焼干を並べて置
くと來ない。

(角館小學校「迷信調査」)

・正月に鬼除の呪と稱して、家の各窓口に、干鯛の頭を
取つて、それを豆殻のタチに通して挿して置いたもので
あつた。

(吉成直太郎氏)

○烏賊 イカは煮たり焼いたりして食ふ外に、刺身にも
する。他所でこれを食べる時は、よほど警戒せぬと食あ
たりする。

この地方一帯で、刺身は生身と稱してゐる。又烏賊と
茸は、普通の鍋で煮る時は別段なこともないが、若し貝
焼皿(帆立貝の殻を鍋代用にして)で煮て食ふと、うっかり
すれば生命を取られることがある。どうした食ひ合せか

知らないが不思議である。

(小野納藏氏)

イカの切込み、即ち鹽辛は鮑の切込みや、焼カゼ(海
膽)など、共に南部方面から輸入されたものであつた。

其頃、烏賊風といふものを作つて揚げたが、その形へ
如何にも脚を表現するやうに、細い尾を數本附着けたり
した。それから朴の葉も釣糸をとつて尻にして揚げたが
それは肴屋で魚を包んだりする葉で附近の山村から賣り
に來るものであつた。

(蓮沼氏)

・烏賊の口遊びに

(a) なか／＼さうは烏賊の眼(容易くは出來ぬの意)

(b) 男と女ゴど仲よしこ

エガコ三枚で取つた嫁コ

・樽イカの骨は非常に太いものであるが、それを前述の
鮫皮で下ろして、疵薬とする。

・干イカ 即ちスルメを焼くには、兩側でなく片側だけ
火にかざすと、軟かく焼けるといふ。所謂、村の祭には
屋臺店のダシに、必ず干イカが並らべられる。

山奥の村では、スルメで御汁のダシを取る所もあると見えて
大正十三年正月三日、私が仙臺から山形縣の天童へ向けて、單

身で奥羽山脈スキー横断行をやつた時、握飯を食べやうと思つ
て關山の或る百姓家へ憩ふたら、お婆さんが小さなお膳にお汁
と漬物を供へて出して呉れた。中を覗くと蕨の鹽物をスルメで
煮たもので、色が氣味悪く眞黒であつた。それでも空腹であつ
た故、その山海の珍味を、珍味として舌鼓を打つたことであつ
た。

○オゴズ オゴゼのことであるが、この魚に就いてはい
ろ／＼に云はれてゐる。先づ「川オゴズ」といふものが
居るといふ。大水の時それを見るので、海から溯つたも
のとして「海鰈」と云つてゐる。鰈の傍にも刺があるが
下腹にある鱗はウド(空洞)になつてゐるといふ。

先に述べた、中川村十兵衛家の下に居るものは、一尺
以上の大物で下腹が眞白く、人が潜ぐつて行くと大口を
開くので、怖れをなして皆逃げて來るやうである。

(角館圖書館主催、魚の座談會)

秋田市附近では、それを「鮎カキ」と云つてゐるが、鮎
がその怖ろしい頬ベタを岩の一部だと思つて、甜めつた
りすると、引つかけられるからだといふ。(手賀順造氏)

當町に於ける魚類研究家條田清治氏の御教示に依れ
ば、此の地方でオゴズといふ、川から捕獲するものは、

體鱗があるそうである。水産書に「鱗なし」とあり、オコゼはカサゴ科で鱗はない筈故、海のものとは相違する

と。
柳田國男先生御著「山の神とオコゼ」を見ても、鬼オコゼ即ち海のオコゼは、頭部が殆んど畸形的に偉大で、川のものとは別物である。

ところが同じこの町であり乍ら、肴屋に頼んでオコゼを見當つたら持つて来て呉れといふと、あの膚のカラカラした嘴の長い海魚、ヤセトクビレを持つて来るから妙である。

・山の神とオゴズ 「山の神へオコゼ見せたやうだ」とは全国的にある言葉らしい。その理由もいろ／＼に説明されてゐることである。けれども、そのどれが眞實であるかは判からない。

拙著「鳥蟲草木の民俗學的資料」にも述べたことであるが、とにかくオコゼは山神の渴望するものであり、人若しそれを供へやうものなら、碌すつば拜みもせぬうちに攫らつて行つてしまふ程だといふ。

然し神を騙ますことを知つてゐる人間は、その上手

がる。

然し、オコズの約束などは、ケロリ忘れてゐる。

○鯨 この鯨の出るムガシコを一番語つてみんに、

一人の野良息子が夢を見た。あまりよい夢で誰が聴き度いと云つても語らない。名主様の前ならと連れて行つたが語らない。大黒様の前ならと連れて行つたが語らないので、大黒様も怒つて家來にその野良息子を追拂はせた。

どん／＼山へ逃げて來ると一軒屋があり、鬼婆々が居て「何用で來た」と聞くので、かう／＼いふわけですと、鬼婆々もその夢を聴きたがる。條件に飛行の團扇を呉れるといふ。野良息子は、眞實に飛べるか驗めした上と云ふて、その團扇で煽ぎ宙に浮いて、その儘逃げてしまふ。

やが大海の上に出たが、疲れた故少し休まうと思つて下を見ると、小島がある。下りたら島が揺らぎ出した。

動くも道理、それは大鯨の背であつた。その鯨もよほどの物好きであつたと見えて、その夢を語つて聴かすなら、一本を刺せば、どんな猛しい者でも死ぬし、他の一

行く。即ち鷹匠達は袂の中にその魚の干物を入れて行つて、いゝ加減になると袖口からチラと見せるが、直ぐ引込めて仕舞ふ。先の又鬼のトリックのやうに、山神はそれを眞にうけて豊穡にして呉れるが、鷹匠は決してオコゼを捧げることはしないのである。〔第四圖參照〕

又、炭焼達は山ノ神といふ背負臺を作る。炭に焼く木を背負ふ場所が藪、笹原、或は傾斜面である場合には、股木のマツカから三尺程もあるもの二本、それに準じた桁木二本とを用意して、兩マツカの間隔三尺程にし地上に挿し、桁木をそれに載せる。それで山ノ神が出来上がる。その上へ普通二十貫、多い時は三十貫ほどの重量の木を積み、荷繩をかけて背負ひ起さるのである。

その場合、兩脇下に出てゐる桁木の頭をつかんで奮張るが、荷が重くて起き上られない。すると炭焼男は、懸聲と祈願とゴツチャにしたやうな聲で叫ぶ。「山ノ神！」まだ重いと「山ノ神、頼む！」それでも未だ起き上られぬと、最後の手を出して「オゴズ上げもす」と叫ぶ。オコゼに目のない山神は、騙まされるときも知らず、大いに力添して呉れるので、炭焼は今度は漸く起き上り上

本を刺せば、死人が甦へるといふ不思議の針を提供するといふ。

野良息子は、又驗めしたといふて、その死ぬ方の針で鯨を刺殺し、飛行の團扇を使つて陸の方へ逃げて來た。其處は城下町、殿様のお姫様が死んだといふて皆の悲みの最中であつた。蘇生をして見せる自信を述べると、早速座敷へ招ぜられた。そこで四邊へ金屏風を廻はし

金のハダ

と唱へ乍ら、お姫様の身體へ鯨から奪つた、蘇生の針を立てると、こは不思議、死んだ筈の姫がパッチリ目を開いて甦へたではないか。

殿様始め皆の喜びは云ふ迄もない。野良息子に姫の婿になつて呉れるやうにと懇願したが、辭退して其代はり莫大なお金を頂戴して、家へ歸つたので兩親も大そう喜んで。トツピンバラリのブウ。(荒川正氏が、荒川村水澤の鈴本子之助翁から聴かれたもの)

○河童

カッパは鉛ン棒 カッチャカッパは風船蟲で、共に河童の如く水渡り、水潜ぐりに巧みである。

「河童捕つた」は、水に落ちてツブ濡れることになること、又「かつぼれや」とも云ふ。

河童は人のお尻に手を突込み、腹綿を取つて食ふものなそうだ。(内藤直之助翁)それから又、川へ水浴に行く時、胡瓜を食べて行くと矢張りお尻をクチられると。(松田直彌氏)又、川へ小便しても同断。口遊びに問はれても知らないことを表示するに「知らん、變はらん、河童の尻」といふ。どんな匂ひの尻であるものか。

「河童の尻石」といふものがある。自然の孔石であるがこれが魔除けだと云つて、大抵の家の入口に下げて置く。

「河童の尻」は嘲笑語であるが、逆に「尻の河童」と云へば、造作もないといふ意である。

○吉成市左衛門助久の筆録

(吉成直太郎氏藏)

市左衛門助久は、山根御米倉の役人であつた。役の暇には魚を釣つた。酒を嗜んだ。然し又、頗る藝術味の豊かな樺細工をしたり、先に述べた、家例覺の冊子、それに次の、萬之覺を書き遺されたりした。

これは麴紙四つ折、表紙共六十六枚のもので、郷土研

究家の貴重資料である。次にそのうちから、魚に關する部分を抜書紹介せんとするのであるが、魚の種類、餌、價格、棲息所、料理などが面白い筆致でメモ式に記されてある。所々に釣つた魚の統計を擧げてあるも面白い。釣場は殆んど全部が、雲然村である。

天保十年
一 萬之覺
己亥正月吉日

紙數珍重
一 助久花押
叶

天保六年宋正月元日嘉例之通祝ひ致候 丁内年禮、藤太郎出候

- 一四日 大雪ニ御座候 雜魚、鱒、鹽鱒貳本澤山有之候
- 一十三日 マトイ蔵取、鮎汁、鱒、書酒ニ而悦ひ致候
- 二月朔日 雨ニ候 鮎突 四ツ頃、鮎瀬へ鮎突ニ參候而落合より船場上迄突、大もの斗貳拾九疋つき申候
- 一廿二日 玄米三斗五貫五六百文、薪炭高値、鬼壹疋六百文、タカブ鴨四百五拾文、豆腐二拾文、生鮎大五文
- 一廿七日 大雨ゆきニ候 木山へ出、辨當致、其より主

馬へ參、鱒、貝、とふにて生保内之參酒吞

三月

一十五日 木山へ參、主馬三郎へ出、孫四郎、三郎へ出 生鮎ニ而吞候

一廿日 極上日和ニ而、鯨壹疋百貳十文ツ、貳枚、鱒切 日十五文、鮎壹ト申五文

一廿九日 指細クキ雜魚大貳ツ、中壹ツ都合三ツ六百文 鯨壹疋五六拾文ニ相成申候 鷹壹疋四貫五百文と申居候

一晦日 雨ニ候 取集ニ出、七ツより吞申候 鯨貳疋夜 參候

四月

一六日 御日和 下ニ而しき貝、彌き鯨ニ而清酒持參存候

一八日 上御日和ニ御座候 晝迄岩瀬崎より森へ羽蟲取ニ參候所貳疋取申候 八十八夜より二日メ頃ニ出候

一九日 岩瀬羽、蟲山口山へ 朝早ク岩瀬へ羽蟲取ニ參候處、貳ツ取、鮎瀬ニ而壹ツ取、八日分共ニ五ツニだけ取、高橋下夕より釣ニ參候所、羽蟲ニ而斗三疋釣

候 所々ニ山へ居候

- 一十日 雨ニ候 御支配より五貫文拜領、酒代へ壹人ニ付三百文ツツニ而、源之助家ニ而吞候 相談ニ參、六郎左衛門出合候 鴨、しき、大きく、鮎、鳥求候
- 一十二日 御日和ニ而岩瀬羽蟲貳十斗取、山口へ貳人參候所、大水ニ而一向釣不申歸候
- 一十七日 御日和ニ而、山口上兩川釣候所、土釣へ西小川ニ多く居候

- 一十九日 上月並御指留ニ而羽蟲取ニ參、百餘り取候
- 一廿日 ツリツリ雨ニ候 山口寺下より釣候所、大水ニ而黒水ニ相成、羽蟲百貳三十取參候 ○岩瀬羽蟲桑はたけ最中、○山へ最中澤山ニ居候
- 一廿二日 くもり御日和ニ而、山口上へ參候所、山へ八ツ、金(鐵城註、金堀雜魚なるべし)十五六、鮎取參候

- 下へ七ツ遣酒吞ニ參候
- 一廿五日 御日和ニ而、ツクメ堂下より大下ツキス迄釣候所、大山へ七ツ釣候 西小川ニ斗所々ニ居候 水不足、金、吞取參候
- 一廿九日 黒羽蟲 御日和ニ而朝、岩瀬へ羽蟲取ニ參候

所、拾六疋取候 奥之助、△多郎、中川原迄羽蟲取ニ
參候得共、壹ツも取不申由ニ候

五月

一 二日 御日和、下へ參、赤羽蟲取、上へ參候處、大壹
ツ、中貳ツ都合三ツ、山へ釣、鰯、金百五十斗取參候
而大酒致、幸太毎晩參爲吞申候 大水不足、山へ所々
ニ參候得共、水不足ニ而不埒明申、きりく貳ツ 羽
蟲ニ而釣申候 鰯水ニハ多シ

一 三日 其より内ニ而酒吞候 源太郎娘お國、老之助ニ
賄致候 ざつこ五ツ、鰯ニ持參ニ候

一 五日 上日和、嘉例致、朝酒、さより汁、大鯛等ニ而
七ツ時分より與市振舞ニ而、新左衛門へ參、大酒致候
一 六日 小館、圓兵衛へ參、酒五升、鱒壹本、鯛、椎茸
等に候

一 七日 御日和ニ而、山口上へ參候所、關根へ水上ニ而
大水不足、小川瀬切、山へ貳ツ、キリく貳十餘り、
鰯五合斗、金等取、參本字下隣へ遺吳候

一 九日 御日和ニ而早朝より西小川へ、かつか突ニ參候
所、三盃程突申候 瀬切候得共、上の方へ瀬きれ不申

歸、三郎ニ而大酒致候 ○鰯貳疋さし三本丸拾文 ○
濁きき三つさし三拾五文 ○小鯛五文ニ貳つ ○大鯛
壹つ拾文

一 十一日 御日和大暑、晝過より鰯瀬にタマタへ、雜魚
釣ニ參候所、クキ七ツ釣申候

一 十二日 くもり候得共、御日和ニ而、山口上西小川へ
鰯つきニ參候處、三盃斗突申候

一 十五日 晚、福より參候鱒ニ而大酒致候

一 十七日 御帳書ニ治助へ參、晚同人ニ而、ざつとニ而
酒吞、其より天寧寺ニ町子共女踊有之見ニ參候

一 廿日 御日和ニ而町送、早太家ニ而相立、晝酒吞大馳
走、其より川へ釣ニ參、赤羽蟲十八九取歸候 ○鰯瀬
下高はぶ、又、どひんニ居候 赤羽蟲大末 ○雜魚七
寸斗少ク成候

一 廿二日 晝頃より雨ニ而、山口はし下夕より、きり
く釣候所十二三、鰯四五取、鰯瀬下落合ニ而、ク
キ三疋釣參吞候

一 廿三日 島ヶ返、其よりどびんへ鰯突ニ參、五六十取
參吞候

一 廿五日 くもり早朝、山口西小川ニ而鰯壹盃餘突、其
より下延村忠吉へ參大酒致候 □ニ而をつて、きりき
り鰯品々出候

一 廿六日 くもり御日和ニ候 きりく釣ニ山口上へ參
候處、きりく三拾斗、金貳十斗鰯壹盃程取、下へ湯
治ニ遺候

一 廿七日 朝雨ニ而 下へ參、湯治へ參ニ付祝ひ酒吞、
其より山口上へ釣ニ參候所、山へ壹つ、きりく貳十
八、金、鰯貳拾斗取參候 大雨御鳴ニ而、古寺下より
歸り申候

一 晦日 くもり御日和ニ而、上落合迄きりく釣ニ參候
きりく拾八、鰯五合斗取參候 翁助へ大鰯十、きり
く七ツ遺候 才兵衛へ鰯三十五斗遺候 ○干鱒本家
より二タ切コ、同長屋より一枚參候

一 六月朔日 鰯品々有之ニ而祝ひ致候
一 二日 大くもり、度々ツリく雨ニ候 四ツ頃より山
口迄鰯取ニ參候所、七八拾取候

一 四日 上御日和、山口上へ鰯つきニ參、四十壹申取、
拂申候、貳百文ニ

一 五日 上御日和ニ而、落合迄きりく釣ニ參候所十、
金三十餘鰯、六十斗取、三十貳申百五十文ニ遺候
クキ壹ツ釣候 山口針切申候

一 六日 上御日和、晝過より久保田道より寺下夕迄、鰯
突候所七八拾取候

一 九日 くもり、ツリく雨ニ候 四ツ頃より上御日和
ニ而、山口西小川ニ而五合斗取、壹文ニ壹ツ宛貳百三
十文ニ上鰯へ貳百五十枚遺候 大水不足、淵斗釣瀬也
一 十一日 くもり、ツリく雨ニ候 高橋より壹ツ山へ
ノ淵迄釣ながら鰯取ニ參候所、キリく壹ツ、鰯七八
十取參候 長三より酒參候

一 十五日 御日和ニ而、山口へ高橋上より西小川迄、鰯
五合餘り取候 滑川下隣向下へ壹ト皿ツ、遺候

一 十六日 御日和大暑ニ候 高橋上より落合下迄、鰯五
合斗取、下へ遺候

一 廿三日 どちやう五拾本程取候 其より度々取候
一 廿八日 どちやう毎日取居候

一 七月二日 極暑御日和ニ而、山口西小川へ鰯つきニ
參候處、大水ニ而、柳蟲取歸候 夕飯時ニ候 其外、

大徳上より、とめ下迄致候 壹ツも釣不申候 大徳淵下タ、ハブより見候所、澤山雜魚居はね申候 濱前草船下タニ而釣候所、是も澤山ニ居、はね申候
 一廿三日 手廻中、大曲へ参候 鯉五百九拾文代、酒代五百文、歩夫代百五十文
 一廿七日 大暑御日和ニ御坐候 藤太郎たなこ釣ニ参候
 一廿九日 大暑御日和ニ候 鱒取上隣へも遣候 ○鮎大三十貫文
 閏七月初日 極大暑、御日和ニ御座候 七ツ頃より岩瀬森下へ参候所中釣壹ツ釣参候
 一三日 御日和大暑、本船場へ参、三ツ釣参候
 一四日 御日和ニ候 くもり、晝過より、いかタ出し、上瀬ニ而大小六ツ釣、向へ二ツ、下へ三ツ遣、久田酒参吞候
 一五日 晝頃より小雨ニ相成候 本船場へ参候て三ツ、中、釣参候
 一六日 上御日和ニ而、朝、蟲取ニ岩瀬森下へ参候 本船場より留下タ迄致候處、大小四ツ釣候 貳ツ大はつし候

一九日 御日和、森下へ蟲取ニ参、其より、いかり上迄釣ニ参候所、お鳴利遊(鐵城註、雷鳴)雨ニ而大小四ツ釣、四ツ頃ニ歸り、滑川へ参、宮田酒香、内ニ而夕飯致。其より又釣ニ参候所、大小三ツ釣、下へ大壹ツ遣、大雨中ニ而致候都合七ツ釣候
 一十五日 御日和ニ而、大威徳かけより上の瀬ニ而、大小さつこ廿貳釣、滑川へ七ツニ而三百文ニ遣候
 一十六日 御日和ニ而、同所へ釣ニ参候所、兵藏大小拾斗、手元大小六ツ七ツ
 一十七日 川原ニ角力有之、たなこ六七ひき取候
 一廿日 新左衛門へ参候 甘鯛、小鯛、しいら等也
 一廿三日 長野村お秀参、宮田酒五合、しいら百文、鮎とふふ、ねふか等求候
 一廿九日 御日和ニ而取集ニ出、丑より、さつこ三疋百文ニ求参候
 八月
 一七日 ソコベ鱒大澤山出候
 一十一日 極上御日和ニ而、鷹のす下小川釣候所、山へきりく、ハヤ取合六拾斗釣申候

一十二日 御日和ニ而、西小川迄釣候處、小川ニハ無之大川ニ而所々ニ居候 山へ、きりく、ハヤ取合十四釣候 山へ四ツ五ツ有之候
 一十九日 栗最中ニ冷居候 さつこ釣ニ能きもやうニ御座候
 一廿六日 江橋へ参、生鱒五十文に十三求参候(鐵城註、久保田滞在中のこと)
 一廿五日 上御日和ニ而、山口高橋より上大川斗、落合迄釣候處、山へ十、きりく、五ツ都合十五疋釣候 外ニ五つはつし申候 鮎五六匹取候 大水不足、川蟲の方吉
 一廿六日 朝くもり候も御日和ニ而、月明堂下より山の寺上迄釣候所、キリく、五ツニ出合三ツ釣候 鮎貳ツ有候 大雪ニ相成
 十二月
 一五日 大雪 ○八ツ目貳本求候、百拾文 ○初鱒澤山参七八文ニ候 翌日は拾文ニ候 ○鮎はらみこ上々壹つ拾五文 ○しつ鴨六百文 ○兎七百五拾文
 一廿八日 歳暮参候覺

一ブリコ壹れん 下隣
 天保七年正月
 一四日 極上御日和、鮎、大根、牛蒡求参候
 三月
 一八日 黒羽蟲 八十八や、廿日より羽蟲出、廿四日ニ貳百餘取参候 大雪水ニ候
 一廿五日 御日和ニ而、高橋より釣候所、西小川上迄に七ツニ出合、六ツ釣候 大不足ニ候 鮎の子ニ而三ツ釣候
 四月初日 四ツ頃より小雨、晝より風ニ相成候 山口下へ参候得共、水不足ニ而一向釣不申候 こんこみタラノ木もへ取参候
 一廿六日 朝より晚迄小雨ニ候 キリく、釣ニ参候所、きりく、五十斗、かつか貳三十取参候 三寸五寸程ニ相成候
 一廿七日 雨ニ候 鮎瀬崎へ参、酒辨當ニ而、さつこ貳ツ釣、六郎左衛門と吞申候 さつこ四五寸斗之者ニ候
 一廿八日 釣ニ参、くき十二、きりく、三十餘り、鮎瀬

へ遊山、六郎左衛門女子連居、翁助、鐵藏等ニ而大酒致候

一廿九日 くもり雨也 クキ十一、きりく三十餘り釣候 水少々多し ○山口所々に、クキ澤山居候 キリ

川蟲の方吉

五月朔日 くもり御日和ニ候 山口下落迄釣、きり

く三十餘、くき大貳ツ釣候

二日 くもり御日和ニ而、上小川入口迄釣候所、きり

く七八十、くき七ツ、鰍等取參候 水不足の方

三日 御日和大暑 上へ釣ニ藤太郎と貳人參候處、く

き六ツ、キリく、鰍、金取來候 東條向へ參香候

五日 御日和ニ而、上西小川上迄釣候所、くき貳つ、

きりく五十斗取參候 針ヤし落し參候

六日 御日和ヲりく、ヘラくと雨ニ候 石切より

久保田道迄釣、キリく三十斗、くき貳ツ、ヤスコ拾

ひ參候 月明堂下ニ候

○三月廿五日に斗、山へ六ツ ○四月廿五日より五月

六日迄に、クキ雜魚四拾四ツ、キリく三百貳拾程

一九日 極上御日和、大暑、晝過より山口、月明堂下よ

り上、羽蟲居所迄釣、きりく十、かつか五十斗取參候 若者方、ダキかへりへ參候 水多し

一十二日 晝過より山口、久保田道迄釣、きりく十、

鰍五十取

一十七日 鰍瀬どびん迄釣ニ參候 きりく十、鰍取參

候 ○土びん柳原ニ羽蟲居候

一十八日 川友吉へ參候 小作會ニ而田、丁八、萬藏

多吉ニ候 鮭、鮭等ニ候

一廿二日 上落合迄釣候所、水多く、クキ六ツ、山へ壹

ツ、キリく五六十釣、鰍少々取參候 古寺、雨

一廿三日 上落合下迄釣、タキ五ツ、キリく五十、金

鰍取合候 御不足ニ相成候 北の方面、御鳴雨

一廿五日 くもり候得とも御日和ニ而、山口之大岩迄釣

候所、大水不足ニ而、大ききく六十、クキ貳ツ、鰍

七八十取參候 兵藏入湯へ參候由ニ而、キリく五十

鰍三十持參大酒致候

一廿六日 くもり、ツリく雨、きりのことくふり、山

口へ參り古寺、橋下柳下迄釣、大ききく貳十五、ク

キ壹ツ、鰍四五十取參、晝ニ歸候 大水不足、裏のせ

きの水の多き時ほとニ御座候 鰍水ニハ多し

○五月九日より同廿六日迄、山へ壹ツ、クキ拾四、

キリく貳百廿五釣候 三月廿五日より五月廿六日迄

大川共ニ鰍六百斗取候

一廿七日 晝より寺下へ、キリく、鰍取ニ參候所、大

水不足ニ而、キリく壹ツ、鰍百餘り取參候 雲然せ

き、クキ壹つのぼり候

下川原、多兵衛小屋出來致候 酒香其より新九郎へ酒

鰍爲取置、大酒致候

一廿九日 御日和ニ而山口西小川より下へ、鰍つき候處

五合餘りつき、鰍瀬に六郎左衛門、岩松、角藏居、其

外女連參大酒致候 濁酒斗ニ而

六月朔日 大曲三十郎參、酒香候 平瀬一升取、鰍

ニ而

一四日 御日和 四ツ過より山口へ、ヒバリハナシニ釣

參候處、大水、西小川同斷、古寺ノ上、伊勢堂下ニ而

かつか四五十取參候

一廿六日 御金藏へ參候 靱貞、角藏、專治、藤太郎、

廿八日より御番御土産かつ、黒澤、赤津へ遣候 五右

衛門へ鰍、キリくしし (鐵城註、鮭) 二品三軒へ七

百交代斗

七月

一二日 御宛米渡、大酒致、山口、寺下、鰍へ參、アメ

打、鰍五十斗拾ひ參、大酒致かへり致候

一五日 山口へ御日和ニ而鰍つきニ參候所、アメ打、百

斗つき、八ツニ歸、落合へ、くき釣ニ參三つ釣候 大

不足ニ候

一九日 大徳上より、くき釣ニ參、本いかた南の方より

釣歸候 壹ツも不釣、大水不足

○雜魚下り大不足、毎日落合へ七ツ頃より參候とも

小もの壹ツ貳ツ斗ニ候

一落合上ニタ又古川、ほし候所へ、北家内、高畑宇内親

子參、とかめニ候由、され共ヤメズ鰍取吞歸候由、丁

内若衆貳十人斗ニ候

一廿二日 御日和ニ而、大徳下夕より船ツナき所迄釣候

得とも一向釣不申、さし鳥(註、虎杖)蟲、カナカレコ

(註、流木か)取參候

一廿四日 晩、采女同、鰍一と重持參ニ候

一廿九日 ○下り雑魚大不足 ○あゆ同断 ○鰯大澤山

八月

一廿二日 指鳥蟲取候 舍利堂川ニ而、五寸雑魚壹ツ釣候

九月

○大徳川原へ七日ニ蟲取ニ參候

十二月

一廿日 ○鹽鱒百文に十五 ○ブリコ壹れん八九拾文

○キリノ、壹つ四十文 萬事諸品大高直

一廿八日 歳暮覺書、一酒壹升 保太壹本 宮田治左衛門

門

天保八年丁酉

三月

一十九日 ○三斗入八貫八百五拾文 ○下延ざつこ大壹

疋三百文ツ、ニ候

一廿日 ○鱧上壹疋七拾文

一晦日 山べ、キリノ、上川、山口川大澤山之山 鱒

同断

五月

一十六日 歸宅 船留リニ而歩夫ニ而參候 ざつこ百五
十文ニ求參候(註、久保田より歸途)

六月

一十三日 大雨ニ候 朝より晚迄百五十文代鹽鱒、貝や

喜(註、貝焼のことで帆立貝の殻で煮物すること)ニ而吞

候

七月

一十七日 上々御日和ニ而、山口へ鰯取ニ參候處、水多

く七八十取參候 ○鰯壹疋大三文、小貳文

一にし百本、吉原たり 右ハ手元御金藏より歸之節、土

産參候事(註、にしは身欠鱒)

一廿二日 御天キ、大徳かけへ朝より釣ニ參候所、大小

七八疋釣候 大もの壹ツ有之、七ツ頃より雨

一廿三日 上御天キニ而、同所へ釣ニ參候所、中、小十

斗釣候 五ツ頃より雨ニ相成候

○大徳かけ大川ニ而、キリノ、四五疋釣候

一廿五日 ヒテリ雨ニ御座候 大ぬく、ハタカニテ吉

森下ニ而、中小釣申候

一廿六日 御日和ニ候 朝森下へ、絲繩ひろいニ參候

小もの貳ツ釣候

一廿七日 御日和ニ而、山口、寺下へ鰯突ニ參候處、三

拾餘り大物取申候 小田野主水もタナコニ參候 雨ニ

相成候

一廿九日 御日和くもり候 同姓政多郎とタナコ釣ニ參

候 六七十釣參候 手元、山口、寺下へ參候所、水多

く鰯七ツ斗突參候

八月朔日 極大上々御天キ 小豆飯、汁タナコ、酒

呑、灸立、かや箸祝ひ致候

一廿二日 御日和ニ而落合ニ而、クキハツ釣候

一廿三日 上御日和ニ而、夕過より落合へ同姓と參候得共

壹疋も釣不申候 在之者、町之者舟ニ而貳人居候

一廿四日 上御日和ニ而、大徳かけへ參候所、喜六郎居、

上へ登り候處、大物共ニ五ツ釣、御神明様ニ雨ニ成候

一廿五日 さし鳥ニ而、同所へ參、壹ツ小もの釣候

一廿六日 幸之助家ニ而、多八と三人鮎求吞

一廿七日 御日和ニ而、夕過下川原へ釣ニ參

一廿九日 上御日和ニ而、朝、蟲取ニ參、小峯弟參、辨當

ニ而下川原へ參候處、クキ四ツ、キリノ、四ツ釣候

一十日 御日和 朝より大徳上、舟下より釣候所、小も

のキリノ、歸ニ杉原長瀬ニ而、大五ツ釣候

一十二日 御日和ニ而、高橋上より鰯へ參、壹盃程取候

水中、山べ、キリノ、水ニ候

一十七日 くもり御日和 鰯ツきに參、寺下へ參候

一十九日 キリノ、釣ニ參、三十七八釣參候 さし鳥蟲

一廿日 同四十貳三釣參候

一廿一日 同三拾四五釣參候

一廿二日 晝迄に十貳疋釣

一廿三日 上兩川釣候處、廿斗釣、大雨さつとふり晴れ

ニ御座候 上へ登候内、下より喜一郎ニ被釣申候

一廿四日 御日和ニ候 鱒ニ壹本四百五十文、久三郎よ

り求、ヨノコ取候

一廿五日 キリノ、釣ニ上へ參候處、山べ、くき共に七

十餘り釣申候 前より釣候分すくに致候

一廿七日 御日和大暑 ヤナ下へキリノ、釣ニ參候處、

山べ、キリノ、五十疋釣候 キリノ、少ク御座候

一廿八日 御日和、大暑、大アツさニ御座候 館江へ釣

ニ同姓參、タナゴ三百餘り釣申候

- 一晦日 御日和、吉藏へ蹴、キリく、辨當へニゴリ酒ニ而參、大酒致候
- 九月
- 一二日 極上御日和大暑ニ而、キリく、蹴取ニ參候處キリく十三、蹴五十斗取、酒壹升持參ニ而、文七と貝彌喜(貝總)ニ而、吞歸候
- 一三日 御日和ニ而、夕過より參候處、キリく一向釣不申、金、タナコ、蹴突參、吞候
- 一四日 大川、並、山口水大不足、キリく釣れず、蹴取に大吉
- 一六日 御日和ニ而、高橋より上へ、さし鳥ニ而、きりく釣候所、山べ共五十貳三釣候
- 一七日 御天氣ニ而、八幡關へ釣ニ參候處、水多くタナゴ百三四十釣申候
- 白米壹升ニ付五百文 ○鹽鰯大壹ツ廿五文 ○鱒澤山町へ出候
- 一九日 惣クモリ、終日ふり、はれ、小雨ニ而、山べ、キリく三十、蹴三十、内四寸餘の蹴壹ツ 西小川ニ而取候
- 一十四日 御日和ニ而、同姓とクミ致、カッカ、タナコアミ等ニ而、夕過より參百餘取參候
- 一十五日 御天氣ニ而、キリく、蹴取ニ參、キリく十四、ヨノコ取、蹴澤山取參候 夕過大風ニ相成歸候
- 一十六日 極上御天氣ニ御座候 下槌淵上迄釣候所、キリく十四、大物蹴七八十取參候
- 一廿三日 天きニ而、小せき斗釣候處、百斗釣候
- 十月
- 一八日 ○山べ、きりく惣合四百程 ○蹴七百程 ○タナゴ六百廿 ○クキ四拾五程
- 十一月
- 一廿五日 大極上々御天氣、正左衛門下へ、さし鳥蟲取ニ參候と存候所五步斗ツ、一圓雪有之様、出崎山より一見致歸り候
- 十二月
- 一六日 大極上々晴天御日和ニ而、屋敷山少しも雪無之八九月のことく、大ぬくニ御座候 庄左衛門下へ、さし鳥蟲取ニ參、澤山取
- 一十二日 晩、鮒汁ニ而祝ひ大酒致候

一十九日 角藏内よりニコリ酒、圓谷娘より鮒三枚もらひ候

一廿七日 歳暮之覺 一ぶりに壹れん 栗原小四郎殿

天保九年正月

一十三日 雪こニ候 町へ參、大根、牛房、さつこ求祝ひ致候

二月

一七日 御天氣ニ而、上新町お利さ所へ、下より久田貳升百五十文ツ、鮒五枚持參、六郎左衛門と參、大酒致候

三月

一二日 ○鮒五六寸中、三百文 ○玉子五十文より上

○肴澤山參候

一廿六日 小倉山下え、ウラ竿取ニ參候 宮内 テンガラニ而、鱒の子舟場上ニ而十餘釣居候

一廿八日 ○鯉節壹本、池田 ○同貳本、滑川 ○ニコリ酒、輕とく ○産衣木綿、鯉節壹本、重、本家 ○重、鯉貳枚、大根漬、栗戈 ○鮒三枚、富士助 ○五

百文、下隣、同下より古ウブキ品々、外ニ福鱒片前

四月

一五日 大クキ、ツキス三百文壹疋

一十二日 上天氣ニ而、上え參候處、山べ十二釣候 西小川へ入所々ニ居申候 下ニ貳ツ、龜へ三ツ遣候所、ニゴリ一銚子參候、上隣へ三ツ遣候

一十五日 クロ羽蟲 上御日和ニ而、上兩小川共釣候所

小川兩川共に澤山居候得へとも少く候 山べ廿八足釣候 本家へ五ツ、長ヤへ四ツ、下へ三ツ、下隣へ三ツ、家へ十三疋ニ候 都合貳拾八足釣候、羽蟲ニ而 ○黒羽蟲七拾餘り取候

一十七日 御日和ニ而、高橋より下ス、落合迄釣候所、大山べ十八釣候 小作へ十二、酒と引替候と申而、手代ニ川ニ而遣候 翁印へ貳ツ、丹治へかつかと山べ壹ツ遣候 大不足、水上よりハ下の方大きく候 キリく澤山見得候

一十八日 お日和ニ而、森下ニ而、黒羽蟲百七八十取參候

一廿日 大雨、御鳴被遊候 上西川へ少し入候得とも水

大不足ニ而、山ベ十三釣候得とも少ク御座候 向翁へ
三ツ 金ニ壹ツ遣候

一廿五日 小雨ニ而、高橋下より久保田道迄釣候所、壹
ツも無之、水不足、鰍六十五取候

閏四月

一四日 御日和ニ而、伊勢堂下迄釣候所、山ベ十釣申候
お鳴大雨大風ニ相成候 下へ三疋遣候

○水出、釣頃、山ベ所々へ出候 きりく有 ○赤
羽蟲、道脇家近所ニ澤山居候

一六日 御日和ニ而落合上迄釣候所、五ツ釣、鰍十七八
取參候 水、鰍ニハ多シ 山ベ所々ニ居候

一十一日 御日和ニ而釣ニ落合上迄參候所、水大不足、
三ツ四ツ釣はつし、鰍五合斗取參候

一十五日 くもり候得とも、ヒサニツ(鐵城註、日三市か)
留迄鰍取ニ參候所、壹盃餘り取、下へ吳候 輕徳へ遣
候

一廿一日 御日和ニ而、きりく釣ながら鰍取ニ參候
鰍五合斗きりく壹つ釣候 酒持參致吞

一廿三日 御日和ニ而、高橋上より道家の前迄ツき、五

合斗取申候

一廿四日 くもり、晝前雨と相成申候 同姓鰍へ參、五
合斗取參候

一廿八日 上御日和ニ御座候 高橋より上留下迄鰍取ニ
參、壹升斗取參候 下と本家と龜吉と官三へ遣吳申候

五月

一三日 御日和ニ而、下ニ而生酒吞申候 鰍と茸持參候
一四日 御日和ニ而、上曲り迄取候所、五合餘り取、大
四十三、丹治へ遣、晚吞ニ參候 下へ廿五吳遣候

一五日 御日和ニ而、高橋より伊勢堂下迄、キリく十
七、山ベ壹ツ、鰍五十斗取參祝ひ致候 向政治へ、キ
リく五ツ、金、鰍等遣候 酒持參ニ而參候

一十二日 御日和ニ而朝より古寺下迄、鰍壹升斗取、七
ツニ歸、下ニ而鰍ニ而吞候 武右工門も參、女子達も
參吞候

一十三日 御正ツきニ而、ふきの葉取ツ參候處、水大不
足、鰍百餘り取參候而、下ニ而吞候

○クキ魚大未ニ而、川蟲ニ而四五疋斗ツ、ニ、キリ
く諸人釣見得候 ○鱒大澤山ニ而、貳十本斗ツ、町

ニ出、八百文位より貳貳文位迄有之候

一廿五日 御日和ニ而、高橋上より留下夕迄、鰍壹升程
取、善治へ五合參り遣候

一廿七日 雨ニ候 下え酒吞ニ參候 さつこにて

六月

一七日 上御日和ニ而、藤太郎鰍へ參候處、五六十ツき
參候

一十二日 大暑御日和ニ而、大徳上、多郎兵衛裏川え、
文七郎と參候而小川ニ而七八寸壹ツ釣、タラノ木取參
候(鐵城註、タラノ木はその芽を食用に欠く)

一十五日 御日和ニ而、高橋より、ス、水落合迄鰍ツき
候處、壹盃斗ニ、がめ、海どちやう取候 晚右汁ニ而
大酒致候(註、がめはガメロカ)

一十六日 裏のせきより、どちやう取候

一十八日 御日和ニ而、早夕飯ニ而、大徳上下釣候得共
壹ツも釣不申候

一廿一日 ヲリく小雨晝迄ふり候 酒持參ニ而、森向
川原へ同姓と參、大壹ツ釣候

一廿二日 御日和ニ而、森下へ晚參り壹ツ釣候

一廿三日 御日和ニ而、高橋上より、上留下夕迄ニ五合
斗取 大暑ニ候

一廿五日 御日和ニ而、高橋より上へ突候處、鰍百四五
十取、久保田へ土産ニ遣候 雨ニ相成候

一廿七日 川へ參、壹尺斗の、さつこ貳つ、小もの壹ツ
久保田へ大魚三ツニ鰍遣候

七月

一三日 御日和ニ而、釣ニ參候處、落合之岩瀬川ニ而、
四ツ釣、雨ニ相成申候

一六日 御日和ニ而七ツ前より參候所、水多シ、さつと
(註、僅かの意)にこり、柳蟲ニ而釣候所、キス(註、
岸ニ而はね、それより、へま蟲取釣候所、七八寸五ツ
釣候 雨ニ相成申候

一七日 森のせきニ而、どじやう度々取候

一十一日 御日和 小雨ニ成、森下ニ而、中小七ツ釣候

一十二日 雨ニ候 ふつたり、はれたりニ候 森下ニ而
中小拾疋釣候

一十六日 御日和ニ而、森下ニ而、大小貳ツ釣候

一十八日 大暑、落合上瀬ニ而、中小貳ツ釣候

一廿三日、御天氣ニ而晝より新左衛門宅へ參、大酒致候
連中無殘參候 國鱒、あらニ候

八月

○白米登升 五百文 ○鮎壹疋百三拾文 年々の築
よりは少ク候 四寸五寸斗も可有之哉 ○鱒澤山出候
得共、コホゴレズ若ク候

一七日 御日和ニ而、朝ニ下へ酒香ニ參候 其より庄左
衛門下へ、さし鳥蟲取に參澤山取參候

○さし鳥蟲、留下夕川原ニ澤山有之候 ○鱒出候得
とも、ヨノコ早シ

一九日 上御日和、大徳下やなせきニ而、たなこ竿釣中
四、さし鳥ニ而釣候

一廿二日 ○ヨノコ、たなこ毎日雨ニ而毎日一向出不申
候 ○鱒春より秋迄大澤山、毎日貳三十本斗ツ、三右
衛門へ出候

九月

一八日 御日和ニ而下川原へ、さし鳥蟲取ニ參候處、柳
茸取參候

一十二日 御日和ニ而、寺上より久保田道下迄、さし鳥

ニ而釣候處、山べ大登ツ、キリノ大十九釣候 大寒
サニ而、ス、落合ニ而、火たき晝食致候

一十三日 雨ニ候 大川どびん上より船場下迄釣候所、
山べ登ツ、キリノ十二釣候、大ものニ候 山口より
大きく候 大雨ニ而歸、留五郎へ酒香ニ參候

一十五日 御日和大寒サ風ニ候 鱒瀬より落合、柳原迄
釣候 きりノ、山べ三拾壹釣候

一十七日 御日和ニ而、山口上落合迄釣候所、山べ、き
りノ三拾貳釣候

一廿日 御日利ニ而、高橋上瀬より寺下夕迄釣候所、キ
リノ三拾壹釣候

一廿二日 上御天氣ニ而、高橋上瀬より寺下夕迄釣候所
山べ、きりノ取合六拾三疋釣候 瀬々に貳疋三疋ツ
、は皆居候

天保十年正月

一七日 鮎汁致候

一廿八日 御日和、大雪ニ成、本家よりキミヨ貳ツ參候
三月

一十四日 ○大クキ魚五百文より貳百文迄有、大小ニて
○鰍四串、八疋ニ而五十文、大小ニ而値有
(鐵城註、筆錄者、市左衛門助久は、この五月十七日逝去され
たので、記録はこれで終つてゐる。)

以上で、鹿の兩角の如き檜木内川と玉川との落合まで
の魚屬、並びにその頭蓋に相當する角館町の魚のことを
述べ終へた。然るにその兩角の間に、宛も獅子舞の獅子
頭の間に平に輝く鏡の如く、新百景の田澤湖がある。

現在、角館の南で抱き合つてゐる檜木内、玉川の兩河
も嘗ては田澤湖で握手した時代があると、地質學者は語
る。(秋田鐵山専門學校、大橋良一氏)

田澤湖

○湖の三大特色

- (一) 水深四百二十五米にして、日東第一深也
- (二) 水色、フオーレル氏標準液第一號に相當す
- (三) 透明度三十九米に達し、水色共に世界に稀有也

○傳説

・縁起書(抜)

西ニハ、アメマシ落シ、ワシ森、湯尻ニハ魚ノ宮アリ
湯ノ主ハ金ガ澤、常光坊ノ娘也 一代死シル事ヲキラ
イ、觀音エ立願カケ湯ノ主ト成ル 名ハ、カメツルコ
ト申也 其後、龍宮ヨリ犬三疋寶ニシテ金ヲ出シ、其後
龍宮エ歸ル 院内道ハ大折戸、下毛長根、部名足 カ
ツ右、カメツルノ主ニ成リタル節、兩親尋ヌルニ越ル
砌リ、男嶽の腰ニテ一時休ミタル時ニ、ナベヲ落シワ
リケリ 字ナベワリト申也 享保二十年正月吉日、久保田
五十人組の内、佐藤六兵衛書之)

右の縁起の奥書にこの文字と、それから「此書角館山
根御假屋に於て寫之 山本郡湯村三浦兵右衛門」とあ
る。

現在まで紹介された田澤湖傳説のうち、最も古いもの
と思ふ。猶ほ右の後段、小沼觀音のところは國鱒のこと
も出てゐるが、それは豊岡村の條に於て述べる。

寛政十年 人見蕉雨著「黒甜瑣語」
角館山中にも湖水あり。爰に八郎の雌龍の住めると云
ふも、同じく孟浪の談に似たれども、土人の口碑世に
も知れり。むかし院内に六人の衆徒と云ふあり。其中

神成澤の常殿坊か女、鶴子と云へるか嫉妬ふかくして生ながら蛇良となり此湖水へ來れり。此水、船越へ土水一線の水脈を通じ、二龍としに一回は行會ふ事ありと聞えし。

寛政十二年 同上書

八龍湖を雄湯とよひ、角館山中の湖を雌湯とよぶ。爰より土中一線脈を通じ、八郎の湯龍住て春分の頃しも年に一回雌雄相會ふ日は、此湖中、氷さけて魚鱗のこくと其祠より神わたりなす事は、土人も見る事あり。

文政七年葉月十八日 佐竹義文侯筆録

しら雲と見まがふ眞砂路を徐歩して春山といへる漁村にいたる。置か軒はをかりてしばしやすらふ。白髪の漁父一人居たり。養老湖の縁起を問へば懇に答ふ。養老のむかし大倉山の麓に金鶴といへる麗人ありしが二八のおもかげかはらで歳の積れる事を大倉山の御神に祈念をこめ夜ごと五更を期とし詣しにある夜しきりに口咽かはき渴やんことなく山こえ野こへ見れば木蔭に湧いづる清水ありき。幾たび結び上へても渴やまじついに湧く水へ口を付け飲しとや。涯だん／＼に

かけ落／＼東の間に浸／＼たる湖水となれり。彼女は忽二十尋あまりの大蛇と變じ主じとなりしとなん其夜ふり來りし松明は化して他にたぐひなき國鱒となれり。其因縁によりて養老湖と號えしか安永のはじめ詩人來りて槎の明神をおもへし又槎湖と號しともかたる。(養老紀行)

明治十三年文月 伊豆園石井多津良著

院内支郷神成澤に、百姓三之丞と云者一人の娘を持ち。名を神鶴子と云。容貌美麗也。夜毎庭前梨樹に龍燈現す。紅粉粧ひて夜更に及僕一人を伴ひ、觀音に詣す。里既に二里、百日に及ふ。其願曾て知る人無し。或夜僕に謂て曰、我題滿てり。觀音の示現有て此山を越ゆべし。汝從ふべしと山を越て廣澤の處に至る。月光明也。側に清水潺々たり。又僕を呼て曰、汝是より歸るべし。我此處に居せんと。僕曰、今既に鶏鳴に近し。何そ一人歸るべきや。神鶴子曰、左にあらす、日頃觀音を信す。今日願滿る處也。歸りて父母に告くへし。再び來る事なかれ。汝去らずんば忽ち佛罰を得むと。僕如何共爲べからず。遂に別れて歸る。

神鶴子彼の清水を結ぶに顔色鬼の如く、月光に水中に移るを見、あつと云て突く息、瀧の如く山崩れ谷涌き大湖と成る。其身蛇形となれり。僕歸て告ぐ。

父母大に驚き、母爐に有る處の焚さしを振りて、僕か云處に至る。渺々たる大湖を見る。母湖の邊りに立て娘を呼ぶ。神鶴、波上に浮んで觀音の示現を語り、二夕度來り玉ふへからすと云て蛇形を現す。

母驚き持所の焚指を湖中に投ず。變して魚となる。國鱒是也。三之丞か子孫今有、梨樹の古木尙有是。大同年中の事也云々と見る。(増補郡邑誌)

右のやうに古い記録には、辰子といふヒロインの名も亦、魚を食べて咽頭の乾くまゝに水を呑み蛇體と化したことも見えない。然るに今日一般に田澤湖傳説として語られてゐるは、次の如き筋である。(鐵城、所々省略)

明治四十四年十月十七日 千葉源之助著

往古仙北郡院内村神成澤に三之丞なる家ありて、一人娘辰子(一説には常光坊の娘龜鶴、又は金鶴とあり)母と共に棲めり。……辰子自らも永く絶世の麗容艶姿を保たんと思ひ立ち……大藏山に參籠して祈願百夜に及び

滿願に當りて、神靈の出現あり、其垂示に曰く、此山嶺を北に越ゆれば清泉湧出する所あり、汝行きて宜しく其の水を呑むべし、然らば日頃の願望成就すること疑ひあるべからず……滄澁たる一篠の小流ありて奇魚群を爲して泳ぎ居たるを發見し、喜びて其數尾を抄ひ捕り、僚友の歸來を待ち團樂して共に賞味せんと思ひ、之を炙りしに佳香芬芬として食思頻りに動き、試みに其一尾を取りて喫すれば、美味譬へん方もなきに思はず心を奪はれ、友に告ぐるに及ばずして悉く之れを食し了りぬ。然るに辰子は俄に喉渴して堪へがたければ、……終には匍匐して泉に伏しつゝ……丹花の唇を直ちに白沫に接して源泉も濁れ盡す迄に飲みて止まざりしが、忽身體只ならず覺えて異形と變じ、見る／＼大龍と化し去りぬ。……山崩れ、谷埋れて漫々たる湖水を現出し辰子は遂に此の湖の主とはなり了り。……されど我が神通力を以て、母上の求めんとする鮮魚を庖厨に贈り、聊か報恩の微志を表はさんと欲す。……母は噫々情なし。残り惜しやとて、手にしたる燃え残りの木の尻を湖中に投げ棄てしに、不思議なるかな其木

見るまに魚となり、尾を振り鯖を動かし、波の間に間に泳ぎ去れり。(後世、此魚の鱗に似て其色黒ければ、神話によりて木の尻鱗と稱へ、又鱒鱗と唱ふ。之れ國に一品なりといふ意)……其後辰子の誓言に違はず、客來る時、母が求めんとする鮮魚、數に應じて水屋の槽中に潑瀾として跳り來るを常とせり。(田澤湖案内)

右の傳説のうち、水屋の水槽に鱒の入つたことは如何にも荒唐無稽に聞えるが、そんな不自然なことでもない。寧ろ傳説の作者に敬意を表し度いと思ふ。

入水屋、即ち水屋に槽を埋め、小川の水がそれに入り又出て行くやうに仕掛けてある家が多いが、それに蟹が入つて臺所を歩き廻はつたり、その中に雜魚の入つて泳いでゐる現象を見ることは、決して稀らしくないからである。

・タツ子の語源 一般にタッコと二音でなく、タツコと三音にまで稱せられるやうになつた語の源は、恐らくはその湖の名を女性名としたことにあると思ふ。然らばその湖名タツ子潟は何から生じたかと云ふに、私は夷語のタッコブ、即ち水邊の圓錐形の小山の義から生じたもの

と思ふのである。

湖の西南に霧森と稱する圓錐形の小山が突出し、其處の部落を田子ノ木と稱してゐることが、その消息を雄辯に物語つてゐる。日本全國に同様の地形で、タッコ或はタゴと稱されてゐる所は相當多い。本縣内だけに於ても仙北郡野田の辰子澤、雄勝郡東成瀬の田子内、山本郡能代附近の達子の森に同一地形を見出すのである。(秋田郷土叢話、拙稿「田澤湖に一石を投ず」に詳述)

○石器時代民と魚漁

田澤湖は人皇第四十三代元明天皇の和銅六年に現出したと傳へてゐると思へば、否、第五十一代平城天皇の大同二年に、駒ヶ嶽が出来ると同時に凹んで出来たと傳へる向もある。和銅、大同、養老などの年號は、よほど古老に氣に入る響きを持つてゐるものらしい。

然るに地質學者は云ふ。これは第四紀以後に出来た桶形陥没湖、即ちカルデラであると。すると何千萬年前のことか、人間が地上に顔を出してから間もない時のことである。まるで桁違ひの話である。

私が踏査發掘した湖畔二十餘ヶ所の石器時代遺蹟その

ものが既に、大同や和銅より遙か昔の聚落で、その遺物中に、網を實體とした土器破片があり、(カシラナシ遺蹟)又、網に下げたと思はれる鍔石が澤山出るのである。(田子ノ木、カシラナシ、湯尻、ヨテコ澤等の遺蹟から)

つまり先史時代に確かに湖が其處に存在し、石器時代民が其處で魚撈を行ふた證據である。又有史時代となつては、多く魚業目的のシーズンの小屋掛が定住居となり必然農耕地も出来たと思はれる。(拙著「田澤湖を圍繞する石器時代遺蹟の群」に詳述)【第二〇・二二圖参照】

○鱒に就いて
・國鱒 傳説の木ノ尻鱒であるが、藩公へ献上の折に名前が悪いとて、改めたものといふ。若しそれが事實とすれば、前述の享保の縁起に既に國鱒なる文字が見えてゐる故、改名はその以前としなければならぬ。

この湖の特産で、體色の暗灰色を呈してゐるは、日光の届かない深所に棲息するためであらう。常に十尋以下の水に遊泳してゐるものである。體形は川鱒に似て、長を一尺餘、肉は稍桃色を呈してゐる。一尾の産卵數八百粒内外。(田澤湖案内)【第六圖参照】

少くとも明治頃までの國鱒は、尾の附根の部分が非常に幅廣く、一つの特徴をなしてゐたものであつたが、現在、姫鱒と交配の結果殆んど昔日の面影なく、素人目では一寸姫鱒と區別出来ないやうな有様となつた。

漁期は大寒前後であるが、安永、天明、文化と引續いて豊漁で、殊に文化年代には日に數千尾の捕獲があつたといふことである。

文化二年八月廿三日、角館の佐竹家から築鮎と共に藩公へそれを獻じて嘉納され、鹽漬けにして江戸へ送ると仰出られたことは、角館の條、鮎のところでも述べた通りである。

又文化八年には藩主義和公が、田澤の洶見物に來られてあつたが、其時この鱒の繪を献上したこともある。

・文化八年八月廿九日 佐竹義文侯筆錄

一先日御立寄之節被仰付候、抱返り繪圖二枚、國鱒圖一枚箱入ニ而遣候 右者御膳番處へ指出候様可申遣申付候 右繪圖當代才兵衛相認候 (北家御日記、才兵衛は翠帶のことである) 義和公は、その時の遊覽記、「千町田の記」に

漢槎湖に到れば四方山を廻らし、中に湖水を湛へたり。
廻り四里、水清らかにして千尋の底も曇りなき明鏡とやいはん。

千尋なる水底までも曇りなく
見るめなきさの清き眞砂地

一つ浮木ありて明神とあがむ。湖中より産する國鱒といへるは、形鱒に似て淡黒なりとある。

又寛政の頃、藩の家老匹田定常(柳塘)が藩用で、江戸から京都へ赴いたが、道中、箱根蘆ノ湖で山椒魚及び此の鱒を大いに考證してゐる。彼は關所の役人へよほど撰ましたものと見えて「箱根の御關所近ふ也て、本陣某出迎ひて案内す 懇々として舊知の如し 是皆彼の黄なるものゝ力なるべし 乘輿の儘にてかたへの戸を開きて通りぬ」と大いに壯語してから

寛政二年十月廿六日 匹田定常筆録

湖水眺望よろし 湖中、山椒魚、赤腹魚といへるを産す

す 山椒魚ハ吾藩にも稀にあり 鱒魚、はらかと訓す

名だといふてそれを呼稱したと書いてあるが、少しく變である。傳説にあつたやうに、木の尻鱒が國鱒と都合上改名されたもので、現在でも一部では依然として木の尻鱒と云つて云つてゐるのである。

多分は匹田氏が、槎木と木ノ尻と混同したことに起因してゐると思ふが、兩者は文字も傳説も別である。

槎木は浮木明神關係の傳説であり、木ノ尻は辰子に母親が投じた燃えさしの傳説にあるものである。

若し滄州以前に、傳説に木ノ尻鱒のことが語られてなかつたとすれば、傳説中の木ノ尻鱒の部分が、滄州が槎魚と命名してからの附會と解釋される。

・國鱒の條 湖の深度を測量に來られた田中阿歌麿博士は、湖畔の風光を「西の山の端に夕榮した美しい雲の色が太古そのまゝの湖面に影を映す邊、獨木舟に刈草を山と積み、茜纏に姐様冠の早乙女等が船唄面白く湖岸に漕ぎ來る有様は、實に得も言はれぬ詩趣、ヴァーチルやパインスなどの農民生活を歌つた詩人に見せ度い心地がする」と描寫して讚嘆されてから、湖畔民が國鱒の腹中に寄生する條蟲を、三杯酢にして食ふ悪食には、嘔吐を

赤腹なるもの恐らくハ此種類ならんと、其魚を見ればしからず 赤あらといへる魚に似たり 依て思ふ

吾藩角館に漢椒祠本槎祠と云、益戸滄州祠額を出あり、時、はしめて漢の字を加ふ 祠前の湖また祠に依て名付、湖中魚あり 國鱒といふ滄州、漢槎魚の詩あり、好事の者、國鱒の名雅ならざるを以て、竟に槎魚と呼ぶ

予かつて東都にありし時、ある人、常州の産にて捕獲のよし、うきゝの肉といふを送る しかも其形いかんとしらす 去歲、吾藩能代の海にて一異魚を網し得たり 其形、比目魚に大同小異也 皆魚をしらす

後是を考るに槎魚なることを知る。先の、うきゝなる物、即是也若し後人、角館の槎魚を以て槎魚となさへ、大に人をあやまらん 滄州はしめ、名を無意に設けて後の害をなす 一魚の上にすら如此し、天下の事豈思へざるへけんや

夫湖中、地によつて各一種の魚を産す 赤腹腹赤の語轉すといひ、國鱒といひ、同じく鱒魚の類によぶもまた奇也

(東海道中日記)

國鱒を滄州が槎魚ワキナヅと漢詩へ書いたので、人々は優雅な

催されたやうに述べられてある。(趣味の湖沼學)

果してそれが條蟲の三杯酢であつたか、この問題に就いては、後述することにする。

・アメ鱒 自然繁殖のものもあるが、一般にそれは岩魚の育つたものであらうと云はれる。(田口鐵藏氏)

然し又鮭鱒として、明治三十五年に、當時潟尻にあつた孵化場で琵琶湖から運んで來た卵を育養して放流したのもも交つてゐる。(田澤湖案内)

このアメの語原に就いては、所謂、雨鱒であつて、岩魚時代の斑點の大きくなつたものが、宛も雨粒のやうについてゐるからだと云ふ。(蓮沼運動氏)

・姫鱒 輸入魚である。明治三十五年以來年々、十和田湖から卵を運搬し、孵化放流したもので、當時は、カバチエツポと稱してゐたが、明治四十二年に改めて姫鱒としたものである。その始めての漁獲を見たのは大正四年秋季であつて、春山其他の湖岸からであつた。

それは放流後實に十三年目のことであつた。(田澤湖案内)

姫鱒の元祖は樺太の紅鱒であるが、それが十和田へ運

ばれ、更にその田澤湖へ移流されるに及んでは、その都度々々型が小さくなるやうであるといふ。(白岩村、渡邊家榮吉氏)

・口黒鱒 その名の通りの色彩である。然し非常に美味である。

・ホッサギ鱒 この鱒は四季絶ず産卵するが、産卵後は川鱒と等しく生氣がなくなり、一寸の波でも岸に打上げられる。頗る不味いので、もとは一尾二錢位で賣つたものであつた。(松田直治氏)

○雑魚 この湖の魚の旨くないのは、湖畔から直ちに外輪山が起つて、従つて澤が浅いこと、並びに水が綺麗過ぎて藻屑もなく、魚の食料が不足なためと云はれてゐる。

然し不味とは云ひ乍ら雑魚の産額は相當多い。人々はこの湖のものを鴻群魚カグキと稱し、川カグキのものを特に川群魚カグキと稱してゐる。(渡部小勝君)その大きいものは背黒といふ。

之等を釣るには、荒れ模様の日が工合よく、馬鹿の物を唯取るやうに附着いてくる。(角館圖書館主催、魚の座談會)濁つて、透明度が曇る故かも知れない。

の、此邊か一番ザラ(遠淺のこと)なので、此處ばかり曳網が行はれる。

・カベツポ 前述カベチエツポと稱した姫鱒のことである。部落の人達の話に依ると、姫鱒が何處かでさう呼ばれたものではなく、その鱒の放流前にこの湖に居た鱒の名が移つたものではないかと云ふ。(湖畔、蓬來館、柴田保太郎氏)

・國鱒 孵化場(現在は大森山下の水尻澤にある)で、國鱒の卵を買ひ集める時は、モーターボートを走らして湖畔漁民から獲りだての國鱒を買ひ、卵を絞ぼり、それに時々、カノ(雄)のシラコも交せて四五十分経過すると、水洗ひするものであつた。それでゐて充分受精するものである。

腹を絞ぼられた雌は、その日は、ひつくり返つてゐるが、その翌日になるとシヨッキリして泳いでゐた。(同氏)

・鯉 これは夜に出て藻を掻き廻して餌を捜すので、晝になつて見るとその肩が浮いてゐて、何處に居るかの見當が附く。(同上氏)

所謂この鴻群魚は鱒花(谷ウツギ)の咲く頃、野萩の串に刺して賣りに來るのが旨いと云はれてゐる。(蓮沼氏)

「鴻グキ炙つたやうだ」とか、「鴻の群來雜魚刺したやうだ」とか云ふ言葉がある。串の刺方が特種で、普通は雜魚の口から刺してやるのに、湖畔では魚の陰部から突き通すのである。理由に、辰子が口から串を刺さないやうにとの願であつたと云ふ者(荒川正氏)、或は鯉轆りのやうに見えるると云ふ人、口から刺せば腹の子が噴き出るといふ人(下延村、故青柳徳五郎翁)等々様々である。

然し又、凭うして焼けば、脂が下がるわけでもないだらうが、鴻雜魚は尻の方から食べると旨しいと云はれてゐる。(西明寺村、赤倉善藏翁)

明治廿年頃、角館の町に、鴻群魚女房カグキメウラと仇名された女が居てあつた。串に刺した鴻雜魚のやうに、反り返つて歩くからであつた。(内藤直之助翁)

◎各聚落
○春山部落(田澤村)

湖の東岸に位し、北の藁田へかけて若干田地があるので、半農半漁の部落である。桶形の陥没湖とは云ふもの

田澤湖の主は鯉であつて、それを見ると死ぬなどと云はれてゐるが(渡部小勝君)、昭和三年五月に此處で獲たものなどは、その主に近いものであつたかも知れぬ。殆んど四尺近いもので、肉などは魚肉といふよりも寧ろ獸の肉の味であつた。

猶ほ魚の年齢は、鱗の放射線の數で計算するものであるといふ。(柴田保太郎氏)その鯉の鱗は幸ひ柴田正男君から三枚私へ惠寄せられたが、生まの時は舊二錢銅貨よりも大きかつた。

十年程前に、矢張り田澤湖から獲れた鯉だと云ふて、角館町へ賣りに來たことがあつたが、それを一間幅の柱と柱の間に据ゑたら、殆んど隙がなかつた。

あまり氣味悪くて、誰も買手がなかつたと。(角館町、石川直樹氏)これは後述の、檜木内役場員達の食べた鯉であつたかも知れない。

・鰻 此の魚は深所の岩のナツギ(鰻の意で、其處から急に深くなるやうな所)に棲息する。それを夜に魚杖を持つて行て突くが、片手に權を持つてゐるので素人はヤスを下ろした瞬間、舟に動かされて、うまく出來ない。

玄人は突いたヤスの柄を手前へ引くやうにしてコワル(抵抗さす)ので舟が動かない。(柴田氏)

・捲網 これも夜行ふものである。沖で捲いたものを漸次岸へ引張つて来る。そしてヤスを使へる程度の所まで来ると、各舟一齊に篝火を焚いて、中の魚を突く。

あまり浅い所まで曳くと、大きい鯉など網を飛び越えて逃げるからである。(同氏)

・密漁 周囲僅か四里の湖乍らこれがある。春山部落の者は、對岸の大澤、田子ノ木、或は北西の相内潟へは行かないことになつてゐる。然し矢張り夜中に出掛け、繩張りを犯して密漁する。

若し発見されると、燈を消し滅茶苦茶に沖へ漕ぎ逃げるのである。(同氏)

○相内潟部落(楡木内村)

御座石神社近くの聚落である。昭和十年五月三日、神社前に建立、山口蘭徑先生の筆太に書かれた「日東第一深」碑の除幕式へ参列した私は、式へ來合せた此の部落の戸嶋留之助翁の御厚意で同家へ一泊、次のやうな御話の數々をノートし得たことであつた。

戸嶋留之助翁の御話

相内潟部落には、武藤、門脇、淺利、畠山の姓がある。そのうち畠山傳之丞家は、大家と稱し草分けで、その昔、北秋田郡から移つて來たものと傳へてゐる。

・潟尻川は、この湖水の外界へ溢れ出る唯一の水路であり、楡木内川へ注ぐものであるが(尤も白濱には疏水はあるが、人工的のものである)、それを溯上して入込む魚類は、海鱒、鮎、鰻、岩魚等である。

岩魚はアメ鱒になるといふ。それを獲る網は、刺網でメダカ網といふ絲も丈夫で、目も廣い。雪の降りがけ(十一月頃)から獲るが、大きいものになると二尺以上もある。

又、澤が浅いため、ヤマベは居ない。然も湖に澤山の成育した鱒の居るところを見ると、これは鱒の子がヤマベであるといふ一つの證據になるかも知れない。

・國鱒 この鱒の燻製は、前に講習を受けてやつたもので、最近はやほど上手になつたが、皮の強靱と、肉の軟か過ぎるといふ缺點は、なか／＼除却し得ない。

・姫鱒 十和湖から輸入したものであるが、國鱒よりも

鱗が細かくそして光る。共に冬季に餘計獲れる。

・口黒 國鱒と同じく古來棲息するものであるが、姫鱒と非常によく似てゐる。兩者は恐らく同一祖型を持つてあらう。それは環境に支配されて僅か相違してゐただけ故、最近は兩者の交配に依り更に著しく似通ふて來たやうである。

昔は子を抱いたものも獲れたが、最近はまだ獲れなくなつた。味は姫鱒より稍劣り、鱗に何處か似てゐる。

・ホツツアレと清水寄 何處でも云ふやうに、産卵後の鱒の弱つて浮くものは前者である。その現象はあるが然し、此處では大川で見ると「清水寄り鱒」と稱する夏の暑熱に負けて、川面を浮いて流れ、冷たい水の流入する點を求めて寄る鱒は居ない。

それは水面が如何に熱しても、廣い湖の中で、自由に冷い部分を求めて泳ぎ廻はることが出来るからである。

・雜魚 雪の多い年は、一般に雜魚が小さいと云はれてゐる。毎年舊曆の四月の半時分から、その漁が始まるが方法は、釣、卷網、潜り筈に依る。

冬は一般に深い所に隠れてゐるもので、日が湖面へ

さす時は坐はつて温順しい。然し雪溶け時分からだんだん足が速くなる。

雜魚は同じこの潟に棲息し乍らも、澤々の溪流の吐口に依つて相違するは面白い。潟尻附近のものは、赤い筋が顯著であるが、他の澤口のもの、赤いといふよりは寧ろ黒っぽい。梨ノ木澤の吐口のもの、その黒色が最も著しいやうである。

・鯉 この魚は鰍網や卷網、卷網にはかゝらないもの故魚扱で突く。尤も春山部落の方では、ザラ(遠淺)だから曳網で獲ることもあるが。

鯉ヤスは袋ヤスと云ふて、金の部分が袋になつてゐる。

穂先は六本で、そのうち兩端のものが特に太く長い。柄の長さ二十尺、必ず杉の割材を使用する。でないといふからである。それで總重量は二貫匁程となる。

十年前前に四尺程の鯉の泳いでゐるのを見た者は、幾人も居た。頭が赤く、軀體が白く氣味悪い鯉で、誰云ふとなく「頭巾冠ぶり」と稱されてゐたが、死んだか獲られたか、最近は一尙姿を見せない。

- ・タナゴ 赤勢ナゴが多いやうである。
- ・鰍 別段、ゴリ鰍など云ふて區別しない。夏時分になると、二三人組して「鰍追ひ」をやる。一人が少し沖の方で鰍網を立てゝゐる。他の者、即ち勢子は杉枝、青木枝などを五尺位の長さ束ねたものを、岸の方から押し進め、取巻いて網の方へ鰍を追つて行く。鰍は青い葉など見ると、逃げるものである。
- ・鰻 先に湯尻川から入込む鰻のあることを述べたが、以前に仙臺から移して放流したこともある。これには専らヤスを使用する。矢張り袋ヤスであるが、鰻を突くものよりも小型で、然も穂だけは長い。
- 火ブリの方法で、夜静かにしてゐるところも突く。然し別段、正體を見届けて突くものではなくて、居さうな處を何處でも、ボヅ／＼と突くやうなものである。
- 手筈があると、一寸間置いてから上げる。つまり鰻が苦しがつて、穂先に絡まるところを上げるもので、さうしないと落すことがある。
- ・鯰 これは殆んど見ない。
- ・ギギタ 大きいものになると、一尺程もある。穴に入

- つてゐるが、よく鰻に噛ちられて疵付いてゐる。
- ・ガベロ 鰻を放してから不足になつたと云はれてゐる。
- ギギタよりも不足である。
- ・蝦 三寸位のものも居るが、不足な方である。
- ・釣餌 バゲといふは、早春に家の軒のあたりを盛んに上下に飛ぶ羽蟲「上ガリコ下ガリコ」の母である。
- 春田の水口などに、紙魚に似た黒いものが居るがそれで、釣餌としては最上物である。ガン蟲は、川の石の間に巢造つてゐる蟲。それから大根や玉菜の青蟲、虎杖の莖の蟲に居るサシドリ蟲、柳やセンの木の幹の蟲、メメズ(蛭刺)、ハッタギ(イナゴ)等々である。
- 最後のものは勿論、その季節に群來雜魚を釣る。
- ・網類
- (a)鰍網 弓に袋網を附着けたもので、普通一般に使用されるが、唯、使用法は河邊郡などは相違して、弓の弦の部分水平に河床に置く。そして弦の中央から丁度矢をつがへたやうに細棒を立てる。網の材料はマダの織維で織つたものである。

- (b)巻網 主として雜魚を獲るもので、幅三十九種で木綿幅ほどよりない。これはハガ下し時分から、日中使用する。但し絹製。
- (c)刺網 鱒獲用のもの、幅九尺、長さ十四五間の大物で矢張り絹製。目は一寸から二寸。これは夕方から刺して置く。
- (d)メダカ網 アメ鱒専用。
- (e)投網 何處も同じ。
- (f)サデ網 二尺程の木柄に、徑一尺の金輪をつけ、輪に網袋を附けたもの。
- ・魚入れる袋 角館方面の雜魚袋に同じ。但し現在はマダよりも紡績編みの袋を使用する。
- ・イシ(石) 刺網、巻網の足の錘石は、七種から大きくて十一二種位の稍長い目の自然石である。少し前まではそれをヤス(澤胡桃)の皮でくるんで結び付けたが、今は殆んど布で包む。相當湖底を曳き廻はる故、弱いものでくるんでは直ぐ破れて、石が落ちてしまふ。
- ヤスの皮などは、丈夫で工合よい物であつたが、何事も手近の物で間に合せ勝ちの世の中となつてきた。

- この石は裸の儘を結び付けても、いゝやうなものであるが、そうすると底の石の間に挟まつて、どうしても取れないことがあるからである。
- ・クグリ籠 これは雜魚を獲るに使用するもの。クダルは潜るで水中に深く入る意もあるのであるが、この場合靈山などにある胎内潜(大難潜とも)のやうに、雜魚の體が潜り抜ける意である。即ち普通の笠のアギ(漏斗形)ばかりの大きいものと思へば間違がない。
- 材料は柳があればよいのであるが、それが無いのでガサ(谷ウツギ)の細長い枝を編んで作る。つまりその籠を口徑一尺二三寸、長さ二尺四五寸、尻口へ指三本位樂に入る孔が開くやうに捲いて、圓錐形を作るのである。
- それを湖へ注ぐ溪流の吐口の真中に、口を湖に向けて置き、兩側を土やクレ(芝土)で堰止める。
- それから其時の水量の多少に依り、距離を加減し、その上流を簾で止める。
- 産卵のため溯上する雜魚は、そのクグリを抜けるが最後、廣い魚溜へ自ら飛び込むことになる。三ヶ月位もそれを漬け放して置くものであるが、二千尾位は樂に獲

れる。

・エビス！ 魚を獲つた時の懸聲であるが、一尾一尾の場合よりも寧ろ澤山獲れた時にかう叫ぶ。

・獨木舟 この部落は家數十軒であるが、現在獨木舟は一艘よりない。他は釘を使用してならぬと、昔から嚴に禁ぜられてゐる戒めを破つて、板舟である。

・獨木舟の材料として檜か楡は丈夫であるが、現在は多く杉で間に合はしてゐる。掘る道具は、手チヨンナ（手てうな）である。

舟は用が済めば、舟小屋と稱する水上に萱などで簡單に屋根を葺いた所に入れて置く。これは冬季に雪除けとなること勿論である。

戸嶋マサ姫の御話

・スンバゴ雜魚（鐵城曰、田中阿歌磨博士がその著に、湖畔民が國鱒の條虫の三杯酢を食ふ惡食に、嘔吐を催したと書いてあることは、先に述べた通であるが）國鱒には條虫は居ない。よく三杯酢に鹽を入ることがある故、それでも誰かに條虫だと擔がれたか、或は又スンバゴ雜魚であつたかも知れない。

大澤部落では、パンチ（叩き板）を打つて、その合圖とする。若し都合悪くて行かれない家があれば、その分は別に除けて置くなり、持つて行つてやるなりする。

・卷網の巻き方 舟に乗り岸近くから下ろして行く。その最初の網端には、比較的大きな沈ミ（錘石）を入れ、動かぬやうにする。そして輪を描いて舟を進め、他端が未だ岸まで少々距離のある頃に、舟から岸の淺瀬目懸けて、石を盛んに投ずる。手頃の礫で、唯「石」と云ふだけで特種な名はない。

若し人家近くへ卷いた時は、家の者に石を投げて貰ふ。

雜魚は一寸、人の足音しても深い方へ逃げるもの故、沖から岸を扼するやうに卷く網に入つてしまふ。

其時、今度は逆に舟を廻はし、片手でケニスギ籠を使い漕ぎ、他手で網を手繰り入れる。と、魚はそれに入つて来るのである。

・刺網 雜魚の網は岸の殆んどスレ／＼から下ろし始め行くのであるが、鱒の刺網は百尋以上の深い所に刺すので、アバ（浮標）も水中に潜つてゐる。それ故、水面へ

スンバゴは條虫の義で、その寄生した雜魚は金魚のやうに腹を膨らまし、ヨロ／＼泳いでゐる。串へ刺して炙ぶると、腹孔から素麵のやうなものが、ペロ／＼と一尺以上も出る。キト／＼して旨いものである。

子供達はそれを指で取つて、その儘食ふ。

・雜魚へ串の刺方 陰部から串を刺すと同時に、魚の全身を掌の中で撓め、頭上から串先が出るやうにする。

これは威勢よく見えるばかりでなく、普通よりも餘計に刺すことが出来るからである。（第五圖参照）

・ケニスギ籠 舟の櫂のことをかう云ふ。（鐵城曰、河邊郡の一部では、この名稱の物に雪籠のことである。櫂と雪籠は形状が似通つてゐるだけ、名稱も似てゐる。）

又鬼（獵師）や鷹匠の使用する雪籠は、小長柄と書かれ、コナゲヤと發音されるが、ゲヤはケヤで櫂にも通ずる。

・雜魚の卷網 これを上げると、漁の多寡に關せず、必ず皆で分配する規約である。但し網主は二人前を取る。

皆同じやうな時刻に上げるので、此處で分配してゐると思へば、又彼地からも知らせが来て、大いに忙はし

は別に桐の大きな丸枝を浮かして置く。

水中のアバは、雜魚の物よりは二寸程短い。沈ミ（錘石）は勿論、深い／＼盤（水底）に届いてゐる。人々は湖面によく流木のやうに丸太の浮いてゐるを見るであらうが、あれが即ち刺網の一番上の浮標である。

鱒はそのやうに、水中に平面的に縦に張られた網へ引懸かるが、中には網の目を咬えた儘になつてゐるものも多い。

・串 ガザ（ウツギ）の丸串を使用する。

・ナガラ（長柄） 焼いた雜魚を、翌日賣りに行くまで、臺所の長押へ渡した二本の長柄へ並らべて置く。ナガラは長木の意である。

・夷講 霜月九日（海尻では十日）に行ふもので、神様へ國鱒の生き魚二本を供へる。又その日に刻む水神ノ神の御幣は、湯頭の湧泉の所へ納めることになつてゐる。

淺利廣之助氏の御話

・串の刺し方 鱒を炙ぶる時は、串の刺方に二通りある。その一は、ササメ（鱈）から骨添ひに片側だけ通るや

うに刺して、先端を尾の附根の邊から裏へ突刺して出すもの。他は魚の右眼から矢張り骨に添ふて刺して、先端を同様裏へ突き出すものである。

・ジロヨ 女郎魚の意か。四五寸の細長い鱈のやうなものであるが、天保銭型が附いてゐる。食べて旨い。(以上)

・昭和十年舊曆五月三日(新曆六月三日)、浅利廣之助氏は、蛇ノ木の邊で、長さ二尺五寸、胴廻一尺八寸、重量一貫八百匁、鱗二錢銅貨大の鯉を獲つた。

その時使用した魚扱は廿五尺柄で、穂ばかり一貫五百匁のものであつたが、突いた瞬間、一間餘も獨木舟に乗つた儘引張られたといふ。(同年六月六日、秋南新報)

・クシエヤ澤 名の通り解釋すれば、「臭い澤」とも思はれるが、古い記録には「九千尾澤」と書いてあるから鯉魚がその數程も澤山溯上した故に生じた名かも知れない。(角館町、田口鐵藏氏)

○潟尻部落(西明寺村)

故柴田富藏七十二翁の御話(昭和十年五月四日採集)

・獨木舟 潟尻の草分けは、吉太郎といふ者であつた。

に折つたやうに中程から折れて出ることであつた。私はそれを手にして、現在南洋土人が石斧で獨木舟を掘つてゐる寫眞を想起せざるを得なかつた。即ち土人達は、それと全く同じ磨製石斧へ、テウナの柄式に着柄して、獨木舟の炭化した部分「その材木の兩側へ濡れた布を置き、焼く擴るがらぬやうにして置いて、上に火を焚く」をコツ／＼掘つてゐるのである。

それ等の折れて出る石斧は、嘗て其處に居住した石器時代民が獨木舟を、右の方法で刳る際に折つたものではなかつたか。石斧といふは、その形に附された名稱であつて、今日の斧鉞の如く木を伐つたり削つたりする切味はなく、實際は、鉞或はテウナ式に着柄されて、寧ろ掘る、刳るの目的に使用されたものと私は解釋してゐるので、此の感を餘計深く持つ次第である。・國鱒 昔は巻網へも澤山入つたものであつた。これを賣りに行く時は、十尾づゝ繫いで、一ヅラ、二ヅラと數へた。國鱒に就いて面白い話がある。私は今年七十二歳であるが、子供の時分、八十歳を越した婆さんが、その又昔に聞いた話として語つたもの故、よほど以前の話であらう。

其頃痘瘡が非常に流行して、それに罹つた者は片端からジャボ(或はジャングと稱し、アマタの事)になつた。

その人がこの潟で、最初に舟を拵らへて乗つたといふ話である。

現在板舟は十艘以上あるが、獨木舟は一艘もなくなつた。確か五六年前までは、それを使用したもので、板舟に比べて風に負けないものであつた。それに草刈舟と漁師舟と二種類ある。

材料は、杉か楢で、ツボ鉞で掘つて行き、底はテウナで均らし、内外共に、オーハといふ道具で仕上げた。

昔も昔、大昔のことであらう。カルケヤ崎で、大楢へ舟を刳ぐつた。ところが、その殆んど竣工の間際に、セシノ木澤のヒド(凹んだ所)からそれがひとりで、凄まじい勢で湖の中へ走つてしまつた。

斧やテウナだの、ツカダ(道具)類を載せたままであつたが、湖底深く突刺つてしまつた。老人達がよくこの邊にその舟が沈んだと教へて呉れたが、湖底に眞實にそれらしい形のものが見えてあつた。

(鐵城曰、此處の石器時代遺蹟は前後四回踏査して、掘著「田澤湖を繞ぐる石器時代遺蹟の群」に詳述してあるが何より私の注意を惹いたのは、相當堅質の磨製石斧の幾本か、家も故意

ところが誰云ふとなく、木ノ尻湖を水煮した汁で顔を洗ふと、ジャボにならないといふので、人々は鱒を獲らうとしたが、運の悪い時は悪いもので、當時、大澤の旭鑛山が發興してゐたので、鑛毒が湖に流れ込み一尾の鱒を手に入れるにも、非常に難儀したそうだ。(鐵城註、大澤の鑛毒に就いては、同部落の條に於て述べる)

・雜魚 潟尻川を溯上して湖へ入る一番上ぼりは背黒であるが、これは勿論産卵に来るものである。それはシラス(底の見える部分)に、ホリ掘るに来るのであるが、どういふわけか、明治二十九年の六郷の大地震以來あまり来なくなつた。

その盛かりの時は、眞黒になつて来るもので、その中に棒を立て、も倒れない位であつた。

其時は殆んど一週間といふものは、碌に寝付かずに、眞實に次の網間ももどかしく、それに投網を打つたことであつた。

舊はこの川(潟尻川)へも築をかけたもので、何千となく雜魚が獲れた。又川の中へも火ブリで入り、片端から魚扱で突いては葛籠へ入れ、突いては入れる程多かつ

た。それ等は檜木内川から湯尻川へ入り、更に湖へ入らうとするものであるが、一方湖から外輪山の澤々へ溯上するものは、この附近では病の澤が一番多く、小折と戸澤は二番目である。

昔は澤口に、ウラ田螺が澤山附着いてゐて、それを食ふため集まる魚も多かつたが、今は殆んど盡きてしまつた。さうした澤へ入る雑魚を、クグリ筈で獲る仕事は、準備から捕獲まで、全くの共同事業であつて獨占は許さない。

町とか他村の人から、泉水へ放すから生きた儘に雑魚を持つて来て呉れと、注文を受けることがある。其時はサデ網のやうなものに百尾も入れ、手桶に僅か水を入れて浸して行く。さうすると大概はオチないで(死なず)ゐる。一般に生き魚を運ぶには、茗荷の葉、藤の葉、メサグ(エソニウ)の葉など入れると元氣がよい。温くみが来てから(暑熱になつてから)生き魚を運ぶには、右の方法が一番よい。

・鯉 あまり古いことでもないが、春山部落にあつた話である。同部落の鬼川氏が、或る御天氣のよい日、何氣

なく湯を眺めてゐると、怖ろしい程大きな鯉が悠々と泳いでゐるのを見付けた。早速、家から獵銃を持ち出して、水中のその大鯉を目懸けて一發ダガンとやつたら、うまく命中して、鮮血を流して浮いた。

計つてみたら全く嘘でなく、四尺九寸あつた。先づ五尺といふところ。然もその大鯉は、何年経つたものか、鱗のあたりに、ボヤ／＼と産毛のやうなものが生えてゐた。家の人達は氣味悪がつて、皆食ふことに反對した。獲るには獲つたが、もて餘してゐると、話を聞いて有

木内の役場から食べてみ度いからといふて貰ひに来た。それがどんな味であつたかは聴き洩らしたが、煮た汁を翌日見ると、ギド／＼して、まるで鬚付のやうに堅く粘つてゐたといふ。

一般に鯉は、長さと同廻はりと同じものだと云はれてゐる。

・鮎 湯尻川から入つて来た鮎は、秋頃まで産卵するがもとより孵けない。其頃はタガカラ(高川原の意か、淺い所のことをいふ)のあたりに、百も二百も鮎のやうに細く瘦せて、そして膚も黒くなつて、ブワ／＼してゐる。

獲つて食べてみたところで、何も味がないものである。
・鰻 火ブリで突くか、又、置き針もする。餌は鮎か誰魚を切つて附ける。

・網一般 現在は刺網、巻網共に絹絲を使用してゐるが昔は麻網で、藍で薄淺黄色に染めた。現在は右の絹網を楢のアモキ(老木)の皮を煮て、茶色に染める。

かうすると、バサ／＼して、さばきがよい上に、丈夫である。

・巻網は五分目で、雑魚を主として獲る。刺網は六分から七分までは雑魚を獲る。その一寸目は鱒を獲る。

・國鱒は霜月から、早春雑魚の獲れるやうになるまで、この網で獲る。メダカ網はアメ鱒に使用し、季節は秋十月から雪の降りがけまでである。この鱒の大きなものになると、二尺四五寸から三尺までもある。そして國鱒のやうに網を堅く咬ちめてゐたり、暴ばれて殆んど網にくるまつてゐる位である。(以上柴田翁)

浅利松之助翁(八十二歳)の御話

・舟 ヌグリといふは、四間、或は四間半もある大舟で肥料や刈草を運搬する。稀に客や炭の類も運ぶ。

それよりも小さくて、約三間の丸木舟形のもの、漁舟といふ。魚獲り舟である。マルキ舟は材料の入手困難となつたので現在は一艘もない。

それを作るには、手チンナで彫り、外側をオーハ、(大刃の意か、別名ヌビロ)と稱する鉞で平に削つたもので、幅二尺二三寸、長さ四間から五間までのものが普通であつた。そして順調に使用せば、十三年位の壽命があつた。

進水式のことには「舟のデヤ下ろし」と稱して、老人にやつて貰へば舟も丈夫、それに怪我もないと信ぜられてゐる。其時使用のケヤシギ即ち櫂は、粗末な物は使はぬ。その場合は勿論、船靈様明神へ御神酒を供へる。そして濁酒を五升、客が多いと一斗も用意して祝宴を催するであつた。

・金比羅の信仰 この神様の掛軸は、何處の家でも懸けて祀つた。舊正月十五日の晩には、家に祀るこの神と船靈様へ餅を供へ、舟にはお神酒を供へた。

又、人々はこの神を信心するが故に、絶對蟹を食べないばかりか、蝦も食はぬ。蟹は金比羅様のチシヤ(使者

か)と稱してゐる。

・湖の投げ 特に大きな魚を、主、母、王などいふは普通であるが、此處では、ウミのサツケと云ふ。

四五年前、私の家で獲つたアメ鱒は二貫匁を越したもので、この年になる私も見た事も聞いたこともない程、大きなものであつた。家の婆々が小山田部落まで擔いで行つたら、買主が附いて七圓で賣れた。そのお金で、役場のツナギ(税金)を納めることが出来てあつた。

・オバギ 尾のことであるが、大魚の尾は「エビスが利く」と稱して、水屋の板へ貼つて置く。

・メスとカノ 何處も同じいやうに、雌と雄のことである。メスの腹中の卵はハララゴであり、カノの腹中の白腸は、シラコと云はず、シロコといふ。

・雑魚の炙ぶりやうの別なのは、私は唯、炙ぶり易いためと思つてゐる。

・刺網のうち、春に雑魚を獲るものは七分目、高さ六七尺である。然し最近ハスキ方も上手になつて、一丈二尺位とする者が多い。夏の國鱒のものは八分目、冬のアメ鱒のものは二寸目で、共にオニクロ結びである。そして

どれも幅十二三尋ある。

兩上近く水面の浮標に結ぶサバ口、即ち耳が附着してゐる。その間を水中で浮かしてゐるアバは、漆ノ木を割つた約三十程の、兩端狭く中程稍廣い薄板であるが、それに各屋の屋號が刻まれてゐる。これは舊藩時代の御薪山に、各自が使用した記號で、私の家のものは「二一」で「イチにチウナ」、櫻田留吉のものは「二二」で「サンコ」、柴田富藏のものは「二」で「ニコ」、齋藤小一郎のものは「二一」、齋藤堅吉のものは「二」等である。

・波ミ箆 桶の蓋のやうな圓い板を底とし、廻りに柳の萌を簧のやうに附けて、中にトヅラ(クマシデ)の輪を入れ、高さ一尺二三寸、籠状のものを作り、上部横にアギを附ける。中に油糟を土に混じたものを入れ、九尋位の底に沈めて置く。

さうした場所のことを、下漬け物と稱してゐる。大抵二三寸の雑魚の、所謂「下雑魚」が、一箇に五十尾も入つてゐる。然し丁度育ち盛りの頃である故、最近ハ雑魚の増殖に悪いといふので、皆で申合はせて使用しないこ

とに決議した。

・トヤ箆 湯尻川にかゝつた橋の處々、川水を玉石で垣を作り分け流してゐる部分がある。それを流れる水が石の垣を越して本流に溢れ落ちてゐる。背黒、雑魚、岩魚、鱒の類が、それから下へ落ちることがある故、石に寄せ、口を上に向けて水を受けるやうにして置くのが、トヤ箆である。

落ちる魚を受け入れ、ばよいのである故、唯、圓錐形の箆で、アギも何もない。材料は、ガザ柴、中にトイヅラ或は楢の枝を裂いたもの、輪を入れて、それに絡らぐ。大きさは定まつてゐないが、高さ大抵二尺前後である。

トヤの語は、鷹待の塀が鷹を待受けてゐる場所であるやうに、魚の落ちるを待受けてゐるためであらうか。

・魚を捕る鳥獸(鐵城註、これに就いては、後條、齋藤幸二郎君の御話で詳述する故、こゝではそれと重複せぬものばかりを述べる。)

ミサゴといふ鳥は、魚の壽しを作るさうであるが、その鮓は見たことはない。然し来るには来る。白鷺、一杯(タガブ(メン)、稀に鷹、海雀(これは死魚を拾ふ)。

河瀬もよく杉の腐れ穴などを棲家としてゐたが、水中潜行が御手のもの故、刺網に引掛つてゐる魚を盗食し、必然網をいためるので、何とも困まつたものであつた。運よくそれを獲れば、毛皮は大した値段で賣ることは出来たが。

・三枚おろし この料理は、魚を大きい目の肉片に切り

酢でスクめるものであるが、多くお祝ひのある時やる。

・御幣 水神と恵比壽様は必ず祀つてゐるが、水神の御幣には、鯉鮒(鯉のこと)の形を刻み付ける。(以上、淺利翁)

齋藤幸二郎君の御話 (鐵城註、齋藤君はこの部落から湯の分教場へ通つてゐる、尋常四年生である。それでゐて私に次のやうな話の數々を語り得たのは、全く湖水の唯一の吐口、湯尻川が貫通する水郷の子供であるためと思ふ。)

彼は小舟の操縦、箆、道繩、網の上げ下ろし等、大人と何等變はるところがない程、熟練してゐる。就中、水泳に巧みである。)

・舟 魚を獲る獨木舟形のもの、小舟であり、秣を積んだりするのは櫓舟である。(この名は前の二老の話と相

違してゐるが、秣舟即ちエグリは確かに櫓で進む。

先はヘサギ、後部はトモである。若し材が杉であればヘサギの部分と、尾端部を櫓のやうな堅木で作る。

それからヘサギ、トモ共三十二程の部分に檜、桂、或はコメなどの丸枝を渡してあるが、これをネチリ木と云ふ。舟を繋ぐ時の棒である。〔第二六圖参照〕

夏や秋の風雨を避ける目的もあるが、主として冬季に雪を避けるため、水際から水上に簡単に立て置いた、小屋といふよりは、屋根ばかりと云ふやうなものがある。

それを舟小屋といふ。屋根裏に水神の御幣など挿して置くが、それは中の舟の爲めではなく、寧ろ其處を雨や日除けとしてゐるカドコ（物洗場）のやうに利用してゐるためである。〔第七圖参照〕

又、舟の尾部近く二枚の板が縦に敷かれて、座席となつてゐる。それを船敷板と云ふ。

・ケヤシギ 相内湯のやうに、ケヤシギと音便にならない。雄物川の下流で使用するネリ權かのやうに、船べりへ繩で結へて使用するものではなく、カヌーでも漕ぐやうに、水を掻き進む。

材料は多く朴か、イタヤである。

・ユゲヤ 阿伽波ミのことである。イタヤの材を割ぐつたものであるが、この丈夫な原始的舟具も、普通に見る箱型のものになつて、漸次其影を没せんとしてゐる。

・魚扱 ヤスには鯉突ヤス、岩魚ヤス、鰻突ヤスなどがある。鯉突ヤスは、外の部落のやうに袋ヤスではない。

柄は大概同じで二十尺程あるが、穂先は六本で長さ十六尺、開きが十八尺、アギは右三本が左側に一箇宛、左三本は右向きに一箇宛附いてゐる。そして兩外側の二本の根元はツカミとなつて、柄の側面に曲げ刺してあり、中の四本は軸にホゾを作り、それに針金の繩を以て緊縛してある。

鰻ヤスは袋柄で穂は八本、アギは左右から内へかけて一箇宛附いてゐる。穂の長さは十一尺、穂開きは九尺で、先の鯉ヤスと反對に内側にすばまつてゐる。木柄は十二尺程である。岩魚ヤスは大體鰻突きに似てゐる。

柄は二間あり、丈夫で割れないといふのでキピタを使用する。多く雨後の増水の際に突く。

・魚の種類 國鱒、姫鱒、口黒鱒、アメ鱒、川鱒（湯尻

川で漕つて釣で引かける）、岩魚、ヤマベ、鯉、鮒（ゴミ鮒といふは棄せてゐる）、群來雜魚、スンバゴ雜魚、（秋に多い）、小雜魚（夏は誰も顧みないが、冬になると獲る。狭み串に狭さみ、ハシラがして食ふ。ハシラがすは、僅か火にかけること）、カネホリ（谷地雜魚とも）、トゲヨ（多く葭原に棲息）、鮎（稀少）、カナギ（煮れば居なくなるといふ。蓋し落ける意である。極く小さい弱い雜魚であるが、メダカとも相違してあまり浮ばないやうである）、鰻、ゴリ鰻、サド鰻（角館邊で鍋カジカといふもので食べて旨い砂糖鰻である）、クズ（ハゼのこと）、鮎、海鮎、八ツ目、砂メグリ（埃があるといふて食はぬ）、鰻、ガメロ、ギギタ（話者、幸二郎君は、湖と湯尻川との境の邊で二十種あまりの大ギギを突いて見せた。これは鮎の黒いやうなものであるが、下唇の下に二本ばかり長い鱗の生えてゐるは異である。鮎は殆んど見ない）、蟹（但し澤蟹）、蝦等々。

・釣餌 トンボ、マングス、ミミズ、ハッタギ（イナゴ）ガン蟲、青蟲（主として玉葉に附着してゐる）ハムシ（上がリコドリコ的事）、サシドリ蟲、蜂巢の蛆子、（幼虫が蛆のやうになつてゐる）。

・魚を獲る鳥獸 鳶、鶯、鵲、雁、鴨、鴛鴦、砂モドリ（カワセミ）、白鳥、ガア鶯（鶯と思へぬ程、頸の短い鳥である。これが來ると屹度、雨だと云つてゐる）。河鼠（家鼠の大きさであるが、稍紫色がかつた毛で、水を自由に泳ぎ廻はり、鰻や雜魚を巧みに獲る。どういふものか、その鼠は魚扱で突刺しても抜けて逃げる。河獺。

・狐と河獺のムガシコ 此處にもこの民譚が語られてゐる。（鐵城曰、然し田澤湖は冬季一片の氷も浮ばぬ程温くんでゐる故、いゝ氣になつて漬けてゐる狐の尾が凍り附いたとは語り得ない。それで、單に尾を水に漬けてゐるところへ、獵師が來てドガンとやつたと語る。

他の土地で語られてゐるやうに、尾が凍り附いてゐない故、薪を握つた百姓が駈けて來たと語つては、狐が樂に逃げてしまふから、飛道具を打放させなければ間に合はぬことになるのである。）以上、齋藤君。

金鶴子様に就いて

湖の水が湯尻川となつて落ちてゆく、所謂湯尻の附近に、近江八景の浮見堂のやうに湖中へ建てられた御宮は文人墨客の盛んに來遊の昔、碩儒益戸滄州により漢槎宮といふ頗る支那臭い名前を貰つて現在に及んでゐる。

その爲め御堂の祭神は何であるかを、一般から忘れさせてしまつたかの觀がある。

それは立派に明神堂と呼ばれてゐたもので、御本尊は此の鴻を作り、主となつたと云はれてゐる傳説のヒロイン、金鶴子様である。以前に京都から金鶴姫之命として下したもので、美しく彩色された唐人風の女の座像である。持物は寶珠でもあつたか脱落して見えない。(御座高十四程)。

然るにこれは明かに母屋を奪つたもので、昔からの御本尊は花色染の衣裳を着た儘、御いたはしや前の御幣の山の中へ、殆んど放り投げられてゐる。それは合掌の立像で御丈二十八程(御台を失ふ)、法衣を装ふてゐる。

お鼻は抜け落ちて、元の容貌は知るよしもない。全體として男性の感じを受けるが、唯、相模の髻の如き大きな結髪に依り、それが女神なことを知る。

鴻尻の部落民が此の神を、豊漁の神として祭祀してゐることを、一般の人々はあまり知らない。堂そのものは寫真や繪の題材として、宛も田澤湖の如く天下に紹介されてはゐるが。

堂の欄間には、頗る雅致ある腐蝕板に益戸滄州が筆の「漢槎宮」なる額が懸けられてゐるが、その杉板は、昔

春山部落の三之丞が下ろした國鱒獲りの網にかゝつて、湖底から上げられたものだといふ。(故三浦三郎翁)

次のことも、あまり一般に知られてゐない。

この部落では毎年霜月九日に、この堂へお籠りする。夜中に彌宜殿が祝詞を上げるが、國鱒二尾以外お供物はない。唯、各人持參の重箱を其處へ上げて置くだけ。

それが済むと、重詰を肴に騒はぐに、だけ大騒ぎの宴を催し、徹夜して呑み騒はぐ。

といふのは、その夜、八郎が八郎湖から遙々、金鶴子を慕うて愛の殿堂を築く可く田澤湖へ来る日で、必ず雨風へ乗つて来るからである。その「八郎の音」を聞くと悪い故、聞くまいと、より大騒ぎして紛ぎらかすのである。(同社神官、齋藤貞一氏)

明治十三年 伊頭園石井多津良著

雄鹿の八龍湖の八郎は、是か夫也と云。年々十一月十日、八郎此湖に來るとて、其物音を聞者、疾病すと。故に其夜湖邊の里は、太鼓を打、板を叩て其音を不聞

とす。春に至り八龍湖に飯る。此時八龍湖の水破裂すと村老の語及縁起の趣同じ。

然と云とも田澤湖は古よりの湖にして、此時出るにあらず。況や八郎の來るといふこと甚奇事也。尙祭禮の行事にも怪語あり。略して不記、按るに神鶴故有て入水せしか事を託して傳るなるべし。(増補郡邑誌)

霜月九日は右のやうに神聖な日である故、人々は一切水を汚さぬやうに心掛ける。その夜、舟に乗ることなどは以ての外である。然るにあまり古い話でもない。

鴻尻の櫻田某が向方へ働きに行つてゐたが、その九日の夜、止せばよいのに翌日の祭典を見物させると云ふて丸木舟へ仲間を二三人乗せてやつて來た。

ところが榎木神社のあたりまで來た時、八郎様の、オチャ申したところへ(御出でになつたところへ)遭つてしまつたから湛まらない物。凄い風に、舟は忽ち轉覆してしまつた。運よく浅い方へ落ちた者は救かつたが、あの通り岸から急に深い湖故に、其方へ落ちた者は鴻尻の櫻田に縫つたら案内だし安全だらうと思つて、着てゐたウリ木のケラ(ウリハダ風の織維で編んだ、篋より小さい防雨

着)へ掴まつた。

結局、掴まつた者も、掴まられた者も、共に水底へ其儘沈んでしまつたのであつた。

ウリ木のケラを着て、山川へ行くものではないとは、昔から云はれたことであるが、それと云ひ、八郎のオチャ申す事と云ひ、押事ならぬものと人々は身震ひして語るのである。(淺利松之助八十二翁)

・傳説

(a)アマ鱒落し 此處に「アマ鱒落し」なる場所があつてそれが一羽の猛鷲が、一尾の大きなアマ鱒の背に爪を突込み、抜くに抜かれず、又魚もその儘潜つてはみたまの、遂に弱はり、翼の折れた鷲とその大魚が湖面を眞紅に染めて死んで浮き上つた話のあつたことに起源してゐること、拙著「鳥蟲草木の民俗學的資料」に述べた通りである。

全く「即興詩人」中の、ネミ湖畔に起つた出來事を髣髴せしむる、一神秘シーンたるを失はぬ。

(b)網の發明 此處の鷲森山の下に、老樹生ひ繁つてゐる岸、深碧藍を湛へた所があるが、太古は阿仁の方か

ら、アリスケ、ナイスケといふ二人の兄弟が来て、兜森で兜を脱ぎ、その鷺森に登り湖面を眺め、木ノ尻鱒の群集してゐるを認め、着てゐたマダ簀ひ取つた。

簀の裏は網になつてゐるものであるが、それにヒントを得て糸を結び、網を作ることを人々へ教へた。それが網の起源であるといふ。(相内海、戸島留之助翁)

二つとも、この湖畔にして始めて發生する傳説なるべく、共は大きな傳説と云ひ得る。

○大澤部落(生保内村)

湖の西畔に位し、魚屬の最も豊富な部分である。惣名、湯尻と稱されたのは、湖の水面が地質學者の云ふやうに現在よりも甘米も高かつた時代があり、秋田鐵專教授大橋良一氏)その水が引いても猶ほ沼澤めいた土地故にその名を負ふたものではないかと思ふ。

湯尻部落に鷺森があり、又鷺と大魚と格闘のあつたとなど、前に述べたが次の記録なども、昔如何に鷺が多かつたかを物語る資料と思ふ。

延享三年五月十二日 佐竹義棟候筆録

一市郎兵衛、明日より十五日迄内用ニ而、湯村へ參候

依而、鷺に出合候へ、と鐵炮渡置候(北家御日記)

鷺は今でも、年に一二度は、二三羽襲來する。それと鷺との争闘は實に面白く、鷺は折角魚を獲つて舞ひ上つても、鷺に襲撃されると動天して、魚を放して逃げる。

鷺は悠々、それを攫つてゆく。だから少くとも田澤湖では「鷺に攫はれた」の言葉は通用せず、「鷺ア攫つた」である。(同村、三浦政太郎翁)

又、昔、疱瘡流行の時、木ノ尻鱒を煮た汁で顔を洗へばシヤボ面にならぬと云ふて、鱒を求めたが、生憎鱒毒のため手に入らなかつたといふことは、湯尻の故柴田富藏翁のお話として述べたところであるが、實際その鱒毒は昔から當局の問題であつたらしく、次の資料がある。(文中の獵は漁である)

寛政三年七月五日 佐竹義躬候筆録

小野岡彦左衛門來候故、逢候而申合候趣左ニ

一先日田澤入湯より歸路之節、湯見物ニ立寄候節、湯村ニ而承候へ、同處大澤と申處ニ鑛山出候以來甚不獵、

且田畑へも差障、甚難遊之山ニ候 仍而、右山之様子相尋候處、御用立候山ニも無之、漸渡世一通之事之由

ニ候へへ、左候へへ田畑へ差障、且田畑不足之村ニ而獵を以相暮候村形迷惑致候而へ、甚御不益之事、定而其方へへ願も申出候へんと存候

何分其方出精を以、右山相止、村形助リ候様ニ取斗意候様ニ申付候

(北家御日記)

この鑛山は現在も旭鑛山として發掘されてゐるが、右の頃はあまり成績香ばしくなかつたばかりか、賈金造りの者が、支配者北家の治外法權の場所と知つて潜伏してゐたり、とかく面白くない山であつたらしい。

最近も鱒毒に依り漁が思はしくないので、部落民から賠償金を要求したところ折合が附かず、激昂した人々に狙はれて鑛山長が何處かへ姿を隠したといふことを聞いてゐる。次のものも鱒毒の一資料である。

明治十三年 伊頭園石井多津良著

湯村支村、大澤 鑛山有、今休山、此岩より鑛盛に出るとき國鱒濁に漁なかりしが、休山に成て今少し生ずと(増補郡誌)

・雜魚

(a)澤作しやる 簀で以て雜魚を獲る方法の特異なこと

は先に述べた通りであるが、その簀を漬ける場所を皆で作ることを「澤作しやる」と云つてゐる。(同村、三浦兵藏氏母堂)

(b)アギ簀 相内湯で、クグリ簀と云つた筈は、此處ではアギ簀と云ふ。前者は、魚が潜ぐり抜けることに重きを置いたのであるが、此處ではその構造が普通の簀のアギの部分に相當する故にかう呼ぶのである。(第八圖參照)材料は矢張り、ガサである。(同村、三浦政太郎翁)

(c)種澤 殆んど、どの澤目にもアギ簀の仕掛けない所はない位であるが、雜魚を獲るばかり能でなく、増殖のことも考へなければならぬので、一部分の澤目では、雜魚を勝手に潮らして、望み通り上流へ産卵させる。

但しその大役を済まして下る雜魚をば、築を設け置いて獲る。さうした方法を講ずる特種の澤を種澤と云ふのである。

が上流の砂礫原へ産卵しても、貪食な鰍や蛙の餌食になつてしまふものが多い。(三浦兵藏氏)

(d)雜魚の多く潮る時は實に盛んなもので、久兵衛の澤に眞黒になつてのぼる時は、中に棒を立てても倒れぬ

位であつた。寝てゐてもその音が枕に響いて聽える程であつた。

(西明寺村、安樂寺の女)
村で一番多く溯るは、湖に注ぐ谷川のうち最大で、然も村の中程を流れる大澤川である。川の吐口の筈を漬けた點から普通は六七間の距離に簾を立て、止めるが、幾萬と溯る時は、十五六町川上の堰根まで打通して、雑魚の生簀とする。

(故三浦三郎七十八翁)

筈から入つた雑魚は、なるべく早く早く上げないと逃げやうと焦慮する故か味が落ちると云つてゐる。沖で獲るものよりは、確かに旨くない。(同村分教場主、鈴木預太郎氏)
(e) 刺し方や炙ぶり方 雑魚を湖畔で、尻から頭へかけて逆に刺すのは、全く申都合で、あゝして刺すと短い串でも數を餘計に刺すことが出来るからである。(三郎翁)

又、炙ぶる爲め爐端に串を立てる時は、必ず大きな茶釜を上吊りして置く。焚火の火氣が、まんべんなく雑魚に當るやうにする爲めである。

(三浦兵藏氏母堂)

(f) 吊り 炙ぶつた串雑魚を翌日まで並べて置く二本の長木は、相内潟ではナガラであつたが、此處ではツリと云ふ。それは相内潟のやうに、兩端を長押へ載せない

で天井から繩を下げ、吊つて置く爲めである。(兵藏氏)

・國鱒 これの獲りだては濃黒色であるが、だん／＼白つぽくなり、遂には始から白い魚であつたかのやうになる。(深味に棲息する魚故に) それでも流石に網に強く接した部分は、いつまでも黒く網目の痕を見せてゐる。(同村、三浦金治郎翁) 馬なども、死んでから皮を剥ぐと、生前鞭打たれた痕が肉の上に、黒く筋になつて印してゐるものであるが、それを想起して痛ましい氣持になる。

大きな鱒の話をするれば、十年前前に、カノ(雄)で百二十匁、メスで百匁のものが獲れてあつたが、あれなどレコードかも知れない。

又産卵を済ました鱒のことは、大抵の所ではホツツァレ、或はホツツァギなどと稱されてゐるのであるが、此處ではウキヨと稱する。(三郎翁) 前者はホリ掘るため痛んだ尾を見ての命名であり、後者は産卵に疲れて浮き上つてゐる状態を見て名附けたものである。

鱒の料理としては、二枚下ろし、即ち背を切開いたもの、味噌押し(味噌に軽く漬ける)は旨しい。勿論、急の時

雑魚やゴリなどは鱒にもする。

(政太郎翁)

・アメ鱒 岩魚がアメ鱒になるといふことは、此處でも云ふことであるが、これは二百十日の後、水が黒メグリ(濁り)すると寄つて来るやうである。

(三郎翁)

・鯉 田澤の鯉は前述のやうに、屢々大物が獲られ人々を驚かしてゐるのであるが、それは益田治右衛門が外輪山の霧森始め、一ノ森から周圍八ツノ森(鶯森、兜森、針森等々)を檢地した際に、その記念として放流したものと傳へてゐる。(同翁) 益田氏は郡奉行であつたが、天保飢饉の時、農民に苛酷を強ひ結局悪事露顯して自殺した人である。

・鈎八ツ目 普通の八ツ目のやうに孔がある。そして澤目へ行くと、うじよ／＼してゐたものであつたが、今は殆んど捕り盡してしまつた。

食べて少々蒼臭く、春八ツ目の味である。貝焼で煮て食べると旨しいものであつた。前述久兵衛の家では、五升炊の大鍋へそれを煮て食つたものであつた。(同翁)
・ジョロヨ 此處でもジョロヨ(女郎魚か)である。カギ八ツ目とも異つて、豎に平べつたい。そして鱒があつて、

(同上)

普通の魚のやうにもして泳ぐ。
・スンバコ雑魚 田中博士は測深の際、此の村へ宿をとられたのであるが、國鱒の條蟲など若し居るものとしても食べさせる筈もないし、又、スンバコ雑魚も相内潟では炙ぶつたりするかも知れないが、此處では子供だつて減多に食ふことはない。博士の三杯酢は何かの料理を間違へたものと思ふ。

(政太郎翁)

・魚扱の種類
(a) 鰈突きヤスの穂には、アギがない。袋ヤスでないからタマガラ(鐵環)で附根を締める。

(b) 鰈のものは、全部アギの附いた穂が六本並らんでゐる。

(c) 鯉のものは、袋ヤスで穂の長さ四五寸、數は七本で全部アギ付き。

(三郎翁)

・網 藍でも染めたが、絲が弱はるやうである。最近柏皮や楮皮で褐色に染めるが、丈夫な上にサバ／＼して工合よい。少し前に生保内の本村の方から、青森の八戸の鰯網を染めるため、何萬貫といふ大量の柏皮が輸出された。

(政太郎翁)

卷網を上げる時は、午前八時、正午、午後六時頃の三回で、分配の合圖には必ずパンチ（叩板）を打つ。

（三郎翁）

・獨木舟 此處でもこれを小舟と稱するは、秣舟（現在は殆んど板舟）に對照して云ふ名稱である。現在も五六艘はある。長さ三間三尺は大きい方、幅、膝元一尺六寸は最大で普通は一尺四五寸である。

又、關伽汲みも潟尻のやうに木を刳つた物を使用した。現在ではケヤスギと稱し、篋の字を附着けない。又、關伽汲みも潟尻のやうに木を刳つた物を使用した。現在では鎌詰殻などで間に合はせるやうになつた。

（同翁）

私は獨木舟の進水式に際して、船靈様を祀るとか、何か儀禮がないものかと、いろ／＼老人連に尋ねてみたが、昔から何もないといふ話であつた。

○田子ノ木部落（生保内村）

此の部落の名は、現在は夷語となつてゐるが恐らくは石器時代民語であつたらうと思はれる。タッコブ即ち水邊にある小山の義から生じたであらうといふことは、前に述べた通りである。その小山即ち霧森の南にある部落で

である。潟の名稱に就き

明治十三年

伊頭園石井多津良著

田澤の潟は、田澤潟共、田子潟共云、（漢槎湖とは益戸秀典一時の詩作に出ると、正田松塘翁の記に見ゆ）^{ウツ}方言クキ、^{クニニ}國鱒（木の尻鱒と云）出つ。（増補郡邑誌）

又、此處の石器時代遺蹟（私が田子ノ木式土器と銘打つた系統の厚手土器を出す）から、網目を實體紋とした土器破片、並びに網足の錘石の出たことも既述の通りである。

その網を粘土復原し考察するに、細繩、或は纖維の縊絲を材料としたものではなく、テンキン或は蘭草の如き植物莖を簡單に編んだものらしい。この類の網は現在も中央オーストラリア土人間に使用されてゐるもので、彼等はそれを小川に張つて魚を獲り、別にならして乾かすこともなく、張りつ放し、腐り放題に腐らしてしまふといふ。^{BY AUSTON AND HORNE} (SARGE LIFE IN CENTRAL AUSTRIA) この部落に面白い話が傳へられてゐる。昔、田子ノ木と大澤兩部落で家數十八軒よりない頃、何の話からか湖の深さを計ることになつた。

そこで各家々から繩をありつたけ出して見たが届かない。それで仕方なく、附近から葛藤^{クワフチ}の蔓を見當り次第コイで（引抜いて）来て纏ぎ足した。端が底へ届かないうち、その葛藤も盡きてしまつた。

現在も其邊一帶にその蔓の生えないのは、其時皆取つてしまつた爲めであるといふ。（相内潟、戸島留之助翁）

この村は湖畔で一番古いと思ふが、現在のところ昔を尋ね可き老人が一人も生きてゐないことは遺憾である。

扱以上で、田澤湖の魚漁に關する話は切上げ、次に再び角館町附近へ下がり、檜木内、玉川兩川の落合の下流即ち分流玉川と同じ名の玉川へ注ぐ、西からの入見内川に添ふて少しく搜ぐつたものを述べてみたいと思ふ。

雲然部落（雲澤村）

○渡部小勝君の御話

・漁人の使用する河の部分名稱

(a) サラ 小石多き所（田澤湖では遠淺の意）、(b) ワダ 急流中に大きい石などあつて、水の淀む所、(c) ダルミ

灘になつてゐる所、(d) 突込み 急流の直線的に進むところ、(e) タチケナグリ 急流のこと。大急流は大タチケナグリである。

・鱒に就いて

(a) ソゴベ 産卵期のもの。

(b) 卵の雄は居残るが、それが雌より小さいのは海水を飲まない故であると。

(c) ホツツアレの語源 産卵後の鱒の名であること度々述べた通りであるが、その名稱は次の意から生じたらしい。

草などでも枯れ／＼して、手でもむとバラ／＼になるやうなものを、ホザレだといふ。柴の朽ちてボロ／＼になり、又は古繩などのそのやうになつたものも、矢張りホザレだと云ふ。その意であらう。

・鮎 眞實か嘘か判らないが、鮎は金分^{キンブン}を求めて溯つて来るもの故、その川には金があるといふ。

・雜魚に就いて

(a) マデ 待テの訛か判らない。春の晴明^{ハルノハルメイ}になれば、一番のぼりが来ると云ふて、刺網を準備する。このマデ